国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

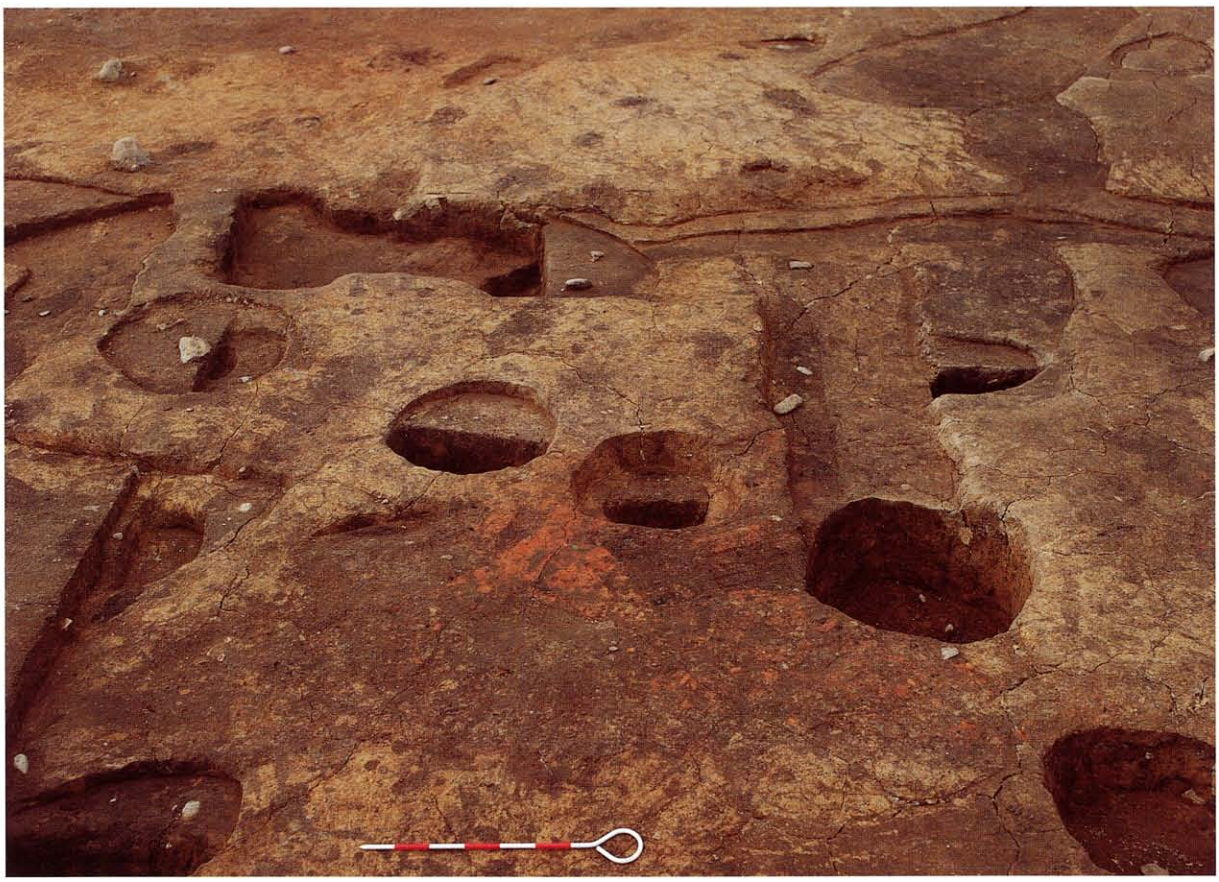
1997

一迫町教育委員会

国史跡　山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

1　第２、３号竪穴住居跡（北から）
Pit dwelling 2 and 3



2　第３号竪穴住居跡
Pit dwelling 3

図版 2

1　第 8 号竪穴住居跡（北から）
Pit dwelling 8

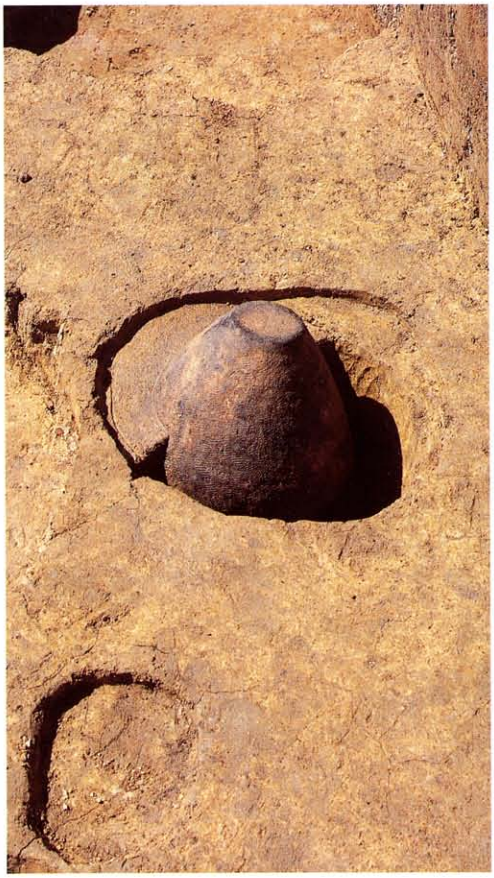
2　第 7 号溝跡（I区）
Ditch7

1　K区全景（東から）
View of excavated trench

2　第７号溝跡断面（K区）
Soil profile of ditch7

図 版 4

1　第 8 号土器埋設土壙
Pit8 with buried pottery



2　第 8 号土器埋設土壙半截状況
Bisected pit8 with buried pottery

3　第 8 号土器埋設土壙
Pit8 with buried pottery

序

山王囲遺跡は昭和46年に国の史跡に指定されました。町ではこれまで、その保護と重要性の理解に努めてまいりました。

史跡整備の一環として始まった発掘調査は本年度で第２次を迎えました。今年の調査では第１次調査に引き続き、縄文時代、弥生時代の遺構群の検出を目的とした調査が行われ、弥生時代前期の竪穴住居跡、溝跡、土器棺を埋めたお墓など数多くの重要な遺構がみつかっています。中でも溝は東北地方では初めて発見された規模のものであり、当時の人々の高度な文化、技術を解明していく上で貴重なデータとなるものです。

本書は平成８年度に国庫補助を得て実施した山王囲遺跡の第２次発掘調査の成果の報告書であります。これらの成果が研究者、町民の皆様に広く活用され、地域の歴史の解明と文化財の保護の一助となれば幸いです。

最後にこの調査に参加された皆様方、本書を作成するにあたってご助言、ご協力下さいました諸先生方、ならびに関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成９年３月

宮城県一迫町教育委員会

教育長　遠藤昭吉

例　　言

1　本書は宮城県栗原郡一迫町字山王に所在する国史跡山王囲遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は国庫補助事業として一迫町教育委員会が調査主体となり、史跡整備の目的で平成８年８月１日から10月４日にかけて面積約1,280㎡にわたって行った。

3　以下に調査組織を掲げる。

調査担当　一迫町教育委員会
調査指導　須藤　隆（東北大学文学部教授）
　　加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長）
調査協力機関　東北大学文学部考古学研究室
　　宮城県教育庁文化財保護課
　　東北歴史資料館
調　査　員　阿子島香（東北大学文学部助教授）
　　古川一明（宮城県教育庁文化財保護課技術主査）
　　佐藤憲幸、三好秀樹、藤村博之（宮城県教育庁文化財保護課技師）
　　富岡直人（東北大学文学部助手）
　　大場亜弥（一迫町教育委員会総務課技師）
調査補助員　氷見淳哉（東北大学大学院博士課程）、伊藤典子（東北大学大学院研究生）、石田　真、藤原弘明、高橋　哲、玉橋さやか、小山有希、高木暢亮（東北大学大学院修士課程）、坂田由紀子、西井　亨、北村浩貴、鹿又喜隆、五十嵐満、川原　啓、熊谷宏靖、澤田純明、杉山陽亮、池谷考史、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、粟野昌之、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、川口貴史、真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎（東北大学文学部学生）
調査作業員　佐藤幸一、津田小砂、曽根茂子、曽根義秋、笹川義春、久我とも子、門伝保輝、大豆田むつき、佐藤運之亟、菅原みさ子、松田節子、金田せつ子、佐藤たけ子、阿部辰江、三浦精喜、菅原清喜、佐藤ひさよ（一迫町）

4　編集は須藤　隆のもとに、大場亜弥、富岡直人、氷見淳哉がこれを進め、一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が整理・分析を行った。以下に資料整理・分析作業の体制を掲げる。
整理参加者　伊藤典子、高橋　哲、玉橋さやか、小山有希、坂田由紀子、西井　亨、鈴木　綾、北村浩貴、

鹿又喜隆、川原　啓、熊谷宏靖、池谷考史、千葉直樹、川口貴史、丹羽美智子、京野恵子、真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎（東北大学文学部）、斎藤幸子、佐藤勝子、菅原みさ子、佐藤たけ子、阿部辰江、大橋道子、井上文子、黒沢まゆみ、佐藤幸一、佐藤運之亟（一迫町）

5　調査にあたって、次の方々のご協力とご助言をいただいた。
藤沼邦彦氏（東北歴史資料館）、荒井　格氏（仙台市教育委員会文化課）

6　調査報告書をまとめるにあたり、以下の方々に分析を依頼した。
阿子島功氏（地形）、鈴木三男氏（植物遺存体）、吉川純子氏（大型種子）、奈良貴史氏（人骨）、鈴木敏彦氏（人歯）、蟹澤聰史氏（石材）、安達三郎氏、宇野亨氏、何一偉氏（レーダ探査）

7　自然科学分析はパリノ・サーヴェイに依頼し、詳細な報告を受け取った。本報告書に要約した内容を掲載した。

8　遺物の撮影はいろは写房（稲野彰子）が行った。

9　土色については『新版土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1994）を参照した。

10　遺物図面、写真図版中の（　）内の番号は属性表中の登録番号に対応する。

11　本報告書の執筆分担は、文章末（　）内に付記した。

目　　次

第1章　調査の目的 …… 1

第2章　調査の概要 …… 3

　第1節　調査の方法 …… 3

　第2節　調査の経過 …… 3

第3章　調査の成果 …… 4

　第1節　層　　序 …… 4

　第2節　遺　　構 …… 5

　第3節　遺　　物 …… 14

第4章　結　　語 …… 36

付章1　山王囲遺跡におけるレーダー探査の成果 …… 38

　はじめに …… 38

　第1節　探査結果 …… 38

付章2　山王囲遺跡の地形的環境 …… 42

　第1節　山王囲遺跡の立地環境の地形学的な問題点 …… 42

　第2節　山王囲遺跡の立地する微地形と土層区分 …… 43

　第3節　微地形形成史の作業仮説 …… 46

付章3　縄文時代晩期・弥生時代の古環境変遷 …… 48

　はじめに …… 48

　第1節　試　　料 …… 48

　第2節　分析方法 …… 48

　第3節　化石の産状 …… 48

　第4節　堆積環境の変遷 …… 51

　第5節　縄文時代以降の周辺植生 …… 52

　第6節　炉の燃材料 …… 52

付章4　縄文時代包含層出土大型植物化石の分析 …… 54

　第1節　試料について …… 54

　第2節　各層の堆積物と出土した分類群 …… 54

　第3節　層相と大型植物化石より見た堆積環境 …… 55

　第4節　特筆すべき分類群 …… 55

付章5　山王囲遺跡合せ口土器棺出土の人歯および人骨 …… 59

　はじめに …… 59

　第1節　所　　見 …… 59

　第2節　まとめ …… 61

図 版 目 次

第１図版　山王囲遺跡発掘区配置図
第２図版　山王囲遺跡遺構配置図
第３図版　山王囲遺跡遺構配置図
第４図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第５図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第６図版　山王囲遺跡出土土器実測図
第７図版　山王囲遺跡出土石器
第８図版　山王囲遺跡出土石器
第９図版　山王囲遺跡出土石器
第10図版　山王囲遺跡出土石器
第11図版　山王囲遺跡出土石器
第12図版　山王囲遺跡出土石器

写 真 図 版

ＰＬ．１　Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｉ北、Ｉ南、Ｍ区全景およびＮ区全景
ＰＬ．２　Ｅ区全景および第２号配石遺構
ＰＬ．３　第６号土器埋設土壙および第３号竪穴住居跡炉跡
ＰＬ．４　ピット305およびピット337
ＰＬ．５　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．６　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．７　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．８　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．９　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．10　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．11　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．12　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．13　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．14　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．15　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．16　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．17　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．18　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．19　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．20　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．21　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．22　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．23　山王囲遺跡出土土器
ＰＬ．24　山王囲遺跡出土石器
ＰＬ．25　山王囲遺跡出土石器
ＰＬ．26　山王囲遺跡出土石器
ＰＬ．27　山王囲遺跡出土石器、土製品、石製品
ＰＬ．28　山王囲遺跡出土木製品、動物遺存体

挿 図 目 次

第１図　山王囲遺跡位置図 ---------- 2
第２図　第２、３号竪穴住居跡（Ｆ・Ｍ区） ---------- 6
第３図　第８号竪穴住居跡（Ｍ区） ---------- 8
第４図　第２号配石遺構（Ｅ区） ---------- 10
第５図　第７号溝跡 ---------- 10
第６図　第６、７、８、９号土器埋設土壙 ---------- 11
第７図　ピット305、306、337、338、339 ---------- 13
第８図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 16
第９図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 17
第10図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 18
第11図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 19
第12図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 20
第13図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 21
第14図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 22
第15図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 23
第16図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 24
第17図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 25
第18図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 26
第19図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 27
第20図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 28
第21図　山王囲遺跡出土土器拓影 ---------- 29
第22図　山王囲遺跡出土土製品 ---------- 31
第23図　山王囲遺跡出土石製品 ---------- 33
第24図　山王囲遺跡出土木製品 ---------- 35

付章１

第１図　探査トレンチと測線 ---------- 38
第２図　バイスタティックパルスレーダシステム ---------- 38
第３図　アンテナ＃３の受信電圧（ａ）　測線３（ｂ）　測線８（ｂ） ---------- 39
第４図　アンテナ３で受信されたＦ区の水平断面 ---------- 39
第５図　アンテナ＃３で受信されたＦ区の水平断面図 ---------- 40
第６図　アンテナ３で受信されたＧ区の水平断面図 ---------- 41
第７図　アンテナ３で受信されたＧ区の水平断面図 ---------- 41

付章２

第１図　大正５年測１：50,000地形図×２倍　山王囲遺跡は長崎川の川の字のところ ---------- 44
第２図　微起伏の詳しい測量図（明治大学　1962測量　等高線間隔0.5ｍ　縮尺１／400原図より） ---------- 44
第３図　自然堤防の原形をなす、洪水ローム層の地山層（“きれいな砂礫層”）の上限高度分布 ---------- 45

付章３

第１図　模式史柱状図および分析層位 ---------- 49
第２図　主要珪藻化石群集の変遷 ---------- 49
第３図　花粉化石群集の変遷 ---------- 50

付章４

第１図　山王囲遺跡出土大型植物化石 ---------- 57
第２図　山王囲遺跡出土大型植物化石 ---------- 58

付章５

第１図　山王囲遺跡出土ヒト乳歯 ---------- 59

第1章　調査の目的

国史跡山王囲遺跡の発掘調査は、1994年度に策定された史跡整備計画にもとづき、1995年から1999年までの５ヵ年の予定で進められることとなった。第１次調査は、1995年７月から９月にかけて実施され、多くの重要な成果がえられた。

山王囲遺跡は、第１次調査の結果、縄文時代晩期から弥生時代中期末、さらに古墳時代、古代にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになった。ことに微高地南半部において、縄文時代晩期の竪穴住居跡の柱穴が多数検出され、２棟の住居跡の柱配置が確認された。また、その東に縄文時代の竪穴住居跡と推定される深く掘り込まれた遺構の一部が発見された。これらの竪穴住居跡をはじめとする多くの遺構が検出されたことから、晩期の居住域がさらに北側にひろがる可能性が考えられた。

微高地の北西部では、弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式期の竪穴住居跡が２棟検出され、精査の結果、その住居構造や、２回程の建て替えがあることなどが明らかになった。さらに、配石遺構、埋設土器群など弥生時代前期に属するとみられる遺構が多数発見された。また、微高地北辺においても1965（昭和40）年の調査で弥生時代前期の包含層、遺構が確認されている。このように弥生時代の遺構、包含層が遺跡北半のひろい範囲に分布することから、山王囲遺跡が規模の大きい弥生集落であることが明らかにされた。

自然堤防西側にひろがる後背湿地では、畦畔状の高まりが北に向かって２条のびていることが確認され、弥生時代前期後半の水路、水田跡が存在する可能性が予想された。

微高地北辺では1965年の調査で縄文時代晩期の土器、石器、有機質遺物を包含した泥炭層が検出されている。その後のボーリング調査によって自然堤防の西側にも泥炭層の分布が確認されており、微高地縁辺に泥炭質の遺物包含層が堆積していると推定された。

このような調査成果にもとづき、第２次調査では以下の①から⑤の課題を掲げた。

①晩期集落の解明　第１次調査にひきつづき、微高地南半部の晩期集落の構造とひろがりを明らかにすることを第１の課題とした。

②弥生集落の解明　微高地北半で検出された弥生時代前期の竪穴住居跡とその周辺の遺構を調査し、弥生集落の構造の究明を目指した。

③弥生水路、水田跡の追究　微高地縁辺で検出された畦畔状遺構の周辺を精査し、弥生時代の水路跡、水田跡の検出を目指した。

④泥炭層の検討　1997年度には、泥炭層について、保存、整備のために精査することを予定しており、その調査体制、方法を検討するため、今回の調査で試掘を計画した。1995年度の調査で畦畔状遺構が検出されたⅠ区で、泥炭層が確認され、縄文時代終末と弥生時代の遺物が出土している。今回の調査ではこのⅠ区で泥炭層を一部掘り下げ、その状況を検討することとした。

⑤遺跡北東部における遺構群の確認　自然堤防の北西部側から北中央部にかけても、1965年の調査区と1995年度の第１次調査区との間で、縄文時代晩期から弥生時代の遺構の検出に努めた。（須藤）

第１図　山王囲遺跡位置図［Scale 1 ：50000］　　国土地理院発行「岩ヶ崎」

Location of the Sanno-gakoi site

第2章　調査の概要

第1節　調査の方法

調査にあたって第1次調査と同様に一辺3ｍのグリッドを基準とした。第1次調査で縄文時代の遺構群が多数検出されたK区をさらに東側と北側に拡張し、遺構の検出を進め、遺構群の時期、位置関係、および性格の把握に努めた。また、F区とG区の間にM区を設け、微高地の北西部で検出された第2、3号竪穴住居跡や第1号配石遺構など、弥生時代の遺構群のあり方を検討した。さらに、微高地縁辺で検出された畦畔状遺構の性格を明らかにするため、I区の北側と西側を拡張した。また、弥生時代の溝（第7号溝跡）の性格を明らかにするためにI南、N、O1～9区を設定した（第1図版）。

H、K区に試掘トレンチを設け層の堆積状況を観察し、遺跡の立地する自然堤防の形成過程について考察を行った。また、東北大学考古学研究室所有ソキア製トータル・ステイションによって、遺構出土の遺物を中心として可能な限り遺物出土位置の記録を行った。遺構の埋土についてはフルイにかけ微細遺物の検出を実施した。

第2節　調査の経過

第2次調査は8月1日より開始された。8月1日にF・M・G・I・K区、2日にE区、21日にI西区、28日にI南・N区を設定した。表土除去を2日にF区、5日にG・H・I・M区、6日にG・H・I・K区、7日にE・K区、8・9日にK区、22日にI西・E区北側・G区南側、28日にI南・N区で行った。

8月5日から9月20日にかけて各遺構の精査を行った。第2、3号竪穴住居跡の精査を、F区では8月6日、M区では8月19日より開始した。8月6日にM区で第6号土器埋設土壙を検出した。22日にK区で第7号溝跡を検出した。27日にE区で環状石斧が出土した。9月3日にI区の北壁にそって層序観察のための試掘トレンチを設定し、掘り下げを行った。4日にE区で第9号土器埋設土壙を検出した。6日にE区でピット338を検出した。9日にK区で第8号土器埋設土壙を検出した。12日にM区で第8号竪穴住居跡を検出した。

9月14日午後2時から現地説明会を行った。

9月17日にH区で層序観察のため試掘トレンチを設定し、掘り進めた。K区でピット337より石製小玉4点が出土し、27日にはさらに2点が出土した。20日にK区で層序観察のための深掘区を設定し、精査した。同日、第8号土器埋設土壙出土の合せ口甕棺のとり上げを行った。第7号溝跡の範囲確認のため、24日から26日にかけてO1～9区を設定し、O1～7区で第7号溝跡を検出した。12日に東北大学鈴木三男氏が来跡し、植物遺存体の出土状況の、25日には山形大学阿子島功が来跡し、地形の観察を行った。26日にパリノ・サーヴェイが自然環境分析を目的として土壌サンプルの採取を行った。

遺構および遺物の出土状況の諸記録は随時行い、10月4日に作業を終了した。

10月24日には東北歴史資料館の協力で、K区第7号溝跡の土層断面の剥ぎとりを行った。　（大場）

第3章　調査の成果

第1節　層　　序

基本層序は第1次調査の報告に従い、第2次調査であらたに確認された層序について以下に記す。

H区試掘トレンチ（第2図版）

南壁際を長さ6ｍにわたり10層上面から深さ約1ｍまで試掘した結果、10ａ層から10ｍ層の13枚の層が認められた。10ａ層は粘土質シルトであり、10ｂ層以下はシルト、または砂である。層は全体的に東に向かって傾斜し、ラミナ状に堆積しており、水成堆積と考えられる。最下部で、自然堤防を形成する砂礫堆であると考えられる11層が確認された。10ａ層から10ｍ層、11層では遺物は出土しなかった。

Ｉ区試掘トレンチ（第2図版）

Ｉ区の北壁にそって試掘トレンチを設定し、深さ約1.4ｍまで9層以下の堆積状況を観察した。その結果601～612層の12枚の遺物包含層を確認した。

601層は褐灰色砂質シルトで鉄分と炭化物を多く含む。

602層は黒褐色のシルト質で粗砂、鉄分を少量含む。晩期Ⅴ期～弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。

603層は黒色のシルトで炭化物を多量に含み、604層由来の粘土粒を少量含む。晩期Ⅳ期～弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。

604層は灰色の粘土層である。晩期Ⅴ期～弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。

605層は礫を含んだ砂層または礫層であり、土色、粒度、礫の大きさによりａ～ｄに細分される。605ａ層は黒褐色の砂質シルトで、晩期Ⅳ期～弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。605ｂ、ｃ層は褐灰色の中砂である。605ｄ層は灰黄褐色砂質シルトで晩期Ⅴ期、弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。

606層は黒色の粘土質シルトで晩期Ⅵ期～弥生Ⅱｂ期の土器が出土している。

607層は黒褐色の粘土質シルトである。

608層は黒色の粘土で609層は褐灰色のシルトである。

610層は含まれる礫の大きさから610ａ、ｂの2枚に細分される。晩期Ⅳ期～Ⅵ期の土器、動植物遺存体の出土が確認されている。610ａ層からは円盤形石器、磨製石斧が、610ｂ層からは土版が出土している。610ａ、610ｂ層ともに褐灰色の粗砂である。

611層は褐灰色の粗砂で晩期Ⅴ期の土器、木製品が出土している。

612層は黒褐色の粘土である。

Ｉ西区（第2図版）

Ｉ区の西側に拡張したＩ西区では5層と9層との間に合計30枚の層が確認された。層厚は10～20cm程度であり、せまい範囲に分布する。これらは砂質シルトまたは砂の層であり、水成堆積と推定される。遺物の出土はみられない。

K区（第3図版）

第2次調査では調査区を北へ拡張した結果、第1次調査の層序に、新たに確認された層が加わり、層名の変更を余儀なくされた。

5、6層はK区北寄りに分布する遺物包含層でそれぞれG～J区の5、6層に対応すると考えられる。6層において第8号土器埋設土壙が検出されていることから、6層は弥生時代前期の生活面であった可能性が高い。

また、8a層、8b層はそれぞれ第1次調査の8、9層と考えられる。遺物は晩期Ⅳ期から弥生Ⅳ期までの土器が混在することからこれらの層中の遺物は2次堆積と推定される。

9、10層はそれぞれG～J区の9、10層に対応する。

K区試掘トレンチ（第3図版）

発掘区北壁際東寄りに試掘トレンチを設定し、10層上面から1.5mまで掘り下げた結果、801～810までの10枚の層が確認された。801、802層はシルト、803層は砂、804、805層はシルト質粘土、806および810層は礫層である。807～809層は砂層である。これらはラミナ状の堆積が観察されるなど、水成堆積と推定される。遺物は出土していない。

（大場）

第2節　遺　　構

1）竪穴住居跡

第1次調査から継続し、F区とF区の西側に拡張したM区において、第3号竪穴住居跡と第2号竪穴住居跡を精査した。またM区中央北寄りで第8号竪穴住居跡を検出し、精査を行った。

第2号竪穴住居跡（第2図）

第2号竪穴住居跡はF区北寄りで検出された。平面形は直径5.6mの不整円形を呈する。壁上部は第3号竪穴住居の拡張で失われており、残存する竪穴の深さは5～15cmである。壁溝の痕跡が竪穴の壁際に断続的に認められた。

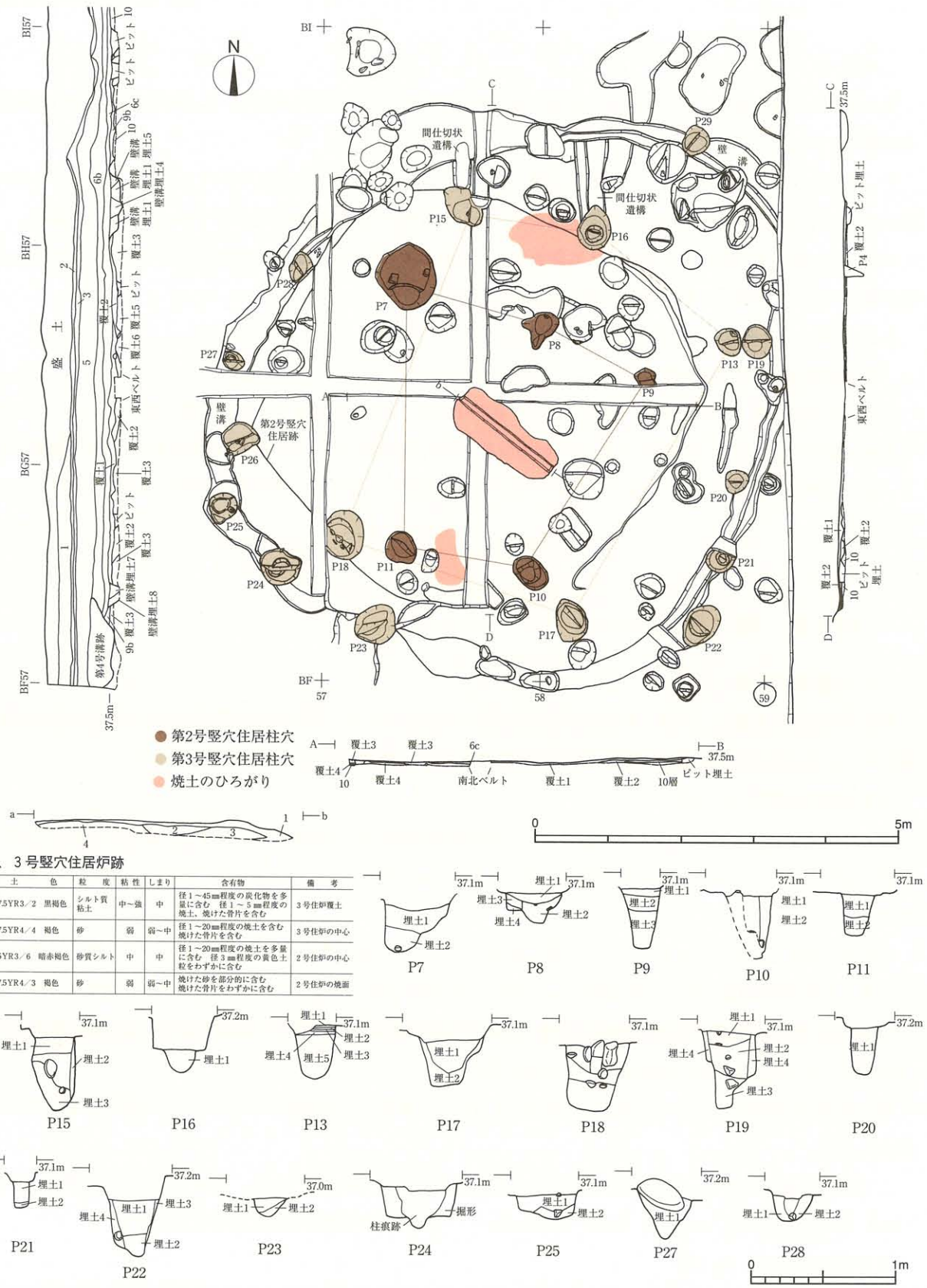
主柱穴と推定される柱穴はP7～11の5基が検出されている。それぞれの主柱穴の間隔はP7とP8の間が2m、P8とP9が1.6m、P9とP10が3.1m、P10とP11は1.8m、P11とP7は3.5mである。主柱穴は深さ30～50cm程度である。竪穴の中央やや南東寄りに重複する炉が2基（F1、F2）検出されている。炉の重複関係と位置からF1が第2号竪穴住居跡に伴うと推定される。

第2号竪穴住居跡は床面および覆土から弥生Ⅱb期の山王Ⅲ層式土器が出土しており、この時期に帰属すると考えられる。

この竪穴住居は平面形、規模の点で岩手県滝沢村湯舟沢遺跡（桐生他　1986）、軽米町馬場野Ⅱ遺跡（工藤他1986）、宮古市上村貝塚（小田野他　1991）で検出されている弥生時代前期の竪穴住居跡と類似する。

第3号竪穴住居跡（第2図）

第3号竪穴住居跡は、第2号竪穴住居跡と重複し、直径約8mの不整円形を呈する。第3号竪穴住居跡は第2号竪穴住居跡を拡張して建て替えられている。壁上部は大きく削平されている。また、周囲にひろがる10層と類似した黄色粘土による貼り床が床面をひろく覆っている。



第２、３号竪穴住居炉跡

炉覆土	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	7.5YR3／2 黒褐色	シルト質粘土	中～強	中	径１～45㎜程度の炭化物を多量に含む 径１～５㎜程度の焼土、焼けた骨片を含む	３号住炉覆土
2	7.5YR4／4 褐色	砂	弱	弱～中	径１～20㎜程度の焼土を含む 焼けた骨片を含む	３号住炉の中心
3	5YR3／6 暗赤褐色	砂質シルト	中	中	径１～20㎜程度の焼土を多量に含む 径３㎜程度の黄色土粒をわずかに含む	２号住炉の中心
4	7.5YR4／3 褐色	砂	弱	弱～中	焼けた砂を部分的に含む 焼けた骨片をわずかに含む	２号住炉の焼面

第２図　第２、３号竪穴住居跡（F・M区）

Plan and sections of pit dwelling 2 and 3

柱穴Ｐ15、Ｐ16、Ｐ13、Ｐ17、Ｐ18の５基が主柱穴と推定される。主柱穴の間隔はＰ15とＰ16で1.6ｍ、Ｐ16とＰ13で2.4ｍ、Ｐ13とＰ17で4.3ｍ、Ｐ17とＰ18で3.4ｍ、Ｐ18とＰ15で4.8ｍであり、柱配置は比較的整った長方形を呈する。それぞれの柱穴の深さは40～60㎝程度である。

炉跡Ｆ２とＦ１は重複し、Ｆ２がＦ１の上層にある。したがってＦ２は拡張住居第３号竪穴住居跡に伴うと判断された。この炉跡は不整形を呈し、中に拳大の焼けた礫数点が認められた。

周囲には壁溝がめぐり、幅は約20～80㎝、深さ５～15㎝程度である。また東側の壁溝では壁の痕跡が認められた。壁溝に沿って壁柱穴と推定されるＰ19、Ｐ20、Ｐ21、Ｐ22、Ｐ23、Ｐ24、Ｐ27、Ｐ25、Ｐ28、Ｐ29、Ｐ30が検出されている。壁柱穴の間隔は１～1.5ｍで、それぞれの深さは20～40㎝程度である。

また、北側の壁溝近くに間仕切り状遺構が２条検出されている。竪穴住居跡北寄りの主柱穴Ｐ15、Ｐ16と壁溝の間にみられる長方形を呈するプランで、Ｐ15に伴う間仕切り状遺構は幅25㎝、長さ65㎝で、Ｐ16に伴う間仕切

第２．３号竪穴住居跡

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
覆土１	10YR3／4　褐色	シルト	中	中	径３㎜程度の赤色土粒をを中程度含む	
覆土２	10YR4／4　褐色	シルト	中	中	径３㎜程度の赤色土粒を中程度含む　黄色土をブロック状に多く含む	
覆土３	7.5YR3／4　暗褐色	シルト	中	強	径１～２㎜の焼土粒、炭化物を微量に含む　径３～５㎜の黄色土を少量含む	
覆土４	7.5YR3／2　黒褐色	シルト	中	強	径１～２㎜の焼土粒を微量に含む　径２㎜の炭化物を微量に含む　径２～５㎝の黄色土ブロックを多量に含む	第３号竪穴住居貼床
壁溝埋土	10YR3／3　暗褐色	シルト	弱	弱	径１～５㎜程度の炭化物を若干含む	

第２号竪穴住居主柱穴

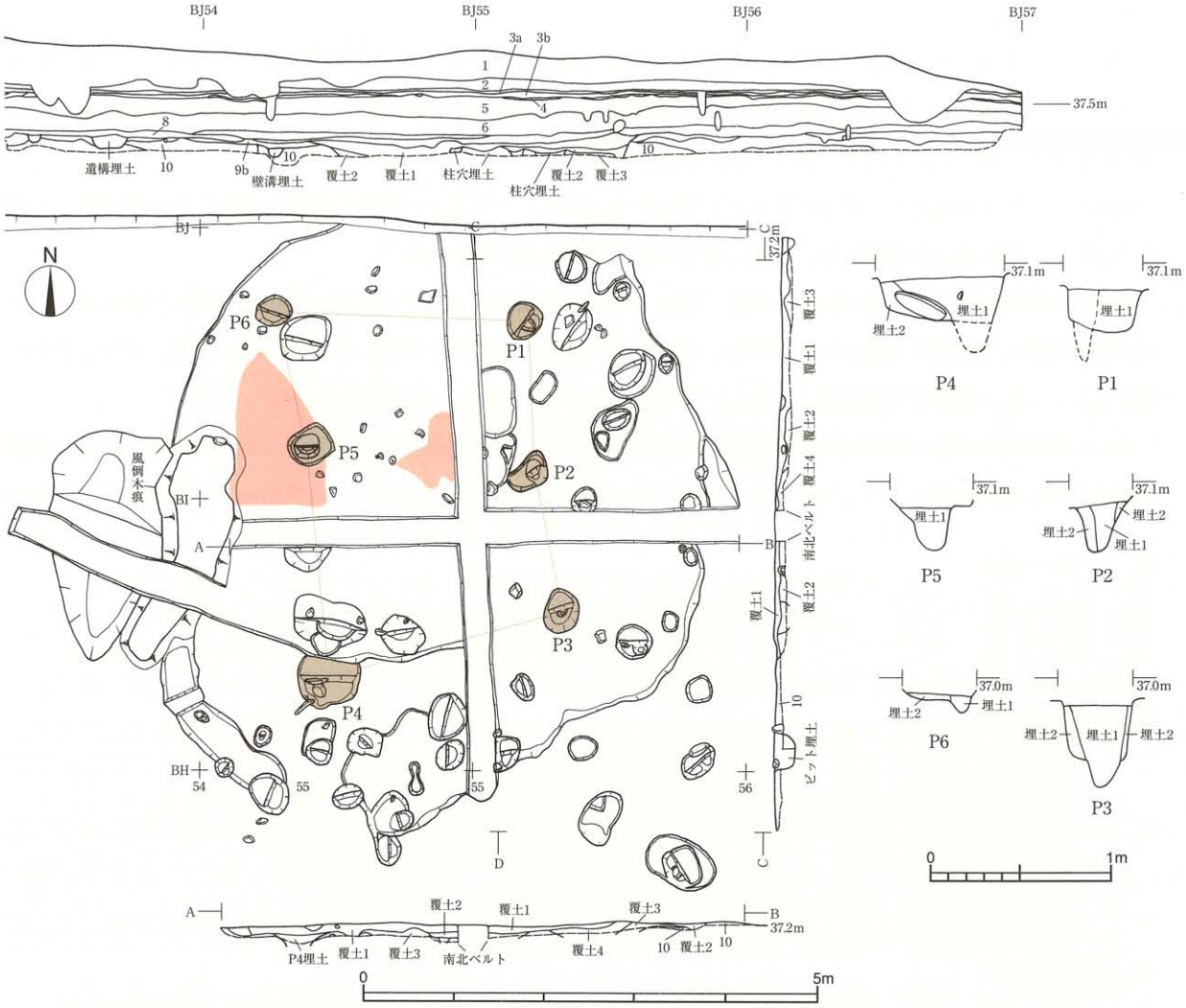
ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
P7	埋土１	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	径５㎜程度の黄色土を多く含む
	埋土２	7.5YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	径５㎜程度の黄色、赤色土粒をまばらに含む
P8	埋土１	10YR2／3　黒褐色	シルト	中	中	径５㎜程度の焼土粒、炭化物を比較的多く含む
	埋土２	10YR3／3　暗褐色	砂質シルト	中	中	径５～20㎜の黄褐色土ブロックを多く含む　径５㎜の炭化物を比較的多く含む
	埋土３	10YR5／6　黄褐色	粘土質シルト	強	中	
	埋土４	10YR2／1　黒色	粘土質シルト	強	中	
P9	埋土１	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	強	径１～２㎜の炭化物と焼土粒を含む　径５㎜の黄色土粒を少量含む
	埋土２	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	径３㎜の黄色土ブロックを多く含む　径２㎜の炭化物を少量含む
	埋土３	10YR3／5　暗褐色	シルト	中	中	
P10	埋土１	10YR3／4　暗褐色	シルト	中	中	径１㎜程度の炭化物、径１～３㎜程度の赤色土粒を少量含む
	埋土２	10YR4／4　褐色	砂質シルト	中	弱	
P11	埋土１	10YR3／2　黒褐色	シルト	中	中	径２㎜程度の黄色、赤色土粒をまばらに含む
	埋土２	10YR4／4　褐色	砂質シルト	中	弱	

第３号竪穴住居主柱穴

ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
P15	埋土１	10YR3／1　黒褐色	粘土質シルト	中	中	径１～３㎝の黄色の砂質ブロックを若干含む　径５㎜の赤色土粒を少量含む　径５㎜の炭化物を若干含む
	埋土２	7.5YR3／2　黒褐色	シルト質粘土	中	中	径３㎝の黄色砂を少量含む　下部に径２～３㎝の焼土を若干含む　径１㎝の炭化物を若干含む
	埋土３	10YR2／3　黒褐色	粘土	中	強	径１㎝の黄色粘土を少量、径約１㎝の炭化物を多量に含む　径２～３㎝の焼土を若干含む
P16	埋土１	10YR2／2　黒褐色	シルト質粘土	中～強	中	径１～２㎜程度の赤色土粒を含む　径３㎜程度の黄色土粒を若干含む
P13	埋土１	10YR3／3　暗褐色	シルト	中	中	径１㎜以下の黄色土粒を中程度含む
	埋土２	2.5YR4／6　赤褐色		弱	中	埋土１の土をわずかに含む
	埋土３	10YR5／6　黄褐色	シルト	中	中	埋土４の土をわずかに含む
	埋土４	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	
	埋土５	10YR3／3　暗褐色	シルト	中	中	径１～２㎝の黄色ブロックを中程度含む
P17	埋土１	10YR2／3　黒褐色	シルト質粘土	中～強	中	径５～10㎜の黄色土粒を多量に含む　径３～５㎜の焼土粒を比較的多く含む 径１～５㎜の炭化物を比較的多く含む　径３㎜の灰白色粘土粒を多く含む
	埋土２	10YR4／4　褐色	中砂	弱	弱	２～３㎜の赤褐色土粒を少量含む　１～２㎜の炭化物を少量含む
P18	埋土１	10YR2／3　黒褐色	粘土質シルト	中	中～強	径１～２㎜の炭化物を少量含む 径２～３㎜の焼土粒を少量含む　径５～15㎝の礫を６～７個含む　径１～２㎝の黄色土粒10YR4／6褐色を比較的多く含む
	埋土２	7.5YR3／1　黒褐色	シルト質粘土	中～強	中～強	径１～２㎜の炭化物を少量含む　径１～２㎜の焼土粒を少量含む　５㎝程度の礫を多く含む 径１㎝程度の黄色土粒 10YR5／6 黄褐色を少量含む
	埋土３	10YR2／2　黒褐色	シルト質粘土	中～強	中～強	径５㎝程度の礫を多く含む　径１～２㎜の炭化物を少量含む　径１～２㎜の焼土粒を少量含む 径５～10㎜の黄色土粒 10YR4／6褐色を少量含む
	柱痕跡	10YR4／3　にぶい黄褐色	砂質シルト	中	弱～中	径１㎜の炭化物を微量に含む

第３号竪穴住居主柱穴

ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
P19	埋土１	7.5YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	径４～５㎝の赤色焼土ブロックを少量、径２～５㎜の焼土粒および径５～10㎜の炭化物を多量に含む
	埋土２	7.5YR3／2　黒褐色	シルト	中	中	径１～2㎝の赤色焼土粒を若干、径2～4㎜の炭化物を少量含む　径5㎝程の黄褐色シルトのブロックを多量に含む
	埋土３	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	10㎝の赤色焼土ブロックを少量、３～５㎝の黄褐色土ブロックを多量に、径３～５㎜の赤色焼土粒を少量、径１～２㎜の炭化物をわずかに含む
	埋土４	7.5YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	３～７㎝の黄褐色シルトのブロックを多量に含む　径１㎜以下の赤色焼土粒、径1～2㎜の炭化物をわずかに含む
	埋土５	7.5YR3／1　黒褐色	シルト	中	中	明黄褐色シルトブロックを全体に斑状に含む　３～５㎜の赤色焼土粒をわずかに含む
P20	埋土１	7.5YR3／2　黒褐色	シルト質粘土	中	中	径３㎜程度の赤色土粒を若干含む　径５～20㎜程度の黄褐色土ブロックを含む　径１～２㎜程度の炭化物をまばらに含む
P21	埋土１	10YR3／3　暗褐色	シルト質粘土	中～強	中～強	径１～５㎜の黄褐色土粒を少量含む　径１㎜程度の焼土を若干含む　径１㎜程度の炭化物を若干含む
	埋土２	10YR3／2　黒褐色	粘土質シルト	中～強	中	径１～２㎜の黄褐色土粒を若干含む　径１㎜程度の炭化物を若干含む　径１㎜程度の焼土を若干含む
P22	埋土１	10YR3／2　黒褐色	粘土	中	中	径1～3㎝の黄褐色粘土ブロックを若干、径5㎜程の赤色粘土粒を少量、径5～30㎜の炭化物を多量に含む　細砂を少量含む
	埋土２	10YR2／2　黒褐色	粘土	中	中	径１㎜程の赤色焼土粒をわずかに含む　細砂をわずかに含む
	埋土３	10YR3／3　暗褐色	粘土	中	中	径３～６㎝の明黄褐色粘土ブロックを多量に、径１㎜以下の赤色焼土粒をわずかに含む
P24	柱痕跡	10YR2／2　黒褐色	シルト	中	中	２㎜程度の赤褐色土粒を少量含む　３～５㎜の灰白色土粒を少量含む　３㎜程度の炭化物を少量含む 10～15㎜の礫を少量含む
	堀　形	7.5YR3／4　暗褐色	シルト	弱～中	弱～中	１～４㎝の礫を比較的多く含む
P25	埋土１	10YR3／4　暗褐色	シルト質砂	中	弱	径１～10㎜の黄色砂のブロックを多く含む　径１～10㎜の炭化物を比較的多く含む　径２～５㎜の焼土粒を少量含む
	埋土２	10YR4／3　にぶい黄褐色	シルト質砂	中	弱	径１～２㎜の炭化物を少量含む　径１㎜以下の焼土粒を少量含む
P27	埋土１	10YR4／3　にぶい黄褐色と10YR1.7／1黒が混在	砂質シルト	中	中	径１～３㎜の赤黄色土粒を少量含む
P28	埋土１	10YR2／3　黒褐色	シルト	中	中	径2～3㎜の黄色土粒を比較的少量含む　径1㎜以下の炭化物を少量含む　径1㎜以下の焼土粒を比較的少量含む
	埋土２	10YR2／3　黒褐色	砂	弱	中	黄色砂をブロック状に含む　径２㎜程の炭化物を比較的少量含む　径１～２㎜の焼土粒を比較的多く含む 径１㎝程の灰白色粘土ブロックを少量含む



M区第8号竪穴住居跡

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
覆土1	7.5YR3／2 黒褐色	シルト	中	中	径10㎜前後の赤色の鉄分を多く含む　マンガンを比較的多く含む 径1～5㎜程度のブロック状の炭化物を多く含む	
覆土2	7.5YR3／1 黒褐色	砂質シルト	中	弱	径10㎜前後の赤色の鉄分を比較的多く含む　マンガンを比較的多く含む　1～5㎜程のブロック状の炭化物を若干含む	埋土2は床面を形成すると考えられる
覆土3	10YR7／3 にぶい黄橙色	砂	弱	中	径10㎜前後の赤色鉄分をわずかに含む	
覆土4	10YR3／3 暗褐色	砂	弱	中	径5～10㎜の黄色土粒を若干含む　径5㎜以下の赤色土粒をわずかに含む	

M区第8号竪穴住居主柱穴

ピット番号	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
P2	埋土1	10YR5／1 灰褐色	砂質シルト	中	中	径1～5㎜の炭化物、径1～3㎜の焼土を少量含む
	埋土2	5YR3／1 黒褐色	小砂	弱	中	径1～5㎜の焼土、径1～3㎜の炭化物を少量含む
P3	埋土1		シルト	中	中	5～20㎜のブロック状の大きな炭化物を多量に含む　径5㎜以上の黄色土粒を若干含む
	埋土2		砂質シルト	弱	中	径5㎜程の黄色土粒を比較的多く含む　炭化物を若干含む
P4	埋土1	10YR3／2 暗褐色	シルト	中	中	埋土2の砂をブロック状に含む　10㎜前後の大きめの炭化物をブロック状に多量に含む　鉄分を多く含む
	埋土2	10YR8／3 浅黄橙色	砂	弱	中	ブロック状の炭化物を若干含む　径10㎜以下の小礫をわずかに含む
P5	埋土1	5YR4／2 褐灰色	小砂	弱	中	径1～5㎜の黄褐色土粒、径1～3㎜程の炭化物、焼土を少量含む
P6	埋土1	5YR3／3 暗赤褐色		中	中	径1～5㎜の粗砂を若干含む　径1～10㎜の黄色土粒を少量含む　径5㎜以下の炭化物を少量含む
	埋土2	5YR4／3 にぶい赤褐色		中	中	径1～5㎜の粗砂を若干含む　径1～10㎜の黄色土粒を少量含む　径5㎜以下の炭化物を少量含む

第3図　第8号竪穴住居跡（M区）

Plan and sections of pit dwelling 8

り状遺構は幅36cm、長さ1.1ｍである。

北寄りの貼り床上に焼け面がひろがり、主柱穴のＰ13の埋土に焼土が認められること、壁溝から焼けた土器片が出土していることなどから第３号竪穴住居跡は焼失住居と推定される。

第３号竪穴住居跡の床面や覆土、柱穴の埋土からは弥生Ⅱｂ期の山王Ⅲ層式土器（第８図１、７）や石器（第７図版21、第８図版37、第11図版67）が出土しており、この時期に属する住居跡と考えられる。

第８号竪穴住居跡（第３図）

第８号竪穴住居跡はM区北寄りで検出された。直径6.4ｍ程の不整円形を呈し、残存する竪穴の深さは10～15cm程である。竪穴住居跡の中央やや北寄りに不整形の明褐色土のひろがりが検出され、多量の炭化物と焼土を含んでいることから、炉跡と判断した。

主柱穴と推定される柱穴としてはＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６の６基が検出された。東西1.5ｍ、南北3.5ｍ程の長方形の柱配置をとると推定される。柱穴の深さは20～40cm程度である。

また、壁溝が南西側の壁際で幅30cm、長さ２ｍ程にわたって検出されている。

第８号竪穴住居跡は、覆土および柱穴の埋土から弥生Ⅱｂ期の山王Ⅲ層式土器（第８図14～16）や、スタンプ状土製品（第22図２）、土偶の頸部破片（第22図３）が出土しており、この時期に帰属すると考えられる。

第８号竪穴住居跡は極めて浅かったため、精査の当初は、壁のたち上がりが捉えにくかった。しかし、床面が検出されるとともに深い柱穴、炉跡が確認され、住居の構造が明らかにされた。第２、３、８号竪穴住居跡はいずれも大規模に削平され、厚い洪水層である６層に覆われている。（氷見）

２）配 石 遺 構

第２号配石遺構

Ｅ区ＢＧ65・66区で検出された。南北1.4ｍ、東西1.7ｍが検出されている。配石の下部には深さ約30cmのピットが確認された。配石上部から晩期ⅣからⅤ期（第13図16）、弥生Ⅱａ期の鉢（第13図15）、凹石が出土している。

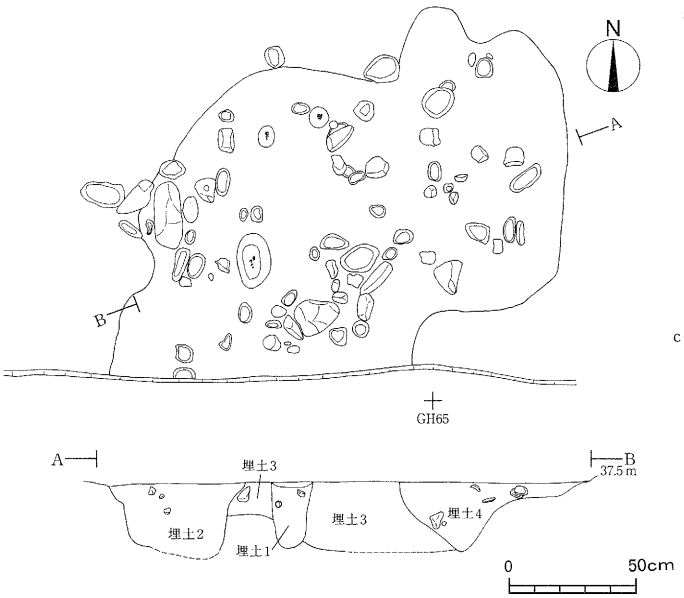
３）溝　　跡

第７号溝跡（第５図、第２、３図版）

Ｉ区、Ｉ南区、Ｎ、Ｋ区、Ｏ１～４区で検出された。Ｋ区北寄りとＮ区では106層上面、Ｋ区東寄りでは７層上面で検出され、10層まで掘り込んでいる。また、Ｉ区、Ｉ南区では８層上面で検出された。長さ約140ｍにわたって北西から南東にかけてゆるやかに蛇行してのびる。

Ｎ、Ｋ、Ｏ１～４区においては、幅約1.5～２ｍ、検出面からの深さは約１ｍあり、底面のレベルは標高約37ｍでほとんど差がみられない。埋土は大きく４つに区分された。埋土１～３は砂質シルト、埋土４は粘土質シルトである。底面は比較的平坦で壁は急傾斜で立ち上がり、埋土３の下部を境に溝の壁上部はゆるやかにひろがるように立ち上がる。溝の上部と下部で壁の傾斜、埋土の堆積状況が大きく異なり、溝の改修が行われた可能性が高い。埋土からは縄文時代晩期Ⅳ期～弥生Ⅳ期の土器、石鏃、土製紡錘車が出土している。

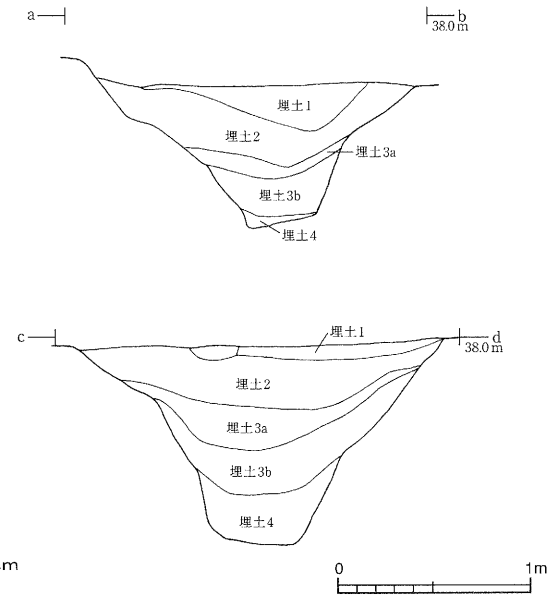
溝はＩ区、Ｉ南区で南北約15ｍ分が検出されている。溝の幅は２～2.8ｍとひろくなり、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土１～３を確認している。埋土１～３はシルトであり、８層と類似している。埋土１～３からは弥生



第２号配石遺構　Ｅ区BG65・66

層名	土色	粒度	粘性	しまり	合有物
埋土１	7.5YR3.／2　黒褐色	粘土質シルト	強	中	径３㎜の炭化物、径２㎜の黄色土粒を少量、径２㎜の赤色粒子をわずかに含む　礫を含む
埋土２	7.5YR3.／2　黒褐色	粘土質シルト	強	中	径３㎜の炭化物、径２～８㎜の黄色土粒、赤色粒子をブロック状に少量含む　礫を多く含む
埋土３	10YR4.／5　にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	中	10層由来の黄色土ブロックを多量に含む　径２～３㎜の炭化物を少量含む
埋土４	10YR4.／3　にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	中	10層由来の黄色土ブロックを含む　径５㎜の炭化物を少量含む

第４図　第２号配石遺構（Ｅ区）
Plan and sections of stone arrengement 2



第７号溝跡

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
埋土１	10YR5.／2　灰黄色	シルト	中	弱	鉄分、マンガンを含む
埋土２	10YR4.／3　にぶい黄褐色	シルト	中	弱	鉄分、マンガンを含む　10層由来の黄色土ブロックを含む
埋土3a	10YR4.／2　灰黄色	シルト	中	中	鉄分、マンガンを埋土２よりも多量に含む　黄色土を少量含む
埋土3b	10YR4.／3　にぶい黄褐色	シルト質粘土	強	強	鉄分、黄色土ブロックを含む　炭化物を少量含む
埋土４	10YR5.／6　黄褐色	粘土	強	強	鉄分を含む　マンガンを少量含む

第５図　第７号溝跡
Section of ditch 7

Ⅱａ、Ⅱｂ期の土器が多量に出土している。

第７号溝跡は、出土遺物の内容と106層上面で検出されたことなどから弥生時代前期に造営され、機能しており、弥生時代Ⅳ期には埋没したと考えられる。

４）土器埋設土壙

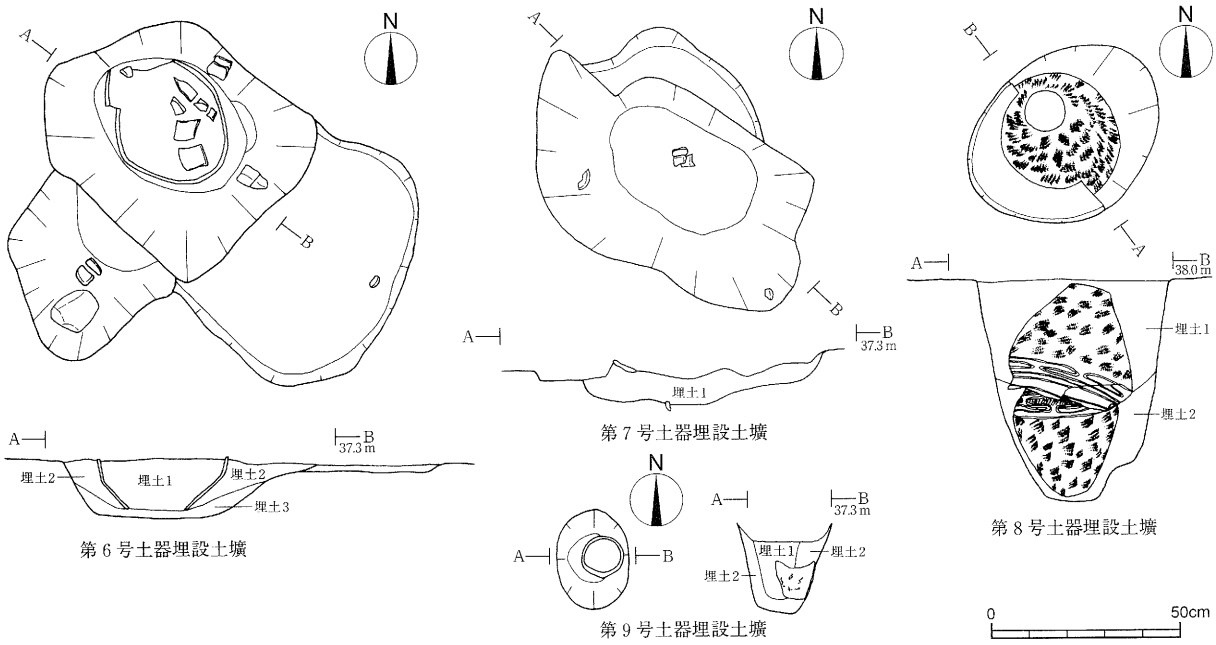
第６号土器埋設土壙（第６図）

M区ＢＨ55区の６層上面で検出された。土壙は長径65㎝、短径55㎝の楕円形を呈し、残存する深さは約15㎝である。弥生時代Ⅲ期の壷（第４図版12）が倒立した状態で埋設されていた。

出土した壷は全体に朱が塗布され、口縁部から頸部はミガキ、体部にはＬＲ縄文が施されている。最大径は推定で30㎝である。土器内部の土壌はにぶい黄褐色の砂質シルトで土壙の埋土に比べやや明るい色調をもつ。この土壌に遺物は認められなかった。土器の風化がはげしく、取り上げ後パラロイドＢ－72で保存処理を行った。この土器は口頸部の膨らむ形態などから弥生時代Ⅱ～Ⅲ期に属すると考えられる。

土壙は埋設された土器よりもひとまわり大きく掘られており、その底面は９層に達する。埋土は２層が確認された。埋土１は暗褐色の粘土質シルトで黄褐色土ブロック、マンガンを含んでいる。埋土２は暗褐色砂質シルトで炭化物を含んでいる。土壙上部は削平を受け、土器の底部は失われ、体部下半の破損も顕著である。

第６号土器埋設土壙の下層で弥生Ⅱｂ期に属する第８号竪穴住居跡が検出されている。さらにその東には第８号竪穴住居跡と同時期の第３号竪穴住居跡が確認されていることから弥生Ⅱｂ期の居住域が埋没した後、この土器埋設土壙が掘り込まれたと考えられる。



第6号土器埋設土壙（M区 BH55区）					
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
埋土1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	6層由来の粘土を含む　黄褐色土粒を含む
埋土2	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	中	中	黄褐色土ブロック、マンガンを含む
埋土3	10YR3/3　暗褐色	砂質シルト	中	中	炭化物を含む
第7号土器埋設土壙（M区 BG55区）					
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
埋土1	10YR3/4　暗褐色	砂質シルト	中	中	黄褐色土ブロック含む　9層由来の砂を含む　赤色粒子、マンガンを含む
第8号土器埋設土壙（K区 AV55区）					
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
埋土1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	径1㎜の白色粒子、径5㎜の黄褐色土粒をわずかに含む
埋土2	10YR4/4　褐色	細砂	弱	弱	
第9号土器埋設土壙（E区 BG66区）					
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
埋土1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	強	中	径1～3㎜の炭化物をわずかに、径3～5㎜の黄褐色土粒を少量含む
埋土2	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	強	中	径5～20㎜の黄褐色ブロックを多量に含む
埋土3	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	強	中	径1～3㎜の炭化物をわずかに、径3～5㎜の黄褐色土粒を少量含む

第6図　第6、7、8、9号土器埋設土壙
Plans and sections of pit 6, 7, 8 and 9 with buried pottery

第7号土器埋設土壙（第6図）

M区ＢＧ55区の6層上面で検出された。長径70cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さ約10cm、埋土は暗褐色砂質シルトである。弥生前期の高杯の脚部、あるいは蓋形土器のつまみ（第6図版1）が土壙上部から出土している。

第8号土器埋設土壙（第6図）

K区ＡＶ55区の6層上面で検出された。弥生Ⅱｂ期の山王Ⅲ層式甕が合せ口の状態で埋設されていた。

土壙は長径55cm、短径45cmの楕円形に掘り込まれ、深さ60cm程度である。土壙底面は10層に達している。埋土1はにぶい黄褐色の砂質シルトで白色粒子、黄褐色土粒を含む。埋土2は褐色の砂層で10層に類似している。土器の大きさとほぼ同じ大きさで掘り下げられている。土器をすえた後、すぐに埋め戻されたと考えられる。

この合せ口土器棺は、下甕（第1号土器　第5図版2）、上甕（第2号土器　第5図版1）ともにほぼ完全な形で出土した。第1号土器は体部上位に太い沈線で変形工字文Ｃ2型が4単位描かれている。口径26.4cm、器高33.5cm、最大径30.9cmである。底部には木葉痕がみられる。沈線内には朱が残存しており、彩色されていたと推定される。外面には体部上半から底部にかけて炭化物が多量に付着している。焼成は良好だが内外面とも風化している。第2号土器は体部上位に変形工字文Ｃ2型が施文されている。口径31.6cm、器高33cm、最大径36cmである。沈線内および土器内面に朱が残存している。特に内面については体部上半から下半にかけて土器のおよそ半分をしめる

部分に朱が付着している。さらに土器外面には炭化物の付着がみられる。体部にはいずれもＬＲ縄文が施されている。土壙には第１号土器が直立して置かれ、その上に第２号土器が第１号土器の口頸部を覆うようにかぶせられていた。

第１号土器の内部の土壌を0.5㎜目のフルイを用いて水洗したところ、幼児の頭蓋骨破片と乳歯の破片が検出された。骨片は土器の下半部の土壌中から検出されている。これにより第１、２号合せ口土器が小児甕棺であることが明らかとなった。

第１次調査では弥生時代の墓域が第８号土器埋設土壙の北側で検出されている。第８号土器埋設土壙の検出によって弥生時代の墓域がＶ字溝を南へ越え、微高地中心部までひろがることが確認された。

第９号土器埋設土壙（第６図）

Ｅ区ＢＧ66区で検出された。長径約30㎝、短径20㎝程度の楕円形を呈する。深さ約20㎝である。埋土１は黒褐色の粘土質シルトでわずかに炭化物を含む。埋土２は褐灰色の粘土質シルトである。埋土１、２ともに10層と共通した黄褐色土粒を含む。縄文を施された深鉢（第６図版２）の体部下半から底部までが正立して出土した。

５）ピ　ッ　ト

ピット305（第７図）

Ｋ区ＡＵ62区の７層上面で検出された。10層を掘り込んでいる。径約1.1ｍの円形で、深さ35㎝である。埋土１～７が確認され、埋土１、２は砂質シルト、３は粘土質シルトである。埋土４は薄い炭化物層であり、埋土５～７は粘土質シルトとシルトが交互に堆積する。炭化物の出土状態から貯蔵穴の可能性がある。弥生Ⅱｂ期の壷（第14図４）、甕（第14図３）、晩期Ⅵ期の高杯（第14図５）、鉢（第14図６、11）が出土しており、ピット305は弥生Ⅱｂ期に属すると推定される。

ピット306（第７図）

Ｋ区ＡＳ62区の７層上面で検出された。10層を掘り込んでいる。径約１ｍの円形を呈し、残存する深さは約40㎝である。埋土は１～８が確認され、埋土１、２はシルト、３、４は粘土質シルトである。埋土５は薄い炭化物の層である。埋土６～８は粘土質シルトである。炭化物の出土状況から貯蔵穴の可能性がある。晩期Ⅵ期の鉢（第14図版10）、晩期Ⅴ期の深鉢（第14図13）が出土している。また、弥生時代のものと考えられる鉢の破片（第14図版12）が出土しており、ピット306は縄文時代晩期から弥生時代初頭に属すると推定される。

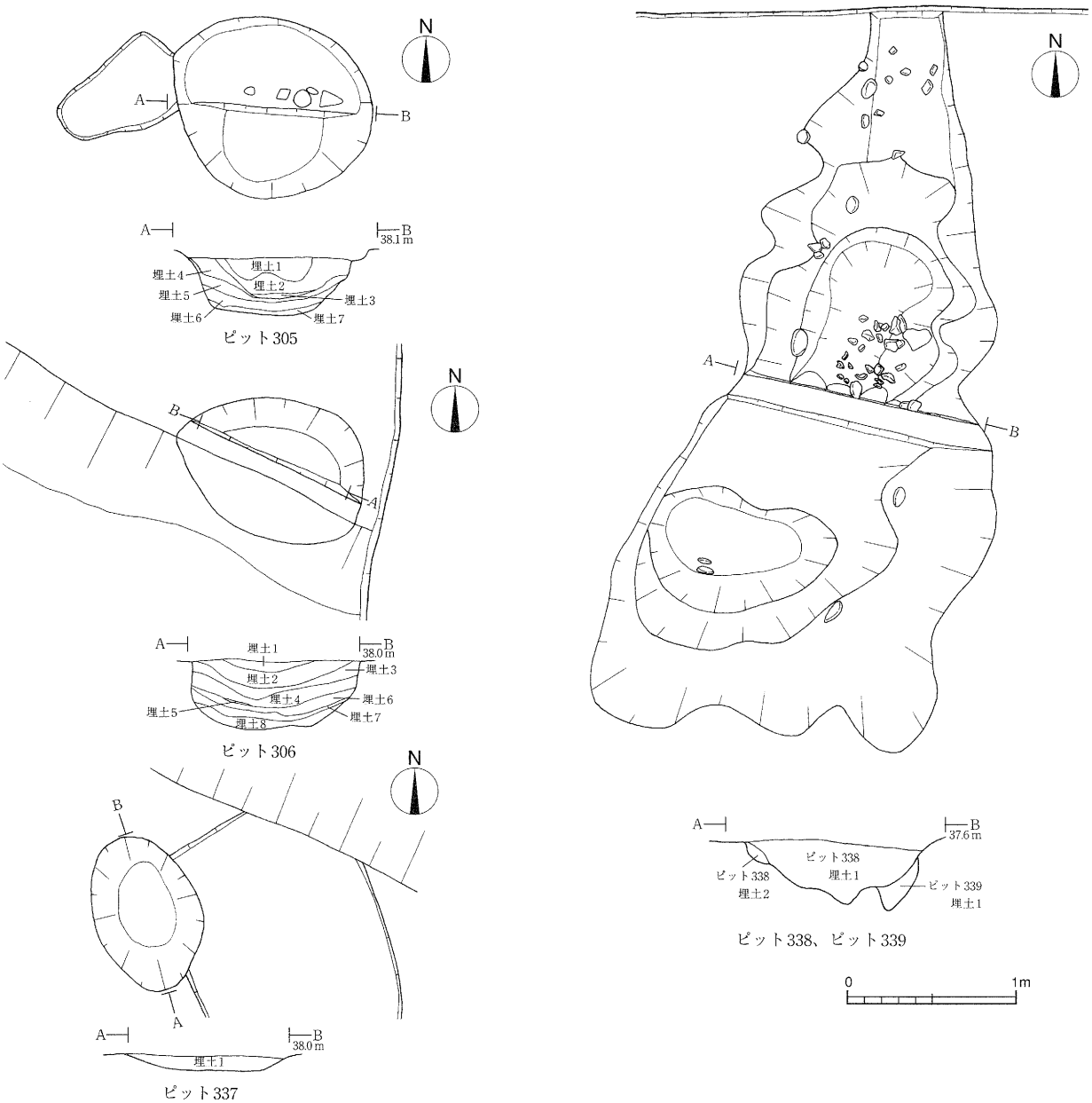
ピット337（第７図）

Ｋ区ＡＳ・ＡＲ60・61区の８層上面で検出された。長軸50㎝、短軸35㎝程度の楕円形を呈し、残存する深さは９㎝である。埋土は褐色のシルトに10層由来の黄褐色土ブロックを含み、人為的に埋め戻されていると判断される。石製小玉６点（第23図１～６）が土壙底部付近から出土している。これらの点より土壙墓であると推定される。８層上面で検出されていることから弥生時代以降に属すると考えられる。

ピット338（第７図）

Ｅ区ＢＦ・ＢＧ60・61で検出された。10層を掘り込んでいる。平面形は不整形を呈し、規模は南北約4.2ｍ、東西は最大で約２ｍである。深さは最も深いところで60㎝程度である。

埋土１からは古墳時代前期の塩釜式に属する土師器の壷（第６図版16）の破片が出土している。



ピット番号	区名	層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
ピット305	K-AU62	埋土1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	弱	中	炭化物を多量に含む	
		埋土2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	弱	中	炭化物を含む	
		埋土3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	中	中	炭化物を含む	
		埋土4		炭化物				
		埋土5	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	中	中	黄色土ブロック、炭化物を含む	
		埋土6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	弱	中	黒褐色土、黄褐色土ブロック、炭化物を少量含む	
		埋土7	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	中	中	径5～10mmの黄色土ブロック、径2mm程度の炭化物をまばらに含む	
ピット306	K-AS62	埋土1	10YR3/3 暗褐色	シルト	中	中	マンガン粒を含む　径3mm程の炭化物をまばらに含む	
		埋土2	10YR3/4 暗褐色	シルト	中	中	径3～10mmの炭化物を含む	
		埋土3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	中	中	径10mm程の炭化物を含む　径20mm程の黄色土ブロックを含む	
		埋土4	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	強	中	径3mm程の炭化物をまばらに含む	
		埋土5		炭化物				
		埋土6	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	強	中	黄色土ブロックを含む	
		埋土7	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	中	中	径1cm程度の炭化物を含む　黄色土ブロックを含む	
		埋土8	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	中	中	径3～5mmの炭化物、黄色土ブロックを含む	
ピット337	K-AS・AR60・61	埋土1	10YR2/2 黒褐色	シルト	弱	強	径2～3mmの10層由来の黄褐色土粒を多量に含む　炭化物を少量含む	
ピット338	E-BF・BG60・61	埋土1	10YR5/1 褐灰色		中	中	径1mmのマンガンをまばらに、炭化物のブロックを多量に含む 径1～5mmの焼土を少量含む	土師器が出土した
ピット339	E-BF・BG60・61	埋土1	10YR3/1 黒褐色	シルト質砂	中	中	径5～20mmの黄褐色土粒を少量含む 径1～3mmの炭化物、径1～10の焼土を少量含む	縄文土器、ドリル、土製小玉が出土した

第7図　ピット305、306、337、338、339

Plans and sections of pit 305, 306, 337, 338 and 339

ピット339（第７図）

Ｅ区ピット338によって上部を壊されている。残存する深さは約35cmである。土製小玉（第22図４）が１点出土している。（大場）

第３節　遺　　物

１）土　　器

Ｉ区の８、９層、Ｉ南区の６～10層の遺物包含層、Ｉ区試掘トレンチの601層～611層および遺構から出土した完形土器と個体認定可能な口縁部や、有文土器片・底部・台部・脚部を抽出し、土器の検討を行った。器形と装飾の明らかな個体は280点に達している。

ａ　縄文土器・弥生土器

属性表に記した「時期」と、土器型式との対応関係は以下のとおりである。縄文時代晩期Ⅲ期は大洞Ｃ１式、Ⅳ期は大洞Ｃ２式、Ⅴ期は大洞Ａ式、Ⅵ期は大洞Ａ′式の時期に相当する。Ⅴ期はさらに1965年の調査成果（伊東他　1985）にもとづいてⅤａ、Ⅴｂ、Ⅴｃの３期に区分した。また、弥生時代Ｉ期は砂沢式の時期に相当する。Ⅱａ期は青木畑式、Ⅱｂ期は山王Ⅲ層式である。Ⅲ期は寺下囲式、Ⅳ期は桝形囲式の時期に相当する。

「器種」は甕、深鉢、鉢、浅鉢、台付浅鉢、高杯、壷、注口土器、蓋に大別した。

「口縁部の特徴」は平坦口縁、平坦口縁に刻みまたは押圧、小波状口縁、山形波状口縁、平坦口縁に突起、山形突起に大別した。

文様帯の名称は、口縁部装飾帯をＩ装飾帯、頸部をⅡ文様帯、体部上半をⅢ文様帯、体部下半をⅣ文様帯、底部あるいは台部、脚部をⅤ文様帯とした。変形工字文については、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｐの４類型に大別し、さらに、須藤の分類に従い、Ａ型を４類型に、Ｃ型を６類型にそれぞれ細別した。ただし、変形工字文Ｃ３型は王字文として分類した（須藤　1976、90）。

抽出された縄文土器には晩期Ⅲ期から晩期Ⅵ期までの資料が含まれている。

晩期Ⅲ期の資料は、Ｋ区第７号溝跡から１点出土している（第10図26）。小波状口縁の鉢で、体部に雲形文が施されている。

晩期Ⅳ期の資料はＦ・Ｍ区第２、３号竪穴住居跡、Ｅ区ピット258、Ｉ区試掘トレンチから、深鉢・鉢・浅鉢が出土している。浅鉢は、平坦口縁に低い突起が付され、体部に雲形文が展開する（第13図19）。

晩期Ⅴ期の資料は、Ｆ、Ｍ区第２、３号竪穴住居跡、Ｍ区第８号竪穴住居跡、Ｋ区第７号溝跡、Ｅ区ピット306、Ｉ区遺物包含層９層、Ｉ区試掘トレンチにおいて深鉢、鉢、台付鉢、台付浅鉢、高杯、壷が出土している。深鉢は口縁部が軽く外反し、平坦口縁に押圧、刻みが施されたものが主体である。第20図８は、平坦口縁に押圧が施され、体部に匹字文が展開する深鉢である。鉢には、工字文（第10図23、24）、匹字文（第19図12、第20図10）が施文されている。台付浅鉢には、体部と台部に匹字文が施されている。第８図２は、体部に押圧隆帯が施されている。第６図版14は、体部に匹字文が施され、底面に４つの脚が付された鉢あるいは浅鉢である。第６図版９は、工字文が展開する台部である。内面には漆と植物質の付着物が残存しており、漆を入れる容器として使用されたと推定される。第19図14は、体部に変形工字文Ａ２型が施された高杯である。壷の体部上半に工字文（第21

図1、2)、変形工字文P型（第20図版13)、匹字文（第16図8、第19図20）や、沈線内に刺突（第18図2）を施した資料が出土している。

晩期Ⅵ期の資料は、F、M区第2、3号竪穴住居跡、M区第8号竪穴住居跡、K区第7号溝跡、E区ピット254、K区ピット305、306、I区遺物包含層9層、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから、甕、深鉢、鉢、浅鉢、高杯、壷が出土している。鉢には、変形工字文A型（第14図5）が施されている。第9図4は、体部に変形工字文A1型が施文された浅鉢である。高杯は山形突起を有し、体部に匹字文（第2図18）や変形工字文A型（第9図19）が施されている。また匹字文（第16図6）の施された脚部が出土している。第10図13は、平行沈線文が施された壷の口頸部資料で、口縁部に低い突起が付されている。

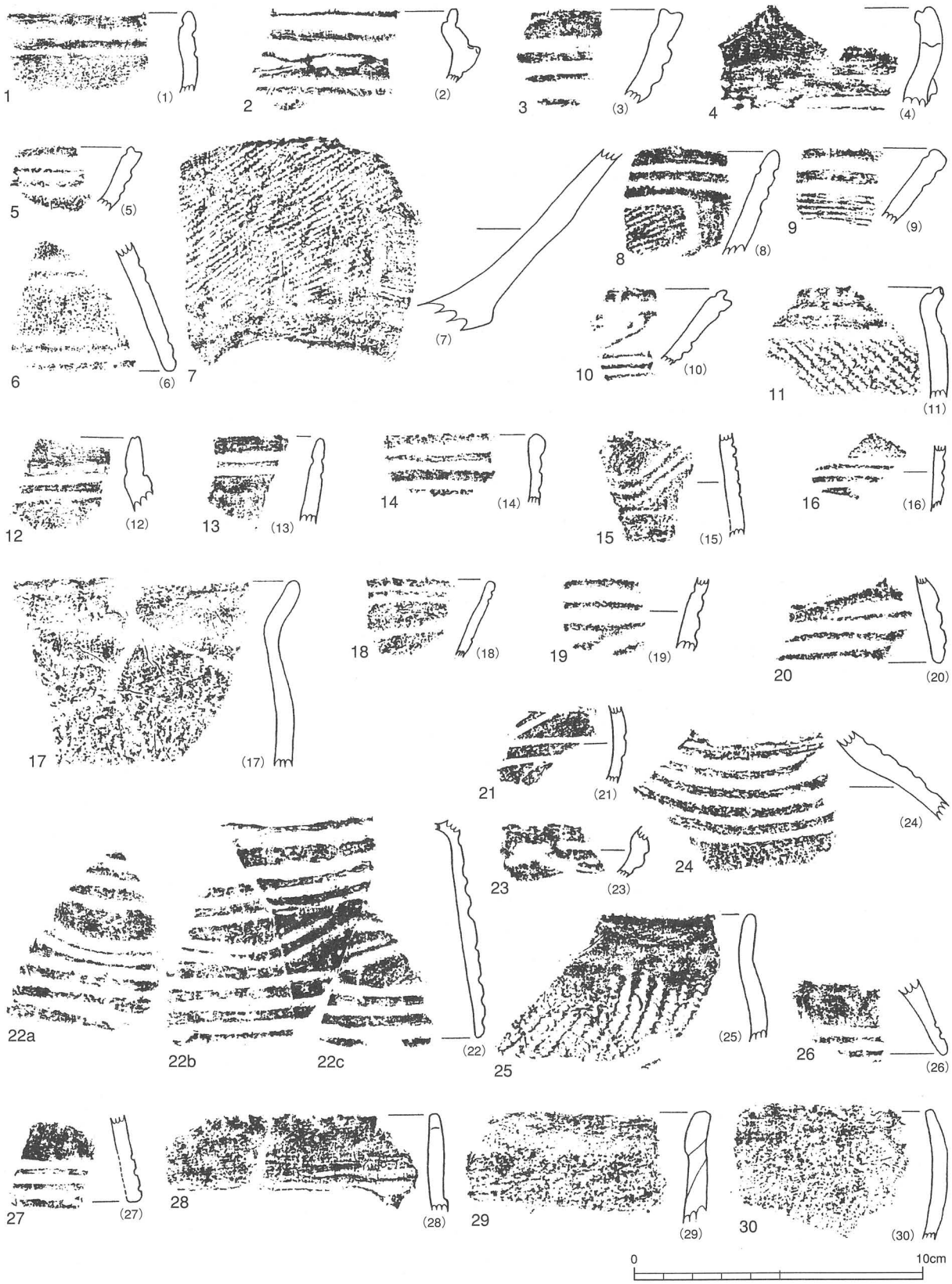
弥生時代の資料は、I期～Ⅳ期のものが出土した。弥生I期の資料は、F、M区第2、3号竪穴住居跡、K区第7号溝跡、I区遺物包含層8層から甕、深鉢、鉢、高杯が出土した。鉢には変形工字文C1型（第15図13）が施されている。第6図版5は、平坦口縁に二個一対の山形突起を付した鉢で、変形工字文A2型が4単位展開する。第19図2は、高杯の脚部で、変形工字文C1型が施文されている。

弥生時代Ⅱa期の資料は、F、M区第2、3号竪穴住居跡、M区第8号竪穴住居跡、K区第7号溝跡、E区第2号配石遺構、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから甕、深鉢、鉢、高杯、壷が出土している。第15図5は、外弯する口頸部に鋸歯文が展開する深鉢である。この深鉢は青木畑式に属する。鉢（第10図8）には変形工字文C1型が施されている。高杯には、体部に変形工字文C1型が施される資料（第10図10）や、脚部に波状文（第8図15、22）が施される資料がある。第4図版11は、体部に重層する変形工字文C1型が施された壷である。

弥生時代Ⅱb期の資料は、F、M区第2、3号竪穴住居跡、M区第8号竪穴住居跡、I区第8号溝跡、K区第7号溝跡、K区ピット305、I区遺物包含層9層、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから、甕、深鉢、鉢、高杯、壷、蓋が出土している。第5図版1・2は、K区第8号土器埋設土壙出土の合せ口土器棺である。第1号土器（第5図版2）は、口頸部に三角連繋文が、体部上半に変形工字文C2型が、体部下半には横走縄文が施文されている。第2号土器（第5図版1）は体部上半に変形工字文C2型、下半にLR縄文が施される。第1号土器、第2号土器ともに、器面には朱が塗布され、炭化物が付着している。鉢には変形工字文C2型（第6図版3）を施した資料や、口頸部がかるく外反し、内彎する体部をもつ資料（第4図版11）がある。第6図版3の鉢は、器面に朱が塗布されている。高杯は、体部に変形工字文C2型（第15図4）、垂下文（第12図2～5）、王字文（第12図6）、波状文（第10図2）、沈線にそった刺突文（第9図1）が施されている。脚部には波状文（第8図15)、垂下文（第6図版4）が展開する。蓋は体部が直線的にひろがり、LR縄文を施した資料（第10図3、4、第4図版7、8）が出土している。

弥生時代Ⅲ期以後の資料は、K区第7号溝跡、I南区遺物包含層6、9層から、深鉢、鉢、高杯、壷が出土している。第4図版12（第6号土器埋設土壙出土）は、弥生Ⅲ期の壷で、頸部がかるくふくらみ、体部にはLR縄文が施されている。頸部全体がみがかれているが、口縁部と頸部の境付近および、頸部と体部の境は入念なミガキが施されており、特徴的である。類例は、宮城県青木遺跡出土土器（伊藤　1960）にみられる。弥生Ⅳ期の桝形囲式鉢、高杯には連弧文が施されている（第10図32)。第9図26は弥生Ⅲ期の底部資料で、同心円文が施され、器面には朱が塗布されている。

（須藤、坂田、京野）



第８図　山王囲遺跡出土土器拓影

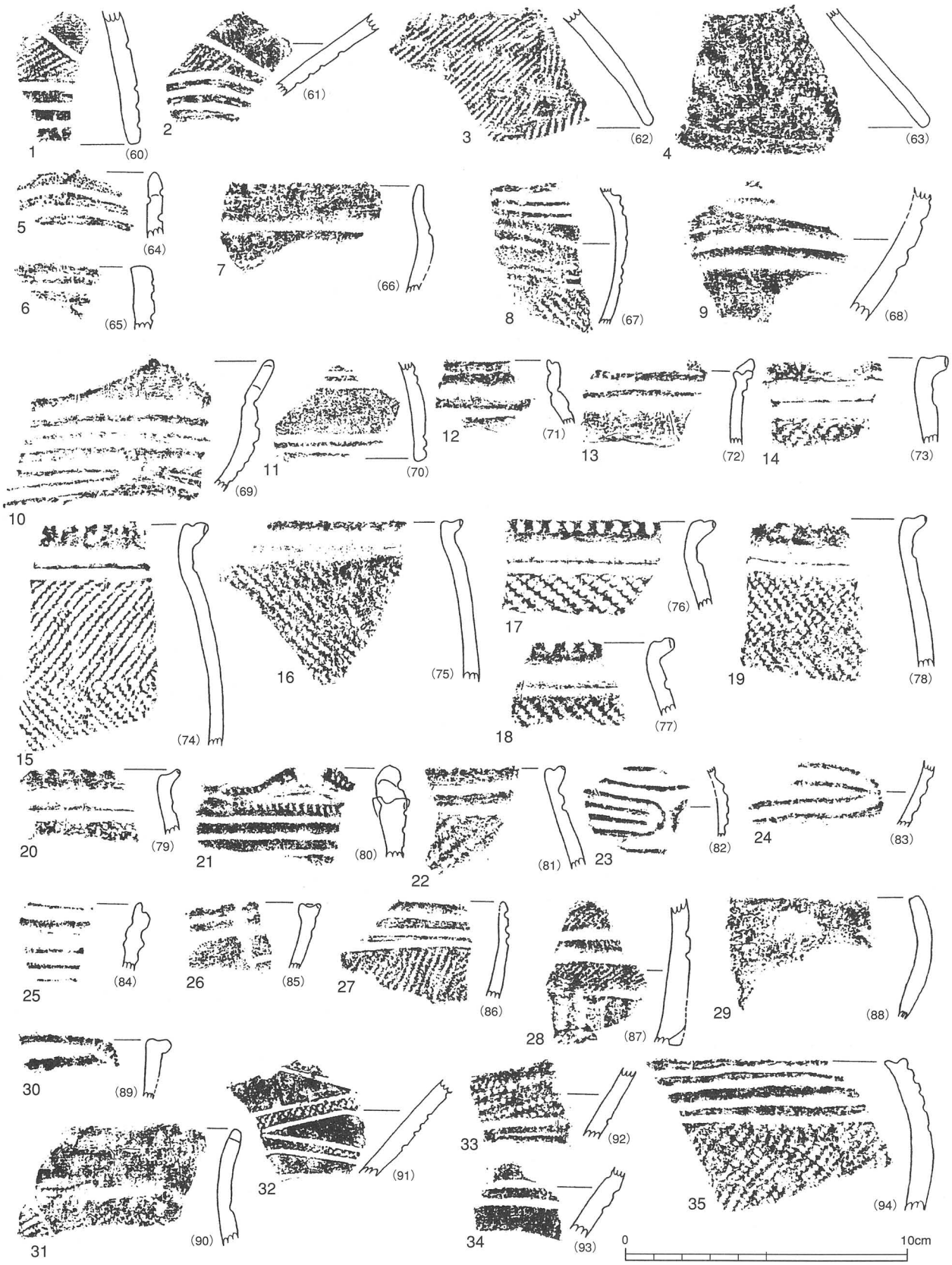
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～11 F・M区第３号竪穴住居跡
12～30 M区第８号竪穴住居跡

第9図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

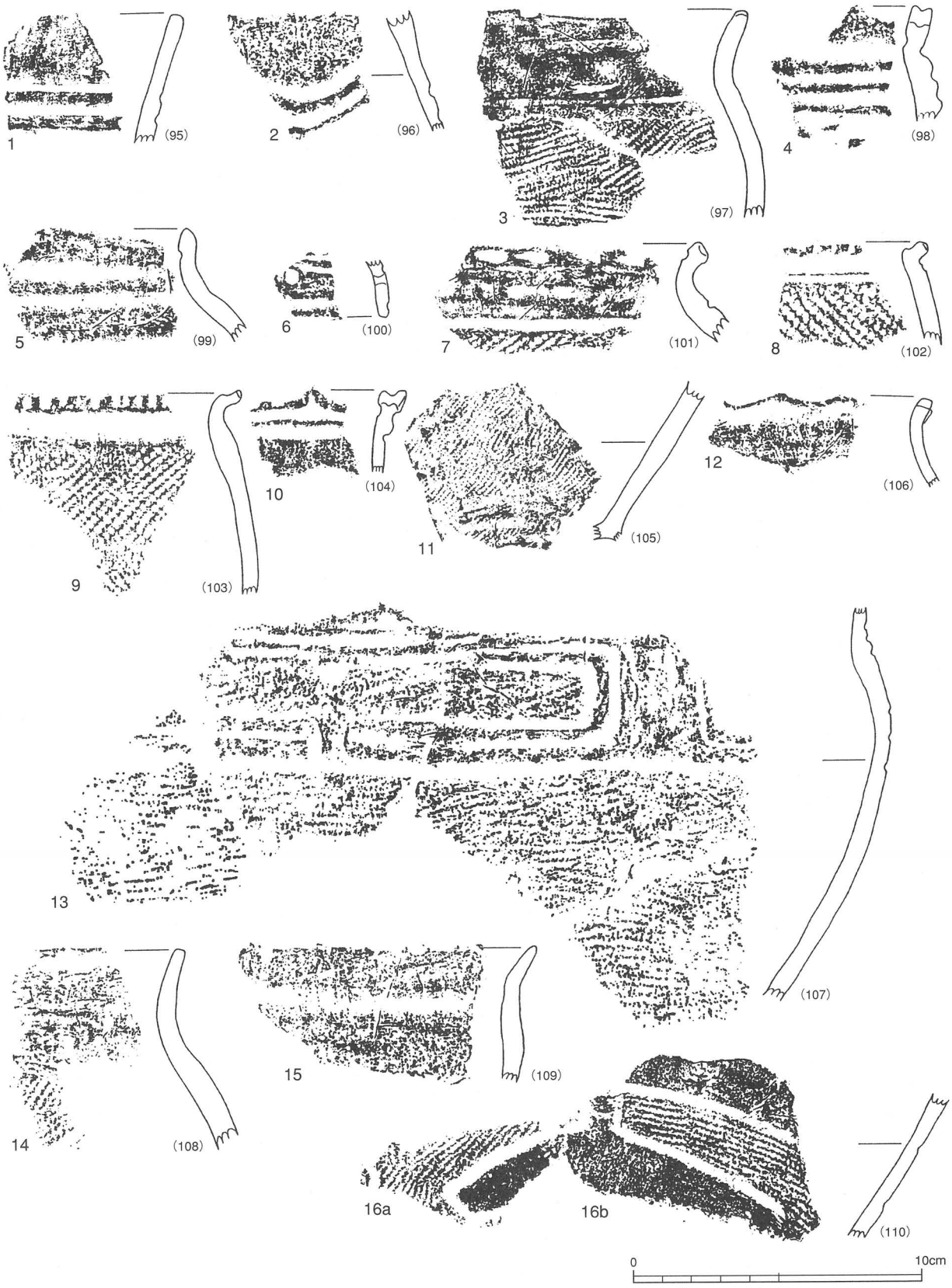
1～10 M区第8号竪穴住居跡
11～29 K区第7号溝跡



第10図　山王囲遺跡出土土器拓影

1～35 K区第7号溝跡

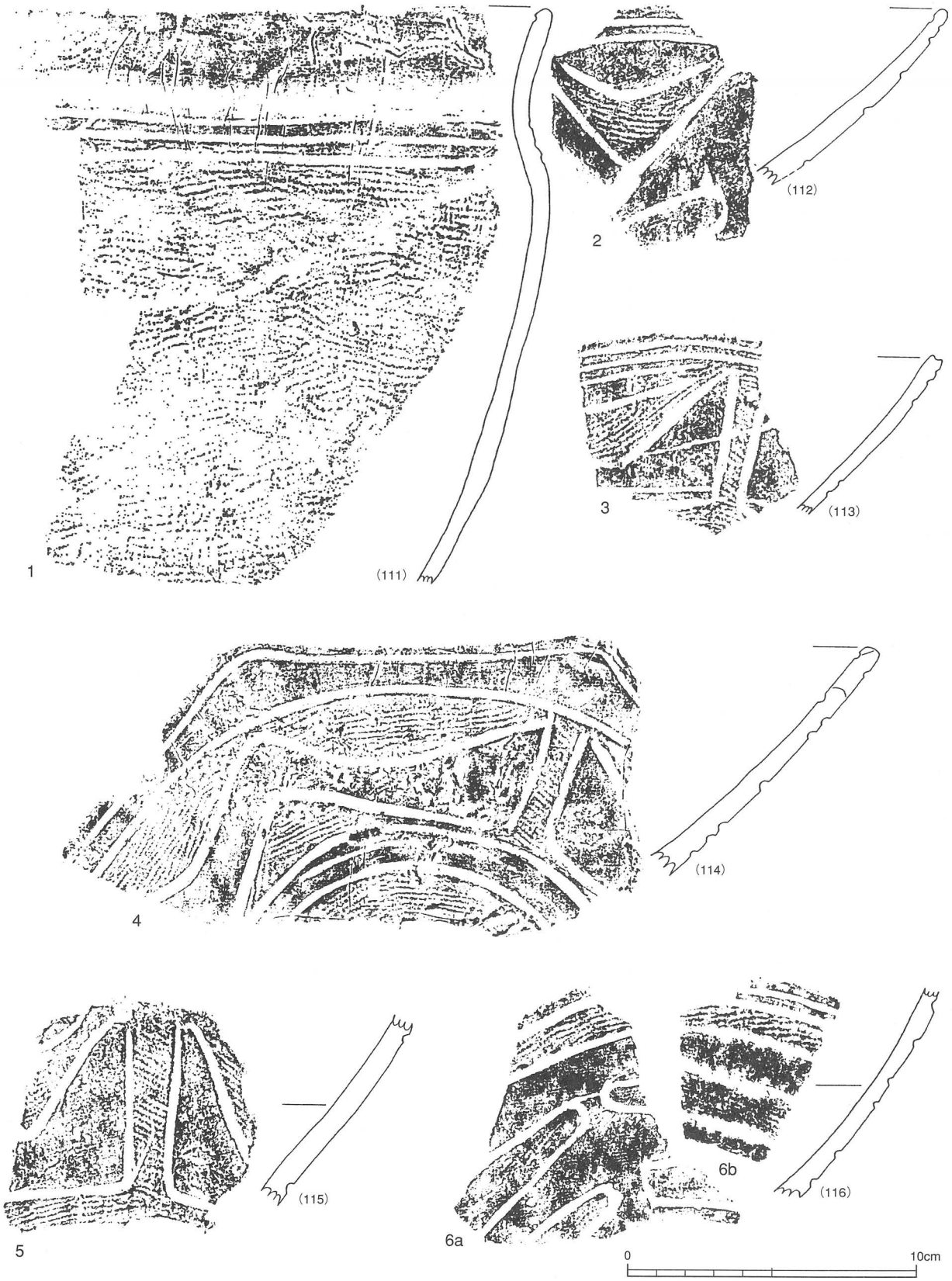
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第11図　山王囲遺跡出土土器拓影

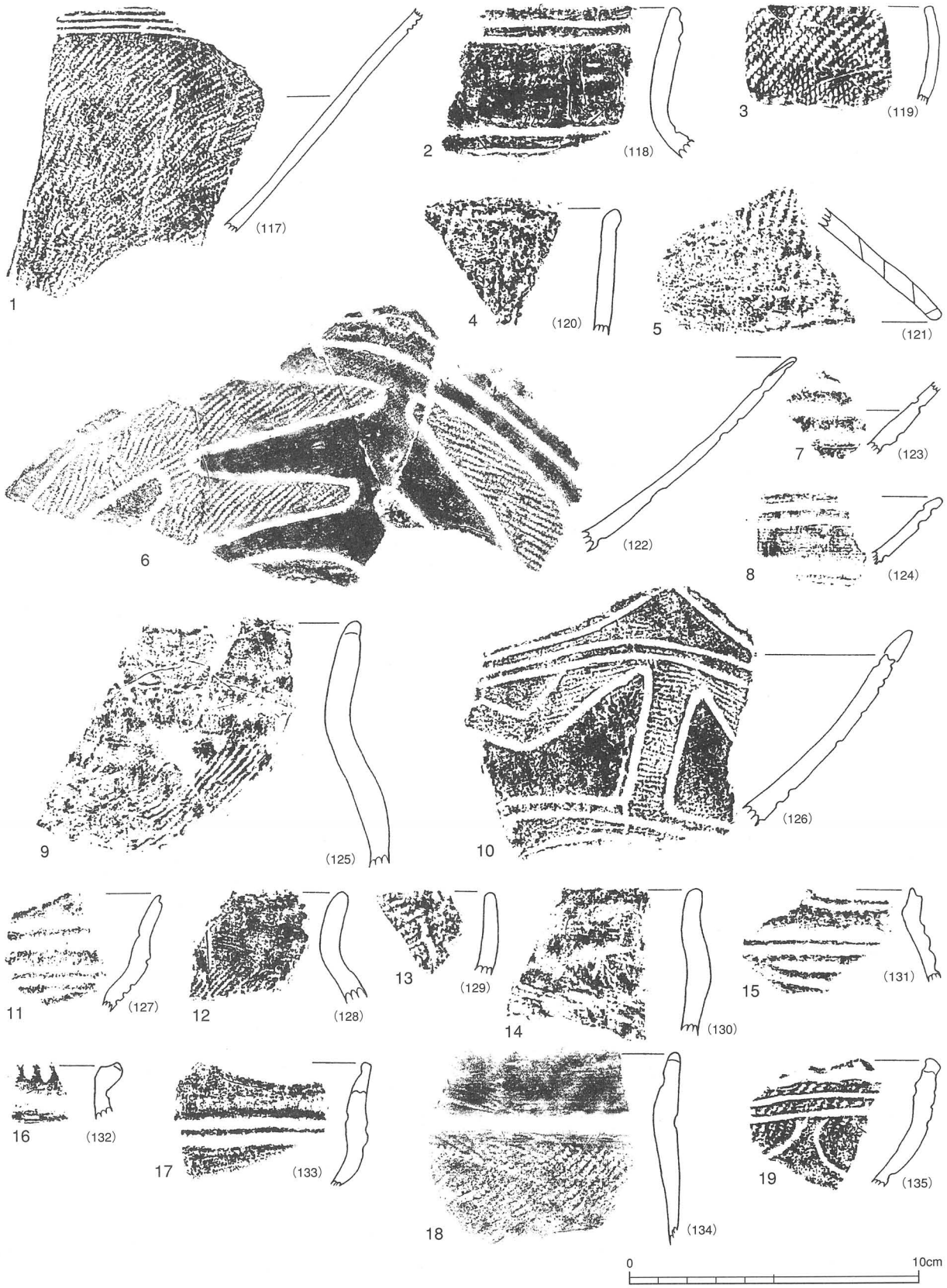
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～12 K区第7号溝跡
13～16 I区第7号溝跡



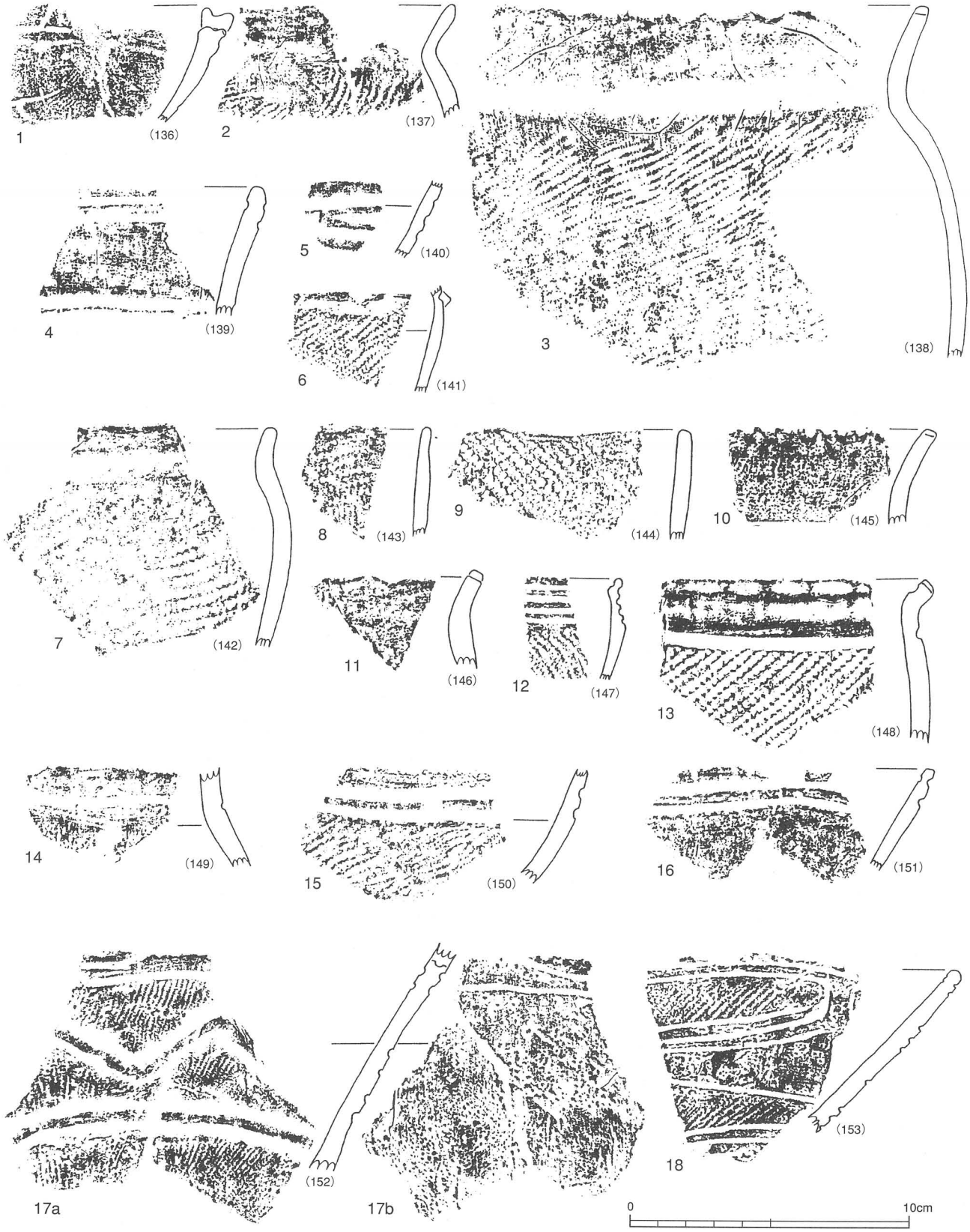
第12図　山王囲遺跡出土土器拓影　　1～6 I区第7号溝跡

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第13図　山王囲遺跡出土土器拓影
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

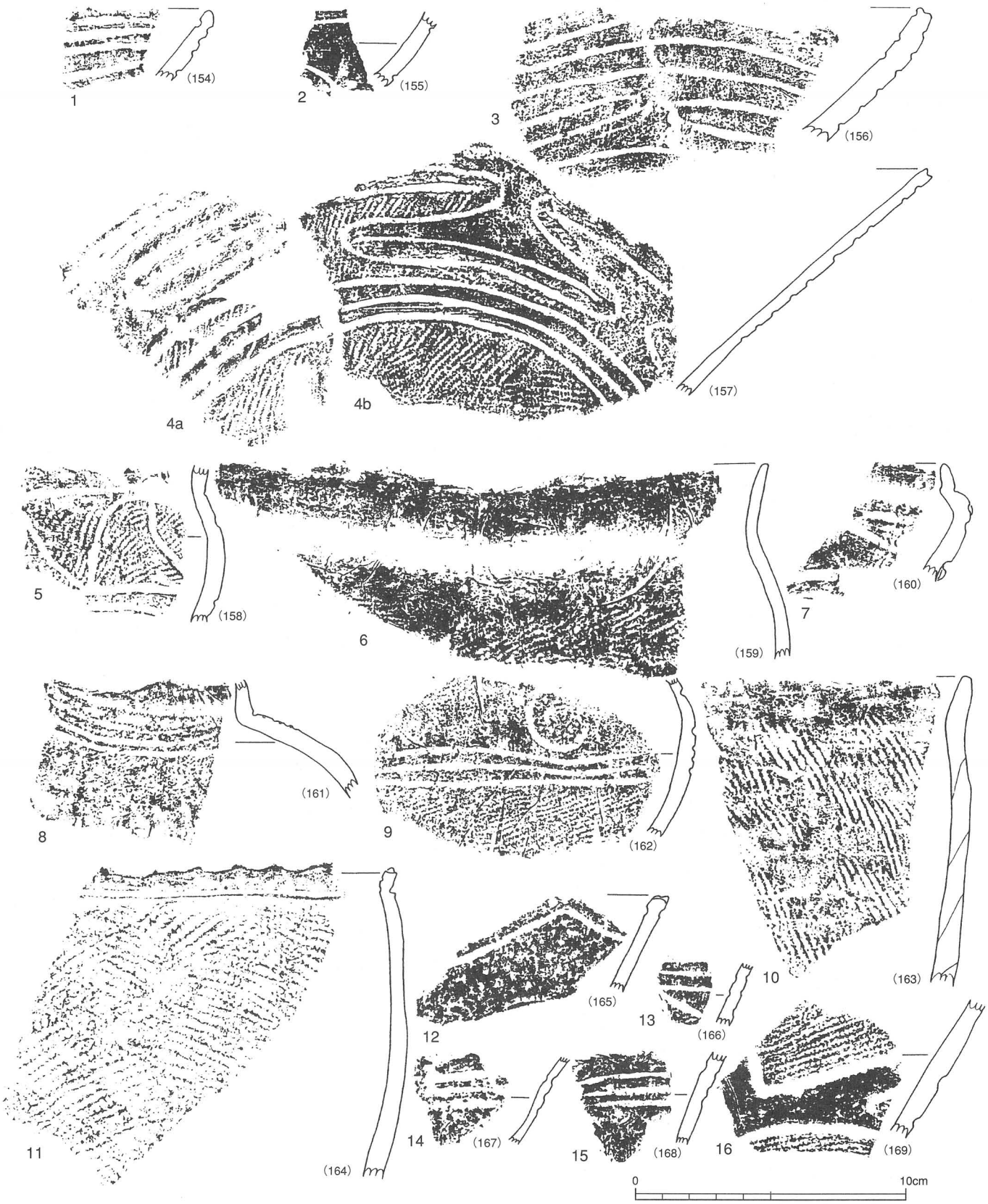
1～14 I区第7号溝跡
15・16 E区第2号配石遺構
17・18 E区ピット254　19 E区ピット258



第14図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

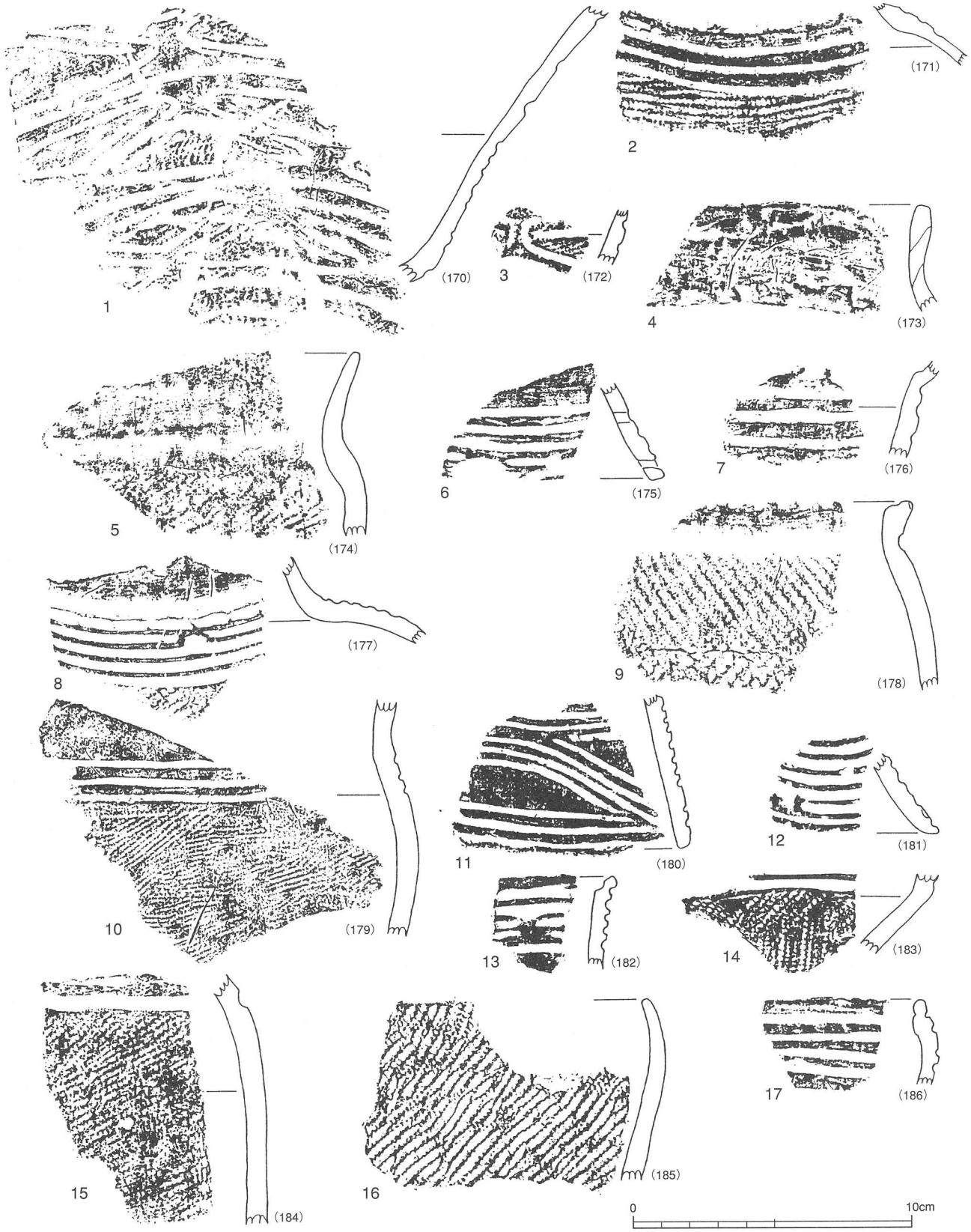
1 E区ピット292　2～9 K区ピット305
10～13 K区ピット306
14～16 I南区6層　17・18 I南区9層



第15図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

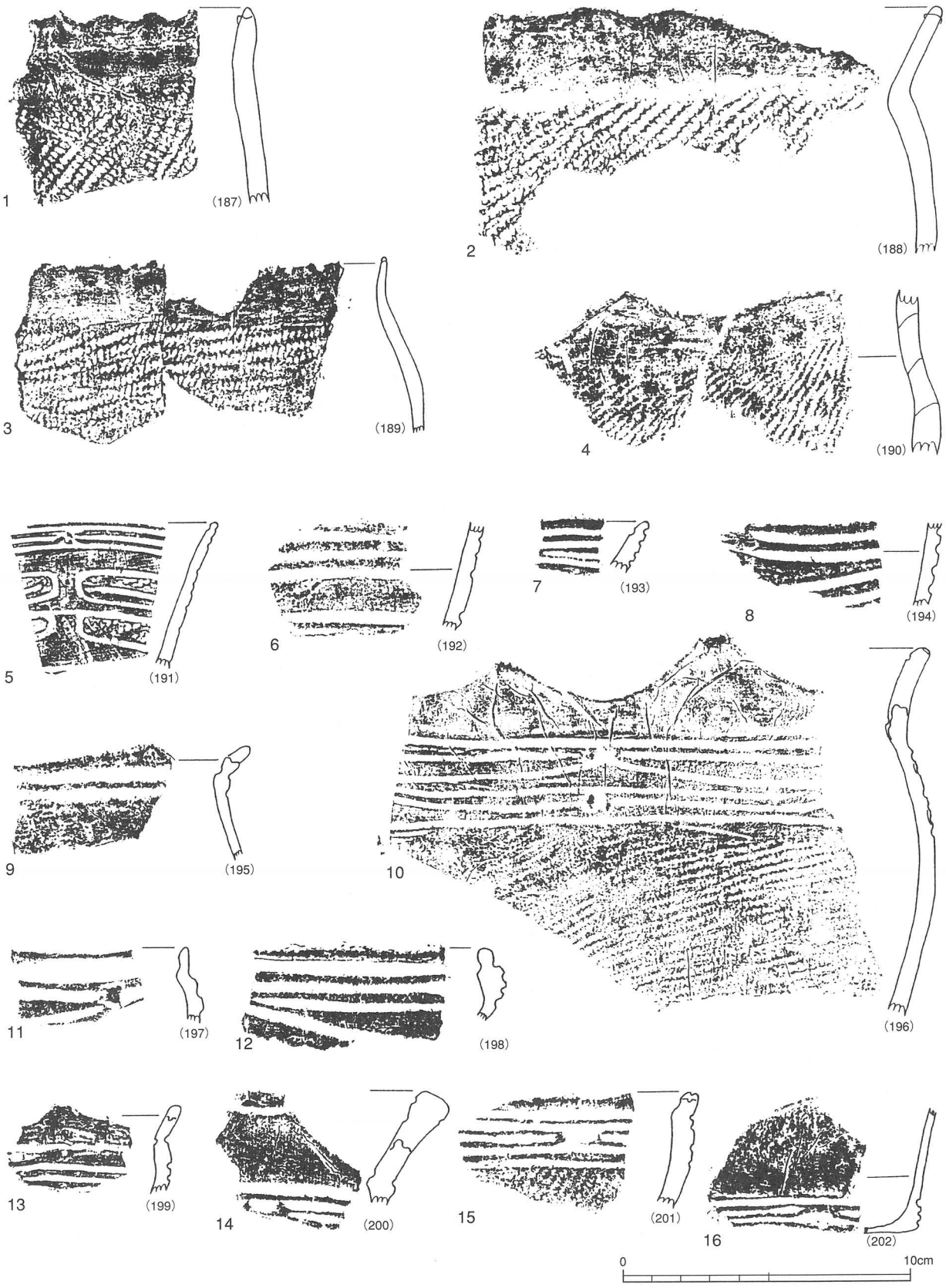
1～11 I南区 9 層
12～14 I区 8 層　15・16 I区 9 層



第16図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

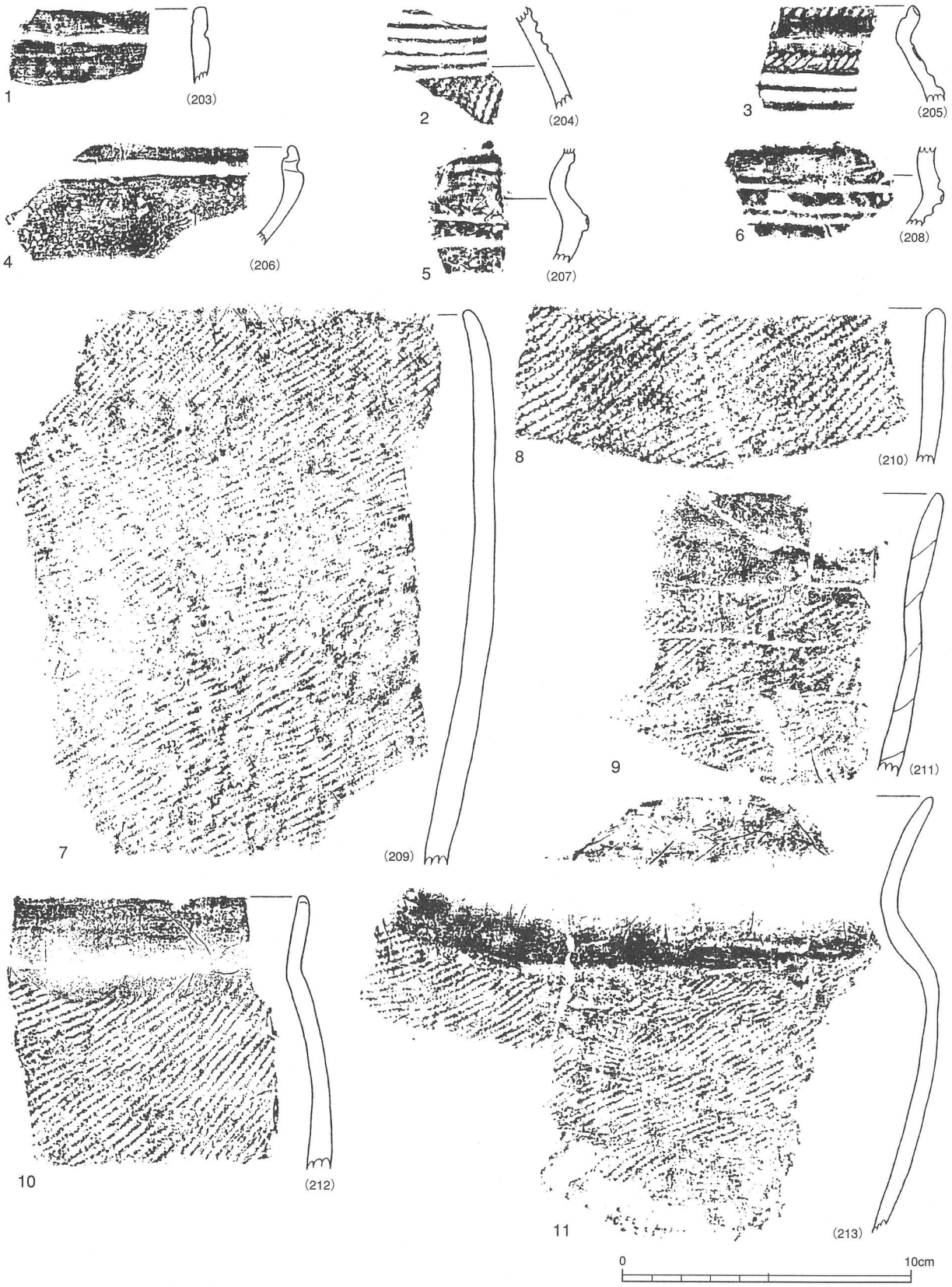
1～9 I区 9層　10 I区試掘トレンチ601層
11～16 602層　17 603層



第17図 山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

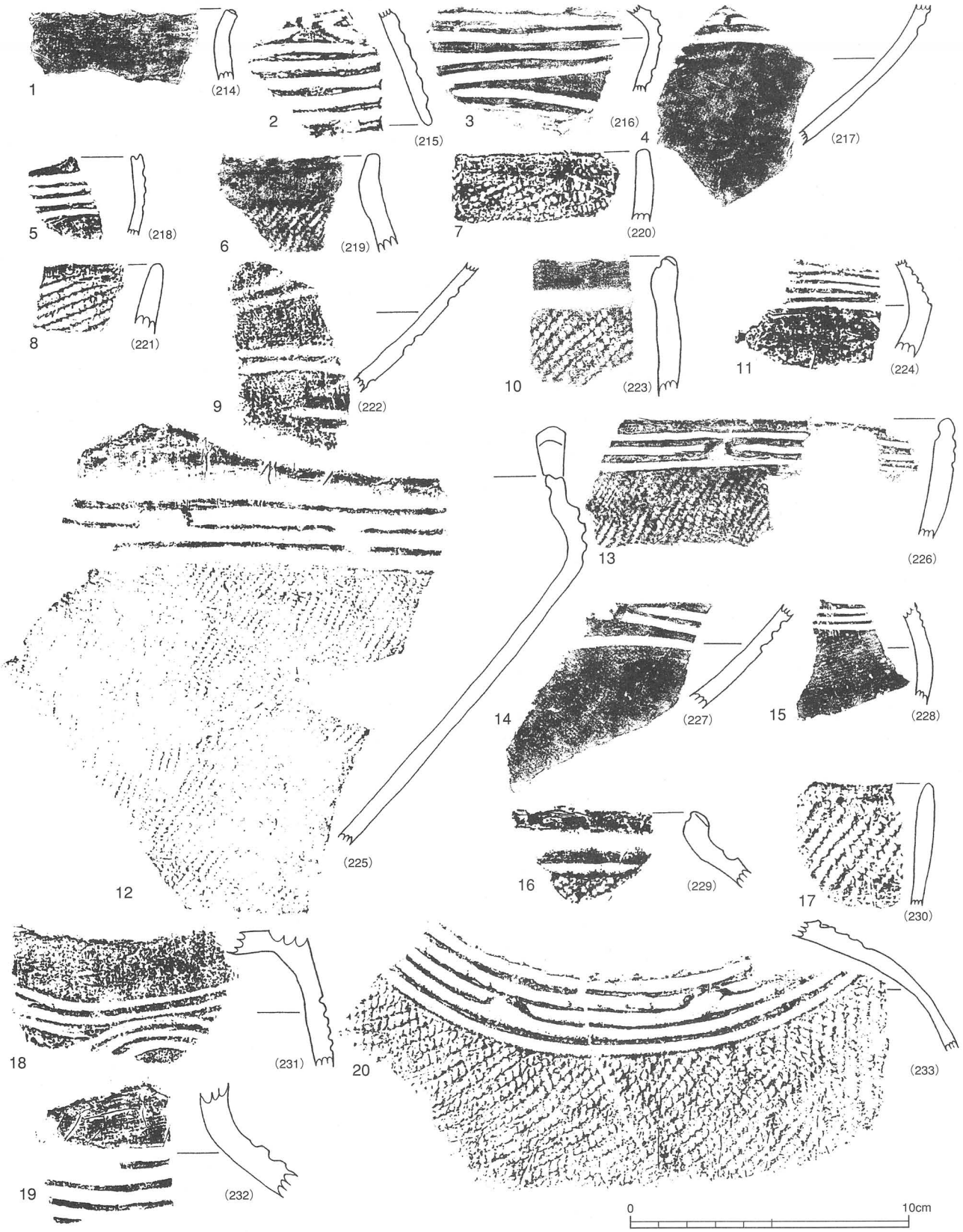
1～16 I区試掘トレンチ603層



第18図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

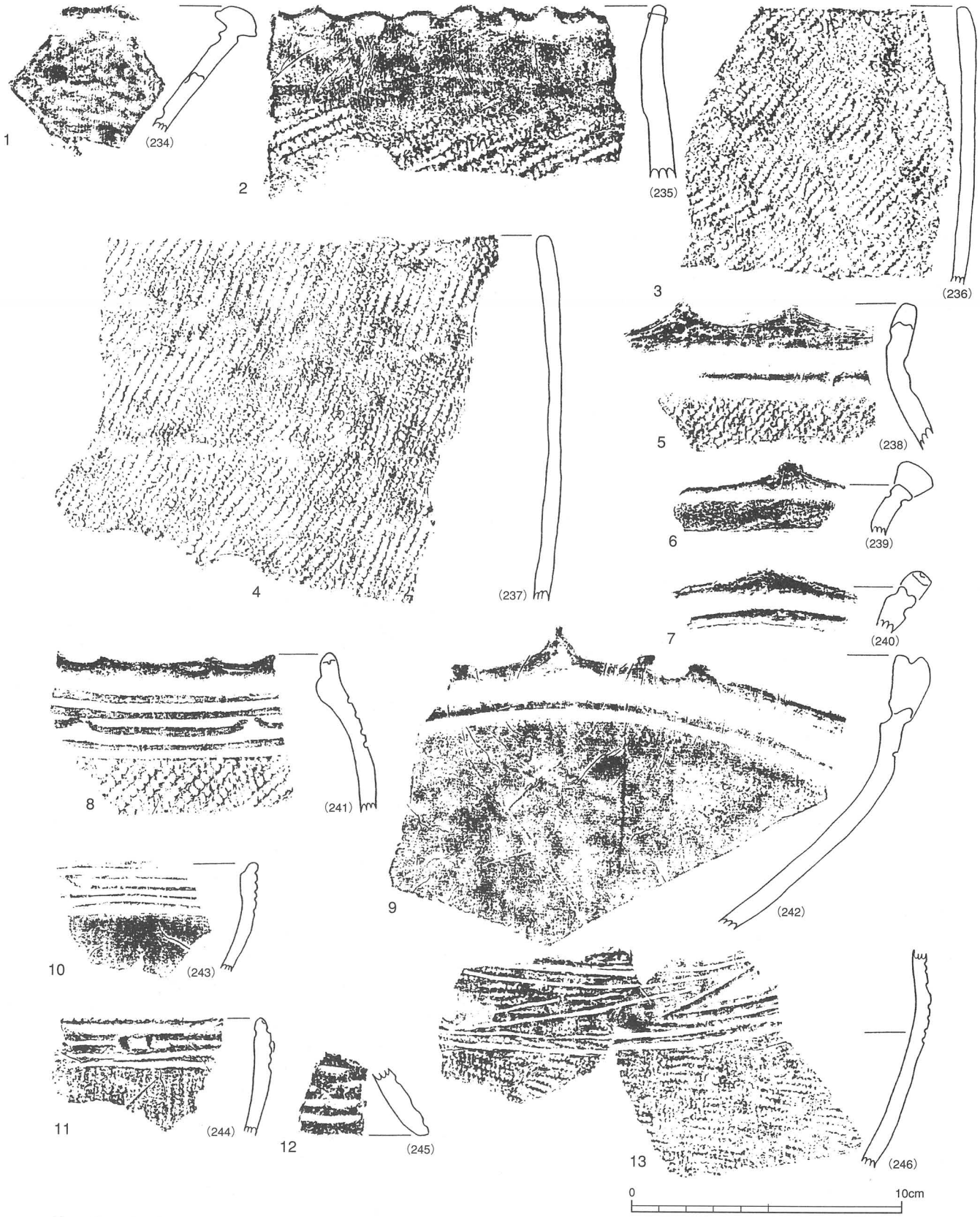
1～8 I区試掘トレンチ603層
9～11 604層



第19図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

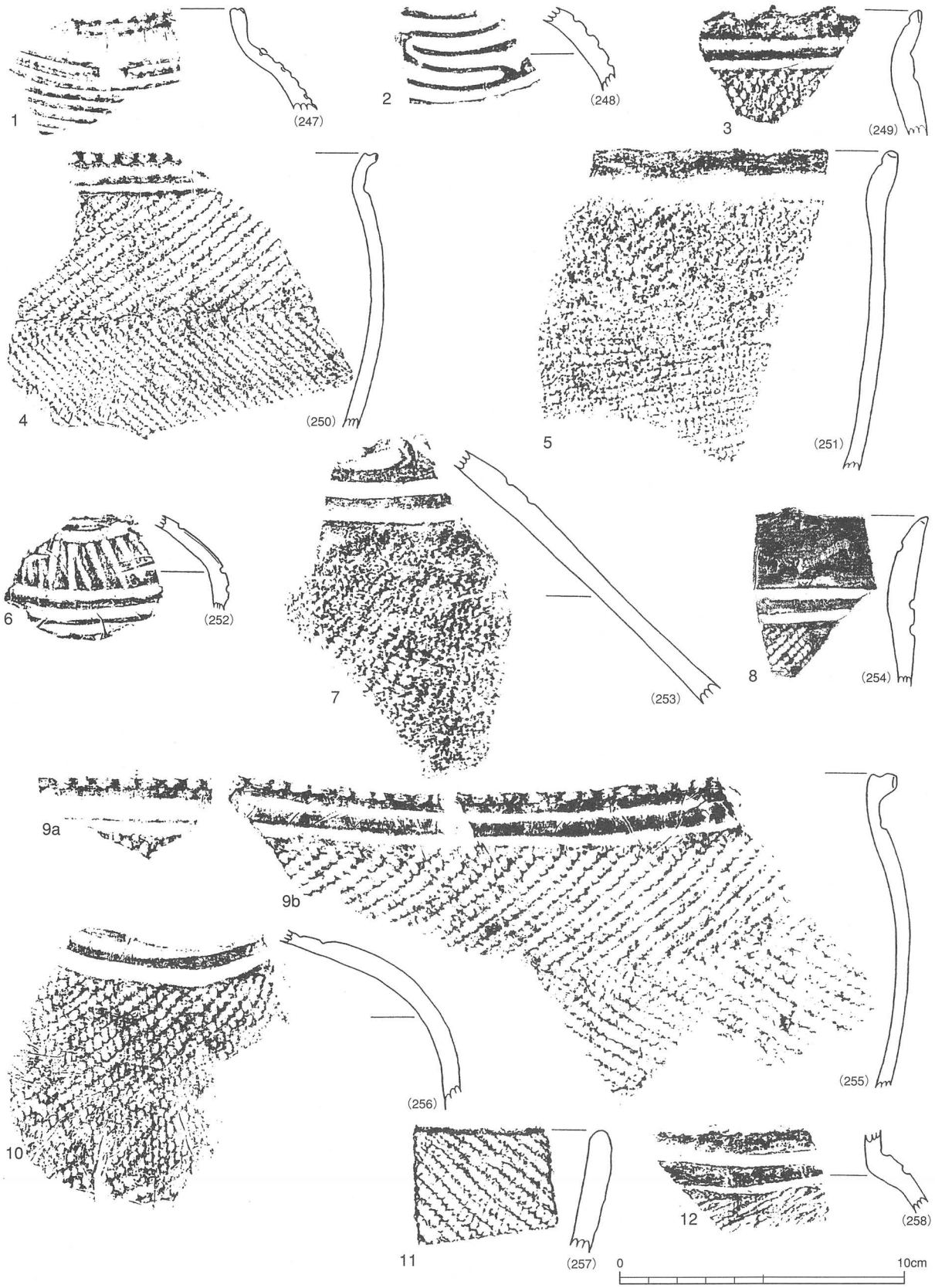
1～8 I区試掘トレンチ604層
9～17 605a層　18～20 605d層



第20図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～3 I区試掘トレンチ606層
4 607層　5～13 610層



第21図　山王囲遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～6 I区試掘トレンチ610層
7～11 610a層　12 611層

b　土　師　器

E区BF・BG60・61区ピット338より塩釜式の壷の頸部から体部下半にかけての破片が出土した（第6図版16）。器厚は薄く、外面にミガキが施されているが、内外面とも風化がはげしい。体部は球形で頸部は短く直立する。口縁部は破損しているが、複合口縁と推定される。

2）土　製　品

a　土　　偶（第22図3）

M区第8号竪穴住居跡の柱穴5から出土した。中実土偶の頸部と考えられる。胴部との接合部分に凹みが、また頭部との接合部には接合痕が観察される。

b　土　　版（第22図5）

I区試掘トレンチ610b層から出土した。両面に弧状の沈線文が施され、全体はナデにより仕上げられている。

c　スタンプ状土製品（第22図1、2）

M区第8号竪穴住居跡から1点、K区8層から1点の計2点が出土している。第22図版2は把手部を欠損している。全体をナデで調整し、円盤部は比較的厚く、下面はかるくふくらんでいる。第22図版1は全体がナデで仕上げられており、下面は平坦である。

d　土製紡錘車（第22図6）

K区第7号溝跡埋土2から出土した。中心に径4㎜の焼成前穿孔がみられる。両面ともに中心から放射状に5本の沈線が施され、その間に短い沈線がほぼ等間隔に連続して両面および側面に加えられている。

e　土製小玉（第22図4）

E区ピット339で出土した。長さ65㎜、長径108㎜、短径95㎜の円柱で、側面に幅1㎜の浅い縦筋が9条施されている。中央に径2㎜程の貫通孔を有する。全体はナデで仕上げられている。　（鈴木、大場）

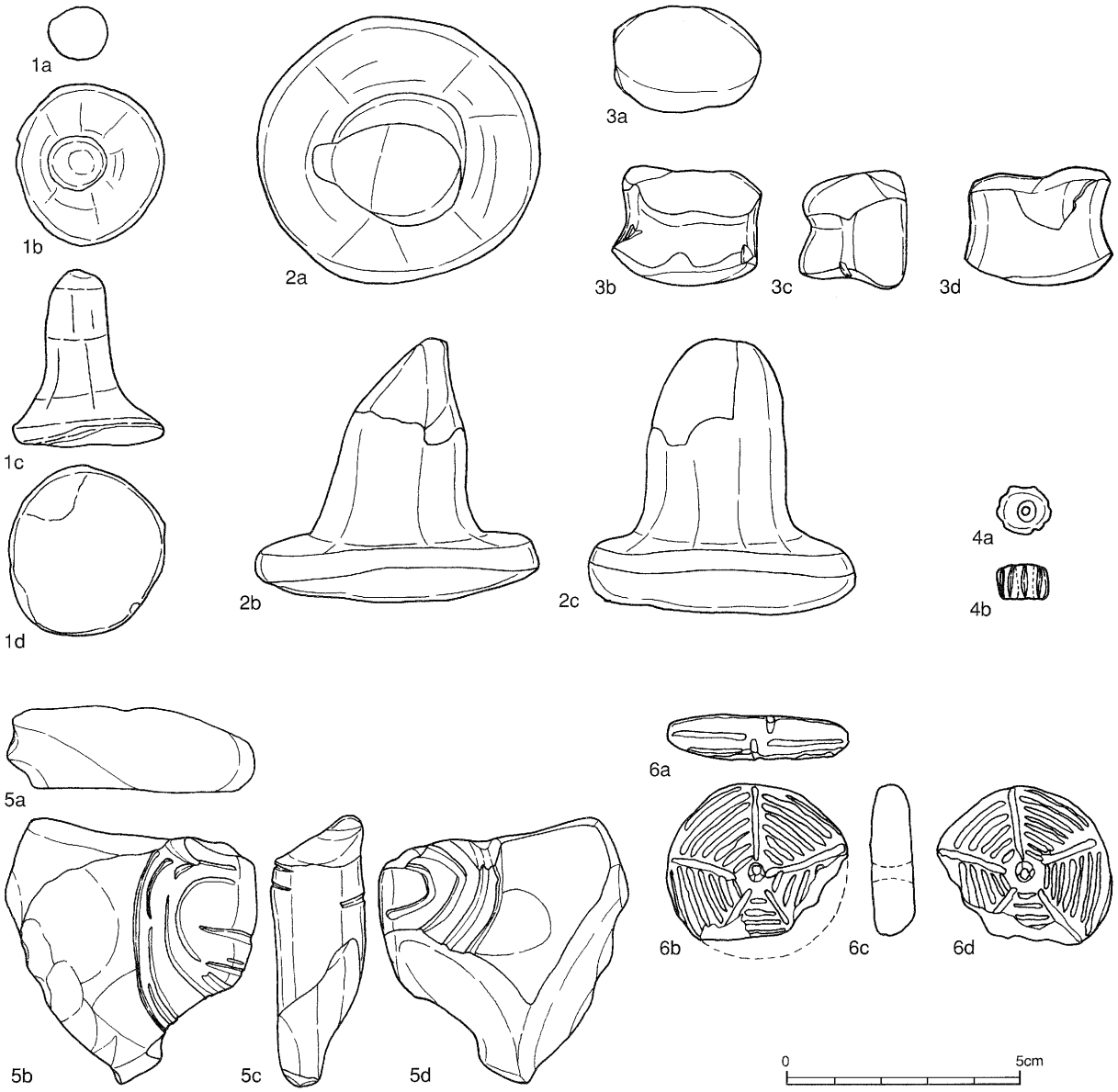
3）石　　器

E、I、I北、I南、K、N区の遺物包含層、I区試掘トレンチおよび遺構から出土した石器のうち定型的な石器、加工の明瞭な石器を対象とし、それらについて属性を抽出、検討した。対象とした石器は計81点である。

石器の器種認定基準は基本的に1995年度の報告に従い、新たに認められた器種については認定基準を設け、分類、記述した。

石　　鏃（第7図版1～36）

36点を抽出した。有茎鏃（第7図版1～33）が33点（91.7%）、無茎鏃（第7図版34～36）が3点（8.3%）みられる。長さ12～42㎜、重量0.3～2.8gと形態、大きさは多様である。両面全体に二次加工が施されたものは26点（72.2%）、片面の全体ともう一面の縁辺に二次加工が施されたものは7点（19.4%）、両面の縁辺のみに二次加工が施されたものは3点（8.3%）である。石材は鉄石英が最も多く24点（66.7%）、以下頁岩7点（19.4%）、碧玉3点（8.3%）、珪質凝灰岩2点（5.6%）である。第7図版18、19、20、28の茎部には微量のピッチが付着しており、着柄の痕跡と考えられる。使用の際に生じたと考えられる基部・先端部の折れや衝撃剥離は基部7点、先端部4点、先端部・基部8点の計19点（50.3%）に認められる。



No.	出土地点	遺構	層位	時期	種別	計測値（cm）	重さ（g）	付着物	備考	写真No.
1	K		包含層		スタンプ状土製品	長さ 3.82 幅 3.45 厚さ 3.15	16.4	無	スタンプ状の土製品で装飾はみられない　全体はナデで仕上げられている	27-10
2	M	第8号竪穴住居跡		弥生	スタンプ状土製品	長さ 5.63 幅 5.97 厚さ 5.76	87.5	無	スタンプ状土製品と考えられる　上部は破損している　下部の円盤状になっている部分は丸みをおびている　全体はナデで仕上げられている	27-9
3	M	第8号竪穴住居跡 柱穴5		弥生	土偶	長さ 2.53 幅 3.21 厚さ 2.18	16.6	無	中実土偶の首と考えられる　装飾はみられずナデ仕上げである　胴との接合部に凹みが観察され、頭部との接合部にも接合痕がみられる	27-6
4	E	ピット339	埋土1		土製小玉	長径 1.08 短径 0.95 長さ 0.65	0.7	無	円柱形を呈し、中央に径2㎜程の貫通孔があけられている　側面には刻みが施されている　全体はナデで仕上げられている	27-11
5	I	試掘トレンチ	610b	晩期	土版	長さ 5.54 幅 5.37 厚さ 1.76	46.2	無	小判形と推定される土版　両面に4本の沈線で半円が描かれている　全体はナデで仕上げられている	27-8
6	K	第7号溝跡	埋土2	弥生	紡錘車	直径 3.7 厚さ 0.98	11.6	無	円盤形を呈し、中央に径4㎜程の焼成前穿孔がみられる　両面および側面に沈線による装飾が施されている	27-7

第22図　山王囲遺跡出土土製品

Clay object from the Sanno-gakoi site

石　　錐（第８図版37～41）

５点が出土しており、全て明確なつまみを有する。第８図版38～41には最終剥離面が残存し、また38には自然面が残されている。石材は鉄石英が３点で、碧玉と頁岩がそれぞれ１点ずつである。錐部先端の破損は４点に認められ、使用時の破損と考えられる。

不定形石器（第８図版42、43）

第８図版42は横長剥片の末端に二次加工が施されており、背面の一端には連続した微小剥離痕がみられる。スクレイパーの一種と考えられる。石材は鉄石英である。第８図版43は縦長の剥片を素材とし、主に腹面からの急角度の二次加工により整形されている。腹面側にも先端部を中心として二次加工が認められる。石材は鉄石英である。

異形石器（第８図版44）

第８図版44はノッチ状の凹部を有するが、凹部以外の周辺部分の両面に二次加工が施されている。入念に調整されていることや、他の剥片石器にはみられない黄色のデイサイト質凝灰岩が用いられていることなどから異形石器に分類した。

チョッピングトゥール（第８図版45）

礫を素材とし、両面からの連続した剥離により刃部を作り出した石器をチョッピングトゥールと分類した。第８図版45は安山岩製であり、扁平な礫の縁辺に両面から連続した剥離が施され半円状を呈する。

円盤形石器（第８図版46、47、第９図版48～50）

５点が出土している。いずれも周縁に両面からの剥離による整形がなされ、直径は55～77㎜の円盤形を呈する。石材は第９図版50が安山岩（20.0％）で、他の４点（80.0％）はデイサイトである。第８図版46、47、第９図版50は剥離面や自然面に不明瞭な敲打痕が観察される。これらの石器は形態、大きさ、石材の点で類似している。

石　　核（第９図版51、52）

２点を抽出した。第９図版51、52は頁岩である。51は打面を固定せず頻繁に打面転移を繰り返して自然面を除去している。52は平坦な自然面であるｅ面を打面とし、ａ面から数回の剥離が行われている。

環状石斧（第10図版53）

中央部に貫通孔を有し、周縁に刃部が作り出された円盤状の磨製石器を環状石斧に分類した。第10図版53は玢岩製である。半分が欠損しているが、直径は約110㎜である。全体は丁寧に磨かれているが、一部に整形の際の敲打痕が残されている。中央の貫通孔は直径約31㎜であり、両面から穿孔されている。刃部には使用の際に生じた微小剥離痕が認められる一方、剥離によってノッチ状に作り出された部分が観察される。

磨製石斧（第10図版54～57）

４点が出土している。第10図版54、56、57の３点は刃部が欠損しているが、いずれも撥形を呈すると考えられる。第10図版55は使用の際に刃部側からの衝撃剥離によって破損したと推定される。平面形および断面形から判断すると刃部は蛤刃で、全体は短冊形を呈すると考えられる。第10図版56は折れ面を打面として数回の剥離が加えられており、表面が大きく失われている。石材は第10図版55が凝灰質頁岩（25.0％）であり、他３点（75.0％）は玢岩である。

石　　鏃（第10図版58）

K区第7号溝跡から出土している。第10図版58は全体が敲打によって整形され、中央部には一定方向の擦痕が認められる。刃部および側縁からの剥離、基部の折れにより形が大きく損なわれているが、杓子状を呈すると考えられる。この石器は敲打によって整形されている点で一般の打製の石鏃とことなるが、その形態から石鏃として分類した。石材は安山岩質凝灰岩である。

凹　　石（第11図版59～72、第12図版73～79）

21点を抽出した。石材は安山岩10点（47.6%）、デイサイト10点（47.6%）、デイサイト質溶結凝灰岩1点（4.8%）である。大半の凹石にはa、c両面に敲打痕の集中が認められる。（第11図版59～72、第12図版73、75～79）また敲打痕の集中をa、c両面に加え、他の面にも有するもの（第11図版61、66、70、第12図版78）や、a面のみにもつもの（第12図版74）が認められる。重量は280～1790gで500～700gにピークがみられる。4点に縁辺に破損が観察される。第11図版61、63、68、第12図版73の4点はE区第2号配石遺構から出土している。

石　　皿（第12図版80、81）

2点を抽出した。第12図版80は軽石質デイサイト質溶結凝灰岩製であり、大型で三角形の自然礫を素材としている。a、c両面の中央部に浅く凹んだ磨面をもつ。第12図版81は多孔質のデイサイト質凝灰岩製である。a面に、ほぼ平坦な磨面をもち、c面にはわずかに敲打で整形した痕跡が認められる。全体のおよそ3分の1が欠損している。

4）石　製　品

石製小玉（第23図1～6）

石製小玉がK区ピット337から6点出土している。これらは大きさ、石材の点で1～4と5、6の2つに分けることができる。1～4は蛇紋岩または軟玉製で、直径7.2～7.3㎜、厚さ4.0～4.5㎜、重量0.31～0.37gである。5、6は角閃石の一種であるスカルン製で、直径5.2～5.8㎜、厚さ2.7～3.3㎜、重量0.07～0.11gである。4は約2/3が欠損している。いずれも研磨により整形されており、特に1～4には明瞭な擦痕がみられる。孔はいずれも片側から穿孔されている。

山王囲遺跡出土石器の石材を検討すると、器種ごとに石材が選択されていたことがうかがわれる。石鏃、石錐などの剥片石器は鉄石英や頁岩が用いられているのに対して、円盤形石器、礫石器は安山岩やデイサイトを素材としている。これらの石材は遺跡周辺で入手することが可能である。環状石斧、磨製石斧には主に玢岩が石材と

No.	器　種	出土地点	遺　構	層位	石　　材	直径（㎜）	孔径（㎜）	厚さ（㎜）	重量（g）	写真No.
1	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	蛇紋岩または軟玉	7.2	4.5／3.1	4.2	0.31	27-12
2	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	蛇紋岩または軟玉	7.5	3.2／2.5	4.2	0.37	27-13
3	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	蛇紋岩または軟玉	7.3	4.1／2.3	4.5	0.37	27-14
4	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	蛇紋岩または軟玉	－	－	4.0	－	27-15
5	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	スカルン	5.2	3.1／2.5	2.7	0.07	27-16
6	石製小玉	K-AS・AR60・61	ピット337	埋土1	スカルン	5.8	2.8／2.5	3.3	0.11	27-17

第23図　山王囲遺跡出土石製品
Stone implement from the Sanno-gakoi site

して使用されている。玢岩は奥羽山系ではみられず、北上山系、阿武隈山系で産出することから、北上川左岸の地域からもたらされたと考えられる。（熊谷、鹿又、西井、丹羽）

5）木　製　品

a　竪　　杵（第24図1）

Ⅰ区試掘トレンチ611層から出土した。握部は径3.5cm、搗き部は長さ24cm、径5.4cmである。クヌギの丸木を削り込んで握部を作りだしている。搗き部には樹皮が残存している。搗き部先端は摩滅しており、使用の痕跡と考えられる。

b　加　工　材（第24図2）

Ⅰ区試掘トレンチ611層から出土した。長さ30cm、幅20cm、厚さ3.5～6cmの板状を呈する。表面を粗く削り、一面は中央部が盛り上がり、他面を平坦に作りだしている。皿形容器などの未成品と考えられる。（大場）

6）動物遺存体（PL.28－3～12）

山王囲遺跡出土動物遺存体種名表

哺乳綱　MAMMALIA

ウシ目　（偶蹄目）　Artiodactyla

シカ科　Cervidae

ニホンジカ　*Cervus Nippon* Temminck

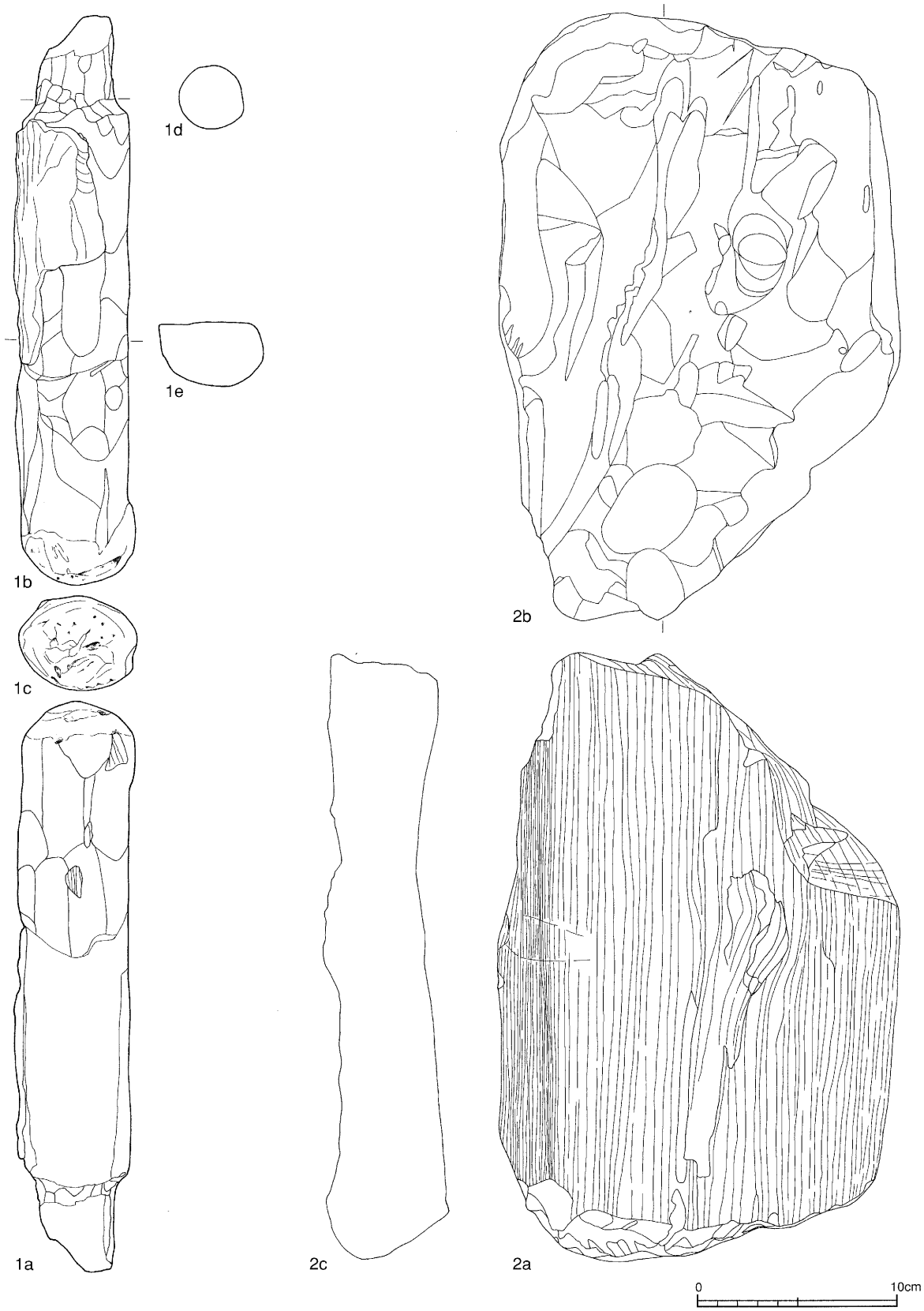
山王囲遺跡第2次調査において、Ⅰ区北壁に設けた試掘トレンチの610、611層（縄文時代晩期Ⅴ期）、Ⅰ南区第7号溝跡埋土3（弥生Ⅱ期）および第3号竪穴住居跡に伴うと推定される2号炉跡（弥生Ⅱ期）内埋土から動物遺存体が出土した。資料の同定・登録は3cm以上の資料について行った。

2号炉跡内埋土及びⅠ区北壁際の試掘トレンチから土壌の一部を採取し、水洗フルイを行った結果、動物遺存体の微細な破片が採集された。これらの破片は熱を受けて白色に変化し、細片化しており、同定は困難であった。緻密質の部分と海綿状の部分がみられ、大半は哺乳類であると考えられる。

Ⅰ南区第7号溝跡埋土3（弥生Ⅱ期）から哺乳類の大腿骨近位端の大腿骨頭の一部と考えられる破片が出土した。熱を受け、白色に変化している。一部しか残存していなかったため、種の同定はできなかった。

Ⅰ区北壁際に設定した試掘トレンチの610層（縄文時代晩期Ⅴ期）から出土した動物遺存体は水漬けの状態で埋存していたため、脱灰がすすみ、脆弱で保存状態は不良であった。表面の一部に青く変色している部分が認められたが、これは地下水によって供給された鉄分と骨中の燐分が反応して、藍鉄鉱（Vivianite　$Fe_3P_2O_8 \cdot 8H_2O$）が生成されたためと考えられる（松井　1984）。ニホンジカ　*Cervus Nippon* Temminckの左下顎骨、左上腕骨骨幹部、左脛骨骨幹部、左下顎の第1・第2大臼歯、第3大臼歯のエナメル質部の破片、ニホンジカあるいはイノシシに相当する哺乳類の四肢骨骨幹部の破片が同定された。

今回の調査で出土した動物遺存体資料にはニホンジカなどの遺存体が含まれており、周囲の丘陵地などで狩猟活動が行われていたことがうかがわれる。（氷見）



第24図　山王囲遺跡出土木製品
Wooden manufacture from the Sanno-gakoi site

1竪杵　2加工材

第4章　結　　語

第2次調査では極めて重要な成果が多数えられた。縄文時代晩期の集落構造については、第1次調査の成果から、自然堤防のほぼ中央部、最も標高の高いK区での遺構のひろがりを追求した。その結果、第1次調査区の東側と北側において、晩期後半の柱穴群、土壙群のひろがりが確認された。これらの遺構群の分布状況から、縄文時代晩期後半の集落は、なお調査区の南と西北にひろがることが明らかになった。また、自然堤防の西北側の低湿地にかかる弥生時代の溝を断ち割って試掘調査を行った結果、低湿地に堆積した包含層から晩期Ⅳ期からⅥ期にかけての土器、木製品、植物の種子などが層位的に出土した。そして、このⅠ区付近が、晩期後半における集落の北西の限界であることが明らかになった。

また、時期は確定しなかったが、自然堤防中央北よりのE区北東部では多数のピットが検出され、晩期後半の土器が出土している。この地域から昭和40年に調査された自然堤防北端の泥炭層にかけて、晩期中葉から後半の遺構群がひろがっていることが予想される。そしてこの自然堤防上に、時期を若干異にして複数の居住域が営まれたことが推定される。全体としては極めて規模の大きな晩期縄文集落である。

今回の調査ではⅠ区の溝の一部を掘り下げた結果、低湿地堆積層から晩期Ⅴ、Ⅵ期の土器とともに多量の植物化石と若干の木製品がえられている。ことに晩期末の包含層611層から竪杵が1点出土した。全長が推定60cmと小型であるが堅いクヌギを用い、握り部を削り込んで整形している。先端は激しい使用によって丸く摩滅している。縄文時代晩期後半の包含層からの出土であり、極めて重要な資料といえる。

さらに、晩期終末の610b層から大洞A、A′式土器とともに5粒のヒエ、アサの大型植物化石が出土しており、ヒエ、アサの栽培がこの晩期終末までさかのぼる可能性を指摘できる。

さらに今回の調査でえられた最も重要な成果として、弥生時代前期集落を区画する大規模な人工溝の発見があげられる。この溝はⅠ区からN、K区にかけて北西から東南にのび、その東南端は、長崎川に近い山王神社の東側まで確認されている。溝幅は1.5～2m、深さは検出面から約1mあり、長さ112mにわたってゆるやかに蛇行して掘削されている。

溝の底面は、ほとんど深さに差がみられない。両壁は急斜面に掘り込まれ、「V字溝」である。埋土は、大きく4層に区分された。また、溝の上部で壁のたちあがりがゆるやかにひろがっており、溝の改修が認められる。この溝は、出土土器の内容から、弥生時代前期Ⅰ期とⅡa期に機能し、Ⅱb期の新しい段階には廃絶したと推定される。

溝の北側のE、M区では第1次調査で検出した第2、3号竪穴住居跡の調査が、引き続き行われ、その住居構造の変遷がほぼ確認された。第2号竪穴住居跡は、径5.6mの不整円形で5本柱である。中央に径約1mの地床炉をもつ。壁溝が確認されている。第2号竪穴住居が拡張、改修され、第3号竪穴住居が造られている。この3号竪穴住居は径約8mの不整円形を呈し、やはり5本柱である。炉跡1基をもつ。壁溝がめぐる。この第2、3号竪穴住居跡の西側、約2m離れてやや小型な8号住居跡が発見された。径6.4mの不整円形のプランをもつ。6本柱で、壁溝が確認されている。

これらの3棟の竪穴住居跡の床面、柱穴、覆土から弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式土器が出土しており、いず

れの住居も前期後半に営まれたと推定される。

M区では、第2、3号竪穴住居跡の西側約1m離れて朱塗りの大型壷1点が土壙に埋設された状態で出土した。土器は口頸部にかるい膨らみをもち、全体に緻密な縄文が施され、朱の彩色が施されている。弥生時代中期前葉、Ⅲ期の埋設土器と推定される。

K区弥生時代溝の西側、推定居住域の外側で弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式期の合せ口埋設土器1基が検出された。径45～55cm、深さ60cmの土壙に高さ33.5cm、最大径30.9cmの甕と高さ33cm、最大径36cmの甕が合せ口で埋設されていた。下甕の中の土壌をすべて水洗いした結果、2、3歳の小児の下顎骨、頭蓋骨の破片、歯が検出された。この資料から、このような合せ口土器棺が小児甕棺であることが確認された。弥生時代の埋設土器がこの他に1点検出された。

古墳時代前期の複合口縁の塩釜式大型壷がE区のピット338から1点検出され、山王囲遺跡の所在する自然堤防が古墳時代前期にも生活の場として利用されていたことが確認された。

このように、今回の調査で弥生時代前期の集落と縄文時代晩期後半の集落の実態が極めて鮮明に把握できるようになった。またⅠ区第8号溝跡上層からは山王Ⅲ層式の新段階の土器群が一括で抽出し、その型式変遷が確認された。さらに下層の泥炭層からは多量の植物遺存体と竪杵とみられる木製品1点、加工材1点が出土しており、その供伴土器から縄文時代晩期の極めて重要な資料となった。　（須藤・大場）

引用文献

伊藤玄三　1960　宮城県青木の弥生式遺跡と出土々器 東北考古学第1輯 pp.9 - 23（東北考古学会）
伊東信雄、須藤　隆　1982　瀬野遺跡（東北考古学会）
伊東信雄、須藤　隆　1985　山王囲遺跡調査図録（一迫町教育委員会）
小田野哲憲、高橋義介　1991　上村貝塚発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第158集
桐生正一他　1986　湯舟沢遺跡 滝沢村文化財調査報告書 第2集
工藤利幸他　1986　馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化事業団埋蔵文化財調査報告書 第99集
菅原俊行、安田忠市　1986　地蔵田B遺跡 秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書
須藤　隆　1976　亀ヶ岡文化の終末と東北地方における初期弥生土器の成立 考古学研究 23 - 2 pp.25 - 50
須藤　隆　1990　東北地方における弥生文化 考古学・古代史論攷 pp.243 - 322（伊東信雄先生追悼論文集刊行会）
須藤　隆他　1996　国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ⅰ（一迫町教育委員会）

付章１　山王囲遺跡におけるレーダ探査の成果

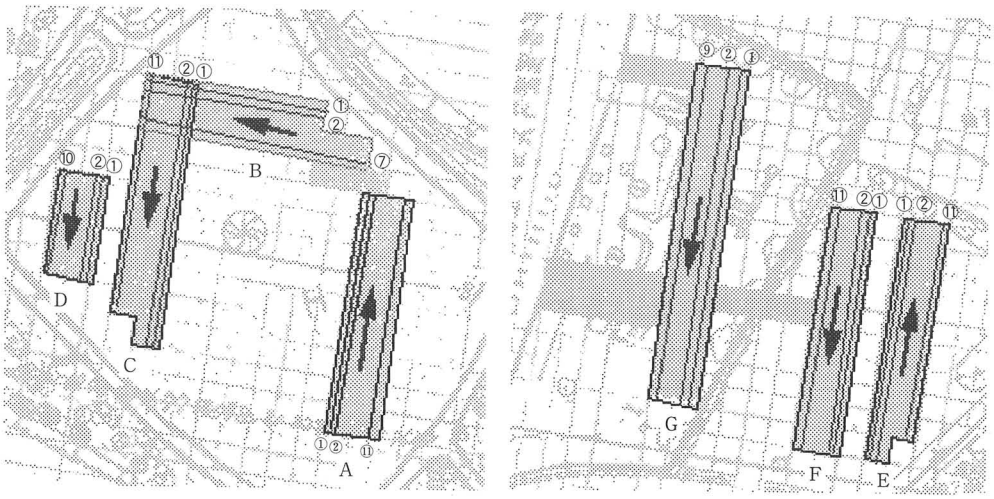
安達　三郎（東北工業大学）、宇野　亨（東京農工大学）、何　一偉（大阪電気通信大学）

は　じ　め　に

一迫町教育委員会と東北大学文学部考古学教室による発掘調査に先立ち、平成７年８月20日から５日間レーダによる探査を行った。ここではその結果の一部と、その後検討した成果について報告する。

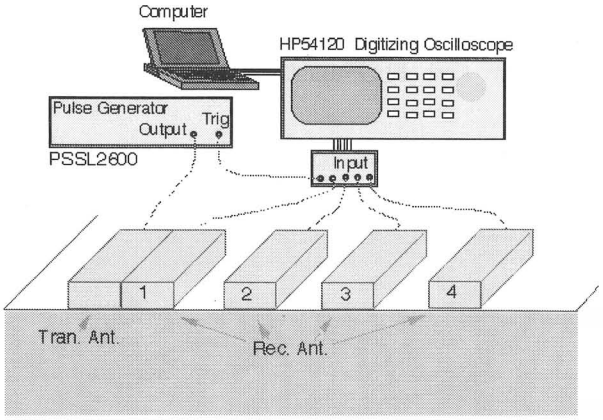
第１節　探　査　結　果

探査実験は第１図に示すように、各調査区に50cm間隔の測線をとり、第２図に示す５つのアンテナを持つバイスタティックパルスレーダを用いて測定を行った。

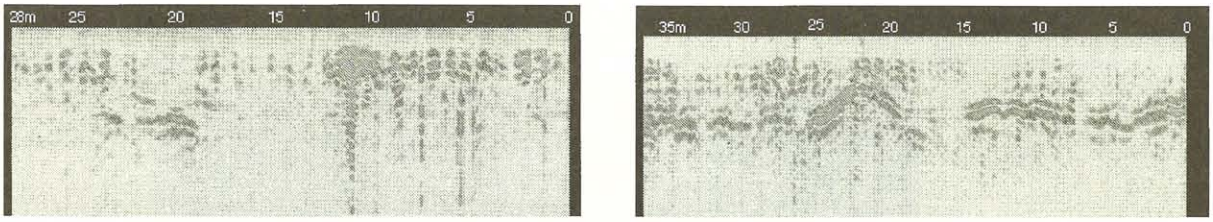


第１図　探査トレンチと測線
Trenches and measuring lings

測定結果の一部を第３図に示す。第３図ａ、ｂはそれぞれ調査区Ｆ、Ｇ内の測線３および測線８における垂直断面の一例である。ただし右端が開始位置である。Ｆ区には、比較的深い位置に孤立した遺物の反応が、Ｇ区には連続的な反応が見られる。第４、５図は、Ｆ、Ｇの水平断面であり、各時刻でのイメージである。この結果からもＦ区には、比較的深い位置に孤立した遺物が、Ｇ区には比較的浅い位置に、広範囲な遺構があるものと考えられる。ただし、第４、５図では左端が測定開始位置、上端が測線１と



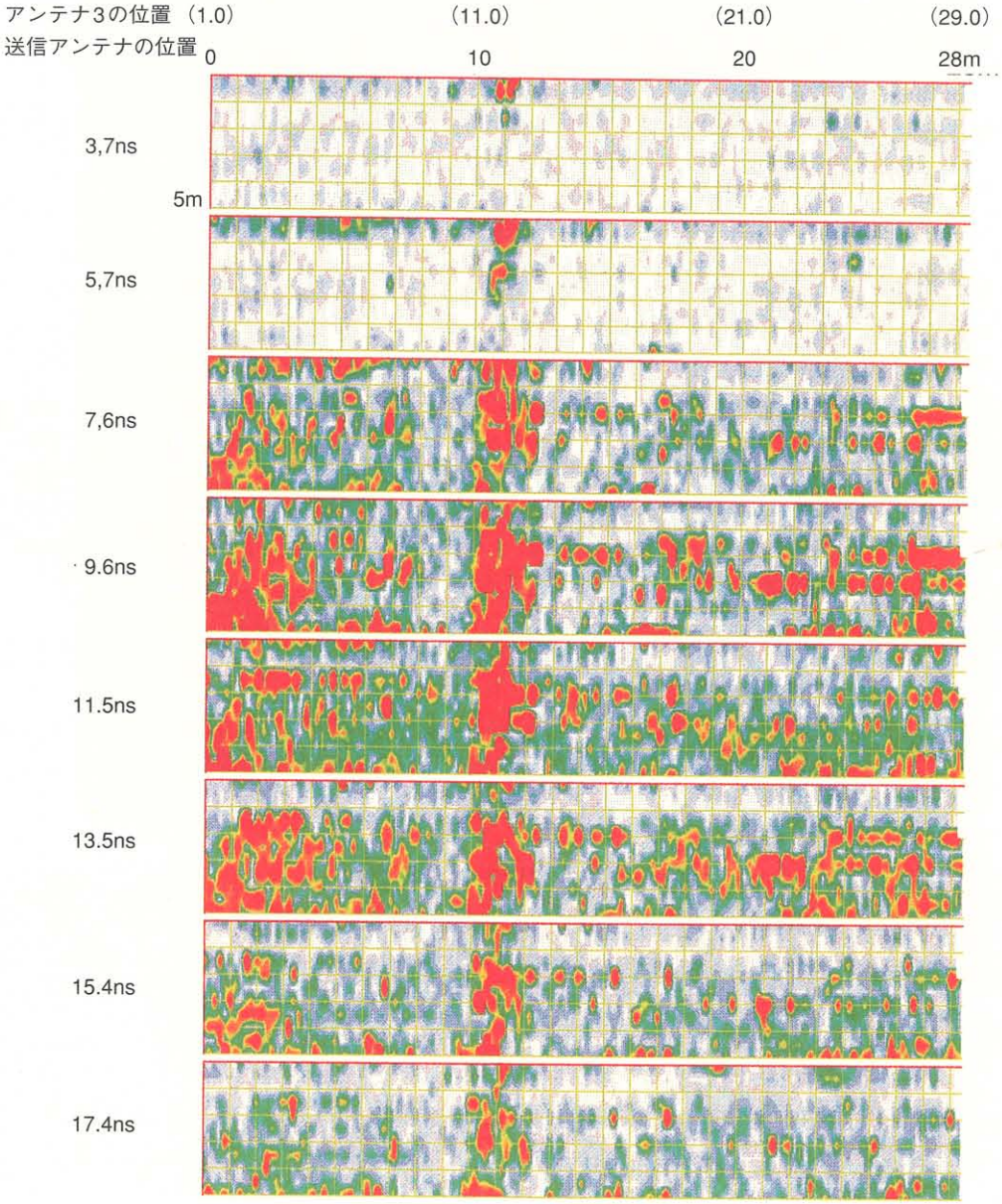
第２図　バイスタティックパルスレーダシステム
Bistatic pulse rader system



(a)　　(b)

第3図　アンテナ＃3の受信電圧 (a)　測線3 (b)　測線8 (b)

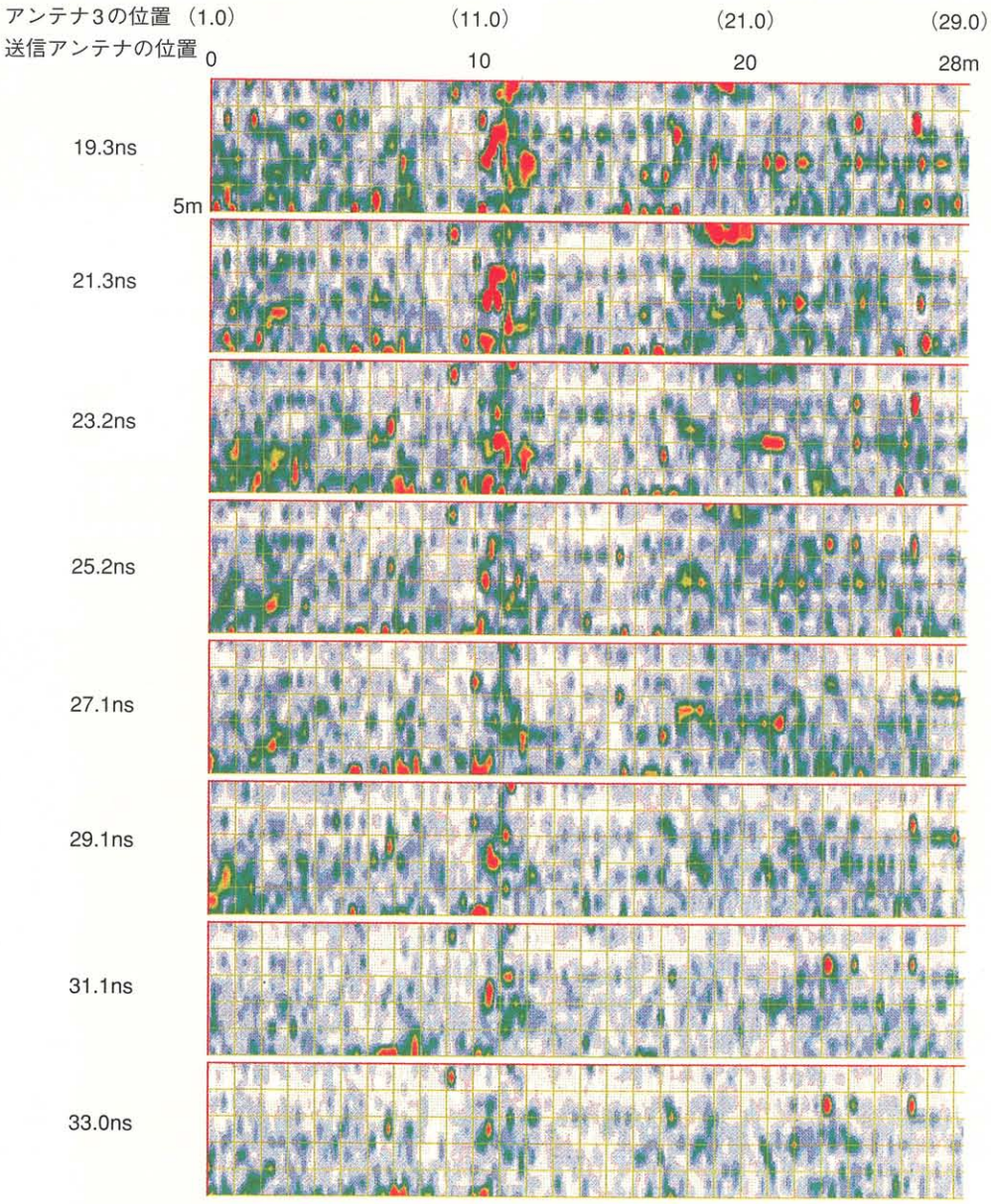
Received voltages of antenna ＃3 (a) Trench F, Line3 (b) Trench G, Line8



F区,アンテナ3, 3.7nsec～17.4nsec

第4図　アンテナ3で受信されたF区の水平断面図

Time-slice signal images of trench F received by antenna 3



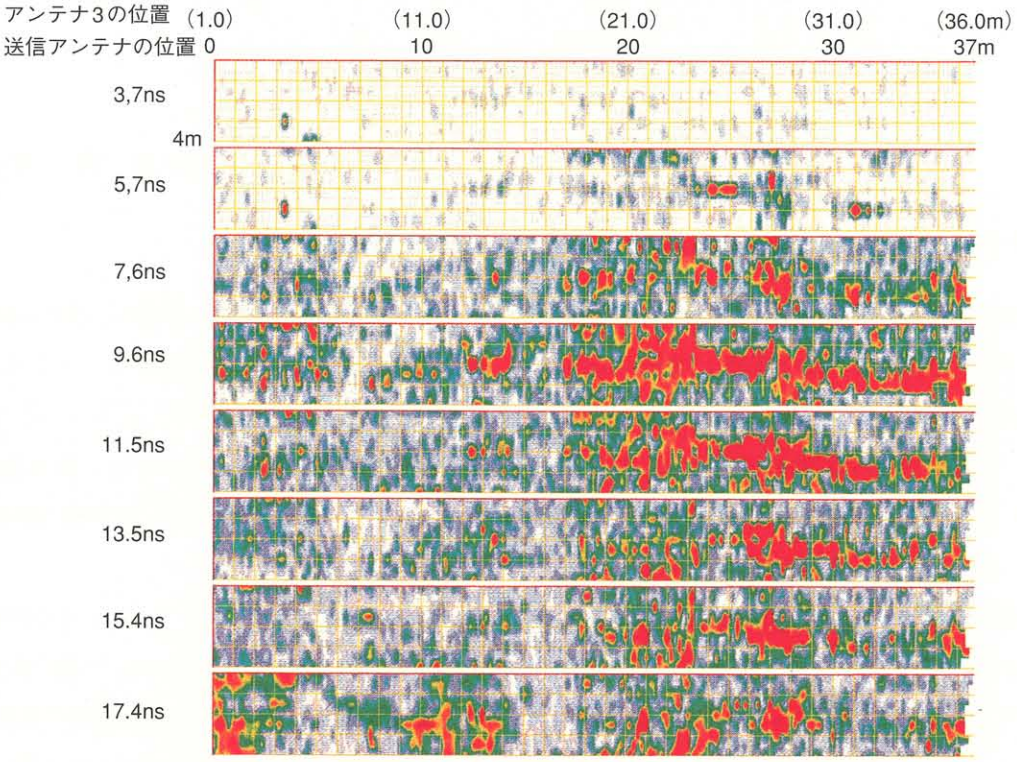
F区,アンテナ3, 19.3nsec～33.0nsec

第5図　アンテナ＃3で受信されたF区の水平断面図

Time-slice signal images of trench F received by antenna3.

なっている。

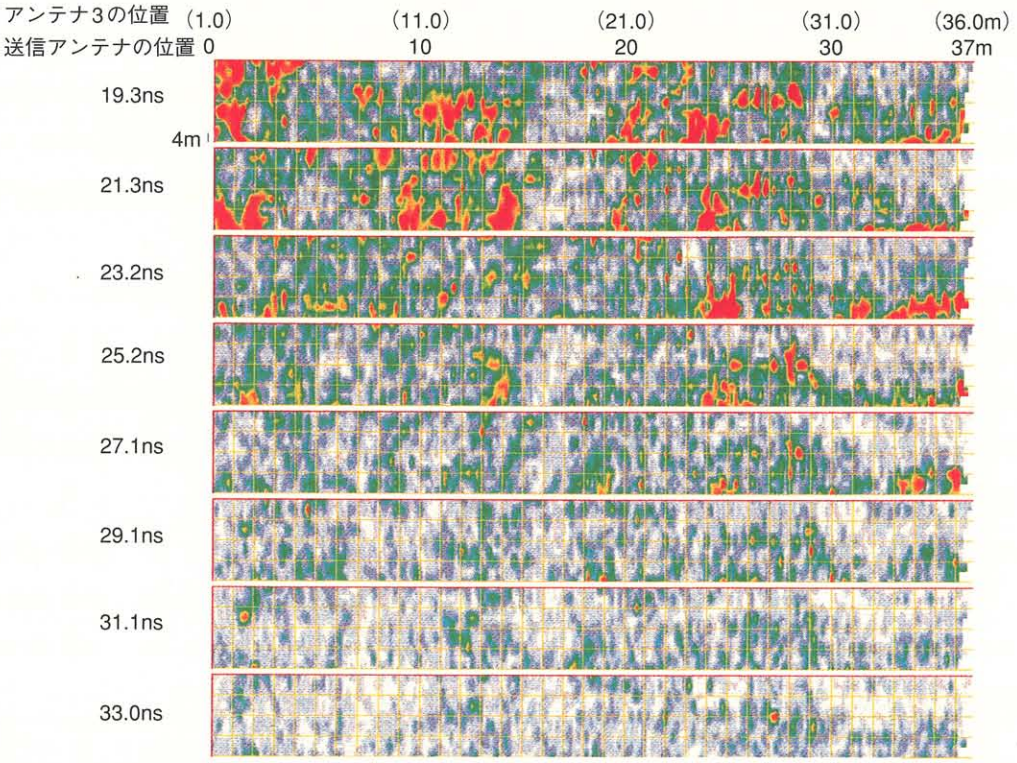
その他の発掘区では際立って強いイメージは得られなかった。



G区,アンテナ3, 19.3nsec～33.0nsec

第6図　アンテナ3で受信されたG区の水平断面図

Time-slice signal images of trench G received by antenna3



G区,アンテナ3, 19.3nsec～33.0nsec

第7図　アンテナ3で受信されたG区の水平断面図

Time-slice signal images of trench G received by antenna3

付章２　山王囲遺跡の地形的環境

阿子島　功（山形大学）

第１節　山王囲遺跡の立地環境の地形学的な問題点

山王囲遺跡の特徴のひとつは1964～65年の発掘調査（旧小学校体育館の部分の深掘り）の際に、深さ1.5ｍを越す泥炭層から保存状態のよい縄文晩期の木製品、漆加工品、繊維、骨角器などが多数発見されたことである。このことが1971年に国史跡の指定をうけることになった根拠の重要な部分である。

1948年～1996年の間の継続的な調査によって、山王囲遺跡は微高地～低湿地にかけて広がる、縄文時代晩期、弥生時代、奈良時代などの複合遺跡であることが明かにされつつある。実は、前述の深い泥炭層（縄文晩期の遺物包含層）は、みかけ上、微高地側にあったことが、地形学的には重要な問題であった。

山王囲遺跡は、北上川支流一迫川にそって旧北上川河口から約65km上流に位置している。ここでの沖積低地の幅は約6km、沖積層の厚さは最大約15ｍである[註1]。北上川本川にそっては、河口から約50kmの、一関～花泉間において地表下19.5ｍ（海水面－３ｍ、JR気仙沼線鉄橋の橋脚下）から縄文早期末の埋没遺物が発見されており（小野寺1970）、ここでの沖積層の堆積には縄文前期頃のいわゆる縄文海進の海水準面上昇の影響が及んだと考えられた。したがって、一迫町真坂付近にも同様に海水準変動の影響が予想された。上流域でも、縄文時代前期の高海水準期には堆積が、縄文後晩期～弥生時代の低海水準期には離水が、さらにその後は谷埋めがおこりやすいと考えられる（阿子島　1968　p.210の注８）。

1994年度山王囲遺跡保存活用基本計画策定案にもとづいて、今回調査の目的は①縄文時代集落の構造を明らかにする、②遺物を包含している泥炭層の分布と保存状態を明らかにする、③泥炭層の植物遺存体の分析によって縄文時代晩期の自然景観を明らかにする、などである。このうち、①②は、同時に山王囲遺跡の立地する微高地～低湿地の微地形と遺物包含層の形成過程、縄文時代～弥生時代の海水準微変動の影響の有無を検討することにもなる。

さらに具体的にいえば、縄文時代晩期～弥生時代前期の山王囲集落の景観復原の問題にかかわって、

ａ．住居の広がりは、微高地の頂上から下限がどこまでか。

ｂ．厚い泥炭層は微高地のなかにわずかにいりこんだ微凹地にあると推定されるが、当時の定常的な低湿地の上限範囲はどこまでか。遺物包含層である泥炭層は、水深のある捨て場か、陸上の生活面で捨てられたものが後に湿地になったのか。

ｃ．縄文時代晩期～弥生時代にかけての微凹地の埋没過程。縄文時代晩期～弥生時代にかけて集落は洪水を被ったか。それは自然堤防の形成過程を復原することでもある。自然堤防は、従来、洪水のたびに成長すると説明されてきたが、いつどれぐらいの速さで成長しているのかは実はよくわかっていない。沖積世の海水準微変動に関連して形成された歴史的所産である可能性もある（阿子島　1980他）。

註１　一迫町簡易水道水源のボーリング（昭和40年）では地表下9.3ｍまで粘土質砂礫で以下角礫凝灰岩、慶泉堂医院（昭和36年）では14.8ｍまで砂利、以下土丹（以上は昭和40年頃一迫町役場狩野次義氏のご教示による）。旧一迫小学校北西プール地点における調査ボーリング№1（1997）では地表下13.25ｍ以下15.28ｍまで凝灰質粗粒砂岩である。

第２節　山王囲遺跡の立地する微地形と土層区分

遺跡は、一迫川と長崎川の間にある微高地（自然堤防）を中心にひろがっている。この微高地は山王神社～給食センターを尾根として、南側の長崎川河床より最大約３ｍ高い。

この微高地は表面を洪水ローム（flood loam[註2]）におおわれている砂礫堆である。洪水ロームのなかに包含層が挟まれている。トレンチごとの土層区分と記載は別項にゆずる。現在は確認調査の途中段階でもあり、ここでは遺跡の全体像復原にかかわる微地形と土層区分の考え方について、作業仮説を含めたシナリオとして述べたい。

１）微高地の平面形

北縁（小学校跡地の北側の住宅と畑地の北縁の旧道～あやめ園）は、一迫川の側刻崖と考えられる、北に凹の、２つの弧形の段差である。その比高は１ｍ程度である。このうち東側の弧形の侵蝕崖は後述の明治大学実測図（図２）では現在の山王池のところでは明瞭であるが、その東半部はやや不明瞭で池をつくるときにすこし強調されているようである。その原形は1985年発刊山王囲遺跡調査図録の図版１－３に写っており、ごく緩い段々の水田である（畦の平面形は北に凹の弧形である）。

西縁（山王橋の北側～歴史民俗資料館～プール）は、長崎川の河道跡と考えられる段差である。比高数10cm程度である。南東縁は、長崎川の滑走斜面状のごく緩い斜面であり、河床から頂部までの比高は約３ｍである。

この微高地の広がりは東西約350ｍ、南北約150ｍであり、北側をかつての一迫川河道に、南側を現在の長崎川の河道に、西側をかつての長崎川の河道に縁どられている。微高地の東縁のぎおん橋付近で、かつては一迫川と長崎川とが合流していたことがあったと考えられる。

２）微高地のなかの微起伏

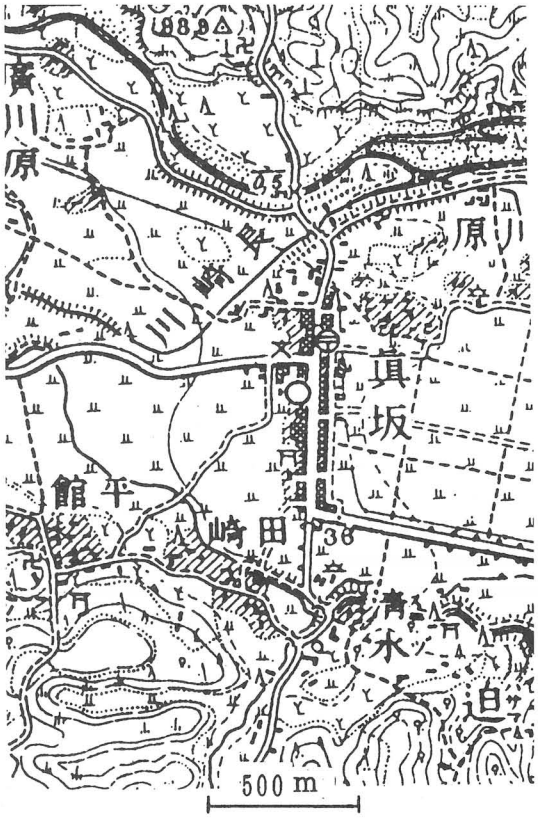
微起伏の詳しい測量図として、等高線間隔0.5ｍ、縮尺1/400の測量図が明治大学による1962年の調査の際に作成されている（第２図）。この実側図によれば、山王神社～給食センターを尾根とし、その東西両側がわずかに低い。測量図では頂部は畑、尾根の西側（小学校校庭～体育館＝後の東北大学発掘区＝）は、水田であった。さらに現給食センターの位置に尾根を横切るように小さな水田が食い込んでいる。また山王神社南側の長崎川滑走斜面に現河道方向に平行な細長い凹地が描かれている。

大正５年測１：50,000地形図（第１図）では高度40ｍ等高線が微高地を表している。長崎川の川の字が重なっているが、まとまった畑記号はない。長崎川ぞいの針葉樹記号と小学校北側の畑記号が微高地を表している。

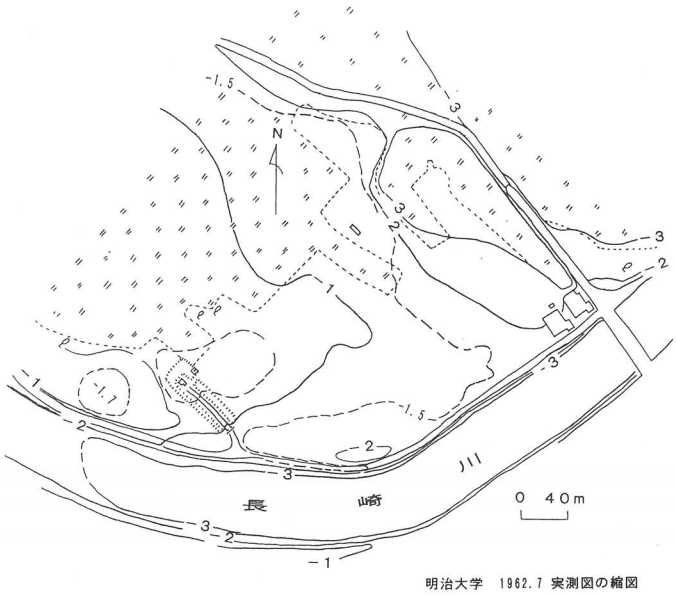
３）土層区分のあらまし

土層の層序の大区分として、上より下へ３層ある；新しい盛り土（小学校校庭や遺跡整備のための盛り土でごく新鮮な山土）／洪水ローム層（縄文時代、弥生時代、平安時代の包含層を含む。シルト層を主とし、一部に砂礫のレンズ層を

註２　洪水でもたらされたローム。ロームは（砂・シルト・粘土）の配分比によって特徴づけられる土壌の粒度分類のひとつの範囲である。関東ローム層は同時に火山灰起源であるため、成因を含む地層呼称となったが、ロームは本来は粒度組成のみを意味する。



第１図　大正５年測１：50,000地形図×２倍
山王囲遺跡は長崎川の川の字のところ
Topographic map to show
the micro-relief from landuse in 1916.



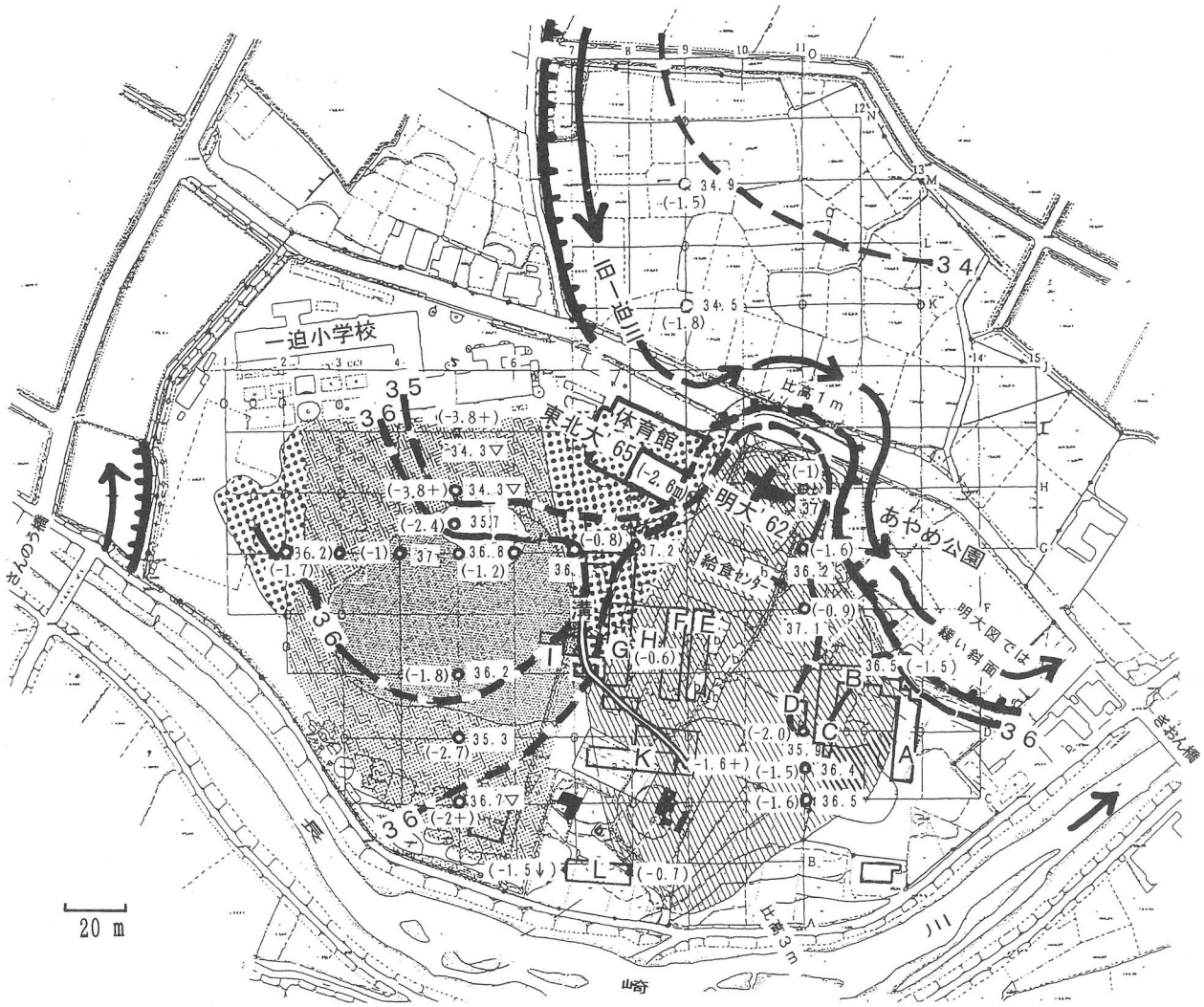
第２図　微起伏の詳しい測量図（明治大学　1962測量　等高線間隔0.5m　縮尺１/400原図より）基準点⊡よりの比高。
Detailed topography of Sanno-gakoi site surveyed by
Meiji Univ. Archeologic Research Team（1964）

挟んでいる。その上面の旧表土は、畑あるいは水田の耕作土である。）／自然堤防の原形となった砂礫堆をつくる砂礫層。

洪水ローム層[註2]の層厚は、B区では1.5ｍ、H区では最大１＋ｍ程度、G区では最も薄く0.5ｍ程度、Ｉ区の谷中心（試掘トレンチ）で2.5ｍ、K区で1.6ｍと変化している。洪水ローム層基底の絶対高度はB区で36.5ｍ、H区で36.2ｍ～37.0ｍ、G区が37.1ｍと高く、K区で36.5ｍ、Ｉ区の谷中心で35.0ｍと波状に変化している。洪水ローム層は、一部にレンズ状の砂礫層をはさんでいるが、シルトを主体としているので以下“シルト層”と呼ぶことがある。

洪水ローム層中の砂礫のレンズは、洪水ローム層の地山層である砂礫層を母材とし、わずかな起伏に応じて浅い谷にむかって２次的に移動・再堆積したものである。両者を比較すると、地山層は、明褐色で相対的に明るく、しまっているが、２次移動したものは（とくに埋没谷の部分では）、泥質のマトリックスを含んで暗く、しまりが悪い。したがって、前者を“きれいな礫層”、後者を“よごれた礫層”と呼ぶ。頂部であるF区・E区の竪穴住居床面や確認面にはシルト層が、H区ではシルト層とレンズ状の“よごれた砂礫層”（第４号竪穴住居跡）、G区では“きれいな砂礫層”（第４号土器埋設土壙付近）が露われている。その基底はH区の東西５ｍの間で36.0ｍ～36.8ｍと波うっている。Ｉ区の谷中心ではよごれた砂礫層の厚いレンズが２層以上ある。K区ではシルト層が厚く砂礫のレンズはない。

旧体育館の下にある豊富な木質遺物包含層である泥炭層は、微高地を刻む浅い谷にそって分布している可能性



第３図　自然堤防の原形をなす，洪水ローム層の地山層（“きれいな砂礫層”）の上限高度分布

Contour map showing the form of the gravel mound lying under the flood loam bed of the natural levee.

基図は遺跡保存管理計画書（1976）のハンドボーリング調査結果および今回発掘区のデータによる。

絶対高度に若干のずれが含まれるかもしれない。

洪水ローム層の下底の高度（砂礫層上面高度）　単位m
（　）は旧地表からの深さ
▽はそれより下

微地形の境界

a　狩野文明氏調査トレンチ

明治大学'62調査トレンチ

(-2.6m)　東北大学'65調査トレンチ

'75 ボーリング地点

遺物包含層の分布

"北の谷の深い泥炭層"

泥炭層

厚さ0.3m以下の比較的乾燥した泥炭層

A，，I　'95-96調査トレンチ

があり、これを（仮に）“北の谷の泥炭層[註3]”と呼ぶ。

“北の谷の泥炭層”は山王囲遺跡調査図録（1985年刊）でみると粘土やシルトを主とし、砂層をはさんでいるが、まとまった礫層は含まれていない。東北大学1965年発掘区（体育館南東隅）北壁断面図（調査図録　図３－３Ｌ－Ｈ－Ｄ区）の東側部分では、地表下１ｍ～2.6ｍになだめに（地層境界が東へ上がる）砂礫層が描かれている。この砂礫層は今回の“よごれた礫層”あるいは“きれいな礫層”のいずれかに相当し、“北の谷の泥炭層（遺物包含層）”は“きれいな礫層”を地山層とする谷地形を埋めるように堆積しているように解釈できる。今回のＧ区中央の底（ＢＦ51区、旧地表下約0.6ｍ）、さらに体育館南東部に近いＪ区（旧地表下約0.7ｍ）に露われている“きれいな砂礫層”はこの砂礫層に連続するのではないか。北の谷の部分は、平面的に、一迫川の旧河道が南へ弧形に入りこんでいる部分（体育館の北側道路付近）へつながり、その東側の給食センター北側（明治大学の北発掘区）は、微高地が張り出している部分である。

1996年発掘のＩ区、Ｎ区、Ｋ区にかけてNW－SE方向にのびる溝跡（第７号溝跡、弥生時代）が検出されたが、これはＩ区試掘トレンチで確認された縄文時代晩期遺物を含む埋没谷に沿っている。Ｉ、Ｎ、Ｋ区の1996年調査の確認面は弥生時代の生活面であるが、このときまでに谷はおおよそ埋もれきってごく浅い状態になっていた。その中心部を人為的に溝として利用している。

埋没谷の西岸はＩ区試掘トレンチでは確認されていない。しかし、Ｉ西区北壁では、灰白色火山灰層（平安時代の十和田－ａか）がわずかではあるが、西へむかって傾き上っている断面がみえるので、縄文時代埋没谷もグランド側でたちあがる可能性がある。

第３節　微地形形成史の作業仮説

近い将来の発掘調査を含めれば、つぎの４時期にわけて微地形図が復原できるであろう。

ａ．縄文時代晩期以前 ── 自然堤防の原形が成立した時の地形

砂礫堆の原起伏は“きれいな礫層”上面の等高線図として表現される。史跡山王囲遺跡保存管理計画書（1976、図４～７）に小学区校庭を含む広い範囲の20地点のハンドボーリング調査結果の記載があり、これと1995・96年発掘区の観察によって、礫層上面の等高線図を作成すると、図３になる[註4]。Ｋ区を除けばこのときの起伏が現在まで継承されることなる。のちに厚い泥炭層が堆積することになる谷の原形は長崎川旧河道か。

ｂ．縄文時代晩期 ── 縄文時代晩期山王囲集落が存続した時の地形

ａとすこし違う点は、Ｇ区に対してＫ区のほうが“きれいな砂礫層”の上面は低いが洪水ローム層が厚く堆積したため、Ｋ区が自然堤防の最高点となった点である。おおよそ現在の起伏に近い状態[註5]で、山王囲集落が営まれ

註３　青森市三内丸山遺跡のいわゆる泥炭層は、低い丘陵状の地形の谷斜面上部に堆積していて、沖積面との比高は大きいが、地下水位が高い条件によって保存がよかった。山王囲遺跡の泥炭層は微高地側に入り込んだ浅い谷から外側の低湿地にかけて分布しており、もともと地下水位が高い条件がそなわっているようである。

註４　ボーリング柱状図から“よごれた礫層”か“きれいな礫層”の区別はできない。また、絶対高度の復原に若干の誤差が含まれる。今後精密化することとして、今回は作業仮説としておおよその旧地形復原を試みた。

註５　北側は当時の谷が2.5ｍ以上埋没しているから、かつては現在より起伏があったといえる。しかし南側では長崎川河床と自然堤防頂部の比高が現在でも３ｍある。

た。K区ではシルト層を地山層として、G区では砂礫層やシルト層を地山層として竪穴住居がつくられた。

Ｉ区の谷は半湿地状態であり、洪水時には側方から砂礫（２層準以上）や土器片が流れ込んだ。谷埋め層の中上部の黒泥層は半湿地状態で腐植が分解されたことを示している（水深のある湿地であるならば分解がすすまない）。北の泥炭層も同様に捨て場として遺物が流れ込んだ。

Ｉ区の谷と北の泥炭層の谷は連続すると考えられるが、北の泥炭層の部分には砂礫層があまり届いていないようである。その水深の有無については今後の再検討課題とする。下部層については腐植の分解程度や珪藻分析が、上部のⅣ層（1965年）付近に多く検出された石組や炉の遺構などが、地面の乾湿の指標となろう。北の泥炭層の谷の西岸の立ち上がりもわかっていない[註6]。

自然堤防の頂部では堆積があまりおこらないので、集落存続期間中に遺構が切り合いになるが、谷部では堆積し易いので遺物包含層は間層にはさまれて分層しやすい。

c．弥生時代 ── 弥生時代前期山王囲集落の時の地形

Ｉ区と北の泥炭層の谷がおおよそ埋もれきって、ごく浅い谷となっていた。谷の上部の覆土は明るい色のシルト層であり、洪水で堆積したものと考えられる。前後してＥ・Ｆ・Ｇ・Ｉ・Ｎ・Ｋ区にかけて浅い谷の中心に沿って溝が作られた。溝埋め層は基底の0.1ｍだけが黒褐色で泥質である。

d．平安時代 ── 灰白色火山灰（十和田To－a火山灰）**が降灰・堆積した時の地形**

Ｉ・Ｍ・Ｊ区、北の泥炭層区には旧小学校建設時まで水田があったが、低いＩ、Ｊ区やさらに北側では覆土の灰白色火山灰の層準に平安時代水田の検出の可能性がある。この後も浅い谷に堆積がみられるので、自然堤防頂面は離水していないであろう。

引用文献

阿子島　功　1966　迫川沿岸の地形　東北地理学会　東北地理　v.18　№.3　pp.123－132

阿子島　功　1968　北上川中下流の河谷底の構造　東北地理学会　東北地理　v.20　№.4　pp.206－214

阿子島　功　1978　低地の微地形と海水準変動（２）－吉野川下流平野および四万十川川口平野　日本地理学会　地理学評論　v.51　№.8　pp.643－661

阿子島　功・檀原　徹　1991　東北地方　10C頃の降下火山灰について　中川久夫教授退官記念地質学論文集　pp.1－9

一迫町・株式会社テクノ長谷　1997　縄文マインド研究所地質調査委託報告書

一迫町教育委員会　1976　史跡山王囲遺跡保存管理計画書　p.20

一迫町教育委員会　1985　山王囲遺跡調査図録　p.15　図１－４　図版37　付図２

一迫町教育委員会　1996　国史跡山王囲遺跡発掘調査報告書Ｉ　p.42　図版19

小野寺信吾　1970　仙台平野北縁部における縄文海進に関する一考察　第四紀総合研究会　第四紀　№.15　pp.2－3

Geomorphology and Soil stratigraphy in the Sanno－gakoi Site.

AKOJIMA, I., Environmental Geography, Faculty of Human Culture and Social Sciences, Yamagata Univ.

The Latest Jomon and Early Yayoi Sanno－gakoi archeologic site were on the natural levee. The wooden huttes were on the top of the natural levee and the abundant remnants including wooden tools, bones and pieces of clothes were in the peat bed deposited in the shallow valley in the fringe of the mound. The depositional processes of the Sanno－gakoi mound may be synchronized with the Holocene eustatic minor sea level fluctuations.

註６　史跡山王囲遺跡保存管理計画書（1976年刊）図８の遺物包含泥炭層分布の平面形はくさび形で谷埋め型を示唆するが、西側は無遺物泥炭層で礫層（きれいな礫層上面深度図）の立ち上がりはない。現在の微地形ともあわないが、西は遺物も届かない深い泥炭地になるのか？山王囲西村があるのか、東村（本体）との間が鞍部で境されるのかも検討しなければならない。

付章３　縄文時代晩期・弥生時代の古環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

は　じ　め　に

平成７年度の分析調査では、弥生時代以降の堆積物を対象として古環境復元に関する分析調査を実施したが、花粉化石がほとんど検出されなかったため、本遺跡周辺の古植生について詳細に検討することができなかった。今回実施された発掘調査では、自然堤防上から後背湿地にかけて縄文時代晩期以降の遺物を包含する土層を確認することができた。このことから、史跡整備事業の一環である縄文時代晩期～弥生時代の古環境変遷について検討することを目的として、土層断面より試料を採取し、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を実施した。また、弥生時代前期後半の住居跡の炉から検出された燃料材と推定されている炭化材について、その種類を明らかにした。

第１節　試　　料

前回の分析調査では、Ａ～Ｋ区で土壌試料を採取し、便宜的に第１～７地点とした。今回はＩ区北壁自然堆積層から試料を採取し、ここを第９地点とした。本地点の堆積物の時代性については、試料番号１採取層準が弥生時代前期後半、試料番号４・５採取層準が弥生時代前期に相当すると考えられる。また、試料番号７以深は縄文時代晩期の可能性があるとされている。本地点の層序および各分析試料は第１図に示す。樹種同定試料は、第９地点試料番号７・11・12を採取した付近で検出された材３点（試料番号Ｗ－１～Ｗ－３）である。この他、弥生時代前期後半の住居跡（第３号竪穴住居跡）の炉跡で認められた炭化材が採取された。この炭化材は数個体採取されたが、試料を観察したところ同一個体が割れたものと判断されるため、一括試料として取り扱った。

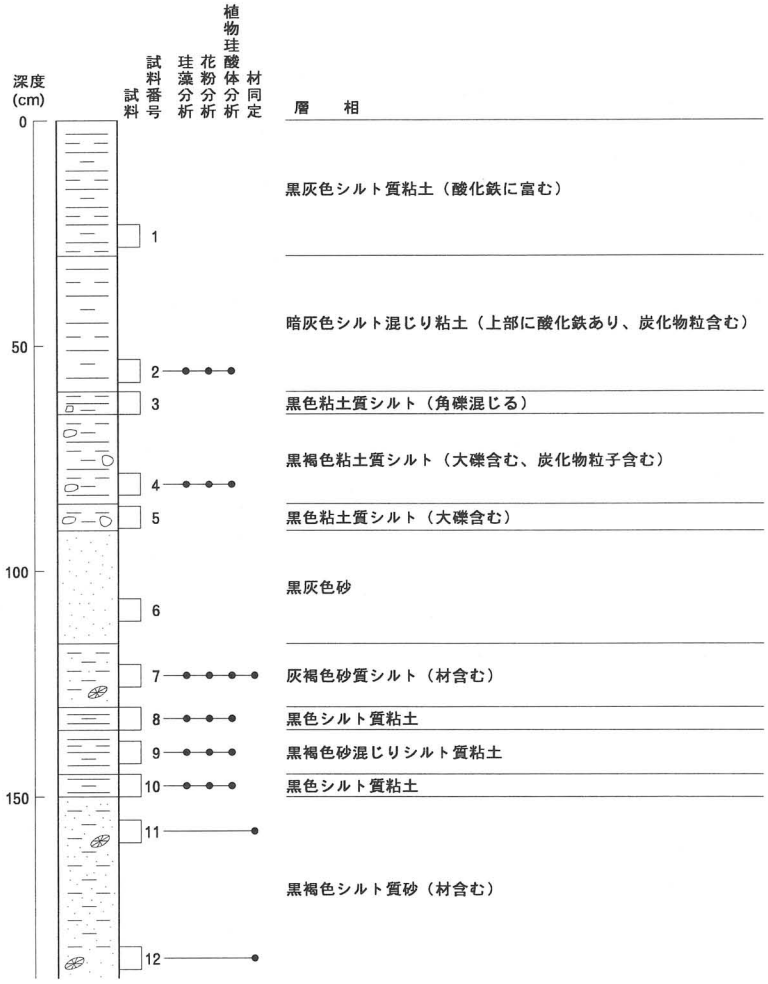
第２節　分　析　方　法

各分析方法については、一迫町教育委員会が保管する「平成８年度山王囲遺跡自然科学分析調査報告」を参照されたい。

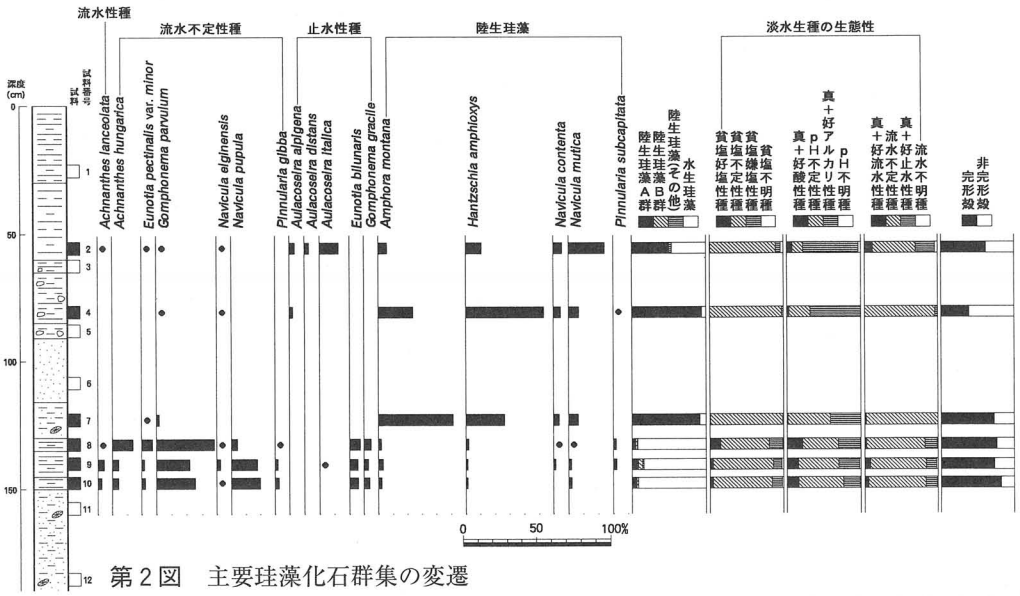
第３節　化 石 の 産 状

１）珪 藻 化 石

産出種のほとんどは淡水生種で構成され、産出分類群数は28属121種類である（第２図）。珪藻化石群集は、試料番号10～８、試料番号７・４、試料番号２で異なる。試料番号10～８では流水不定性で富栄養水域に多く認められる*Gomphonema parvulum*、*Navicula pupula*が約20％と多産する。この内、後種は有機汚濁の進んだ富栄



第１図　模式柱状図および分析層位



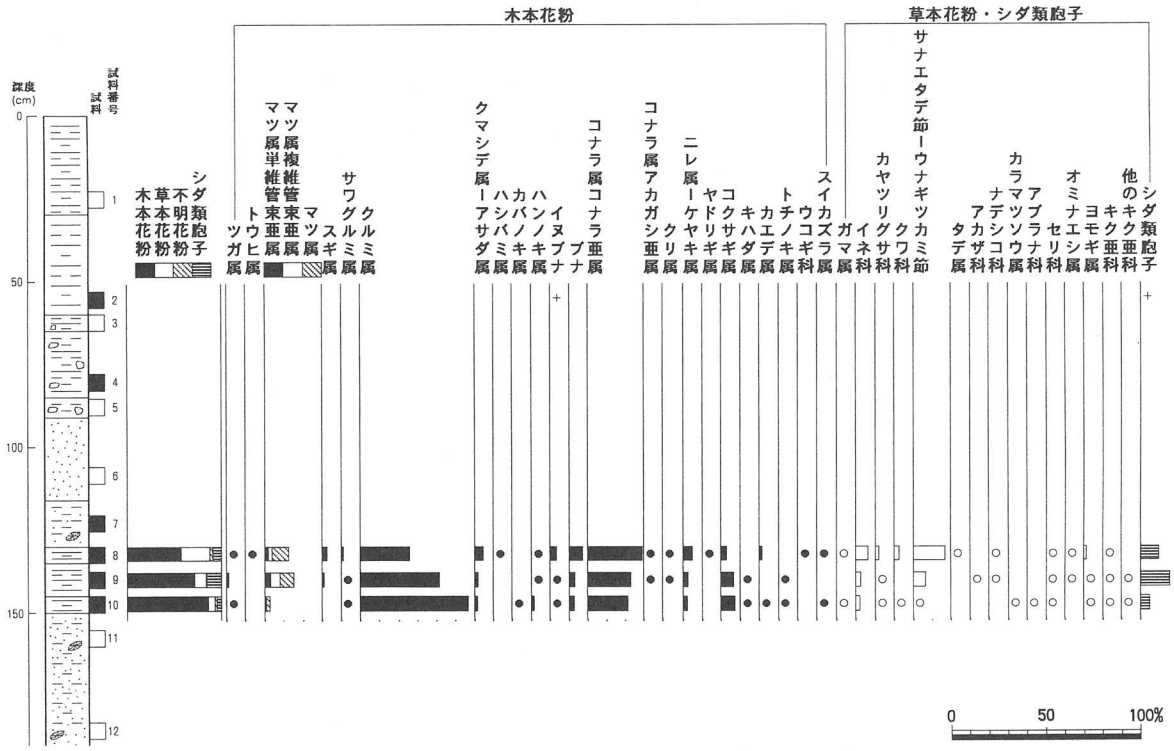
第２図　主要珪藻化石群集の変遷

各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は１％未満の種類を示す。

養水域を指標する好汚濁性種とされている（Asai K. & Watanabe T. 1995）。これに付随して、好流水性の*Achnanthes lanceolata*、流水不定性の*Achnanthes hungarica*、*Eunotia pectinalis var. minor*、*Pinnularia gibba*、好止水性の*Eunotia bilunaris*、*Gomphonema gracile*を伴う。これらの種類の中で、*Eunotia pectinalis var. minor*、*Pinnularia gibba*、*Gomphonema gracile*は、沼よりも浅く水深が１ｍ前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢地やさらに水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤　1990）でもある。試料番号８では*Navicula pupula*が減少し、*Gomphonema parvulum*と*Achnanthes hungarica*が若干増加する。試料番号７・４では珪藻化石群集が急激に変化し、陸生珪藻の中でも耐乾性の高いＡ群（伊藤、堀内　1991）の*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*が30～50％と優占する。試料番号２では陸生珪藻Ａ群の*Navicula mutica*が25％と多産するほか、*Aulacoseira italica*などの止水性種も多く産出する。

2）花粉化石

試料番号２・４・７は花粉化石の保存状態が悪い。試料番号８～10では比較的良好に花粉化石が検出され、クルミ属・コナラ属コナラ亜属が多産し、マツ属・クマシデ属－アサダ属・ブナ属・ニレ属－ケヤキ属・コクサギ属などを伴う。草本花粉は検出個体数が少なく、ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・クワ属・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出される。この内、サナエタデ節－ウナギツカミ節は上位に向かい増加する（第３図）。



第３図　花粉化石群集の変遷

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草木花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

３）植物珪酸体

植物珪酸体は全体的に保存状態が悪く、また検出個体数も少ない。検出される中では、タケ亜科、ススキ属・イチゴツナギ亜科が多い傾向にある。また、試料番号８より上位でネザサ節・タケ亜科の珪酸体列が検出され、試料番号７～10で種類不明の珪化した組織片が多産する（第１表）。

第１表　植物珪酸体分析結果

種　類	Loc.9					
試料番号	2	4	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体						
キビ族	1	−	−	−	−	−
タケ亜科ネザサ節	−	−	1	2	−	−
タケ亜科	17	25	13	46	7	28
ヨシ属	−	−	−	3	1	−
ウシクサ族ススキ属	3	2	3	8	1	6
イチゴツナギ亜科	17	7	18	5	5	5
不明キビ型	7	16	17	34	19	21
不明ヒゲシバ型	5	6	1	12	2	10
不明ダンチク型	11	8	5	1	5	12
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
タケ亜科ネザサ節	−	−	3	4	−	1
タケ亜科	11	6	11	17	4	14
ヨシ属	2	−	−	3	−	−
ウシクサ族	1	8	4	12	6	7
不　明	10	6	9	16	8	13
合　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	61	64	58	111	40	82
イネ科葉身機動細胞珪酸体	24	20	27	52	18	35
総　計	85	84	85	163	58	117
組織片						
ネザサ節短細胞列	−	−	1	2	−	−
ネザサ節機動細胞列	−	−	1	−	−	−
タケ亜科短細胞列	1	1	1	1	−	−
不明組織片	−	−	77	16	4	13

４）材　化　石

Ｗ－２は樹皮であったため、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、全て落葉広葉樹のクリに同定された（第２表）。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

第２表　樹種同定結果

試料採取地点	試料名	時代・時期	用途など	樹　種
第９地点	Ｗ－１	縄文時代晩期	自然木	クリ
	Ｗ－２	縄文時代晩期	自然木	樹皮
	Ｗ－３	縄文時代晩期	自然木	クリ
第３号竪穴住居跡　炉跡	炭化物	弥生時代中期	燃料材	クリ

第４節　堆積環境の変遷

珪藻化石群集は試料番号８と試料番号７の間を境として急激に変化することから、堆積環境もこの間を境として変化したと考えられる。試料番号10～８では水生珪藻が多産し、中でも富栄養水域に多く認められる種類、好汚濁性種（Asai K. & Watanabe T. 1995）、沼沢湿地付着性種（安藤　1990）が多く検出される。このような珪藻化石の特徴から、縄文時代晩期頃の調査地点周辺では、流水の影響の少ない富栄養な沼沢地～湿地のような湿潤な水域が存在したと考えられる。また、草本花粉化石の産状から、このような沼沢地～湿地の周辺には、ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・クワ属・サナエタデ節－ウナギツカミ節・ヨモギ属などが生育していたと考えられる。このように比較的安定した環境の中で、黒褐色～黒色を呈するシルト質粘土が堆積したと考えられる。

試料番号７・４では陸生珪藻の中でとくに耐乾性の強いＡ群が優占する。現在の陸生珪藻の分布調査によれば、陸生珪藻の相対頻度の和が70～80％以上であれば、その試料が堆積した場所は水域以外の常に空気にさらされた

好気的環境であるとされている（伊藤、堀内　1991）。これにしたがえば、試料番号７・４とも陸生珪藻Ａ群が約90％以上検出されていることから、本層準が堆積した縄文時代晩期～弥生時代前期頃の調査地点周辺は、陸生珪藻の繁茂できるような好気的環境へ変遷したと考えられる。なお、試料番号２では陸生珪藻に加えて好止水性種が増加する。これより基本的には好気的な環境であったと思われるが、弥生時代前期の頃になると多少は水の影響を受けた可能性もある。一方、試料番号７・４・２ではタケ亜科・ススキ属・イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出されるが、中でもタケ亜科が多く検出される傾向にある。タケ亜科珪酸体は、他の珪酸体と比較して生産量が多く、しかも風化にも強いとされている（近藤　1982　杉山、藤原　1986）。したがって、周辺は優占的にタケ・ササ類で覆われていたと考えにくい。

以上のように、本遺跡周辺は縄文時代晩期頃に沼沢～湿地のような低湿な環境であったが、縄文時代晩期～弥生時代前期の頃になると好気的環境に変化したと考えられる。このような環境の変化は、一迫川や長崎川などの河川により自然堤防が形成され、それが離水した後に集落が形成されやすい好気的環境が整ったことを示していると考えられる。

第５節　縄文時代以降の周辺植生

縄文時代晩期頃の植生は、堆積層中から得られた花粉化石や材化石の産状からマツ属複維管束亜属・マツ属単維管束亜属・スギなどの針葉樹、クルミ属・クマシデ属－アサダ属・ブナ属・コナラ亜属・クリ・ニレ属－ケヤキ属・コクサギ属・キハダ属・カエデ属・トチノキ属などの落葉広葉樹で構成されていたと推定される。また、クルミ属・ニレ属－ケヤキ属・トチノキ属などは、河道周辺や谷間など比較的湿潤な場所を好んで生育する。したがって、当時本遺跡周辺の後背丘陵地などにはナラ類を中心とした落葉広葉樹林に覆われており、周辺低地の河道周辺などにクルミ属・ニレ属－ケヤキ属・トチノキ属などの木本類が生育していたと推定される。中でもクルミ属は出現率が著しく高いことから遺跡近辺に生育していたと考えられ、局地的な植生を反映している可能性がある。仙台平野周辺における花粉分析結果（奥津、竹内　1972　鶴原、金井　1994　内山　1987、90　安田　1973、80　宮城他　1979）などによると、冷温帯落葉広葉樹林に類似した景観であったと推定されている。このようなことからみて、本地域周辺もこれらの地域と同様に冷温帯落葉広葉樹林のような植生が存在していたと考えられる。試料番号７より上位になると、花粉化石がほとんど検出されないため、弥生時代前期頃の周辺植生を検討することができない。このような傾向は、平成７年度調査でも認められた。おそらく前述した環境の変化により、花粉化石が分解・消失した可能性がある。なお、後述するように弥生時代前期後半の竪穴住居跡から検出された燃料材がクリであることから、引き続き周囲にクリが生育していたと指摘できる。

第６節　炉の燃料材

弥生時代前期後半の炉の燃料材は、縄文時代晩期の自然木と同様にクリであった。クリは、縄文時代から燃料材や住居構築材によく利用されており、東北地方ではとくに類例が多い（パリノ・サーヴェイ株式会社　1993など）。弥生時代については資料が少なく、各地域での用材選択の傾向は不明な点が多い。今回の結果から、本遺跡周辺

では、弥生時代前期後半においても縄文時代晩期と同様にクリが生育しており、その木材を利用していたことが推定される。

引用文献

Asai, K. & Watanabe, T. 1995　Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, pp. 35－47

安藤一男　1990　淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用　東北地理42　pp. 73－88

伊藤良永、堀内誠示　1991　陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用珪藻学会誌６　pp. 23－45

近藤錬三　1982　Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究　昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書　p. 32

近藤錬三、佐瀬　隆　1986　植物珪酸体分析　その特性と応用　第四紀研究25　pp. 31－64

Krammer, K. 1992　PINNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26 pp. 1－353 BERLIN·STUTTGART.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. 1986　Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 876 Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. 1988　Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 536, Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. 1991 a　Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 230, Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange－Bertalot, H. 1991 b　Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomphonema. Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 248, Gustav Fischer Verlag.

奥津春生・竹内貞子　1972　仙台平野の沖積層上部にはさまれる泥炭層の花粉分析　地質学雑誌78　pp. 59－64

パリノ・サーヴェイ株式会社　1993　花粉分析・炭化材同定・種子同定　「御所野遺跡Ⅰ　縄文時代中期の大集落跡」pp. 341－355　（一戸町教育委員会）

杉山真二、藤原宏志　1986　機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－　考古学と自然科学19　pp. 69－84

鶴原　明、金井慎司　1994　仙台東道路遺跡調査関係の自然科学分析について　仙台東道路関係遺跡調査報告書　名取市文化財調査報告書第33集　p. 110－128　（名取市教育委員会、日本道路公団仙台建設局）

内山　隆　1987　中間温帯林域における花粉分析学的研究　その１　東北地方南東部　日本花粉学会誌33　pp. 111－117

内山　隆　1990　中間温帯林域における花粉分析学的研究　その２　東北地方南東部　日本花粉学会誌36　pp. 17－32

安田喜憲　1973　宮城県多賀城跡の泥土の花粉学的研究－特に古代人の森林破壊を中心として－　第四紀研究12　pp. 49－59

安田喜憲　1980　宮城県多賀城跡の泥土の花粉分析〔Ⅱ〕　多賀城跡　宮城県多賀城跡調査研究所年報　pp. 89－96

宮城豊彦、日々野紘一朗、河村智子　1979　仙台周辺の丘陵斜面の削剥過程と完新世の環境変化　第四紀研究18　pp. 143－154

付章４　縄文時代包含層出土大型植物化石の分析

吉川　純子

第１節　試料について

分析に使用した堆積物は試料番号601層から612層までの全14試料である。試料はそれぞれ100ccずつを0.25ミリ目の篩で水洗し、残査から実体顕微鏡で同定可能な大型植物化石の部位のみを選び出した。大型植物化石は分類群を同定し、部位別に計数した。結果は第１表に示されている。なお、同定可能な大型植物化石を出土しなかった層位については表より省いてある。

第２節　各層の堆積物と出土した分類群

601層は木片を多く含む砂礫層で、シルトの塊の中に大型植物化石が多く含まれているものと思われる。炭化材片はやや多く含んでいる。最も多く出土したのはヒシ属、次いでクリ、ニワトコ、トチノキ、クワ属となっている。このうち、ヒシ属、クリ、トチノキのほかオニグルミが破片で出土している。これらの他に木本ではミズキ、クマヤナギ属、マタタビ、キイチゴ属、タラノキを、草本ではカヤツリグサ属、スゲ属、エノコログサ属、カナムグラ、ミゾソバ、ミズヒキ、サクラタデ近似種、ボントクタデ近似種、セリ科、カタバミ属、イヌコウジュ属を出土した。

602層はシルトが少ない砂礫層で炭化材をやや多く含む。ここではわずかにオニグルミの炭化した破片を出土した。

603層は砂礫層で炭化片をやや多く含み、草本起源と思われる細かい植物片が多く含まれている。しかし大型植物化石は少なく、わずかにオニグルミの炭化した破片を出土したのみであった。

604層、605ａ層は砂礫層で炭化片や植物の破片を少し含むが、同定可能な大型植物化石は出土しなかった。

605ｂ層は砂礫に炭化材を少し含み、わずかにオニグルミの炭化片を出土した。

606層は砂礫層で、大型植物化石は出土しなかった。

607層は砂礫層で、わずかにオニグルミの炭化片を出土した。

608層から601ａ層はほとんど砂礫層で大型植物化石を出土しなかった。

610ｂ層は砂礫にシルトをやや多く含み、炭化片、植物片をやや多く含んでいる。ここでは多く出土したのはクリの破片で、ほかに木本はオニグルミ、ニワトコ、マタタビ、クワ属、ミズキを出土し、草本では、ヒエ、アサの他、スゲ属、カラムシ属、カナムグラ、ナデシコ科、ミゾソバ、ミクリ属、ミズヒキ、ボントクタデ近似種を出土した。

611層は砂礫層中のシルトに木片、植物片を含む。ここでは、木本のオニグルミ、クリ、トチノキ、ニワトコ、クワ属、マタタビ、草本ではミクリ属、スゲ属、カラムシ属、ミゾソバ、ミズヒキ、ボントクタデ近似種、カタバミ属を出土した。

612層は砂礫層で炭化片が多い。ここからはニワトコを多く出土し、ほかにはサンショウのみ出土している。

第1表　山王囲遺跡縄文層より出土した大型植物化石一覧表
（処理量は100cc）

分類群名		601	602	603	605b	607	610b	611	612
木　本									
オニグルミ	内果皮破片	3					2	3	
	炭化内果皮破片		5	2	7	1			
ク　リ	果実破片	17					21	12	
クワ属	種子	9					1	10	
キイチゴ属	核	1							
サンショウ	内果皮破片								1
マタタビ	種子	3					2	3	
クマヤナギ属	内果皮	1							
トチノキ	種子破片	4						2	
	幼果	1							
ミズキ	内果皮	2					1		
タラノキ	内果皮	1							
ニワトコ	内果皮	9					5	13	49
草　本									
ミクリ属	果実						1	1	
ヒ　エ	穎						5		
エノコログサ属	穎	1							
カヤツリグサ属	果実	2							
スゲ属A	果実	2					4	4	
スゲ属B	果実						3	5	
セリ科	果実	1							
ヒシ属	果実破片	24							
カラムシ属	種子						1	1	
ミゾソバ	果実	2					1	5	
ミズヒキ	果実	1					1	4	
サクラタデ近似種	果実	2							
ボントクタデ近似種	果実	4					5	2	
ナデシコ科	種子						1		
カタバミ属	種子	1						2	
ア　サ	種子						2		
カナムグラ	種子破片	2					3		
イヌコウジュ属	果実	1							

第3節　層相と大型植物化石より見た堆積環境

試料を採取した地点では、砂礫が堆積物のほとんどをしめていたと思われ、砂礫層には炭化した破片がともに堆積し、レンズ状あるいは薄層のシルトに植物化石が多く含まれていると思われる。また、水湿地に生育するミクリ属、ミゾソバ、サクラタデ近似種、ヒシ属を出土するが、少ないことと、ヒシ属は大変小さい破片となっていることから、当時この地点に生育はしておらず、流されてきたものと考えられる。

人間が関与していた種類としては、炭化しているオニグルミはもちろんのこと、トチノキ、クリ、ヒシ属は細かい破片となっているため、可能性は極めて高い。また、ヒエ、アサは人間が利用していたものと考えられる。特にヒエは砂礫層という堆積物の状況から考えると、100cc中5個の出土はかなり多い。これらの他に食用や薬用として人間が利用する可能性があるものとしては、クワ属、キイチゴ属、サンショウ、マタタビ、クマヤナギ、ミズキ、タラノキ、ニワトコ、カラムシ属などが考えられる。

以上のことからこの地点の堆積物は一時的に流速がある、大雨などの際に周辺の人間が廃棄したものなどを巻き込みながら堆積した砂礫層と推定される。

第4節　特筆すべき分類群

ヒエ：本遺跡で出土した個体は、いわゆる栽培されるヒエに形態が一致する。同定の比較対象として、問題になるのはイヌビエ、タイヌビエなどであるが、これら野生種と異なる形態の特徴は、野生種は、穎果の幅が狭く張りが少ないのに対し、ヒエは幅が広く背面の張りが大きい。また、野生種は穎の先端がかなり尖った感じに対

し、ヒエは剛毛の基部は硬化していない。本遺跡で出土したヒエは未炭化の穎であるが、保存状態が良く、ここまでの観察が可能であった。

縄文時代からのヒエの出土例は福岡県板付遺跡、宮崎県陣内遺跡、鳥取県青木遺跡があげられる。

アサ：種子はレンズ状で表面は光沢があり、堅く平滑で不明瞭な大きい脈状網の模様がある。一側には平たく片側に偏した丸い不明瞭な基部がある。種子を食用としたり、繊維を布にしたりするいわゆる栽培種とされている。縄文時代からのアサの出土例は、福井県鳥浜貝塚、千葉県余山遺跡があげられる。

参考文献

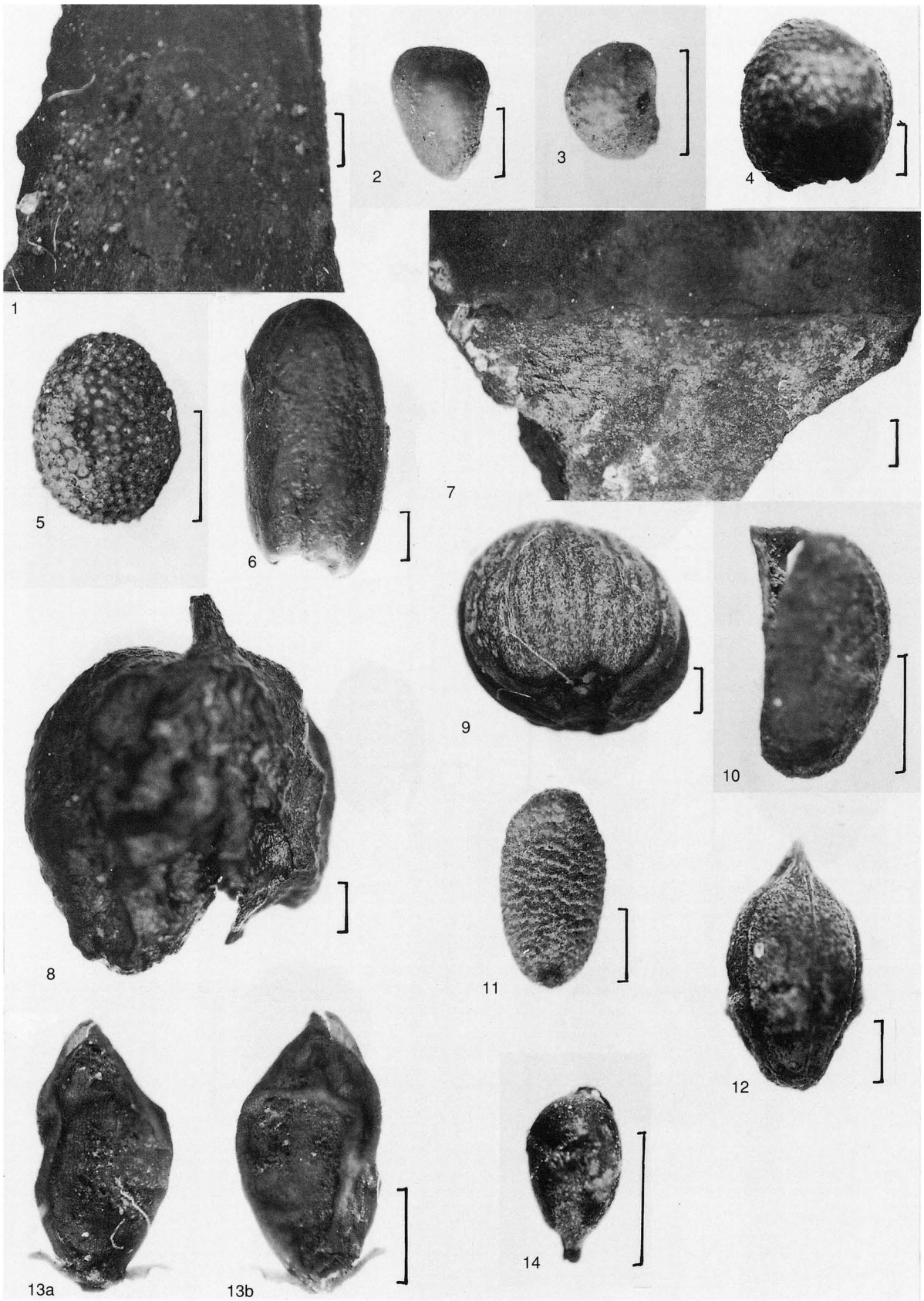
寺沢　薫　1986　弥生時代の食料－畑作物　季刊考古学第14号　特集・弥生人は何を食べたか（雄山閣出版）

第1図　山王囲遺跡出土大型植物化石

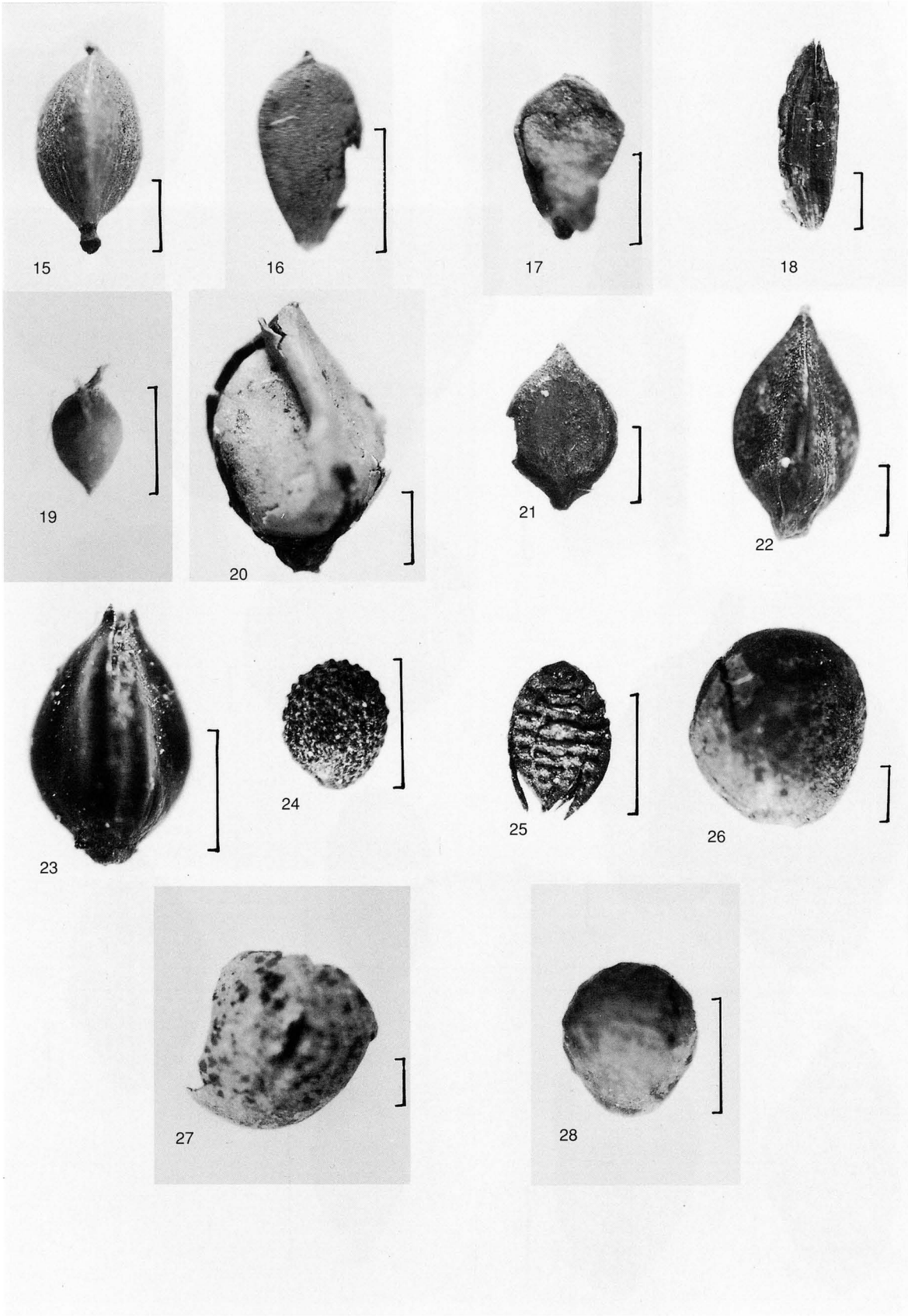
1．クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　果実破片拡大　601層出土
2．クワ属　*Morus*　種子　601層出土
3．キイチゴ属　*Rubus*　核　601層出土
4．サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC.　内果皮　612層出土
5．マタタビ　*Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim.　種子　601層出土
6．クマヤナギ属　*Berchemia*　内果皮　601層
7．トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　種子破片拡大　601層出土
8．トチノキ　幼果　601層出土
9．ミズキ　*Cornus controversa* Hemsley　内果皮　601層出土
10．タラノキ　*Aralia elata* (Miq.) Seemann　内果皮　601層出土
11．ニワトコ　*Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn.　内果皮　601層出土
12．ミクリ属　*Sparganium*　果実　610b層出土
13．ヒエ　*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno　穎　610b層出土
14．エノコログサ属　*Setaria*　穎果　601層出土

第2図　山王囲遺跡出土大型植物化石

15．カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実　601層出土
16．スゲ属A　*Carex* A　果実　601層出土
17．スゲ属B　*Carex* B　果実　610b層出土
18．セリ科　Umbelliferae　果実
19．カラムシ属　*Boehmeria*　種子　610b層出土
20．ミゾソバ　*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.　果実　601層出土
21．ミズヒキ　*P. filiforme* Thunb.　果実　601層出土
22．サクラタデ近似種　*P. cf. conspicuum* (Nakai) Nakai　果実　601層出土
23．ボントクタデ近似種　*P. cf. pubescens* Blume　果実　601層出土
24．ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子　610b層出土
25．カタバミ属　*Oxalis*　種子　601層出土
26．アサ　*Cannabis sativa* Linn.　種子　610b層出土
27．カナムグラ　*Humulus scandens* (Lour.) Merrill　種子　601層出土
28．イヌコウジュ属　*Mosla*　果実　601層出土



第１図　山王囲遺跡出土大型植物化石（スケールは1mm）



第2図　山王囲遺跡出土大型植物化石（スケールは1mm）

付章５　山王囲遺跡合せ口土器棺出土の人歯および人骨

鈴木　敏彦（東北大学歯学部口腔解剖学第一講座）・奈良　貴史（東北大学医学部解剖学第一講座）

は　じ　め　に

1996年の山王囲遺跡発掘調査において、弥生時代前期後葉に属するK区第８号土器埋設土壙第１号土器中から、人骨および人歯の破片が発見された。著者の知る限り今まで報告されている東北地方での弥生時代人骨の発見例は極めて少なく［1］［2］、東北地方における弥生時代人の変遷を形質人類学的に解明していく上でも資料の増加が望まれている。

今回出土した資料はいずれも細片であり、必ずしも遺存状態は芳しいとはいえなかったが、所見が得られたものに関して概略を報告する。

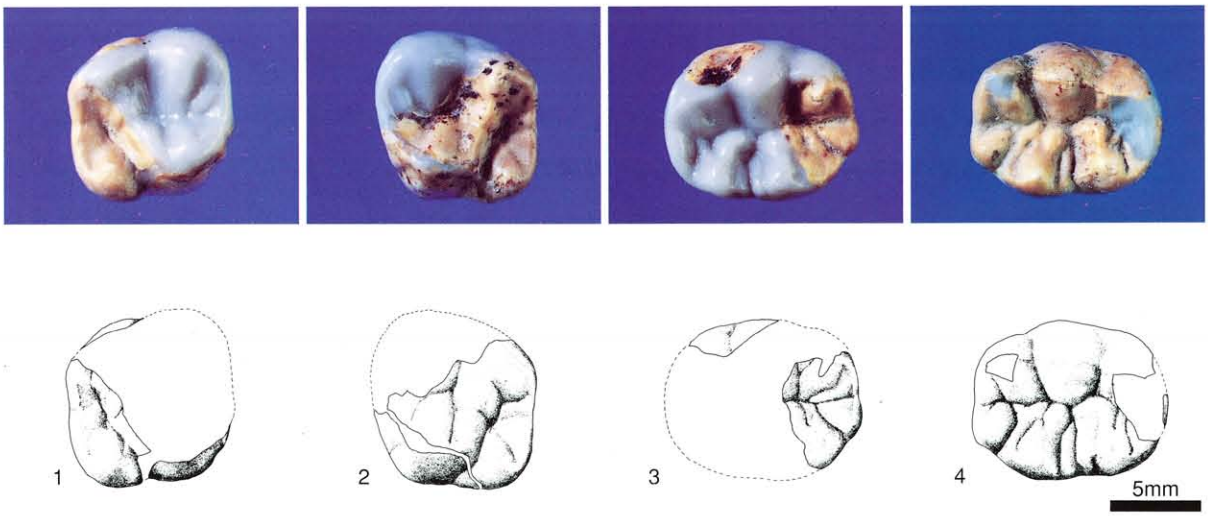
第１節　所　　見

１）歯

採取された破片はいずれも茶褐色～黄褐色を示す。有機成分が比較的多い象牙質が失われ、無機成分に富むエナメル質のみが遺存したものと考えられる。破片は非常に脆弱化していたが、４本の歯を同定することができた（写真１～４、図１～４）。便宜上それぞれにNo.１～４までの番号を付して、以下に各々の所見を記載する。なお、この他に、部位の同定・接合が不可能であったおよそ２㎜角以下の微小な破片が多数遺存していた。

a　No.１

上顎右側第二乳臼歯である。斜走隆線の遠心半を含む遠心舌側咬頭の大部分、頬側面溝付近とその遠心側の頬側面の一部、および舌側面溝の近心側から近心隅角にかけての舌側面の一部が確認できたが、互いに接してはい



第１図　山王囲遺跡出土ヒト乳歯
Human deciduous teeth from the Sanno-gakoi site

ない。

近心面は存在しないために近遠心径は得られない。また頬側面・舌側面に相当する遊離した破片の位置を推測によって復元したものであるから、頬舌径も得られない。

非計測的形質に関しては、Hypocone development[3] はgrade 4、Carabelli trait[3] はgrade 1である。Metaconule[4] はこれに相当する隆起が認められる。

b　No. 2

上顎左側第二乳臼歯である。近心頬側咬頭の全部とそれに続く近心面の頬側半および頬側面の大部分を欠いているが、他は確認できた。

近心面の最大豊隆部を欠き、頬側面も存在しないために計測値は得られない。

No. 1 と同様にHypocone developmentはgrade 4、Carabelli traitはgrade 1である。Metaconuleはこれに相当する隆起が認められる。

c　No. 3

下顎右側第二乳臼歯である。遠心咬頭から遠心舌側咬頭にかけての歯冠遠心部分を含む破片と、頬側面溝周囲の一部を含む破片が確認できた。計測値を得ることはできない。

非計測的形質に関しては 6 th cusp[5] が認められ、発達度はSemiである。

d　No. 4

下顎左側第二乳臼歯である。近心頬側咬頭の近心半および近心辺縁隆線から近心面にかけての一部と、遠心舌側咬頭の咬頭頂を欠いているが、他は遺存している。

近遠心径は11.07㎜、頬舌径は9.02㎜である。

縄文人と弥生人の歯の大きさを比較したとき、下顎第二乳臼歯の近遠心径は縄文人の方が大きく、頬舌径は弥生人の方が大きいとされる [6]。この歯は、近遠心径は縄文人の平均値よりも0.2σ大きい一方で、頬舌径は弥生人の平均値よりも1.0σ小さい。

Protostylid[3] は認められない。Deflecting wrinkle[7] が認められる。6 th cuspの発達度はSemi、 7 th cusp[3] の発達度はgrade 1 である。

e　歯に関する共通所見

どの歯も歯冠は完成しているが咬耗は全く認められず、いずれも 2 ～ 3 歳前後の幼児のものと推測される。

左右の上顎第二乳臼歯であるNo. 1 とNo. 2 は、遠心舌側咬頭の形態の対称的な類似性等から、同一個体のものである可能性が高い。いっぽう、左右の下顎第二乳臼歯であるNo. 3 とNo. 4 は、遠心咬頭付近の形態に類似する点も認められるものの若干の形態差があり、肉眼的観察からは同一個体であるとは断定できない。

また、仮にNo. 1 とNo. 2 、No. 3 とNo. 4 がそれぞれ同一個体のものであったとしても、No. 1 ～ 4 がすべて同一個体に属するかどうかは不明である。

なお、すべての歯について、性別は不明である。

2）　骨　　片

骨片は、最大でも 2 ㎝大で、軽微に彎曲した、厚さ1.5～2.7㎜程度の小破片が多数である。確認できる縫合部

は全く癒合が観察できない。これらの形態学的特徴からみて、いっしょに出土した３歳前後の幼児の歯と同年齢程度のヒトの頭蓋骨片と思われる。

第２節　ま　と　め

1996年山王囲遺跡発掘調査において、弥生時代前期後葉に属する土器中から発見された人骨および人歯の破片を肉眼的に観察した結果、次の結論を得た。

１．最低でも４本の乳歯歯冠が含まれることが確認された。復元できた歯では重複するものはないが、これらが同一個体に属するかどうかは不明である。

２．１本の歯について計測値が得られ、報告がなされている数値と比較すると、どちらかといえば縄文人の値に近い数値を示した。

３．頭蓋の一部と思われる扁平な骨片が確認された。推定年齢は歯とほぼ同程度の３歳程度であるが、歯と同一個体に属するかどうかは不明である。

参考文献

[1] 百々幸雄（1983）塩釜市浦戸寒風沢島鹿の浜出土の一人骨　―― 故松本彦七郎博士発掘資料 ――．人類学雑誌　91：481－487.

[2] 加藤稔、石田肇（1991）山形県日向Ｉ洞窟出土の弥生時代女性頭蓋について．人類学雑誌　99：149－154.

[3] Hanihara, K.（1961）Criteria for classification of crown characters of the human deciduous dentition. J. Anthropol. Nippon 69：27－45.

[4] 埴原和郎（1956）日本人及び日米混血児乳歯の研究　Ⅳ．上顎乳臼歯について．人類学雑誌　65：67－87.

[5] Suzuki, M., Sakai, T.（1973）Occlusal surface pattern of the lower molars and the second deciduous molar among the living Polynesians. Am. J. Phys. Anthropol. 39：305－316.

[6] Matsumura, H.（1991）Deciduous tooth size in the prehistoric Jomon and Yayoi peoples of Japan. Bull. Natn. Sci. Mus. Ser. D：21－29.

[7] Hanihara, K., Kuwashima, T., Sakao, N.（1964）The deflecting wrinkle on the lower molars in recent man. J. Anthropol. Nippon 72：1－8.

Summary

Human Teeth and Bones from the Sanno－gakoi site, Miyagi Prefecture in 1996

SUZUKI Toshihiko（1）and NARA Takashi（2）

Fragments of human tooth crown and bone were found in Yayoi pottery at the Sanno－gakoi site, Miyagi Prefecture in 1996. Of these tooth crown fragments, four were identified to be different deciduous teeth (left and right upper second, and left and right lower second molars), and estimated to be those of two or three years old. The fragments of bone were considered a part of the cranium and almost the same age as the teeth. However, it has not been confirmed whether these teeth and bones belong to the same individual.

（1）Department of Oral Anatomy I, School of Dentistry, Tohoku University　（2）Department of Anatomy I, School of Medicine, Tohoku University

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表（1）
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (1)

個体No.	出土地点	遺構	層位	時期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・基面調整の特徴	備考	図版No.	写真No.
1	F	第３号竪穴住居跡	P16	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	8-1	10-1-1
2	F	第３号竪穴住居跡	P16	晩Ⅳ～Ⅴ期	浅鉢（台付？）	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文、メガネ状浮文	隆帯貼付・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	8-2	10-1-2
3	F	第３号竪穴住居跡	P15	晩Ⅵ期？	浅鉢？	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　平行沈線文	ナデ・沈線文（内）ナデ		8-3	10-1-5
4	F	第３号竪穴住居跡	P15	晩Ⅵ期	高杯	平坦口縁・突起（A突起）	Ⅰ　無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅱ　変形工字文A	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-4	10-1-4
5	F	第３号竪穴住居跡	柱穴BH	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ　変形工字文A	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-5	10-1-3
6	F	第３号竪穴住居跡	柱穴22	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高杯	―	Ⅴ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-6	10-1-6
7	F	第３号竪穴住居跡	P18	弥前期	甕	―	Ⅳ　縄文　Ⅴ　無文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ		8-7	10-1-7
8	F	第３号竪穴住居跡	盛溝	弥Ⅱb期	高杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　王字文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物、朱	8-8	10-1-8
9	M	第３号竪穴住居跡	覆土２	弥Ⅱ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	8-9	10-1-10
10	M	第３号竪穴住居跡		晩Ⅳ期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ　雲形文、口唇部に沈線 Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ケズリ（内）ヨコミガキ	朱	8-10	10-1-9
11	F・M	第３号竪穴住居跡		晩Ⅳ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ		8-11	10-1-11
12	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱb期？	鉢	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅱ・Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	8-12	10-1-12
13	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱb期？	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	8-13	10-1-13
14	M	第８号竪穴住居跡	覆土１	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	8-14	10-1-14
15	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱb期	高杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-15	10-1-16
16	M	第８号竪穴住居跡	覆土１	弥Ⅱb期	高杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	金雲母	8-16	10-1-15
17	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱ期	深鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ		8-17	10-2-4
18	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱa期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　変形工字文C１？	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	8-18	10-1-17
19	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱa期	鉢	―	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文C１	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		8-19	10-1-18
20	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱa期	高杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-20	10-1-19
21	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱa期	高杯	―	Ⅲ　変形工字文C１	沈線文・ミガキ		8-21	10-2-1
22	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱa期	高杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		8-22	10-2-7
23	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	晩Ⅵ期	浅鉢	―	Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-23	10-2-2
24	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	晩Ⅴ期	壺	―	Ⅲ　匹字文、沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		8-24	10-2-3
25	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	不明	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文	炭化物	8-25	10-2-5
26	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	不明	高杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		8-26	10-2-8
27	M	第８号竪穴住居跡　北東	覆土１	不明	不明	―	Ⅴ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	8-27	10-2-9
28	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	晩Ⅴ期	深鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		8-28	10-2-6
29	M	第８号竪穴住居跡	覆土１	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅱ　縄文？	ナデ（内）ナデ		8-29	10-2-10
30	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	不明	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ		8-30	10-2-11
31	M	第８号竪穴住居跡　南西	覆土１	弥Ⅱb期？	高杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ・Ⅳ　縄文、列点文、平行沈線文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母	9-1	11-1-1
32	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	弥Ⅱb期	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	9-2	11-1-4
33	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁・突起（A突起）	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-3	11-1-3
34	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	晩Ⅵ期	深鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文A１ Ⅳ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-4	11-1-2
35	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	不明	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ？		9-5	11-1-6
36	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	不明	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ？（内）ミガキ？		9-6	11-1-5
37	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		9-7	11-1-7
38	M	第８号竪穴住居跡	柱穴24	弥Ⅱb期	高杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ		9-8	11-1-10
39	M	第８号竪穴住居跡	柱穴19	弥前期	壺	―	Ⅱ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		9-9	11-1-8
40	M	第８号竪穴住居跡	柱穴１	不明	壺	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ナデ		9-10	11-1-9
41	K-AU・AT58	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱb期	鉢	―	Ⅲ　変形工字文C２、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-11	11-1-11
42	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）不明	金雲母	9-12	11-1-12
43	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱa期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅱ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	ＲＬ斜行縄文・沈線文・ナデ（内）ナデ		9-13	11-2-1
44	K-AS61	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱa期	鉢	平坦口縁・突起（A突起）	Ⅰ　変形工字文A？、口唇部に沈線	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-14	11-1-15
45	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱa期	高杯	平坦口縁・突起（山形突起）	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線	ミガキ・沈線文（内）ミガキ		9-15	11-1-13
46	K-AS61	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱa期	高杯	―	Ⅲ　変形工字文C１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-16	11-2-3
47	K-AS61	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱ期	壺	―	Ⅲ　変形工字文C？	沈線文・ナデ（内）ナデ		9-17	11-1-14
48	K-AU57	第７号溝跡	埋土１	晩Ⅵ期	高杯	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-18	11-2-7
49	K	第７号溝跡	埋土１	晩Ⅵ期	高杯？	平坦口縁・山形突起？	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ　変形工字文A	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	9-19	11-2-4
50	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅰ期	鉢	山形突起	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	9-20	11-2-6
51	K	第７号溝跡	埋土１	不明	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）不明		9-21	11-2-13
52	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	不明	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）不明		9-22	11-1-16
53	K	第７号溝跡	埋土１	不明	壺？	―	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（ナデ）		9-23	11-2-2
54	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土１	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		9-24	11-2-5
55	K	第７号溝跡	埋土２	弥中期？	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文、連続山形文、刺突文？	ナデ・沈線文（内）ナデ		9-25	11-2-9
56	K-AR・AS61	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅳ期	不明	―	Ⅴ　同心円文	沈線文・ナデ？（内）ナデ	朱	9-26	11-2-12
57	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱb期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	斜行縄文（内）ナデ		9-27	11-2-11
58	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　変形工字文C２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		9-28	11-2-8
59	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱb期	高杯	―	Ⅲ　不明	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ（内）不明		9-29	11-2-10
60	K-AU58	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱb期	高杯	―	Ⅴ　垂下文？、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-1	12-1-1

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表（2）
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (2)

個体No	出土地点	遺構	層位	時期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・基面調整の特徴	備考	図版No	写真No
61	K-AU58	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱｂ期	高杯	―	Ⅲ 波状文、平行沈線文、縄文	沈線文・LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ		10-2	12-1-2
62	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱｂ期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		10-3	12-1-3
63	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱｂ期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		10-4	12-1-4
64	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	鉢	山形突起	Ⅰ 平行沈線文	沈線文・ナデ（内）ナデ		10-5	12-1-6
65	K-AR・AS	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ 変形工字文Ｃ１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ？		10-6	12-1-10
66	K-AU58	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	10-7	12-1-8
67	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	鉢	―	Ⅲ 変形工字文Ｃ１ Ⅳ 縄文	斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-8	12-1-5
68	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	高杯	―	Ⅲ 変形工字文Ｃ１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-9	12-1-13
69	K	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	高杯	山形突起	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 変形工字文Ｃ２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-10	12-1-7
70	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱａ期	高杯	―	Ⅴ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-11	12-1-12
71	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ 無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-12	12-1-9
72	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅵ期	壷	平坦口縁・突起（Ｂ突起）	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-13	12-1-11
73	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴａ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-14	12-1-14
74	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 縄文	羽状縄文・沈線文・ミガキ（内）タテミガキ	炭化物	10-15	12-1-16
75	K-AR・AS	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	RL斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-16	12-1-15
76	K	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		10-17	12-2-4
77	K-AR・AS	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	RL斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ナデ		10-18	12-2-3
78	K-AR・AS	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	RL斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		10-19	12-2-1
79	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	RL斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ナデ		10-20	12-2-2
80	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・突起（Ｂ突起）	Ⅰ 沈線文、刻み目 Ⅲ 平行沈線文	沈線文・刻み目・ミガキ（内）ヨコミガキ		10-21	12-2-8
81	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-22	12-2-12
82	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	鉢	―	Ⅲ 工字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-23	12-2-9
83	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴｂ期	鉢	―	Ⅲ 工字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-24	12-2-14
84	K-AV57	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅴ期	台付浅鉢	山形突起	Ⅰ・Ⅲ 工字文？、口唇部に沈線	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-25	12-2-7
85	K	第７号溝跡	埋土２	晩Ⅲ期	鉢	小波状口縁	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 雲形文	沈線文・ナデ（内）ナデ		10-26	12-2-6
86	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	不明	鉢	―	Ⅲ 平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-27	12-2-5
87	K	第７号溝跡	埋土２	不明	鉢	―	Ⅳ 平行沈線文 Ⅴ 無文（ナデ）	LR斜行縄文・沈線文（内）ナデ		10-28	12-2-10
88	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		10-29	12-2-15
89	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	不明	壷	平坦口縁	Ⅰ 無文（ミガキ）、口唇部に沈線	ミガキ（内）ナデ	海線状骨針	10-30	12-2-13
90	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土２	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 刻み目、平行沈線文？ Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-31	12-2-11
91	K-AT・AV57	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅳ期	高杯	―	Ⅲ 連弧文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		10-32	12-2-16
92	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱｂ期	鉢	―	Ⅰ 平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-33	12-2-17
93	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱｂ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		10-34	12-2-18
94	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱａ期	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		10-35	12-2-19
95	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		11-1	13-1-1
96	K-AT59	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱａ期	高杯	―	Ⅴ 波状文	沈線文・ナデ（内）ナデ		11-2	13-1-6
97	K	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅰ期	甕	山形波状口縁	Ⅰ 無文（ミガキ） Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ		11-3	13-1-2
98	K-AV57	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅰ期	鉢	山形突起	Ⅰ 無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ 平行沈線文	ミガキ・沈線文（内）ミガキ		11-4	13-1-5
99	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	弥？	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		11-5	13-1-7
100	K	第７号溝跡	埋土３	弥？	壷	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	穿孔	11-6	13-1-9
101	K	第７号溝跡	埋土３	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		11-7	13-1-3
102	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	RL斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		11-8	13-1-4
103	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	11-9	13-1-8
104	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	晩Ⅴ期	壷	平坦口縁・突起（Ａ突起・Ｂ突起）	Ⅰ 平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ 無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	11-10	13-1-10
105	K-AR61, 62	第７号溝跡	埋土３	不明	高杯	―	Ⅳ・Ⅴ 縄文	LR斜行縄文		11-11	13-1-11
106	K-AR・AS61, 62	第７号溝跡	埋土３	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	甕	小波状口縁	Ⅰ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		11-12	13-1-12
107	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	甕	―	Ⅲ 変形工字文Ｃ２ Ⅳ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		11-13	13-2-3
108	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ミガキ） Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	11-14	13-2-2
109	I	第７号溝跡	埋土１	不明	甕	平坦口縁	Ⅰ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ	炭化物	11-15	13-2-1
110	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	―	Ⅲ 工字文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物、朱	11-16	13-2-4
111	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物、朱	12-1	14-1-1
112	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 垂下文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	12-2	14-1-2
113	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 垂下文、縄文、口唇部に沈線	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母、朱	12-3	14-2-2
114	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	山形突起	Ⅰ 沈線文 Ⅲ 垂下文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母、朱	12-4	14-2-1
115	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	―	Ⅲ 垂下文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母、朱	12-5	14-2-3
116	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱｂ期	高杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ 垂下文、縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	12-6	14-1-3
117	I	第７号溝跡	埋土１	不明	高杯	―	Ⅲ 平行沈線文 Ⅳ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	13-1	15-1-1
118	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱ期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 平行沈線文	沈線文・ナデ（内）ナデ		13-2	15-1-2
119	I	第７号溝跡	埋土１	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		13-3	15-1-3
120	I	第７号溝跡	埋土１	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ 無文（ナデ）	ナデ（内）ヨコミガキ	炭化物	13-4	15-1-4

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表（3）
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (3)

個体No.	出土地点	遺構	層位	時期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・基面調整の特徴	備考	図版No.	写真No.
121	Ⅰ	第７号溝跡	埋土２	弥前期	壷	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		13-5	15-1-6
122	Ⅰ	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱｂ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　沈線文 Ⅲ・Ⅳ　壬子文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母 炭化物、朱	13-6	15-1-5
123	Ⅰ	第７号溝跡	埋土２	不明	高　杯	－	Ⅲ　平行沈線文？	沈線文・ミガキ（内）ナデ		13-7	15-1-7
124	Ⅰ	第７号溝跡	埋土２	弥Ⅱｂ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　波状文？	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		13-8	15-1-8
125	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱ期	甕	山形波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	13-9	15-2-6
126	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱｂ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　沈線文 Ⅲ・Ⅳ　垂下文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母、朱	13-10	15-2-3
127	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	不明	高　杯	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		13-11	15-2-7
128	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱ期	壷	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ		13-12	15-2-4
129	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	弥Ⅱ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		13-13	15-2-8
130	Ⅰ	第７号溝跡	埋土３	不明	深　鉢	－	Ⅰ・Ⅲ　無文（ミガキ）	横走縄文？・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	13-14	15-2-1
131	E	第２号配石遺構		弥Ⅱａ期	鉢	山形波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ｃ２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	13-15	15-2-9
132	E	第２号配石遺構	埋土１	晩Ⅳ期～晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）ミガキ		13-16	15-2-5
133	E	ピット254	埋土１	晩Ⅵ期	鉢	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	海綿状骨針	13-17	15-2-6
134	E	ピット254	埋土１	晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		13-18	15-2-11
135	E	ピット258	埋土１	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　平行沈線文 Ⅲ　雲形文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		13-19	15-2-10
136	K-AU62	ピット292	埋土１	晩Ⅳ期	鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）・押圧	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　雲形文？	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		14-1	16-1-1
137	K-AU62	ピット305	埋土１	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	14-2	16-1-2
138	K-AU62	ピット305	埋土１	弥Ⅱｂ期	甕	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ	炭化物	14-3	16-1-10
139	K-AU62	ピット305	埋土１	弥Ⅱｂ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-4	16-1-8
140	K-AU62	ピット305	埋土１	晩Ⅵ期	高　杯	－	Ⅲ　変形工字文Ａ１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-5	16-1-5
141	K-AU62	ピット305	埋土１	晩Ⅵ期	鉢	－	Ⅲ　変形工字文Ａ　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-6	16-1-6
142	K-AU62	ピット305	埋土１	不明	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ミガキ	炭化物	14-7	16-1-9
143	K-AU62	ピット305	埋土１	不明	深　鉢	－	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		14-8	16-1-7
144	K-AU62	ピット305	埋土１	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ		14-9	16-1-3
145	K-AS62	ピット306	埋土３	晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ） Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ナデ（内）ナデ		14-10	16-1-4
146	K-AU62	ピット305	埋土１	晩Ⅵ期	鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		14-11	16-2-2
147	K-AS62	ピット306		弥？	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ　縄文	RL斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-12	16-2-3
148	K-AS62	ピット306	埋土３	晩Ⅳ期～晩Ⅴ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		14-13	16-2-1
149	Ⅰ南	包含層	6	弥Ⅱｂ期	深　鉢	－	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		14-14	16-2-6
150	Ⅰ南	包含層	6	不明	甕	－	Ⅰ　平行沈線文　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		14-15	16-2-7
151	Ⅰ南	包含層	6	不明	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		14-16	16-2-4
152	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱ期	鉢	山形突起	Ⅰ　沈線文　Ⅲ　連続山形文、平行沈線文　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		14-17	16-2-5
153	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ２、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ		14-18	16-2-8
154	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	15-1	17-1-2
155	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱｂ期	鉢	－	Ⅲ　変形工字文Ｃ２	沈線文・ミガキ（内）ナデ	金雲母	15-2	17-1-3
156	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	－	Ⅲ　変形工字文Ｃ１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ？	朱	15-3	16-2-9
157	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ２ Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	15-4	17-1-1
158	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱａ期	深　鉢	－	Ⅲ　平行沈線文、鋸歯状文、縄文	LR斜行縄文・沈線文（内）ヨコミガキ	炭化物	15-5	17-2-2
159	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	15-6	17-1-5
160	Ⅰ南	包含層	9	晩Ⅴ期～弥Ⅰ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	15-7	17-2-4
161	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅰ期	壷	－	Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　平行沈線文、刺突文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・刺突文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	15-8	17-2-1
162	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅲ期	注口？	－	Ⅲ　渦文、平行沈線	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ	朱	15-9	17-1-4
163	Ⅰ南	包含層	9	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ		15-10	17-2-5
164	Ⅰ南	包含層	9	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ナデ（内）ナデ	炭化物	15-11	17-2-3
165	Ⅰ	包含層	8	晩Ⅵ期～弥Ⅱａ	高　杯	山形突起	Ⅰ　沈線文	沈線文・ミガキ		15-12	17-2-6
166	Ⅰ	包含層	8	弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ１？	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	15-13	17-2-7
167	Ⅰ	包含層	8	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	斜行縄文・沈線文・ミガキ		15-14	17-2-9
168	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	－	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母、朱	15-15	17-2-8
169	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	－	Ⅲ・Ⅳ　垂下文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ	金雲母、炭化物	15-16	17-2-10
170	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱｂ期	鉢	－	Ⅲ　変形工字文、平行沈線文	沈線文		16-1	18-1-1
171	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱｂ期	壷	－	Ⅲ　平行沈線文、縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	金雲母	16-2	18-1-5
172	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱｂ期	高　杯	－	Ⅲ　変形工字文Ｃ２	沈線文・ミガキ	朱	16-3	18-1-6
173	Ⅰ-BD48, 49	包含層	9	弥Ⅱ期	壷	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		16-4	18-1-7
174	Ⅰ	包含層	9	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ		16-5	18-1-4
175	Ⅰ	包含層	9	晩Ⅵ期	高　杯	－	Ⅴ　匹字文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		16-6	18-1-8
176	Ⅰ	包含層	9	晩Ⅴａ期～晩Ⅴｂ	深　鉢	－	Ⅰ・Ⅲ　平行沈線文、縄文	LR横走縄文・ナデ・沈線文（内）ナデ		16-7	18-1-3
177	Ⅰ	包含層	9	晩Ⅴ期	壷	－	Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文、平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ		16-8	18-1-2
178	Ⅰ	包含層	9	晩Ⅴ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		16-9	18-2-1
179	Ⅰ試掘トレンチ		601	弥Ⅰ期	甕	－	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱、炭化物	16-10	18-2-8
180	Ⅰ試掘トレンチ		602	弥Ⅱａ期	高　杯	－	Ⅴ　波状文、平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	16-11	18-2-9

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表（4）
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site（4）

個体No	出土地点	遺構	層位	時期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・基面調整の特徴	備考	図版No	写真No
181	Ⅰ試掘トレンチ		602	晩Ⅴ期	台付浅鉢	―	Ⅴ　匹字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	16-12	18-2-4
182	Ⅰ試掘トレンチ		602	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　匹字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	16-13	18-2-3
183	Ⅰ試掘トレンチ		602	晩Ⅵ期～弥Ⅱ期	高　杯	―	Ⅲ　平行沈線文？　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	16-14	18-2-5
184	Ⅰ試掘トレンチ	BG48	602	不明	深　鉢	―	Ⅲ　平行沈線文　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ		16-15	18-2-7
185	Ⅰ試掘トレンチ	BG48	602	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	16-16	18-2-6
186	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅱｂ期	高　杯	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	金雲母、朱	16-17	18-2-2
187	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ		17-1	19-1-1
188	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥	甕	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	17-2	19-1-3
189	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥	甕	小波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ	炭化物	17-3	19-1-4
190	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥	甕	―	Ⅱ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ		17-4	19-1-8
191	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅱ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ１？（王字文？）、縄文	沈線文・ミガキ・LR斜行縄文（内）ミガキ		17-5	19-1-2
192	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅰ期～弥Ⅱ期	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-6	19-1-7
193	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅱａ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文Ｃ１？	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-7	19-1-5
194	Ⅰ試掘トレンチ	BG47, 48	603	弥Ⅱａ期	高　杯	―	Ⅲ　変形工字文Ｃ１	沈線文・ミガキ（内）ミガキ？		17-8	19-1-6
195	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	壺	山形突起	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線 Ⅱ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-9	19-2-2
196	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	深　鉢	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ　変形工字文Ａ　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	17-10	19-2-6
197	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-11	19-2-3
198	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期 ～弥Ⅱａ期	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　変形工字文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	17-12	19-2-5
199	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　無文（ミガキ） Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	17-13	19-2-4
200	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅵ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　沈線文、口唇部に沈線 Ⅲ　匹字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-14	19-2-7
201	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁・突起	Ⅰ・Ⅲ　工字文　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	17-15	19-2-8
202	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	鉢	―	Ⅳ　匹字文　Ⅴ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		17-16	19-2-9
203	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱、炭化物	18-1	20-1-1
204	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅴ期	壺	―	Ⅲ　平行沈線文、列点文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・列点文（内）ナデ		18-2	20-1-5
205	Ⅰ試掘トレンチ		603	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・刻み目	Ⅰ　刻み目　Ⅲ　平行沈線文	沈線文・刻み目・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	18-3	20-1-3
206	Ⅰ試掘トレンチ		603	不明	浅　鉢	平坦口縁	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　縄文	斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	穿孔	18-4	20-1-6
207	Ⅰ試掘トレンチ		603	不明	鉢	―	Ⅰ　平行沈線文　Ⅲ　刻み目	隆帯貼付・刻み目・沈線文ミガキ（内）ミガキ		18-5	20-1-2
208	Ⅰ試掘トレンチ		603	不明	鉢	―	Ⅲ　平行沈線文、刻み目	沈線文・刻み目・ミガキ（内）ミガキ		18-6	20-1-4
209	Ⅰ試掘トレンチ		603	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	18-7	20-1-8
210	Ⅰ試掘トレンチ	BG48, 49	603	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	18-8	20-1-7
211	Ⅰ試掘トレンチ		604	弥前期	甕	平坦口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	18-9	20-2-1
212	Ⅰ試掘トレンチ		604	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	18-10	21-1-4
213	Ⅰ試掘トレンチ		603～5	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	18-11	20-2-2
214	Ⅰ試掘トレンチ		604	弥Ⅱａ期	甕	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ		19-1	20-2-3
215	Ⅰ試掘トレンチ		604	弥Ⅰ期	高　杯	―	Ⅴ　変形工字文Ａ２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-2	19-2-1
216	Ⅰ試掘トレンチ		604	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	高　杯	―	Ⅲ　変形工字文Ａ	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	19-3	21-1-1
217	Ⅰ試掘トレンチ		604	晩Ⅵ期	鉢	―	Ⅲ　変形工字文Ａ？ Ⅳ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-4	21-1-3
218	Ⅰ試掘トレンチ		604	晩Ⅴ期	台付鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　無文（ミガキ）、口唇部に沈線　Ⅲ　平行沈線文？	沈線文・ミガキ（内）ナデ		19-5	21-1-5
219	Ⅰ試掘トレンチ		604	晩期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物	19-6	20-2-4
220	Ⅰ試掘トレンチ		604	晩Ⅳ期～晩Ⅴ期	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ		19-7	21-1-2
221	Ⅰ試掘トレンチ		604	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ		19-8	21-1-6
222	Ⅰ試掘トレンチ		605a	弥Ⅱｂ期	高　杯	―	Ⅳ　変形工字文Ｃ？	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	金雲母	19-9	21-2-1
223	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期？	深　鉢	小波状口縁	Ⅰ　無文（ナデ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	19-10	21-1-8
224	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期	台付鉢	―	Ⅲ　工字文　Ⅳ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		19-11	21-2-3
225	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁・突起（Ｂ突起）	Ⅰ　無文（ミガキ）、口唇部に沈線　Ⅲ　匹字文　Ⅳ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	19-12	21-1-7
226	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁	Ⅰ　匹字文　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-13	21-2-8
227	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期	高　杯	―	Ⅲ　変形工字文Ａ Ⅳ　無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		19-14	21-2-7
228	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅴ期	壺	―	Ⅲ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ナデ		19-15	21-2-4
229	Ⅰ試掘トレンチ		605a	晩Ⅳ期	深　鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ　無文（ヨコガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ヨコミガキ（内）ヨコミガキ		19-16	21-2-2
230	Ⅰ試掘トレンチ		605a	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ナデ		19-17	21-2-5
231	Ⅰ試掘トレンチ		605d	弥Ⅱｂ期	高　杯	―	Ⅴ　波状文	沈線文・ミガキ（内）不明	金雲母、朱	19-18	21-2-9
232	Ⅰ試掘トレンチ		605d	晩Ⅴ期	壺	―	Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　匹字文？	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		19-19	21-2-6
233	Ⅰ試掘トレンチ		605d	晩Ⅴ期	壺	―	Ⅲ　匹字文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	19-20	21-2-10
234	Ⅰ試掘トレンチ		606	晩Ⅵ期 ～弥Ⅱａ期	高　杯	山形突起	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	20-1	21-1-4
235	Ⅰ試掘トレンチ		606	弥Ⅱ期	甕	小波状口縁	Ⅰ　無文（ミガキ）　Ⅲ　縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	20-2	22-1-1
236	Ⅰ試掘トレンチ		606	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ミガキ	炭化物	20-3	22-1-3
237	Ⅰ試掘トレンチ		607	不明	深　鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	20-4	22-1-2
238	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅵ期	深　鉢	山形波状口縁	Ⅰ・Ⅱ　無文（ミガキ） Ⅲ　縄文	LR斜行縄文（内）ヨコミガキ	炭化物	20-5	22-2-1
239	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅵ期	鉢	平坦口縁・突起（Ａ突起）	Ⅰ　平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	炭化物	20-6	22-2-5
240	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅵ期～弥Ⅰ期	鉢	山形突起	Ⅰ　平行沈線文、口唇部に沈線	沈線文・ミガキ（内）ヨコミガキ	朱	20-7	22-1-5

付表１　山王囲遺跡出土土器観察表 (5)

Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (5)

個体No.	出土地点	遺構	層位	時期	器種	口縁部の特徴	主要文様の特徴	縄文・表面調整の特徴	備考	図版No.	写真No.
241	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴc期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 無文（ミガキ） Ⅲ 匹字文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	20-8	22-2-6
242	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁・突起（A突起、2個一対のB突起）	Ⅰ 無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ 平行沈線文 Ⅳ 無文（ミガキ）	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	20-9	22-2-4
243	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴb期	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 匹字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	20-10	23-1-1
244	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	鉢	平坦口縁・刻み目	Ⅰ・Ⅲ 工字文？、縄文	LR縦走縄文・沈線文・貼瘤ミガキ（内）ミガキ	炭化物	20-11	22-2-2
245	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	台付鉢	――	Ⅴ 匹字文	沈線文・ミガキ（内）ナデ	朱	20-12	23-1-4
246	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	壺	――	Ⅲ 変形工字文P Ⅳ 縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ	炭化物	20-13	22-2-3
247	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	壺	平坦口縁・刻み	Ⅰ・Ⅱ 無文（ミガキ） Ⅲ 工字文、刻みⅡ、貼瘤	沈線文・刻み・ミガキ（内）ミガキ・ナデ	朱	21-1	23-1-3
248	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴ期	壺	――	Ⅲ 匹字文、工字文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	21-2	23-1-5
249	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅳ期～晩Ⅵ期	深鉢	小波状口縁	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-3	23-1-2
250	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅳ期～晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 縄文	羽状縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-4	23-1-8
251	Ⅰ試掘トレンチ		610	縄晩期	深鉢	小波状口縁	Ⅰ 無文（ミガキ） Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-5	23-1-7
252	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩期Ⅴb期	壺	――	Ⅲ 楔位沈線区画文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ		21-6	23-1-6
253	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅴ期～弥Ⅱ期	壺	――	Ⅲ 変形工字文？、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-7	23-1-9
254	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・突起（A突起）	Ⅰ 平行沈線文 Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	炭化物	21-8	23-2-3
255	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅳ期～晩Ⅴ期	深鉢	平坦口縁・押圧	Ⅰ 無文（ミガキ）、口唇部に沈線 Ⅲ 縄文	羽状縄文・ミガキ（内）ヨコミガキ・タテミガキ	炭化物	21-9	23-2-1
256	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅴ期	壺	――	Ⅲ 平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ	炭化物	21-10	23-2-5
257	Ⅰ試掘トレンチ		610a	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	RL斜行縄文（内）ヨコミガキ		21-11	23-2-2
258	Ⅰ試掘トレンチ		611	不明	壺	――	Ⅱ 無文（ミガキ） Ⅲ 平行沈線文、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ		21-12	23-2-4
259	M	第８号竪穴住居跡	覆土	不明	深鉢	――	Ⅴ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ	底径6.3cm	4-1	7-6
260	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	不明	深鉢	――	Ⅴ 無文（ナデ）	ナデ（内）不明	木葉痕 底径7.3cm	4-2	7-7
261	M	第８号竪穴住居跡	覆土２	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	台付鉢？	――	Ⅴ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ		4-3	7-4
262	M	第８号竪穴住居跡	覆土１	不明	鉢？	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 無文（ナデ）	ナデ（内）ナデ	補修土器 口径4cm	4-4	7-5
263	I	第７号溝跡	埋土	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ナデ） Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ	炭化物 底径8.7cm	4-5	5-5
264	I	第７号溝跡	埋土	弥Ⅱ期	甕	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ナデ） Ⅲ・Ⅳ 縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ	炭化物	4-6	5-6
265	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物 口径22.7cm	4-7	5-3
266	I	第７号溝跡	埋土	弥Ⅱ期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物 口径33cm	4-8	5-1
267	I	第７号溝跡	埋土１	弥Ⅱb期	高杯	――	Ⅳ 変形工字文C２（王字文？） Ⅴ 波状文？	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ・ナデ	金雲母・朱	4-9	5-2
268	K	第７号溝跡	埋土３	弥	鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	ＬＲ斜行縄文・ナデ（内）ナデ	口径10.5cm	4-10	5-4
269	K	ピット309	埋土	弥Ⅱa期	壺	――	Ⅱ 無文（ミガキ） Ⅲ・Ⅳ 変形工字文C１、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ナデ		4-11	8-1
270	M	第６号土器埋設土壙		弥中期	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ミガキ） Ⅲ・Ⅳ 縄文	LR斜行縄文・ミガキ（内）ミガキ	口径12.3cm	4-12	7-1
271	K	第８号土器埋設土壙		弥Ⅱb期	甕	平坦口縁・押圧	Ⅰ 沈線文 Ⅲ 変形工字文C２、縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	第２号土器 朱	5-1	6-1
272	K	第８号土器埋設土壙		弥Ⅱb期	甕	平坦口縁・押圧	Ⅰ・Ⅱ 三角連繋文 Ⅲ 縄文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	第１号土器 朱 木葉痕	5-2	6-2
273	M	第７号土器埋設土壙		弥Ⅱ期？	高杯	――	Ⅴ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	口径9.6cm	6-1	7-2
274	E	第９号土器埋設土壙	埋土１	不明	深鉢	――	Ⅳ・Ⅴ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物 底径6.0cm	6-2	7-3
275	Ⅰ南	包含層	9	弥Ⅱb期	鉢	――	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 変形工字文C２	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱 底径 6.8cm	6-3	8-2
276	I	包含層	9	弥Ⅱb期	高杯	――	Ⅴ 垂下文	LR横走縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱	6-4	8-3
277	Ⅰ試掘トレンチ		603	弥Ⅰ期	鉢	平坦口縁・突起（2個一対の突起が８単位）	Ⅰ・Ⅲ 変形工字文A２ Ⅳ 縄文	LR斜行縄文・沈線文・ミガキ（内）ミガキ	口径28.4cm 底径9.4cm	6-5	8-6
278	Ⅰ試掘トレンチ		605	不明	壺	――	Ⅳ・Ⅴ 無文（ミガキ、ナデ）	ナデ・ミガキ（内）ナデ	底径7.4cm	6-6	8-4
279	Ⅰ試掘トレンチ	BG47, 48	606	不明	深鉢	――	Ⅳ・Ⅴ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	底径6.7cm	6-7	9-1
280	Ⅰ試掘トレンチ		609	晩Ⅴ期～晩Ⅵ期	壺	――	Ⅲ・Ⅴ 無文（ミガキ） Ⅳ 平行沈線文	沈線文・ミガキ	朱・炭化物 底径5.8cm	6-8	9-3
281	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅴ期	台付鉢	――	Ⅴ 工字文、底部内面に円文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	漆 台径7.6cm	6-9	9-7
282	Ⅰ試掘トレンチ		605	不明	深鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 縄文	LR斜行縄文（内）ナデ	炭化物 口径16.6cm	6-10	8-5
283	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅴa期	台付鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ 平行沈線文 Ⅳ・Ⅴ 無文（ミガキ）、底部内面に円文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱 台径18.5cm	6-11	9-4
284	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅵ期	台付鉢	――	Ⅴ 平行沈線文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱 台径7.2cm	6-12	9-5
285	Ⅰ試掘トレンチ		610	晩Ⅵ期？	壺	平坦口縁	Ⅰ・Ⅱ 無文（ナデ） Ⅲ 縄文	LR斜行縄文・ナデ（内）ナデ	口径9.8cm	6-13	9-2
286	Ⅰ試掘トレンチ		610a	晩Ⅴ期	脚付鉢？	――	Ⅴ 匹字文	沈線文・ナデ（内）ナデ	台径7.4cm	6-14	9-8
287	Ⅰ試掘トレンチ		611	晩Ⅴ期	台付浅鉢	平坦口縁	Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ 匹字文 Ⅳ 無文（ミガキ） Ⅴ 工字文、底部内面に円文	沈線文・ミガキ（内）ミガキ	朱 口径12.1cm 台径5.8cm	6-15	9-6

凡例：1. 「時期」の「弥」は弥生時代を、「晩」は縄文時代晩期を示す。
2. 「主要文様の特徴」のⅠ～Ⅴは本文中の文様帯の区分と対応する。
3. 「備考」の「補修孔」は焼成後の、「穿孔」は焼成前のものを示す。

付表２　山王囲遺跡出土土師器観察表

Attribute list of Haji　ware from the Sanno-gakoi site

個体No.	出土地点	遺構	層位	型式	器種	器面調整の特徴	計測値（推定）	備考	図版No.	写真No.
288	E	ピット338	埋土	塩釜式	壺	頸部：ミガキ、体部上半：ミガキ、体部下半：ナデ、(内) ナデ	――		6-16	9-9

付表3　山王囲遺跡出土石器観察表
Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site

No.	器　種	出土地点	遺　構	層位	石　材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備　考	図版No.	写真No.
1	石鏃	K-AR61	ピット		Ja1	29.3	11.8	4.45	0.76		7-1	24-5
2	石鏃	K-AR60		8a	Ja2	24.7	8.85	3.4	0.43		7-2	24-8
3	石鏃	I-BD・BE48	試掘トレンチ	609	Ja2	26.55	8.65	4.3	0.74		7-3	24-17
4	石鏃	I南		9	Ja2	22.5	9.7	4.55	0.61	破損	7-4	24-9
5	石鏃	K-AV56・57			Ja2	26.1	11.65	4.25	0.86	破損	7-5	24-24
6	石鏃	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	Sh	41.8	15.25	5.0	2.82	破損	7-6	24-2
7	石鏃	E		9	Ja2	20.05	8.25	3.45	0.45	破損	7-7	24-27
8	石鏃	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	Ja2	30.1	11.8	7.14	1.96	破損	7-8	24-18
9	石鏃	E	第2号配石遺構		Sh	26.15	11.25	6.4	1.29	破損	7-9	24-6
10	石鏃	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土1	Sh	37.7	10.7	4.65	1.73		7-10	24-3
11	石鏃	K-AR60		7	Ja2	19.1	9.65	4.6	0.89	破損	7-11	24-32
12	石鏃	K-AT61		8a	Ja1	21.7	11.95	5.8	0.91	破損	7-12	24-7
13	石鏃	K-AR61	ピット		Ja2	18.4	13.05	4.2	0.87	破損	7-13	24-10
14	石鏃	K-AT61		8b	Ja2	17.85	11.5	4.9	0.74	破損	7-14	24-31
15	石鏃	K-AR60		8a	Sil-Tu	23.45	10.75	4.95	0.97	破損	7-15	24-20
16	石鏃	I南		6	Ja2	20.2	11.7	7.15	1.4		7-16	24-26
17	石鏃	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	Ja2	18.05	10.75	5.85	0.85	破損	7-17	24-29
18	石鏃	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	Ja2	23.05	11.55	4.65	0.96	付着物有	7-18	24-25
19	石鏃	K-AU・AV55		10	Sh	23.7	10.9	5.95	0.98	破損・付着物有	7-19	24-22
20	石鏃	K-AR61		7	Ja2	20.65	12.8	6.9	1.47	破損・付着物有	7-20	24-30
21	石鏃	F	第3号竪穴住居跡壁溝	埋　土	Ja2	22.7	11.45	4.25	0.83		7-21	24-15
22	石鏃	I-BD48・49		9	Ja2	22.55	11.1	5.45	1.03		7-22	24-16
23	石鏃	I	第7号溝跡	埋土1	Ja2	17.4	9.1	3.6	0.47	破損	7-23	24-13
24	石鏃	M	第8号竪穴住居跡	覆　土	Ja2	32.2	12.5	11.2	1.75		7-24	24-4
25	石鏃	K			Ja2	26.85	9.5	5.75	1.25	破損	7-25	24-33
26	石鏃	N	ピット342	埋　土	Ja2	27.25	11.4	7.2	1.4		7-26	24-35
27	石鏃	K-AV54			Sh	24.25	12.1	3.85	0.96		7-27	24-23
28	石鏃	K	ピット307	埋　土	Ja1	30.05	11.7	5.0	1.11	破損	7-28	24-36
29	石鏃	I南		6	Ja2	14.05	9.2	3.6	0.37		7-29	24-12
30	石鏃	I	第7号溝跡	埋　土	Ja2	12.55	9.15	11.5	0.31		7-30	24-11
31	石鏃	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	Ja2	17.25	10.35	4.1	0.44		7-31	24-14
32	石鏃	K		6	Sh	17.75	12.65	5.3	0.87		7-32	24-21
33	石鏃	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	Ja2	25.5	12.0	4.2	1.08		7-33	24-34
34	石鏃	K-AV56		10	Sh	38.95	16.2	6.55	2.52		7-34	24-1
35	石鏃	I北		7	Ja2	20.3	15.4	3.75	0.91	破損	7-35	24-28
36	石鏃	K-AV58	ピット	埋土2	Sil-Tu	17.7	13.65	3.85	0.64	破損	7-36	24-19
37	石錐	F	第3号竪穴住居跡P15	埋土1	Sh	47.45	16.35	7.45	5.12		8-37	24-41
38	石錐	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	Ja2	36.2	23.45	9.8	4.66	破損	8-38	24-40
39	石錐	E	ピット	埋土1	Ja1	25.6	22.4	9.0	3.51	破損	8-39	24-37
40	石錐	I	第7号溝跡	埋土3	Ja2	34.05	23.2	10.85	7.36	破損	8-40	24-39
41	石錐	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土1	Ja2	25.8	14.5	7.4	1.82	破損	8-41	24-38
42	不定形石器	M	第8号竪穴住居跡	覆　土	Ja2	33.85	29.1	8.65	7.69		8-42	24-43
43	不定形石器	K		6	Ja2	33.25	10.6	5.35	2.15		8-43	24-42
44	異形石器	K-AR61		7	Da-Du	28.05	19.45	11.35	3.63		8-44	24-44
45	ﾁｮﾋﾟﾝｸﾞﾄｰﾙ	N			And	69.8	92.65	23.2	220.89		8-45	25-1
46	円盤形石器	I-試掘トレンチ		610a	And	54.61	59.5	20.75	98.01		8-46	25-2
47	円盤形石器	I-試掘トレンチ		610a	And	69.15	73.75	21.25	165.43		8-47	25-4
48	円盤形石器	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	And	76.8	73.3	27.65	254.13		9-48	25-6
49	円盤形石器	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	And	61.6	61.65	20.2	134.55		9-49	25-3
50	円盤形石器	I-試掘トレンチ		610b	Da	73.8	65.55	24.8	165.16		9-50	25-5
51	石核	K-AU57		6	Sh	73.1	83.55	61.8	458.4		9-51	24-45
52	石核	K	第7号溝跡	埋土3	Sh	61.05	106.4	54.25	486.2		9-52	24-46
53	環状石斧	E		6	Por	107.3	57.95	18.9	138.61	破損	10-53	25-11
54	磨製石斧	E	ピット274	埋土1	Por	60.1	37.6	28.7	98.48	破損	10-54	25-8
55	磨製石斧	E	第2号配石遺構	埋土1	Tu-Sh	75.95	41.5	25.4	123.02	破損	10-55	25-9
56	磨製石斧	I-試掘トレンチ		610a	Por	105.45	52.0	33.7	255.14	破損	10-56	25-10
57	磨製石斧	K-AT59～AV57	第7号溝跡	埋土3	Por	43.55	32.75	26.6	55.96	破損	10-57	25-7
58	石鍬	K	第7号溝跡	埋土3	And-Tu	145.4	95.1	30.4	462.4	破損	10-58	25-12
59	凹石	K	ピット233		And	119.55	104.5	36.6	574.2		11-59	26-5
60	凹石	I	第7号溝跡	埋土1	Da	83.95	62.7	41.85	280.8		11-60	26-10
61	凹石	E	第2号配石遺構		Da	84.1	70.2	41.25	347.1		11-61	26-11
62	凹石	N		6	And	116.3	83.9	41.75	511.5		11-62	26-7
63	凹石	E	第2号配石遺構		Da-We-Tu	90.55	77.85	48.6	484.9		11-63	26-13
64	凹石	E	ピット300	埋土1	Da	74.15	66.85	37.1	222.94	破損	11-64	26-9
65	凹石	I	第7号溝跡	埋土1	And	160.3	150.2	36.25	979.6		11-65	27-1
66	凹石	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	And	89.5	77.8	50.1	503.7		11-66	26-14
67	凹石	M	第3号竪穴住居跡P27	埋土1	Da	93.8	78.3	63.35	546.4		11-67	26-16
68	凹石	E	第2号配石遺構		Da	97.45	66.75	32.7	287.6		11-68	26-12
69	凹石	E		6	Da	98.0	77.5	41.0	388.7	破損	11-69	26-15
70	凹石	K-AV56	第7号溝跡	埋土3	And	121.2	94.5	62.05	1060.6		11-70	26-4
71	凹石	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	And	134.6	106.95	47.0	930.7	破損	11-71	27-2
72	凹石	M	第8号竪穴住居跡	覆土1	Da	126.3	114.85	35.0	702.8	破損	11-72	27-3
73	凹石	E	第2号配石遺構		And	210.0	128.0	47.95	1792.0		12-73	26-18
74	凹石	K-AR・AS61・62	第7号溝跡	埋土2	Da	130.7	95.25	71.3	188.1	破損	12-74	26-8
75	凹石	E		6	And	118.05	96.65	58.5	827.2		12-75	26-1
76	凹石	E		6	And	105.85	92.3	47.6	591.7		12-76	26-6
77	凹石	E	ピット247	埋土1	And	92.95	82.75	53.6	569.8		12-77	26-17
78	凹石	K-AV56	第7号溝跡	埋土4	Da	114.3	86.25	42.15	619.4		12-78	26-2
79	凹石	E		6	Da	115.65	77.8	48.45	682.3		12-79	26-3
80	石皿	H	ピット308	埋土1	Pu-Da-We-Tu	207.0	205.3	75.95	4240.0		12-80	27-4
81	石皿	E	ピット258	埋土1	Da-Tu	133.7	134.5	64.4	843.8	破損	12-81	27-5

石材名称の略号は次の通りである

Sa：砂岩　Sh：頁岩　Sl：粘板岩　Tu：凝灰岩　Ch：玉髄　Ja1：碧玉　Ja2：鉄石英　Ser：蛇紋岩　Obs：黒曜石　And：安山岩　Da：石英安山岩　Pum：軽石
Tu-Sa：凝灰質砂岩　Sil-Sh：珪質頁岩　Sa-Sh：砂質頁岩　Tu-Sa-Sh：凝灰質砂質頁岩　Sil-Tu：珪質凝灰岩　Sa-Tu：砂質凝灰岩　Da-Tu：石英安山岩質凝灰岩　Por：玢石

付表４　山王囲遺跡出土木製品観察表

Attribute list of wooden manufacture from the Sanno-gakoi site

No.	出土地点	層位	時　期	種　別	計測値（cm）		湿重量(g)	木取り	樹　種	備　　考	図版No.	写真No.
1	Ⅰ区試掘トレンチ	611	晩期Ⅴ～Ⅵ期	竪杵	長さ 径（握り部） （搗き部）	28.8 3.5 5.4	(482)	丸木	クヌギ	1／2が残存	24-1	PL.28-1
2	Ⅰ区試掘トレンチ	611	晩期Ⅴ～Ⅵ期	加工材	長さ 幅 厚さ	30.9 20.2 3.6	2240	板目		未成品	24-2	PL.28-2

付表５　山王囲遺跡出土ニホンジカ下顎骨属性表

Attribute list of *Cervus nippon* mandible from the Sanno-gakoi site

資料No.	発掘区	層	♂ ♀	L／R	切歯 骨	i1 I1	2 2	3 3	c C	m2 P2	m3 3	m4 4	M1	2	3	萌出交換推定年齢	備　　考
3	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	不明	L									(M1 不明	M2) 不明		1.0歳以上	破損のため咬耗度不明
4	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	不明	L											M3 fr		頬側エナメル質部
5	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	不明	L											M3 fr		舌側エナメル質部

部位名略称：I　切歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯）　C　犬歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯）　P 小臼歯　M 大臼歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯）

部位骨属性略称：（L）左　（R）右　歯式に（）がつくもの　顎骨に伴うもの　歯式に（）がつかないもの遊離歯　×　歯が残っていないもの

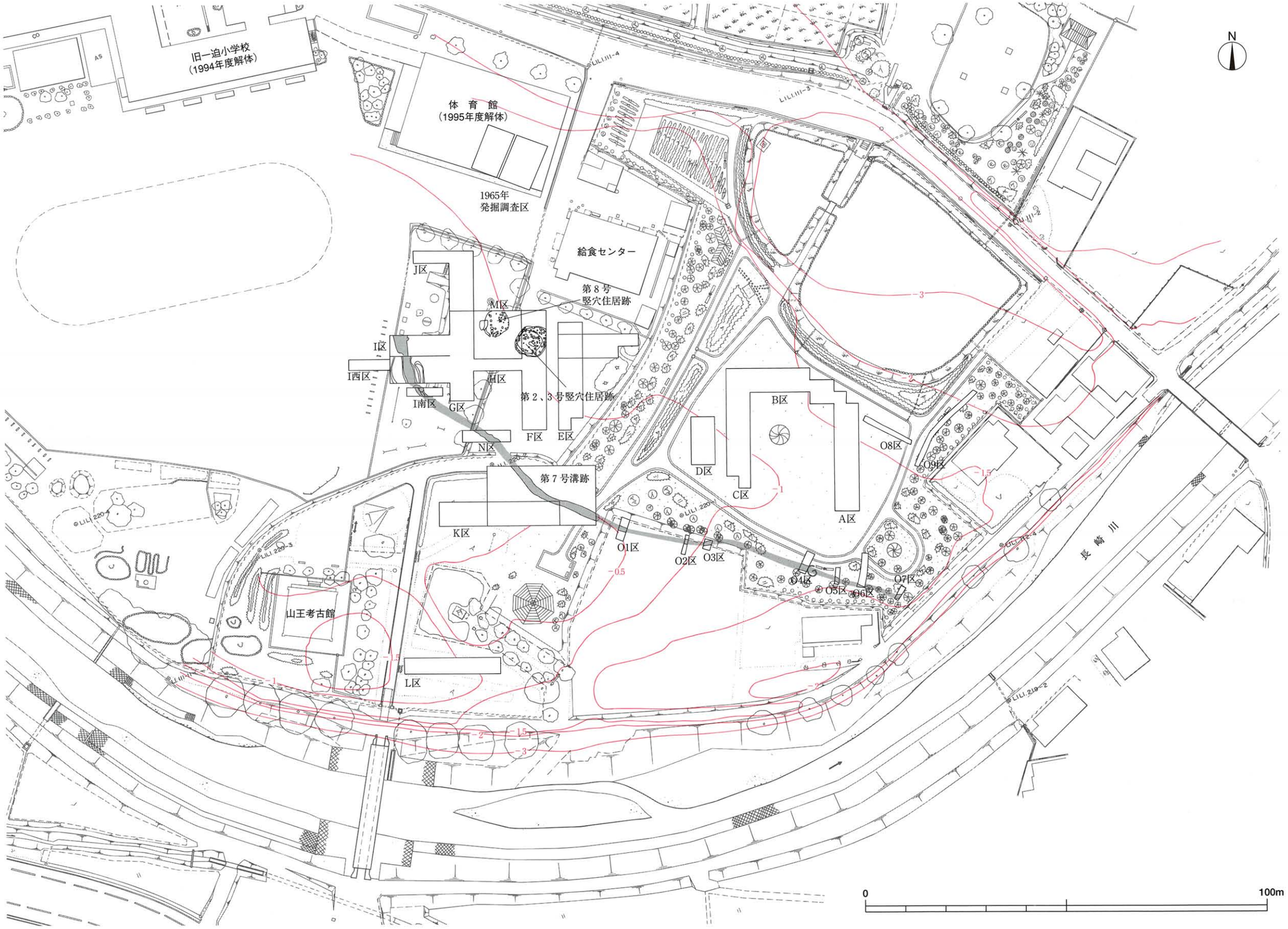
（a）萌出途次　（b）エナメル質咬耗が開始　（c）小窩が独立　（d）小窩が連結　（e）全面窩

付表６　山王囲遺跡出土動物遺存体属性表

Attribute list of animal remains from the Sanno-gakoi site

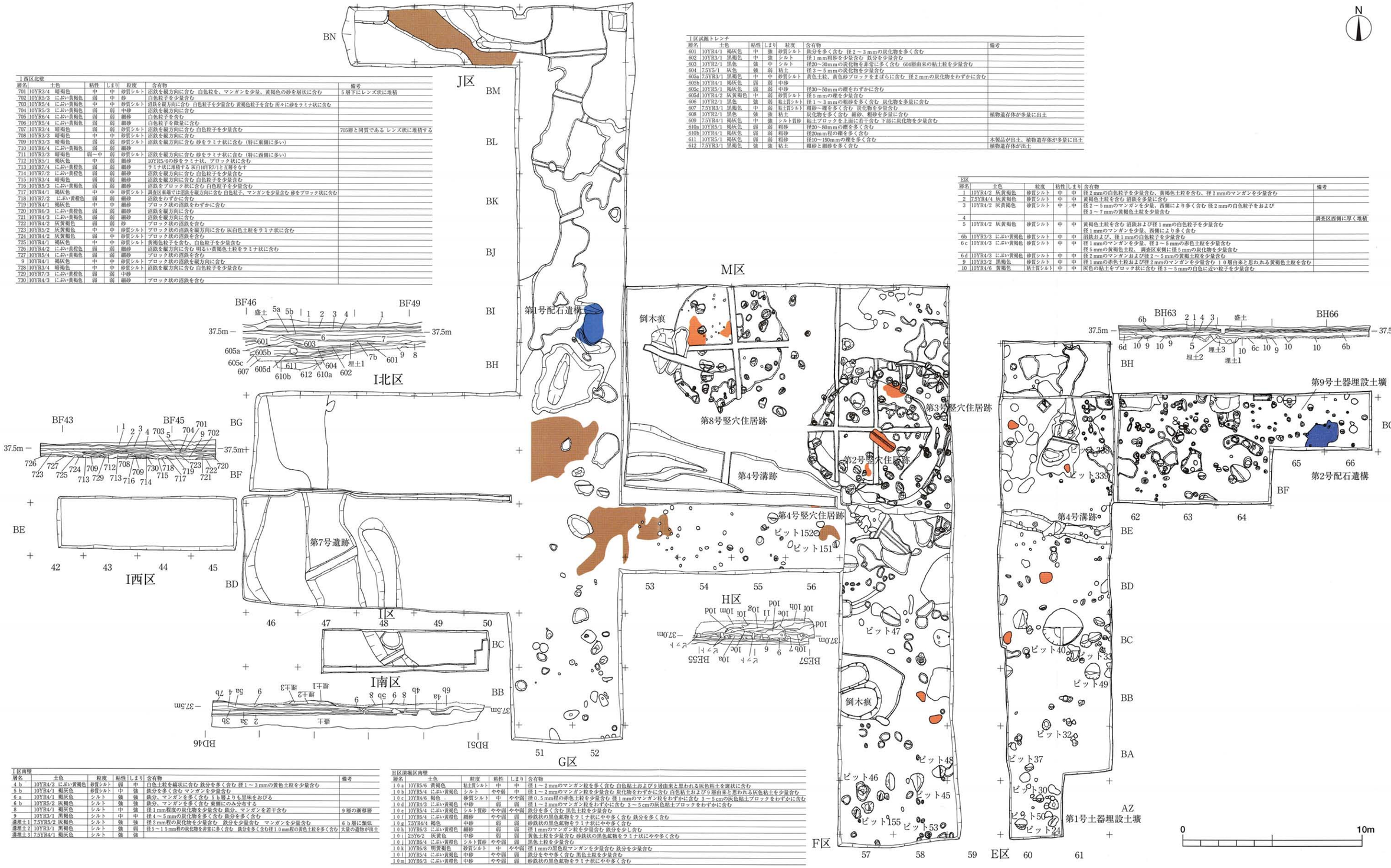
資料No.	発掘区	層　位	綱	種	部　　位	L／R	部分	化骨化	加工	ビビアナイト	色　調	風化	備　考	写真図版No.
1	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	あり		PL.28-7
2	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	上腕骨	L	骨幹部	不明	スパイラル状の割れ？	あり	淡黄	あり		PL.28-6
3	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	L	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	なし	付表5参照	PL.28-3
4	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	下顎第三大臼歯	L	破片	不明	なし	あり	変化なし	なし	付表5参照	PL.28-4
5	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	下顎第三大臼歯	L	破片	不明	なし	なし	変化なし	なし	付表5参照	PL.28-5
6	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	あり		
7	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	あり		PL.28-12
8	Ⅰ区試掘トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	あり		PL.28-9
9	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	四肢骨	不明	骨幹部	不明	?	あり	淡黄	あり		PL.28-11
10	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄	あり		PL.28-10
11	Ⅰ区試掘トレンチ	610層	哺乳類	不明	四肢骨	不明	骨端部	不明	なし	あり	淡黄	あり		
12	Ⅰ南区第7号溝	埋土3	哺乳類	ニホンジカあるいはイノシシ相当	大腿骨	不明	近位端	不明	なし	なし	白色	なし	大腿骨頭	PL.28-8

図　　版



第１図版　山王囲遺跡発掘区配置図
Excavated grid in the Sanno-gakoi site

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による



I区北壁

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
701	10YR3/4 暗褐色	中	中	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 白色粒を、マンガンを少量、黄褐色の砂を層状に含む	5層下にレンズ状に堆積
702	10YR6/3 にぶい黄色	弱	中	砂	白色粒子を少量含む	
703	10YR5/4 にぶい黄褐色	中	中	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 白色粒子を少量含む 黄褐色粒子を含む 所々に砂をラミナ状に含む	
704	10YR5/3 にぶい黄褐色	弱	弱	中砂	沼鉄を縦方向に含む	
705	10YR6/4 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	白色粒子を含む	
706	10YR5/4 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	白色粒子を微量に含む	
707	10YR3/4 暗褐色	弱	弱	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 白色粒子を少量含む	705層と同質である レンズ状に堆積する
708	10YR3/3 暗褐色	中	中	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む	
709	10YR3/3 暗褐色	弱	弱	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 砂をラミナ状に含む（特に東側に多い）	
710	10YR6/4 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂		
711	10YR3/3 暗褐色	弱～中	弱	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 砂をラミナ状に含む（特に西側に多い）	
712	10YR5/1 褐灰色	中	弱	細砂	10YR5/6の砂をラミナ状、ブロック状に含む	
713	10YR7/4 にぶい黄橙色	弱	弱	細砂	ラミナ状に堆積する 灰白10YR7/1と互層をなす	
714	10YR7/2 にぶい黄色	弱	弱	細砂	沼鉄を縦方向に含む 白色粒子を少量含む	
715	10YR3/4 暗褐色	弱	弱	細砂	沼鉄を縦方向に含む 白色粒子を少量含む	
716	10YR5/3 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	沼鉄をブロック状に含む 白色粒子を少量含む	
717	10YR4/1 褐灰色	中	中	砂質シルト	調査区東端では沼鉄を縦方向に含む 白色粒子、マンガンを少量含む 砂をブロック状に含む	
718	10YR7/2 にぶい黄橙色	弱	弱	細砂	沼鉄をわずかに含む	
719	10YR4/1 褐灰色	中	中	細砂	ブロック状の沼鉄をわずかに含む	
720	10YR6/3 にぶい黄橙色	弱	弱	細砂	沼鉄を縦方向に含む	
721	10YR4/3 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	沼鉄を縦方向に含む	
722	10YR4/2 灰黄褐色	弱	弱	砂	ブロック状の沼鉄を含む	
723	10YR5/2 灰黄褐色	中	中	砂質シルト	ブロック状の沼鉄を縦方向に含む 灰白色土粒をラミナ状に含む	
724	10YR4/2 灰黄褐色	弱	中	砂質シルト	ブロック状の沼鉄を含む	
725	10YR4/1 褐灰色	中	中	砂質シルト	黄褐色粒子を含む、白色粒子を少量含む	
726	10YR4/2 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	沼鉄を縦方向に含む 明るい黄褐色土粒をラミナ状に含む	
727	10YR5/4 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	ブロック状の沼鉄を含む	
9	10YR4/1 褐灰色	中	中	砂質シルト	ブロック状の沼鉄を縦方向に含む	
728	10YR3/4 暗褐色	中	中	砂質シルト	沼鉄を縦方向に含む 白色粒子を少量含む	
729	10YR7/3 にぶい黄色	弱	弱	中砂		
730	10YR4/3 にぶい黄褐色	弱	弱	細砂	ブロック状の沼鉄を含む	

I区試掘トレンチ

層名	土色	粘性	しまり	粒度	含有物	備考
601	10YR4/1 褐灰色	中	強	砂質シルト	鉄分を多く含む 径２～３mmの炭化物を多く含む	
602	10YR3/1 黒褐色	中	強	シルト	径１mm粗砂を少量含む 鉄分を少量含む	
603	10YR2/1 黒色	強	中	シルト	径20～30mmの炭化物を非常に多く含む 604層由来の粘土粒を少量含む	
604	7.5Y5/1 灰色	強	弱	粘土	径３～５mmの炭化物を少量含む	
605a	7.5Y3/1 黒褐色	中	中	砂質シルト	黄色土粒、黄色砂ブロックをまばらに含む 径２mmの炭化物をわずかに含む	
605b	10YR4/1 褐灰色	弱	弱	中砂		
605c	10YR5/1 褐灰色	弱	弱	中砂	径30～50mmの礫をわずかに含む	
605d	10YR4/2 灰黄褐色	中	弱	砂質シルト	径５mmの礫を少量含む	
606	10YR2/1 黒色	強	弱	粘土質シルト	径１～３mmの粗砂を多く含む 炭化物を多量に含む	
607	7.5YR3/1 黒褐色	中	弱	粘土質シルト	粗砂～礫を多く含む 炭化物を少量含む	
608	10YR2/1 黒色	強	強	粘土	炭化物を多く含む 細砂、粗砂を多量に含む	植物遺存体が多量に出土
609	7.5YR4/1 褐灰色	中	強	シルト質砂	粘土ブロックを上面に若干含む 下部に炭化物を少量含む	
610a	10YR5/1 褐灰色	弱	弱	粗砂	径20～80mmの礫を多く含む	
610b	10YR4/1 褐灰色	弱	弱	粗砂	径20mm程の礫を多く含む	
611	10YR5/1 褐灰色	弱	弱	粗砂	径10～150mmの礫を多く含む	木製品が出土、植物遺存体が多量に出土
612	7.5YR3/1 黒褐色	強	強	粘土	粗砂と細砂を多く含む	植物遺存体が出土

E区

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	中	中	径２mmの白色粒子を少量含む、黄褐色土粒を含む、径２mmのマンガンを少量含む	
2	7.5YR4/4 灰黄褐色	砂質シルト	中	中	黄褐色土粒を含む 沼鉄を多量に含む	
3	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	中	中	径２～５mmのマンガンを少量、西側により多く含む 径２mmの白色粒子および 径３～７mmの黄褐色土粒を少量含む	
4						調査区西側に厚く堆積
5	10YR4/2 灰黄褐色	砂質シルト	中	中	黄褐色土粒を含む 沼鉄および径１mmの白色粒子を少量含む 径１mmのマンガンを少量、西側により多く含む	
6b	10YR3/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	沼鉄および、径１mmの白色粒子を少量含む	
6c	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	径１mmのマンガンを少量、径３～５mmの赤色土粒を少量含む 径５mmの黄褐色土粒、調査区東側に径５mmの炭化物を少量含む	
6d	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	径２mmのマンガンおよび径２～５mmの黄褐土粒を少量含む	
9	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	中	中	径１mmの赤色土粒および径２mmのマンガンを少量含む １０層由来と思われる黄褐色土粒を含む	
10	10YR4/6 黄褐色	粘土質シルト	中	中	灰色の粘土をブロック状に含む 径３～５mmの白色に近い粒子を少量含む	

I区南壁

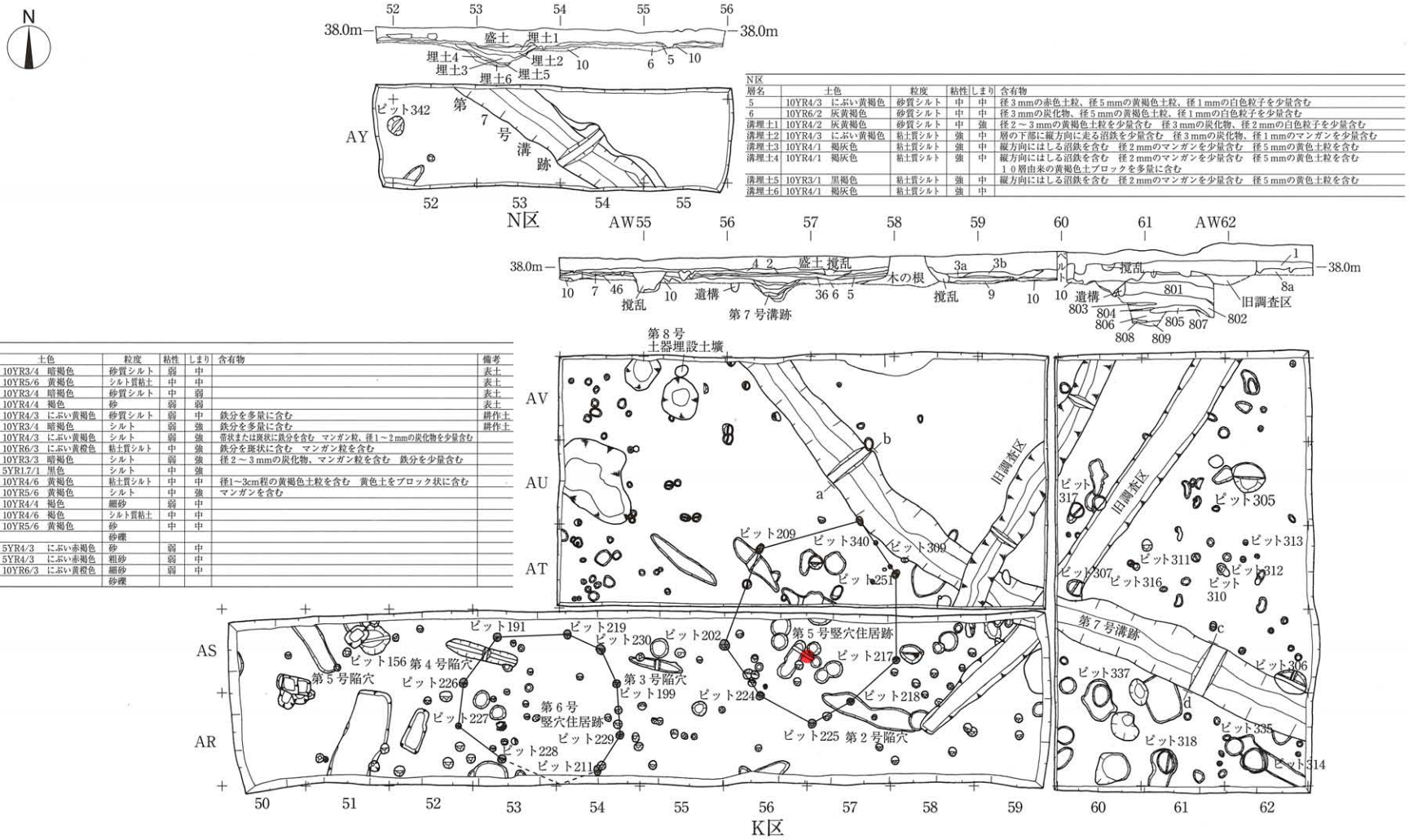
層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物	備考
4 b	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	中	白色土粒を縞状に含む 鉄分を多く含む 径１～３mmの黄色土粒を少量含む	
5 b	10YR4/1 褐灰色	砂質シルト	中	強	鉄分を多く含む マンガンを少量含む	
6 a	10YR4/1 褐灰色	シルト	強	強	鉄分、マンガンを多く含む 5 b層よりも黒味をおびる	
6 b	10YR5/2 灰褐色	シルト	強	強	鉄分、マンガンを多く含む 東側にのみ分布する	
8	10YR4/1 褐灰色	シルト	中	強	径１mm程度の炭化物を少量含む 鉄分、マンガンを若干含む	9層の漸移層
9	10YR3/1 黒褐色	シルト	中	中	径４～５mmの炭化物を多く含む 鉄分を多く含む	
遺埋土１	7.5YR5/2 灰褐色	シルト	強	強	径２mm程の炭化物を少量含む 鉄分を少量含む マンガンを少量含む	6 b層に類似
遺埋土２	10YR3/1 黒褐色	シルト	強	弱	径５～１５mm程の炭化物を非常に多く含む 鉄分を多く含む径１０mm程の黄色土粒を多く含む	大量の遺物が出土
遺埋土３	7.5YR4/1 褐灰色	シルト	強	強		

H区湿潤区南壁

層名	土色	粒度	粘性	しまり	含有物
10 a	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	中	中	径１～２mmのマンガン粒を多く含む 白色粘土および９層由来と思われる灰色粘土を斑状に含む
10 b	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	やや弱	中	径１～２mmのマンガン粒を少量含む 炭化物をわずかに含む 白色粘土および９層由来と思われる灰色粘土を少量含む
10 c	10YR4/6 褐色	砂質シルト	中	やや弱	径０.５mm程の赤色土粒を少量含む 径１mmのマンガン粒をわずかに含む ３～５cmの灰色粘土ブロックをわずかに含む
10 d	10YR4/3 にぶい黄褐色	中砂	弱	弱	径１～２mmのマンガン粒をわずかに含む ３～５cmの灰色粘土ブロックをわずかに含む
10 e	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質砂	やや弱	やや弱	鉄分を多く含む 黒色土粒を少量含む
10 f	10YR6/4 にぶい黄褐色	細砂	やや弱	弱	砂鉄状の黒色鉱物をラミナ状にやや多く含む 鉄分を多く含む
10 g	7.5YR4/4 褐色	中砂	弱	弱	砂鉄状の黒色鉱物をラミナ状にやや多く含む
10 h	10YR6/3 にぶい黄褐色	細砂	弱	弱	径１mmのマンガン粒を少量含む 鉄分を少し含む
10 i	2.5Y6/2 灰黄色	中砂	弱	弱	黄色土粒を少量含む 砂鉄状の黒色鉱物をラミナ状にやや多く含む
10 j	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト質砂	やや弱	弱	黒色土粒を少量含む
10 k	10YR6/8 明黄褐色	砂質シルト	中	やや弱	径１mmの黒色粒マンガンを少量含む 鉄分を少量含む
10 l	10YR5/4 にぶい黄褐色	中砂	やや弱	弱	鉄分をやや多く含む 黒色土粒を少量含む
10 m	10YR6/3 にぶい黄褐色	中砂	やや弱	弱	砂鉄状の黒色鉱物をラミナ状にやや多く含む

第２図版　山王囲遺跡遺構配置図

Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



N区

層名	土色		粒度	粘性	しまり	含有物
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	中	中	径３mmの赤色土粒、径５mmの黄褐色土粒、径１mmの白色粒子を少量含む
6	10YR6/2	灰黄褐色	砂質シルト	中	中	径３mmの炭化物、径５mmの黄褐色土粒、径１mmの白色粒子を少量含む
溝理土1	10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	中	強	径２～３mmの黄褐色土粒を少量含む　径３mmの炭化物、径２mmの白色粒子を少量含む
溝理土2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	強	中	層の下部に縦方向に走る沼鉄を少量含む　径３mmの炭化物、径１mmのマンガンを少量含む
溝理土3	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	強	中	縦方向にはしる沼鉄を含む　径２mmのマンガンを少量含む　径５mmの黄色土粒を含む
溝理土4	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	強	中	縦方向にはしる沼鉄を含む　径２mmのマンガンを少量含む　径５mmの黄色土粒を含む １０層由来の黄褐色土ブロックを多量に含む
溝理土5	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	強	中	縦方向にはしる沼鉄を含む　径２mmのマンガンを少量含む　径５mmの黄色土粒を含む
溝理土6	10YR4/1	褐灰色	粘土質シルト	強	中	

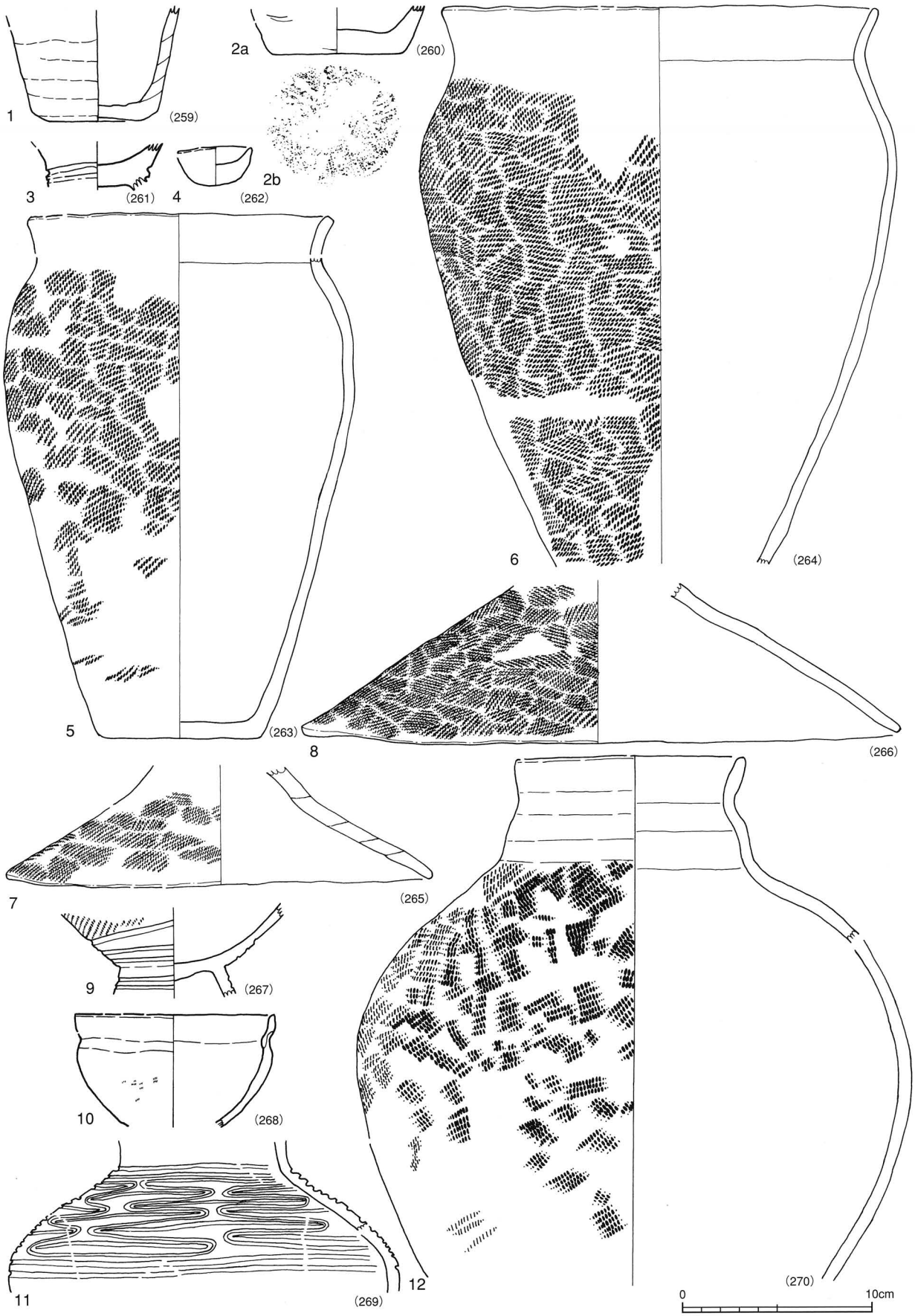
K区

層名	土色		粒度	粘性	しまり	含有物	備考
1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	弱	中		表土
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	中	中		表土
3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	中	弱		表土
4	10YR4/4	褐色	砂	弱	弱		表土
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト	弱	中	鉄分を多量に含む	耕作土
6	10YR3/4	暗褐色	シルト	弱	強	鉄分を多量に含む	耕作土
7	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	弱	強	帯状または斑状に鉄分を含む　マンガン粒、径１～２mmの炭化物を少量含む	
8	10YR6/3	にぶい黄橙色	粘土質シルト	中	強	鉄分を斑状に含む　マンガン粒を含む	
9	10YR3/3	暗褐色	シルト	弱	強	径２～３mmの炭化物、マンガン粒を含む　鉄分を少量含む	
10	5YR1.7/1	黒色	シルト	中	強		
11	10YR4/6	黄褐色	粘土質シルト	中	中	径1～3cm程の黄褐色土粒を含む　黄色土をブロック状に含む	
801	10YR5/6	黄褐色	シルト	中	強	マンガンを含む	
802	10YR4/4	褐色	細砂	弱	中		
803	10YR4/6	褐色	シルト質粘土	中	中		
804	10YR5/6	黄褐色	砂	中	中		
805			砂礫				
806	5YR4/3	にぶい赤褐色	砂	弱	中		
807	5YR4/3	にぶい赤褐色	粗砂	弱	中		
808	10YR6/3	にぶい黄橙色	細砂	弱	中		
809			砂礫				

第３図版　山王囲遺跡遺構配置図

Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site

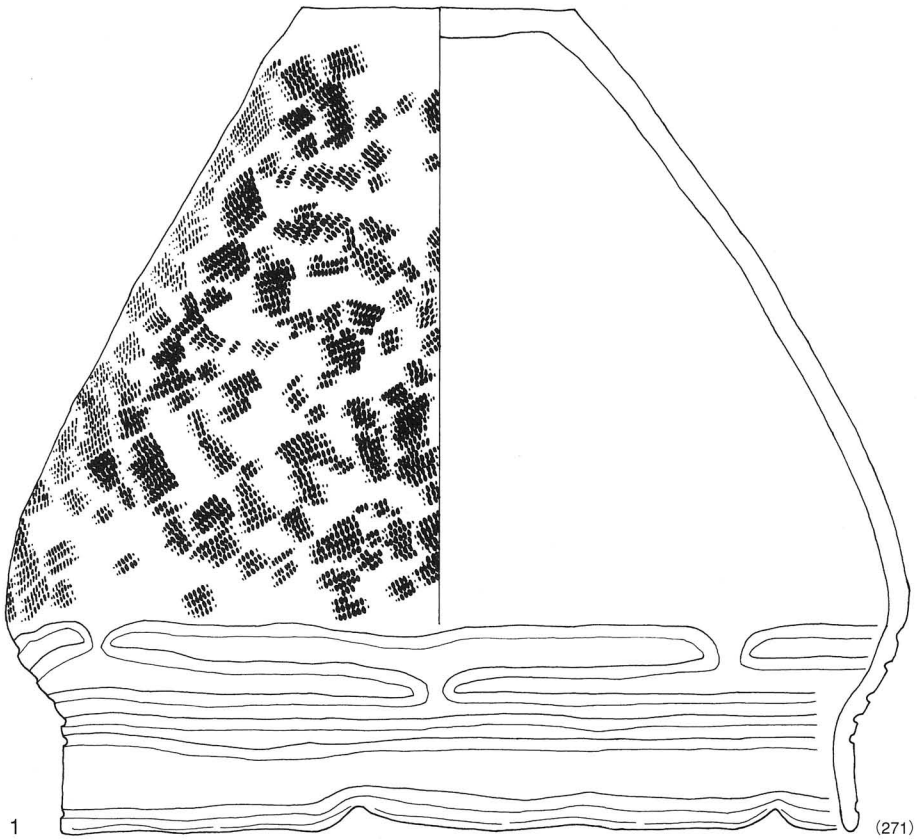
0　10m

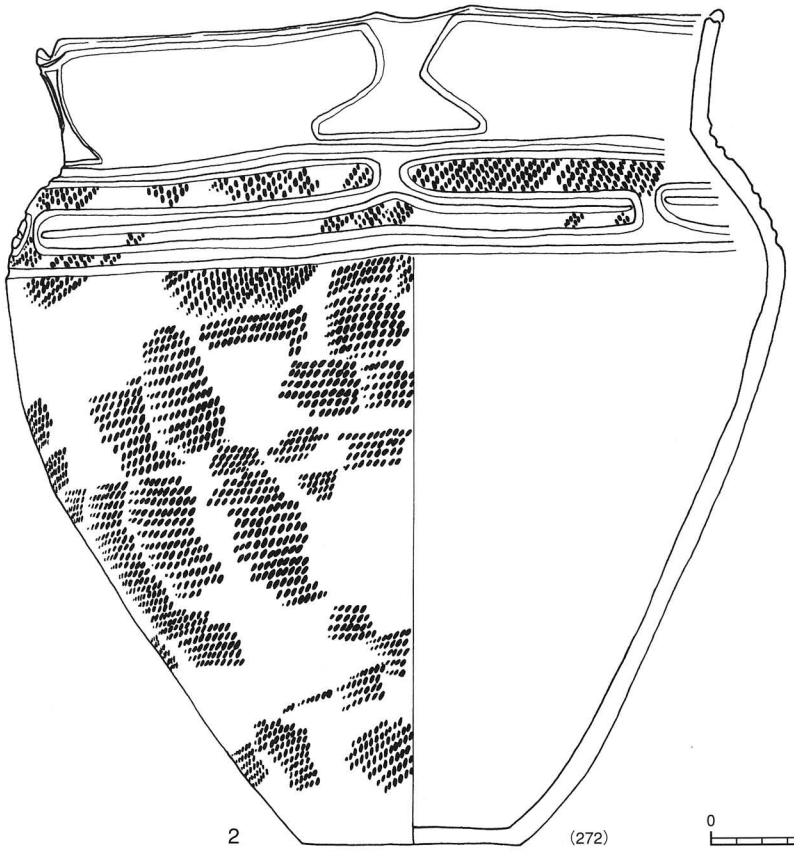


第４図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

１～４Ｍ区第８号竪穴住居跡
５～９Ｉ区第７号溝跡溝跡　10Ｋ区第７号溝跡
11Ｋ区ピット309　12Ｍ区第６号土器埋設土壙



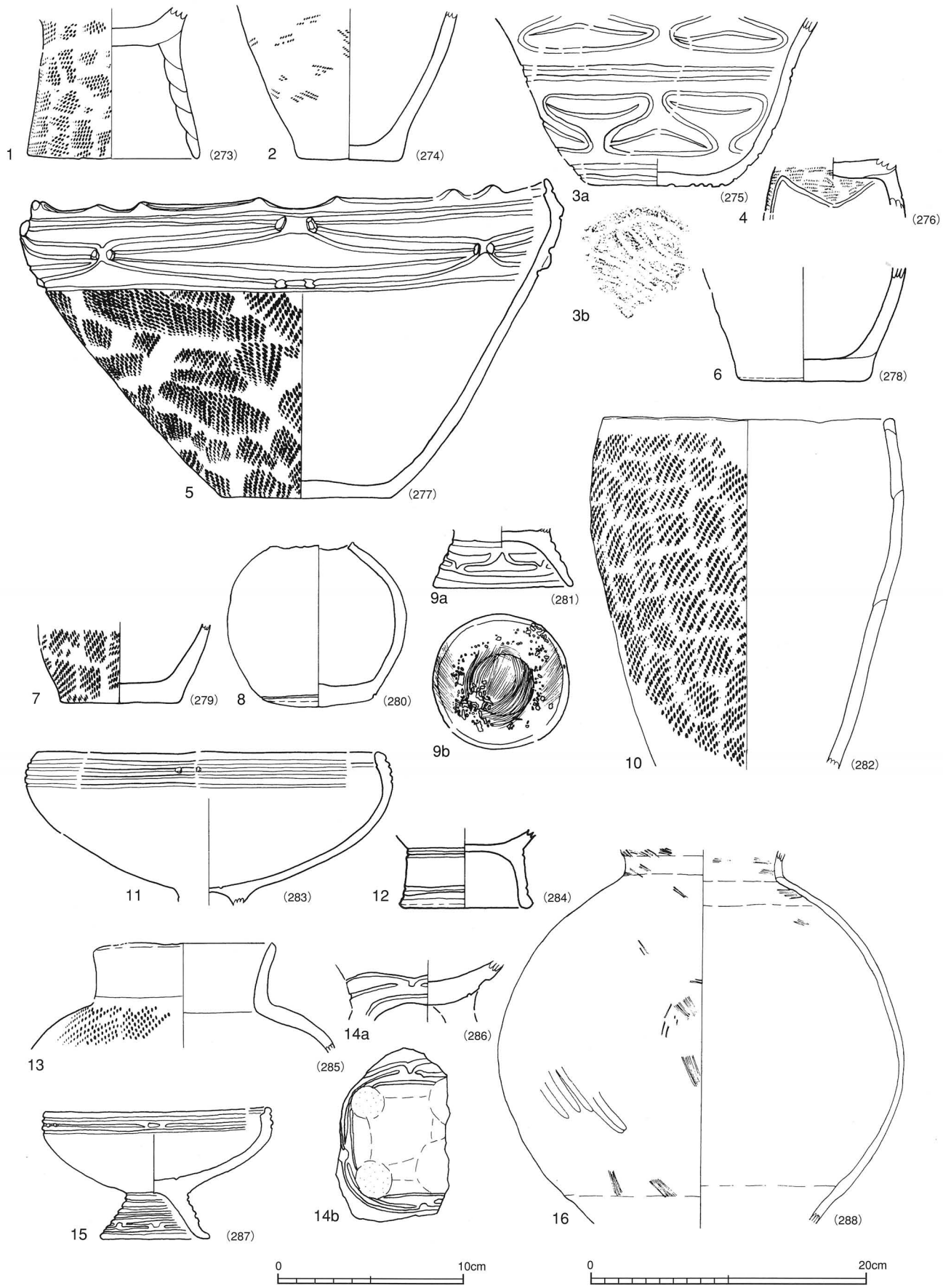


0 10cm

第５図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

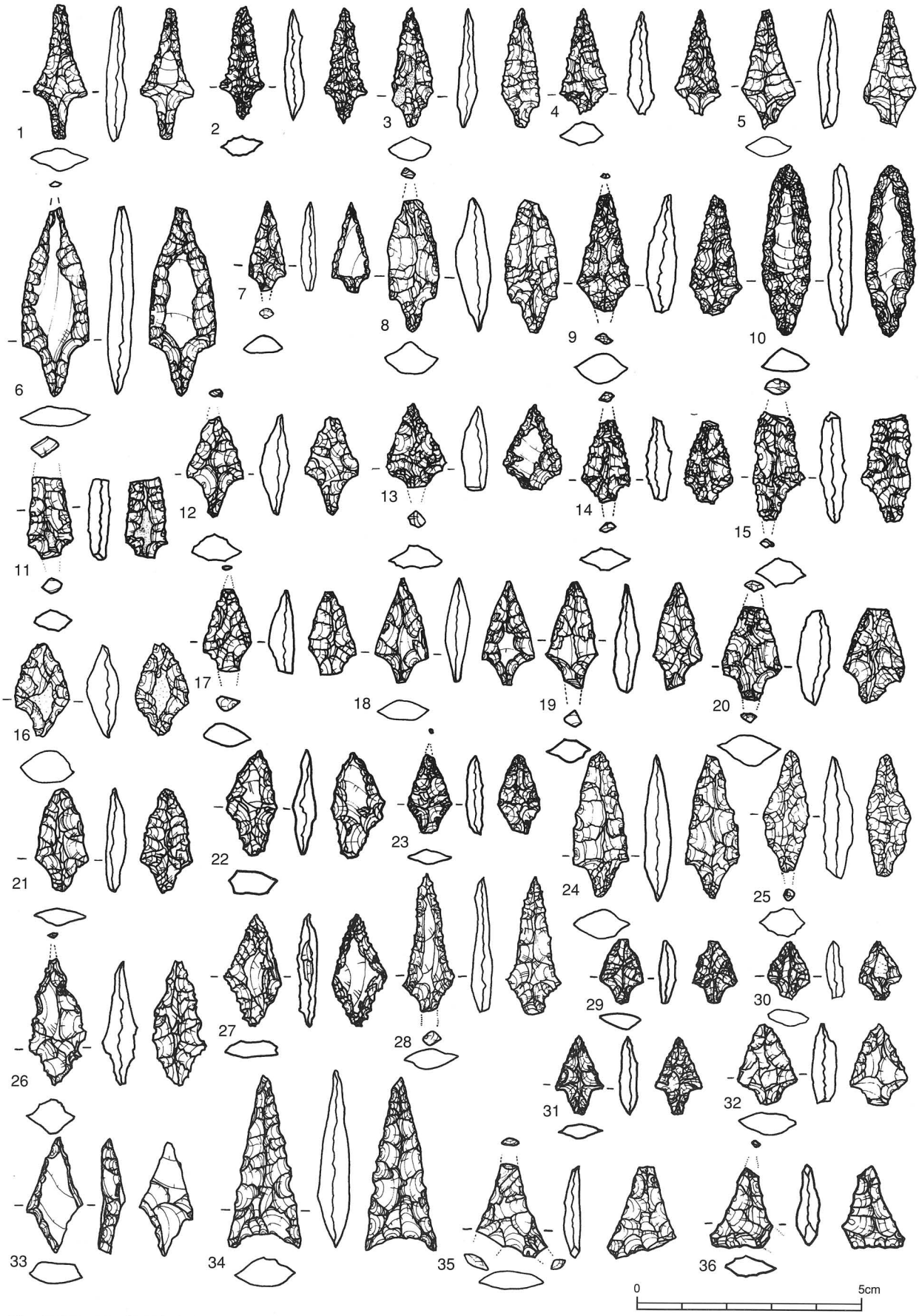
１Ｋ区第８号土器埋設土壙　第２号土器
２Ｋ区第８号土器埋設土壙　第１号土器



第6図版　山王囲遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery and Haji Ware from the Sanno-gakoi site

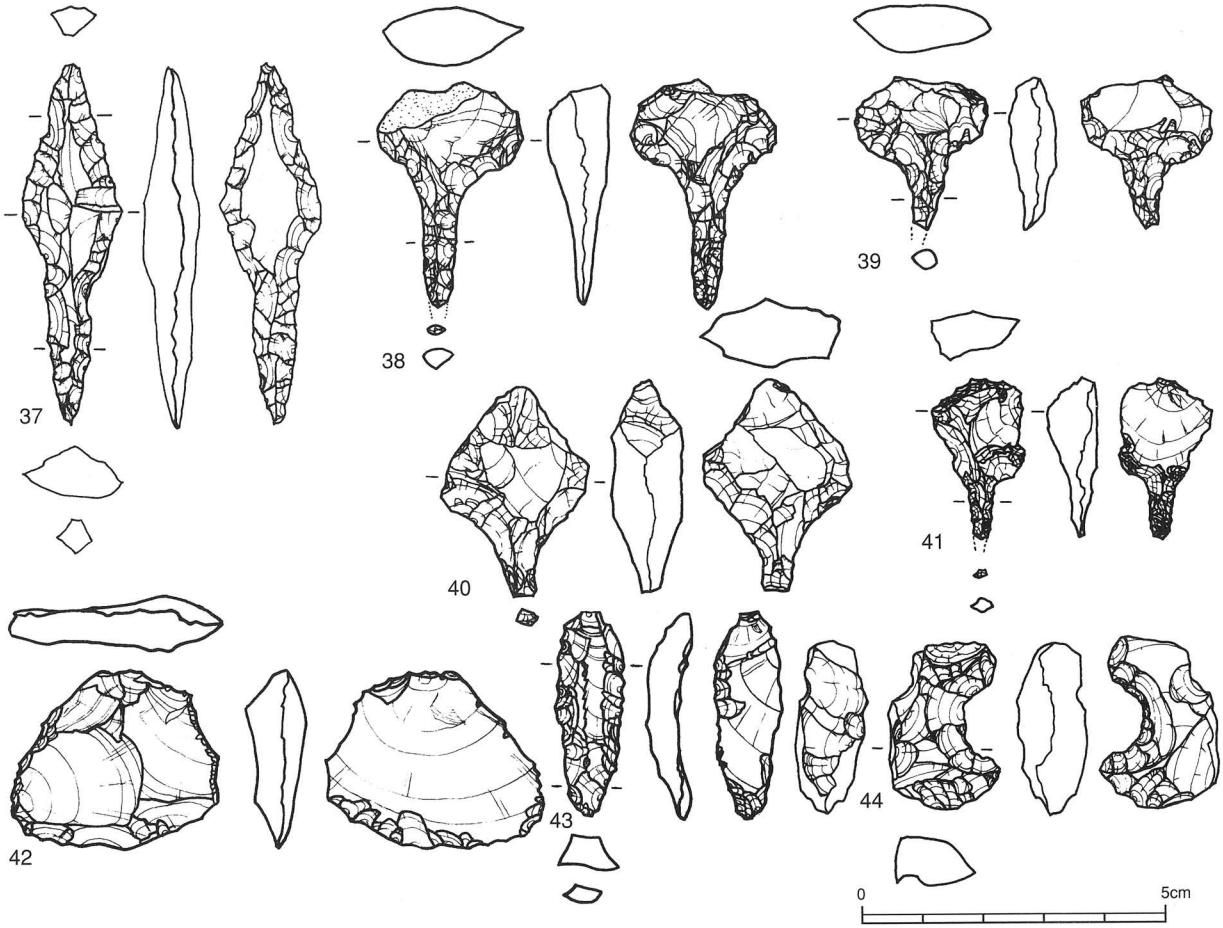
1 M区第7号土器埋設土壙　2 E区第9号土器埋設土壙　3 I南区9層
4 I区9層　5 I区試掘トレンチ603層　6・10 605層　7 606層
8 609層　9・14 610a層　11～13 610層　15 611層

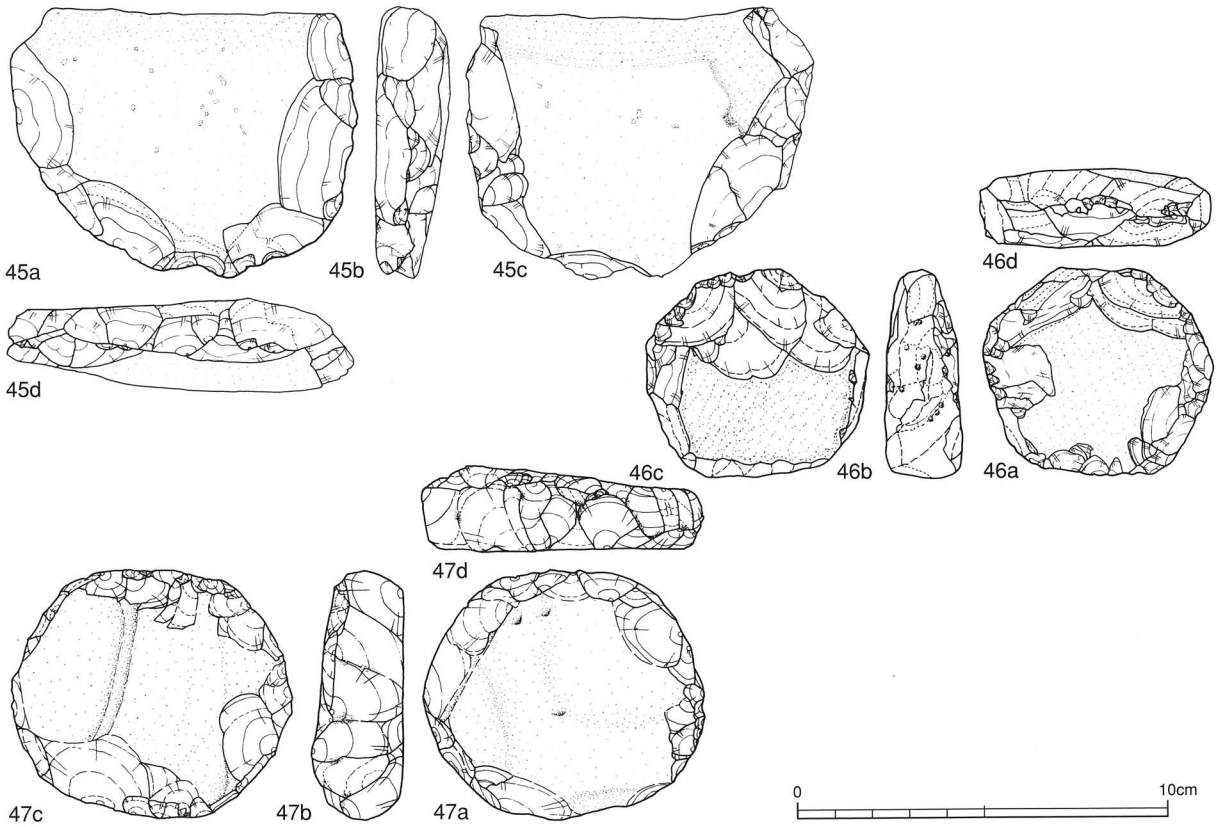


第７図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

１～36　石鏃

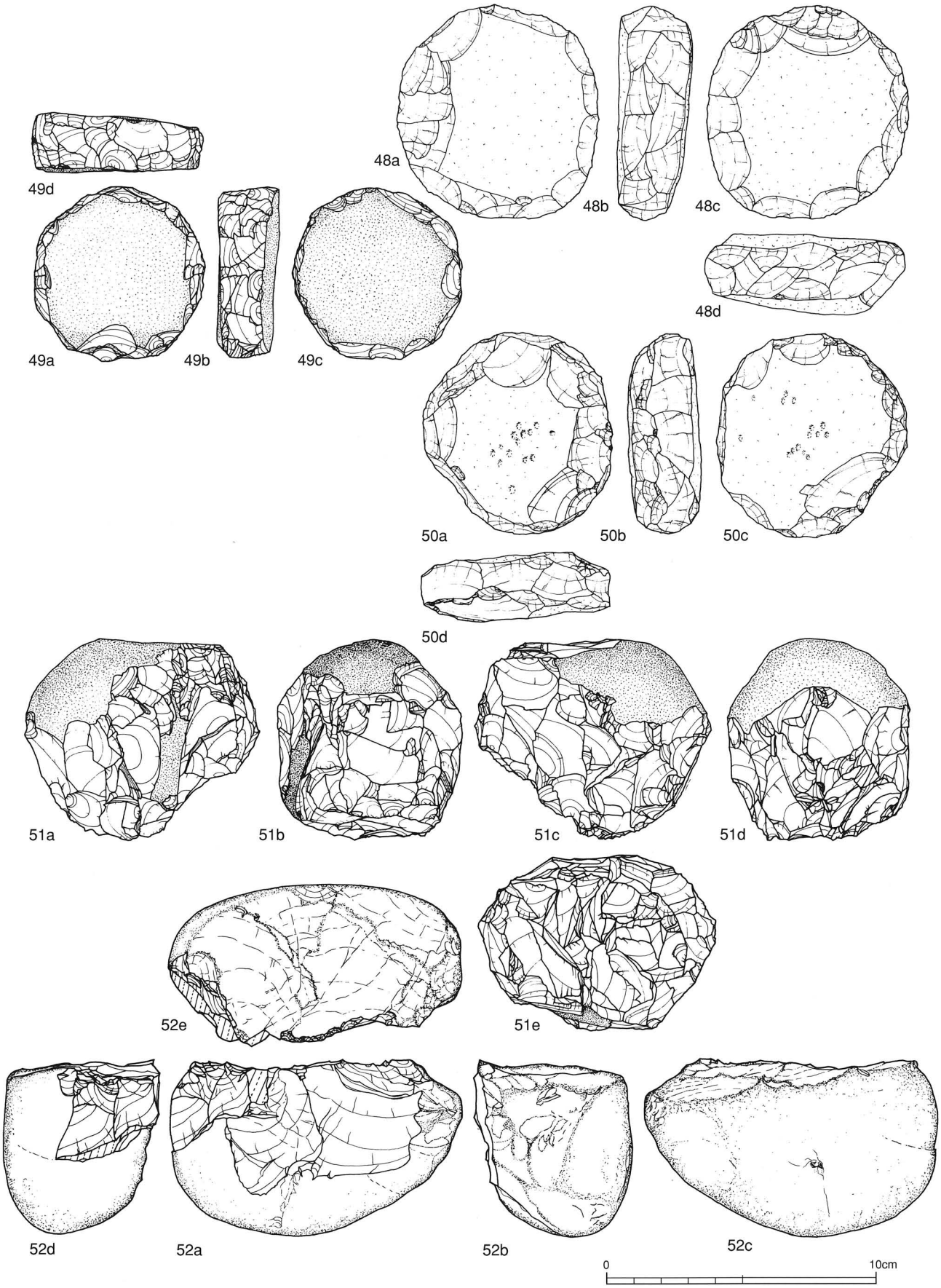




第 8 図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

37～41 石錐　42・43 不定形石器　44 異形石器
45 チョピングトゥール　46・47 円盤形石器



第 9 図版　山王囲遺跡出土石器

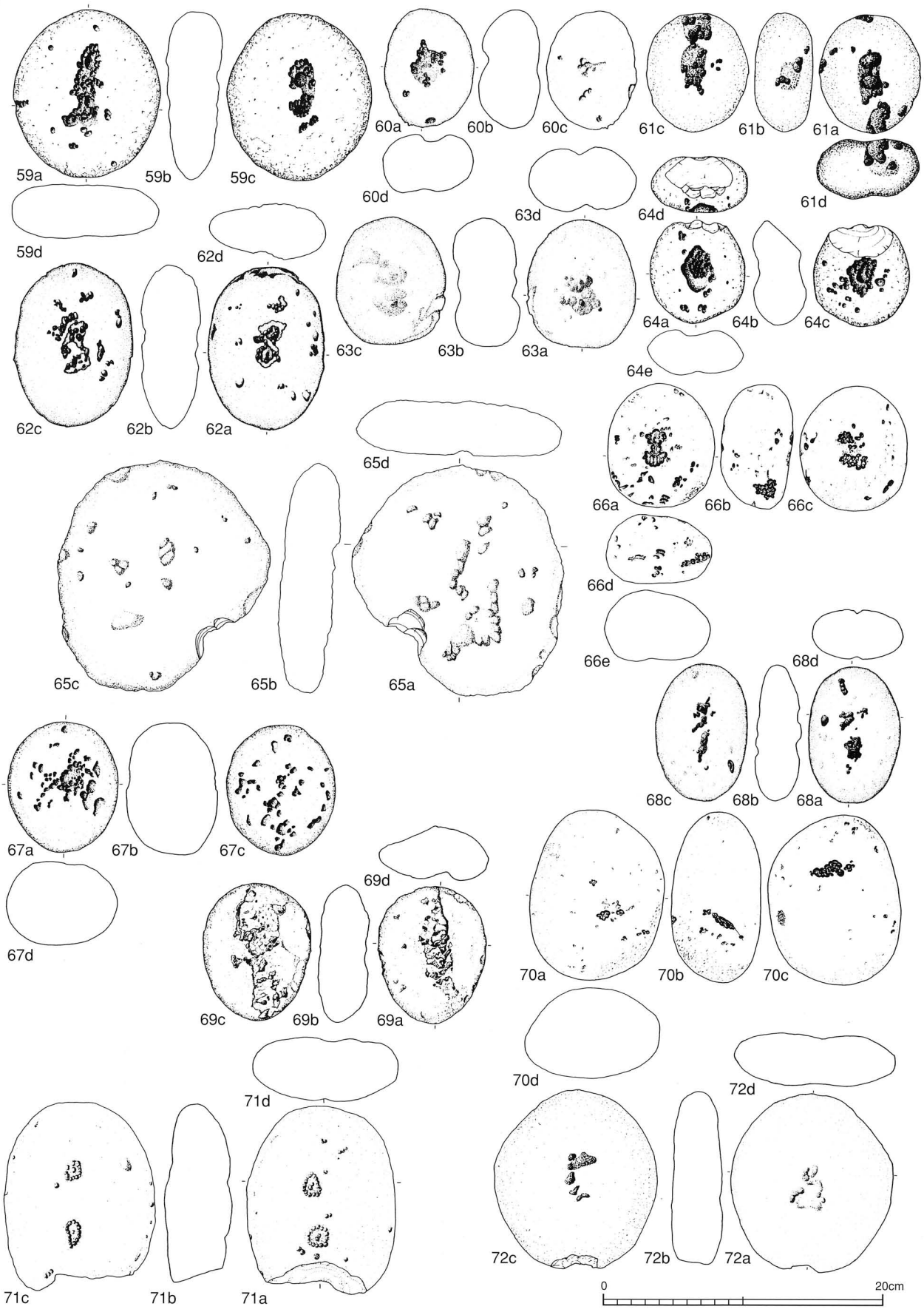
Stone implement from the Sanno-gakoi site

48～50 円盤形石器　51・52 石核

第10図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

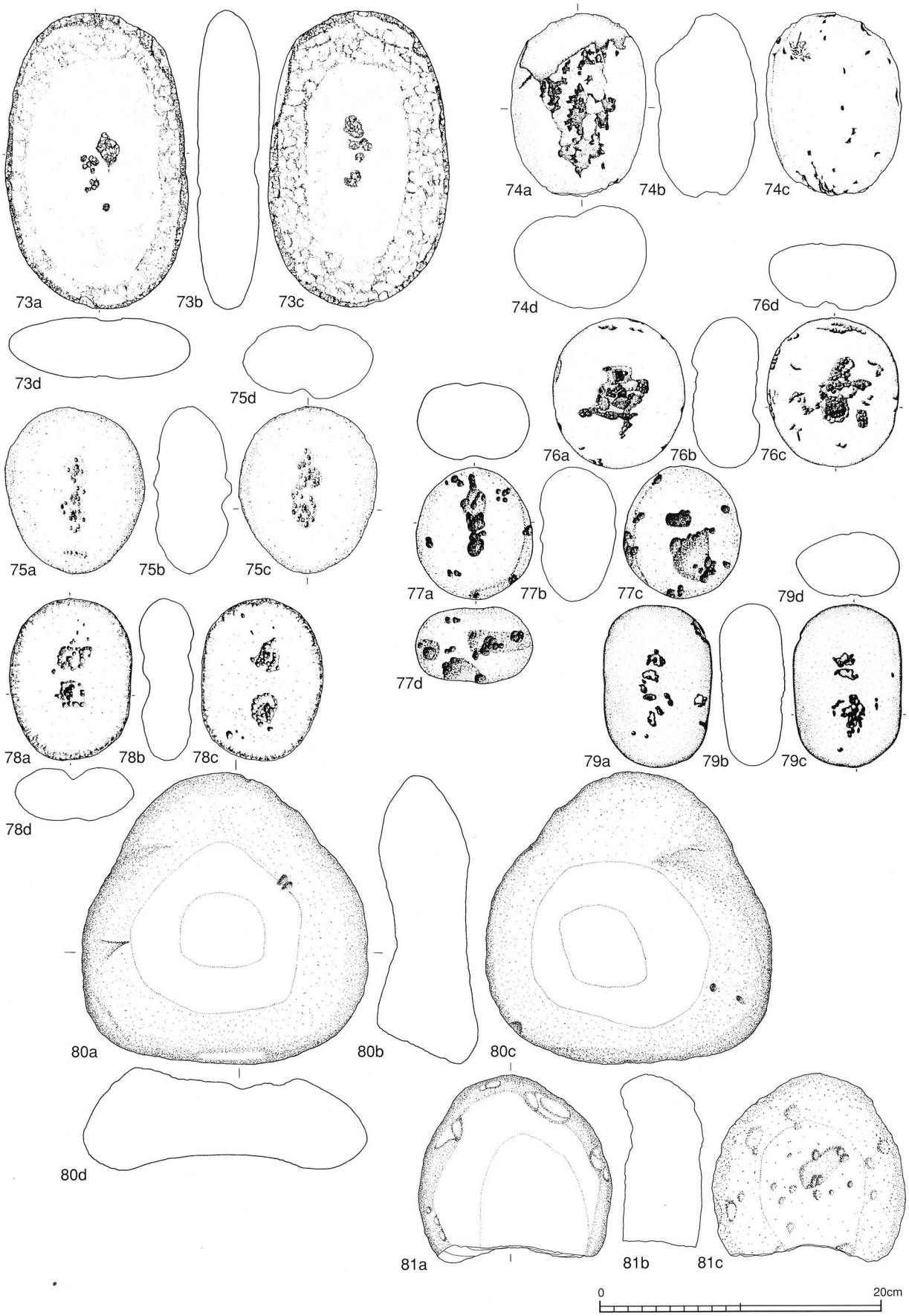
53 環状石斧　54～57 磨製石斧　58 石鏃



第11図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

59～72 凹石



第12図版　山王囲遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

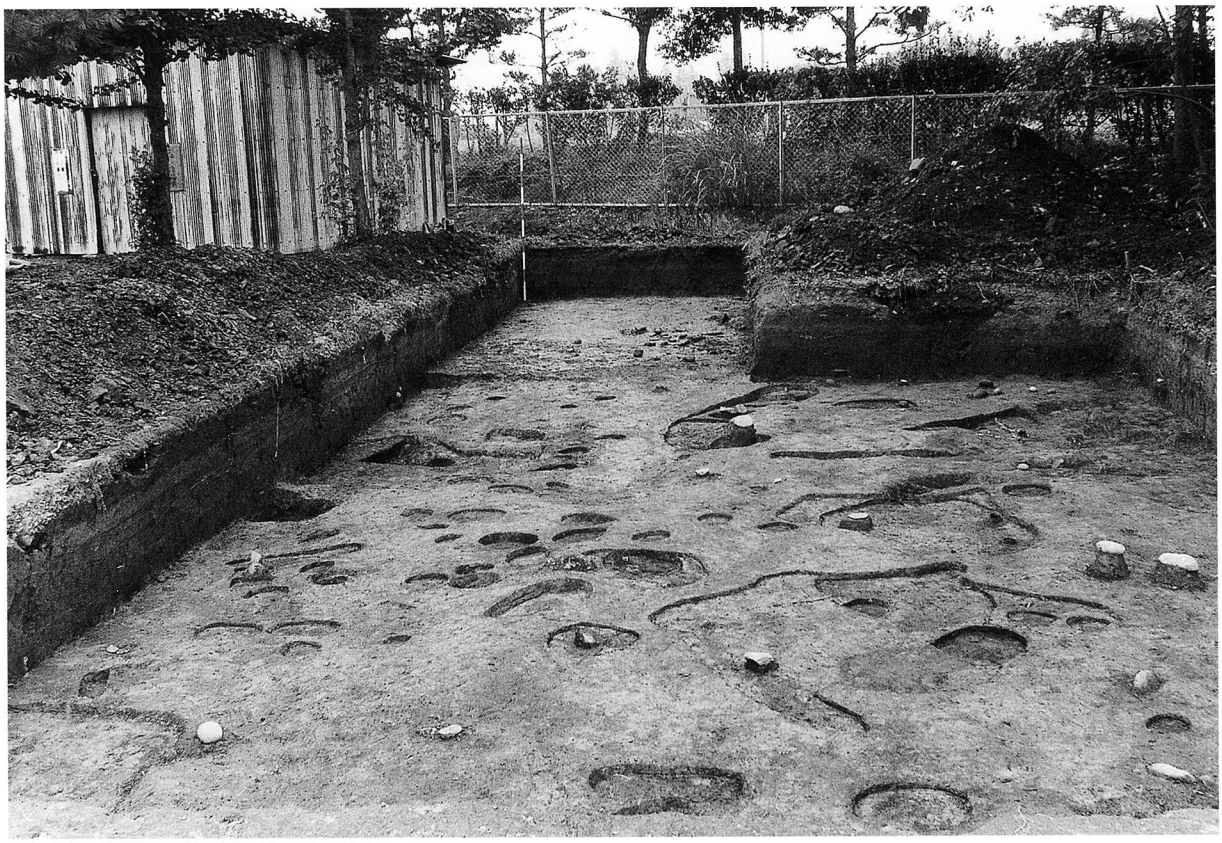
73～79 凹石　80－81石皿

写　真　図　版

1　G、H、I、I北、I南、M区全景（南西から）

2　N区全景（東から）

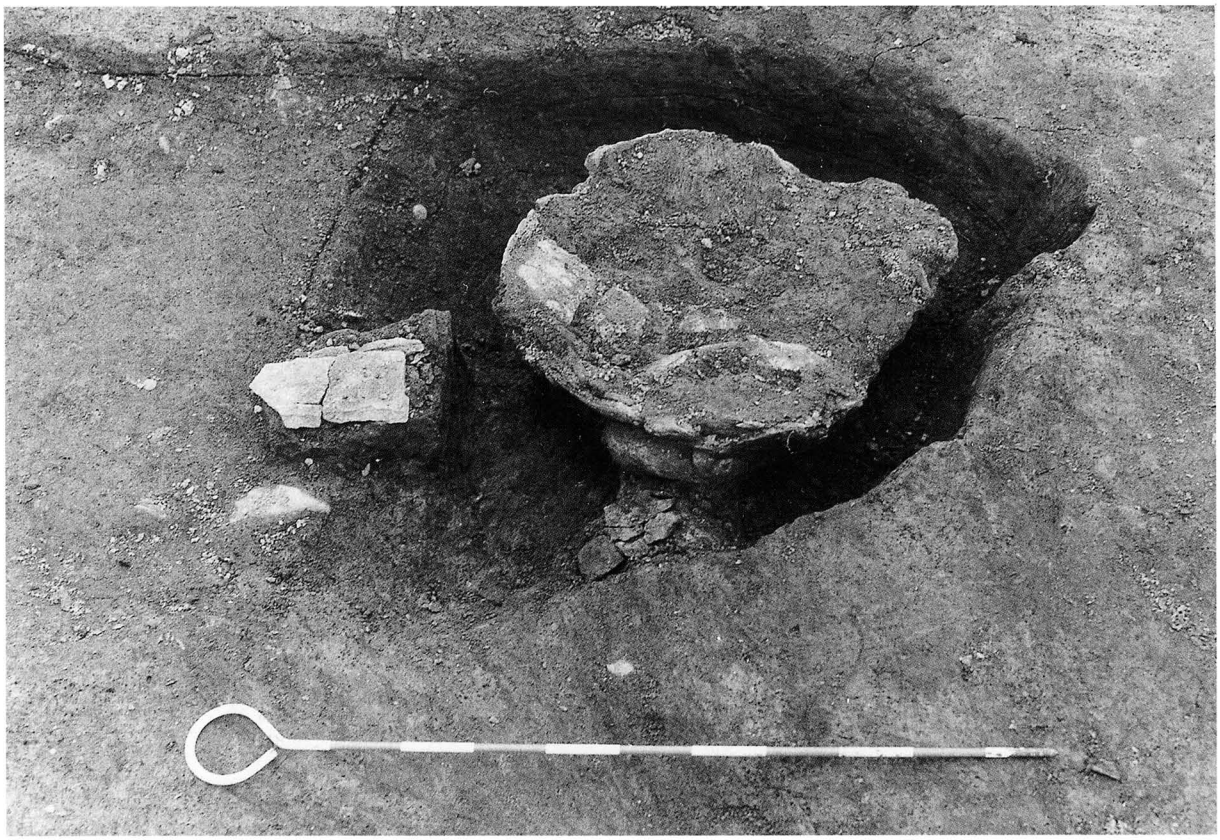
PL．1　G、H、I、I北、I南、M区全景およびN区全景
View of excavated trench



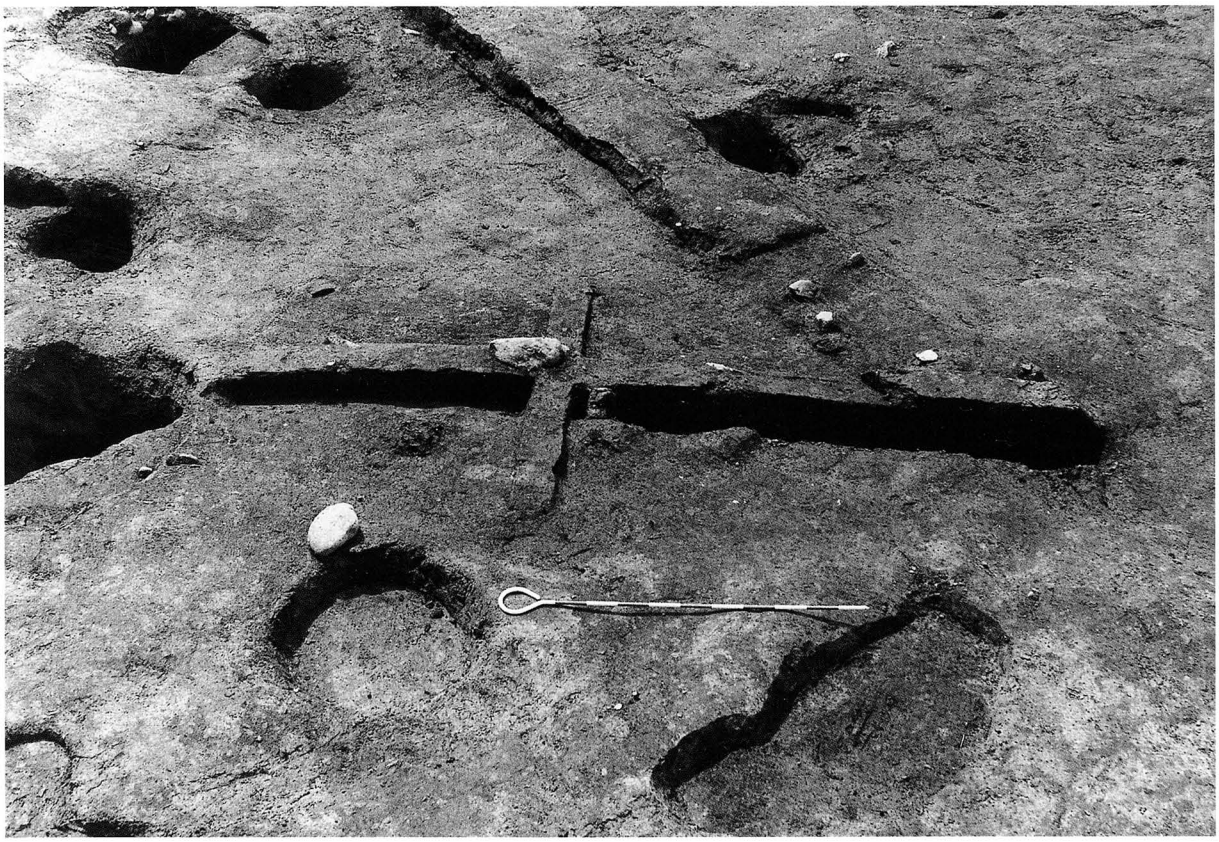
1　E区全景（西から）

2　E区第２号配石遺構（北から）

ＰＬ．２　E区全景および第２号配石遺構
View of excavated trench and stone arrangement 2

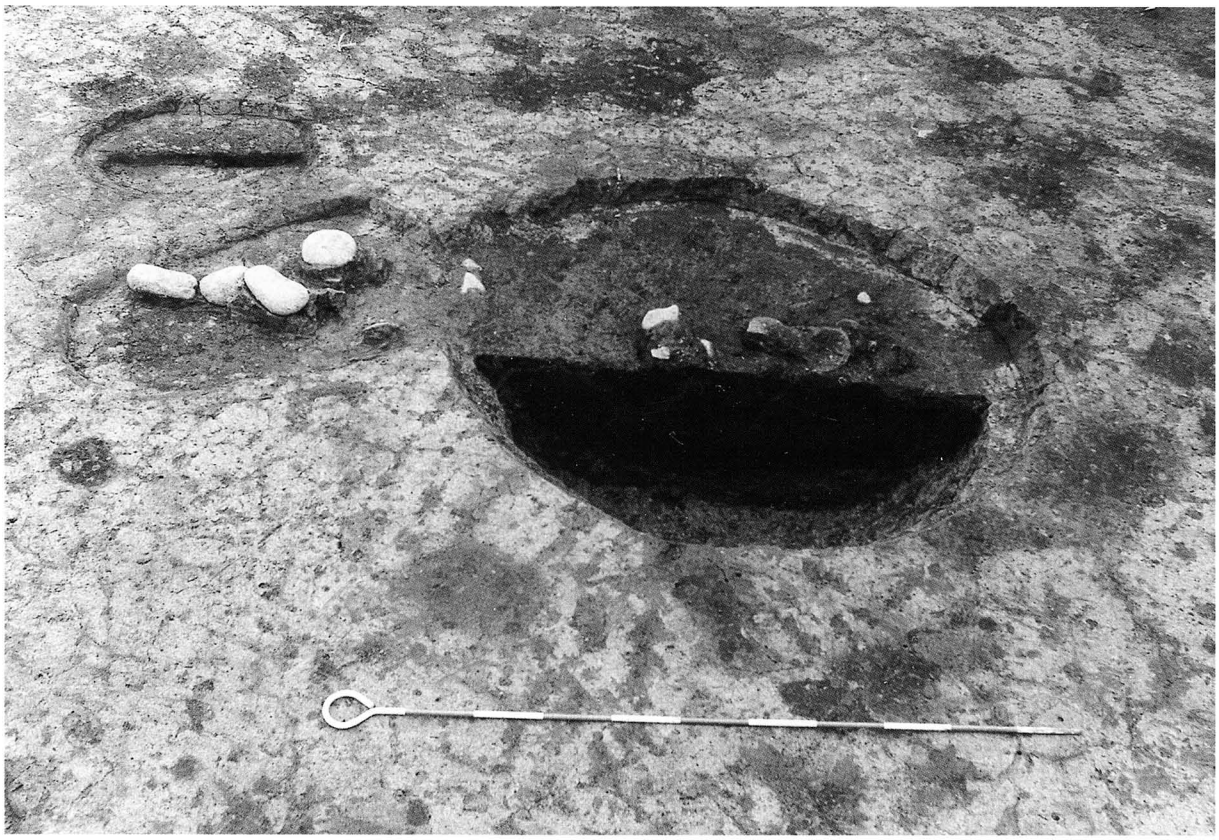


1　M区第６号土器埋設土壙

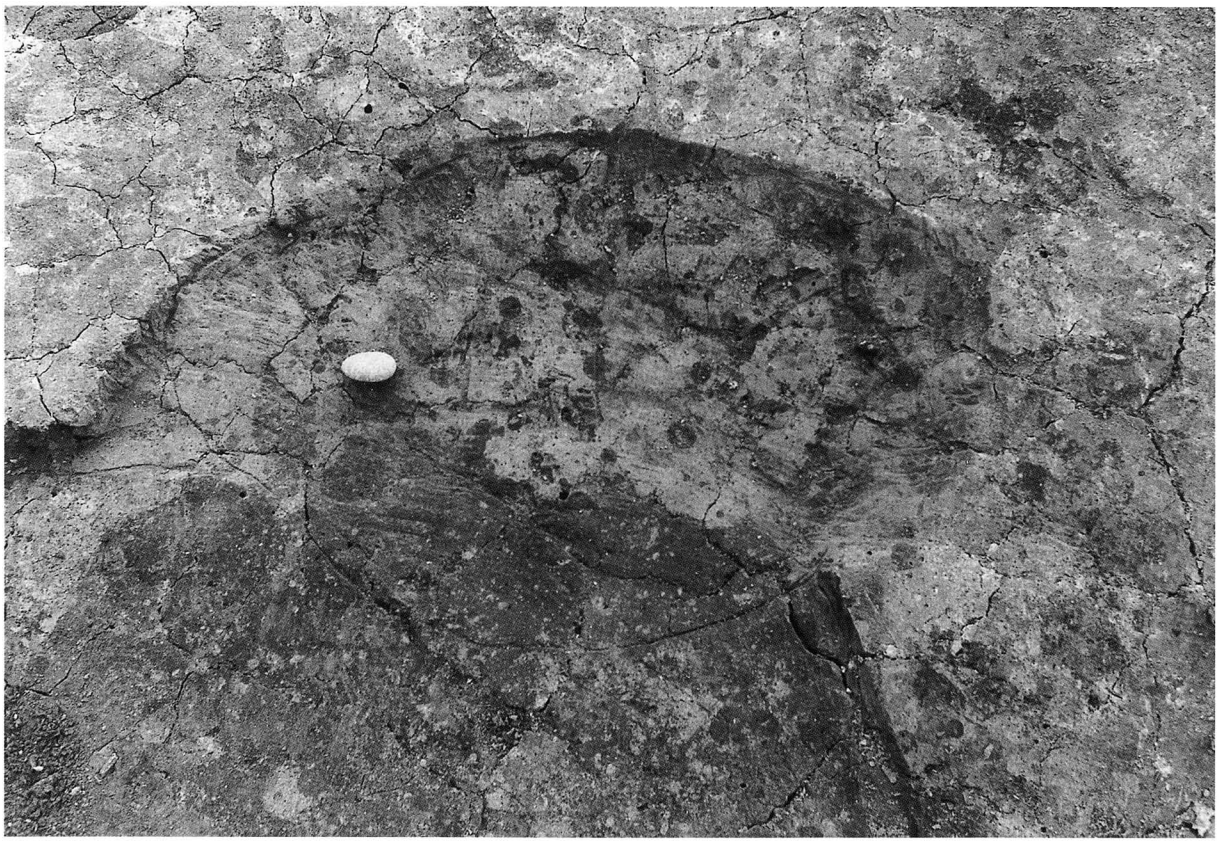


2　第３号竪穴住居跡炉跡

ＰＬ．３　第６号土器埋設土壙および第３号竪穴住居跡炉跡
Pit6 with buried pottery and fireplace in pit dwelling 3



1　K区ピット305



2　K区ピット337

ＰＬ．４　ピット305およびピット337
Pit305 and Pit337

1 (266)

2 (267)

3 (265)

4 (268)

5 (263)

6 (264)

PL. 5 山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～3 Ⅰ区第7号溝跡 4 K区第7号溝跡
5・6 Ⅰ区第7号溝跡

1 (271)

2 (272)

PL. 6 山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 K区第8号土器埋設土壙 第2号土器
2 第8号土器埋設土壙 第1号土器

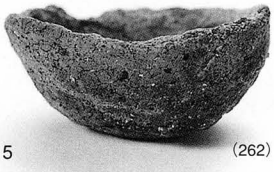
1 (270)

2 (273)

3 (274)

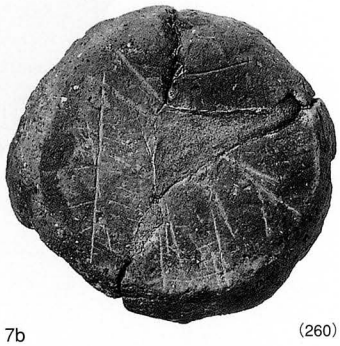
4 (261)

7a



5 (262)

6 (259)



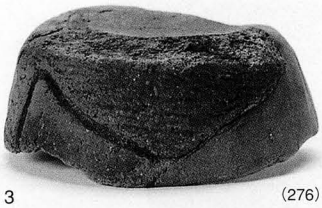
7b (260)

PL. 7　山王囲遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 M区第6号土器埋設土壙　2 第7号土器埋設土壙
3 E区第9号土器埋設土壙　4～7 M区第8号竪穴住居跡

1 (269)

2 (275)



3 (276)

4 (278)

5 (282)

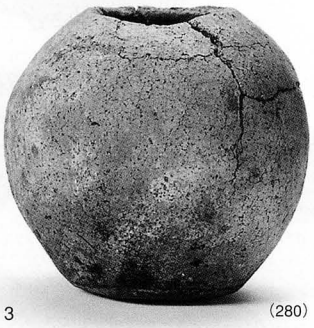
6 (277)

PL. 8　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 K区ピット340　2 Ⅰ南区包含層
3 Ⅰ区包含層　4・5 Ⅰ区試掘トレンチ605層
6 603層

1 (279)

2 (285)


3 (280)

4 (283)

5 (284)

6 (287)

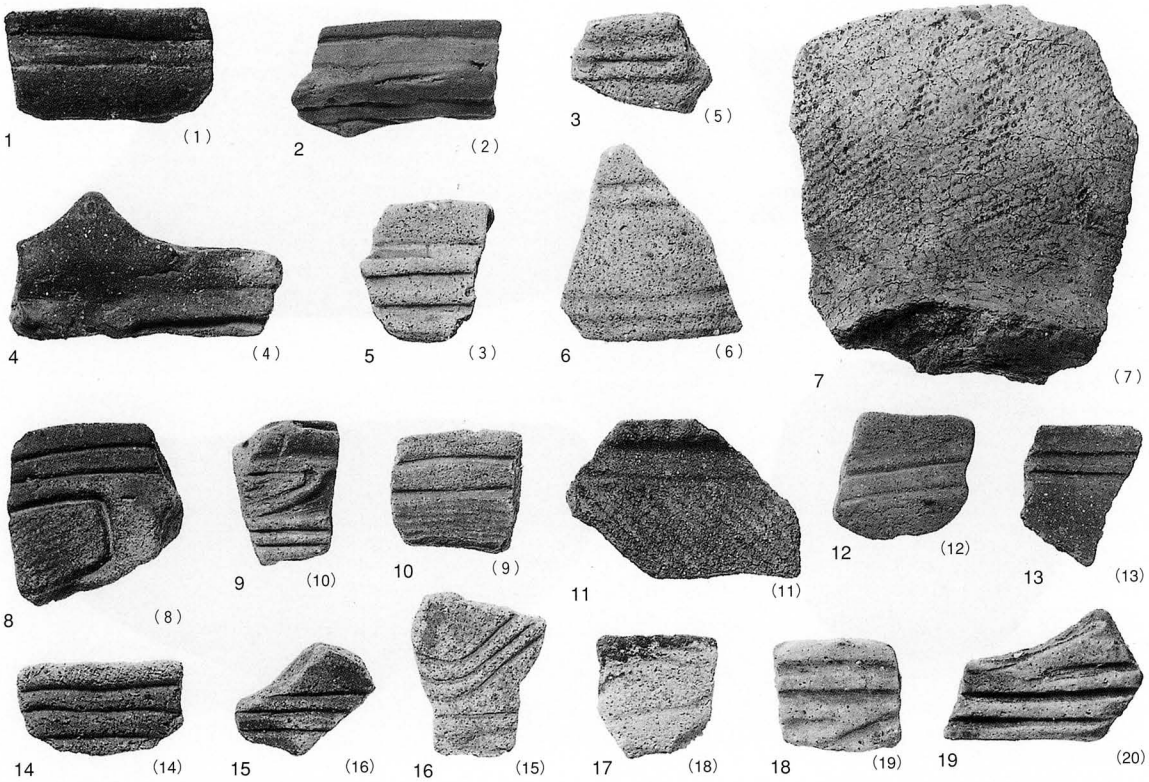
7 (281)

8 (286)

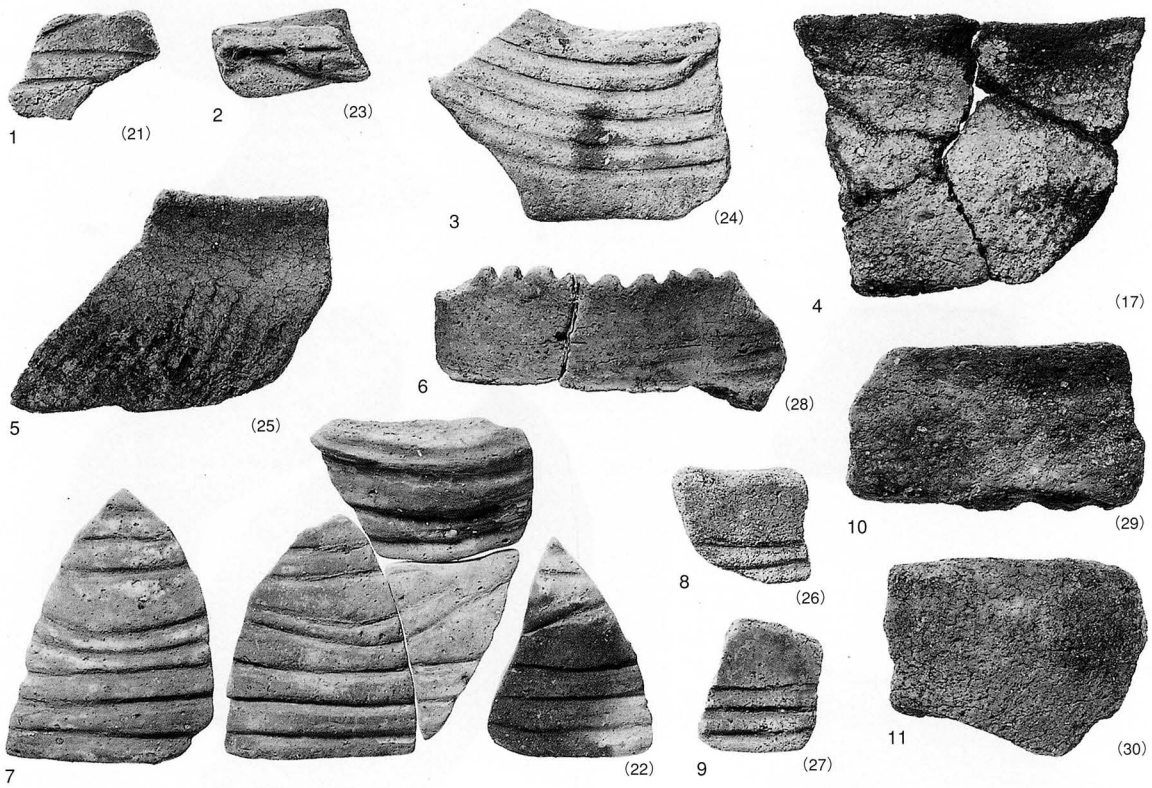
9 (288)

ＰＬ．９　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery and Haji Ware from the Sanno-gakoi site

1 Ⅰ区試掘トレンチ606層　2 610層
3 609層　4 610層　5・7・8 610a層
6 611層　9 E区ピット338

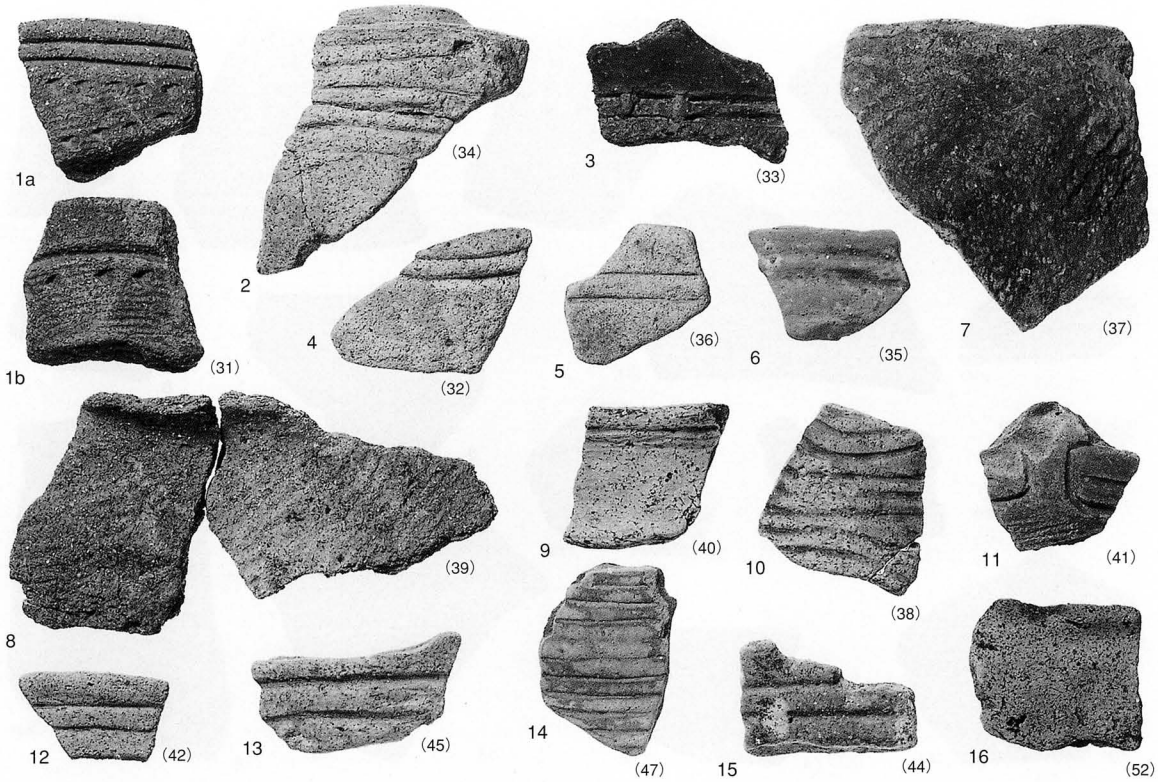


1　F、M区出土土器　　1～11 第3号竪穴住居跡　12～19 第8号竪穴住居跡

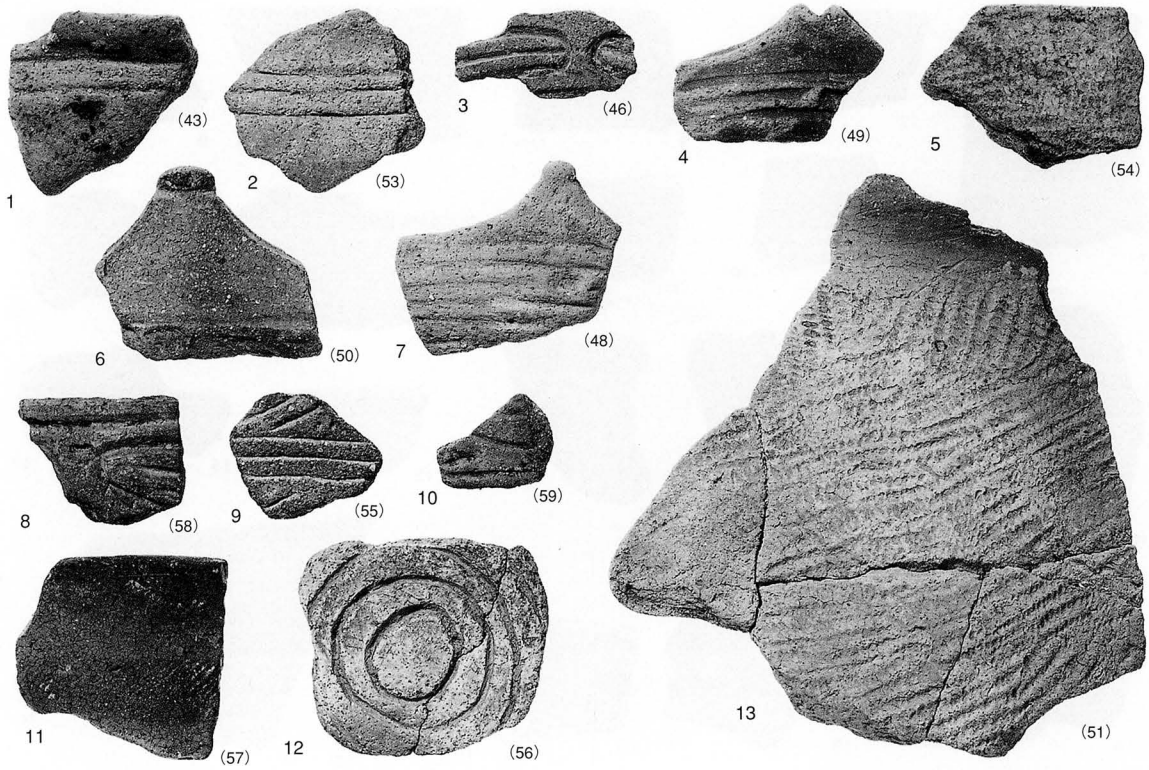


2　M区出土土器　　1～11 第8号竪穴住居跡

PL．10　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

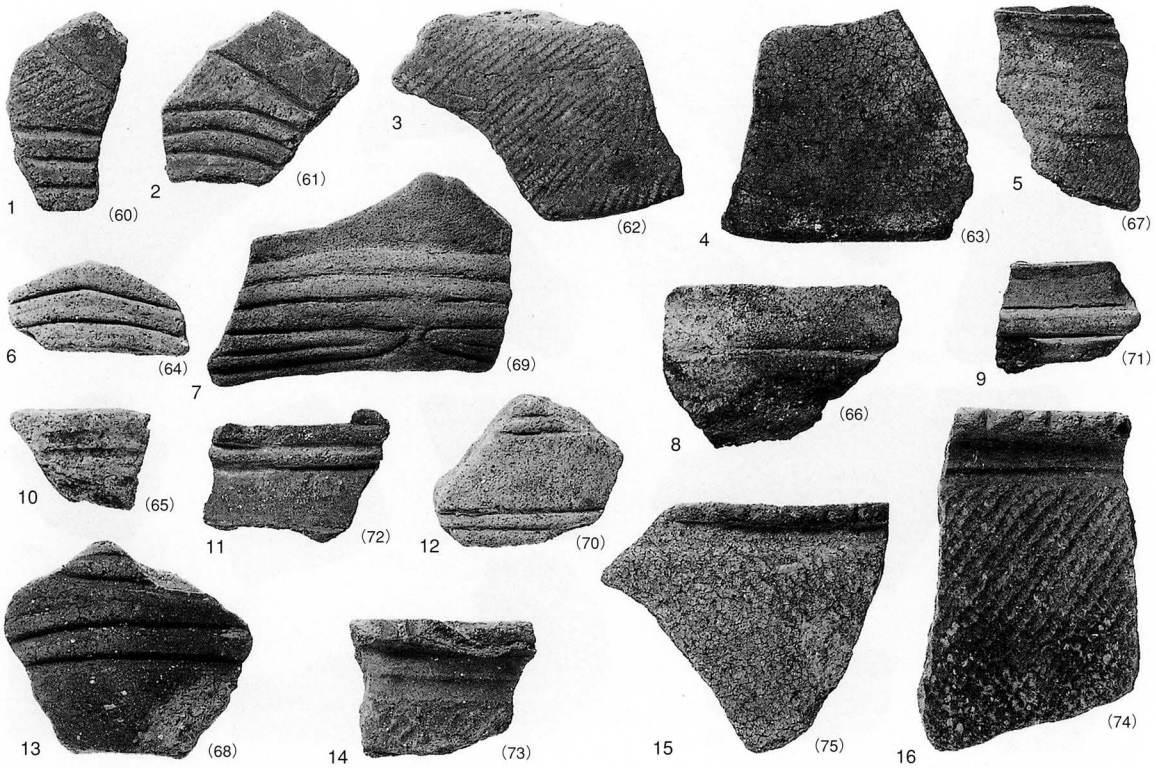


1　M、K区出土土器　　1～10 第8号竪穴住居跡　11～16 第7号溝跡

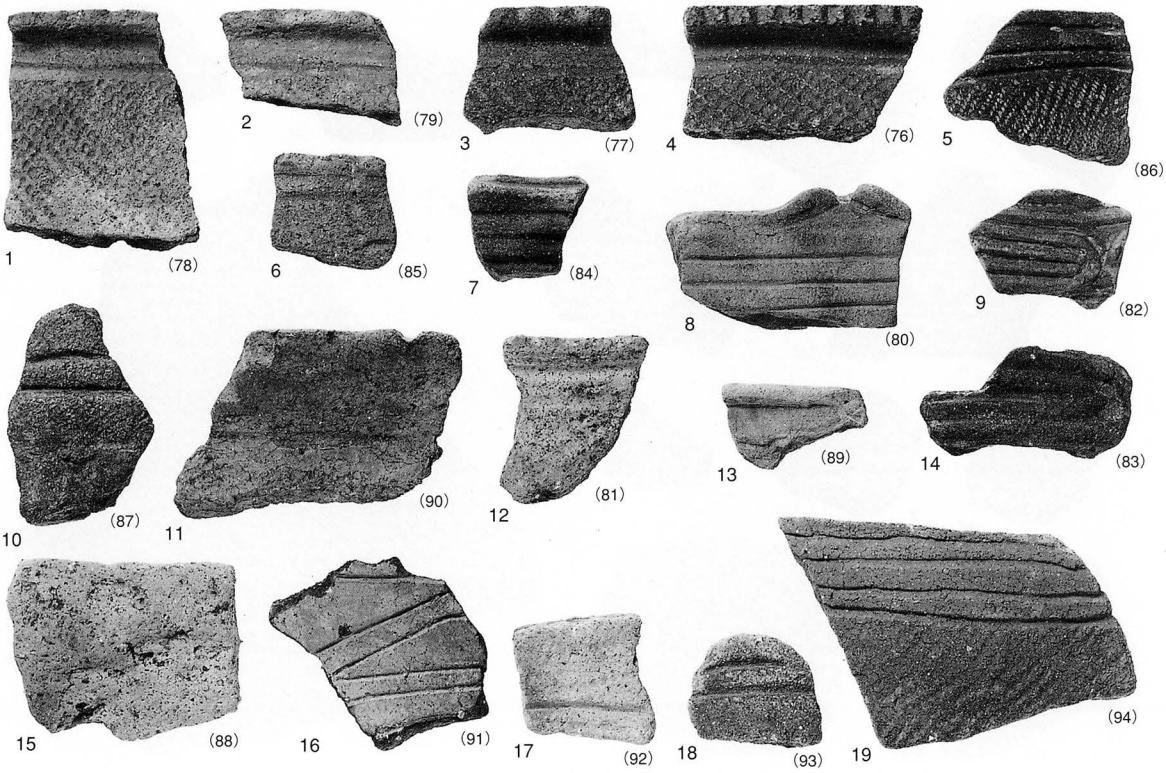


2　K区出土土器　　1～13 第7号溝跡

PL. 11　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

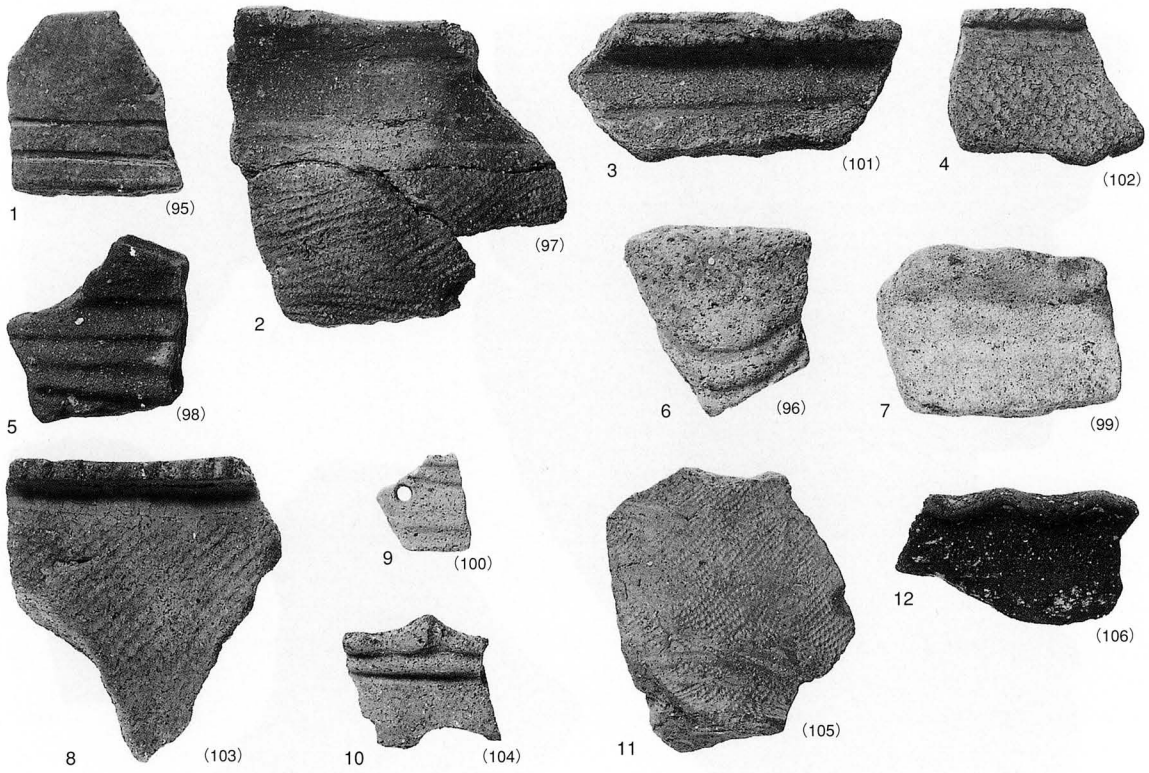


1　K区出土土器　　1～16 第7号溝跡

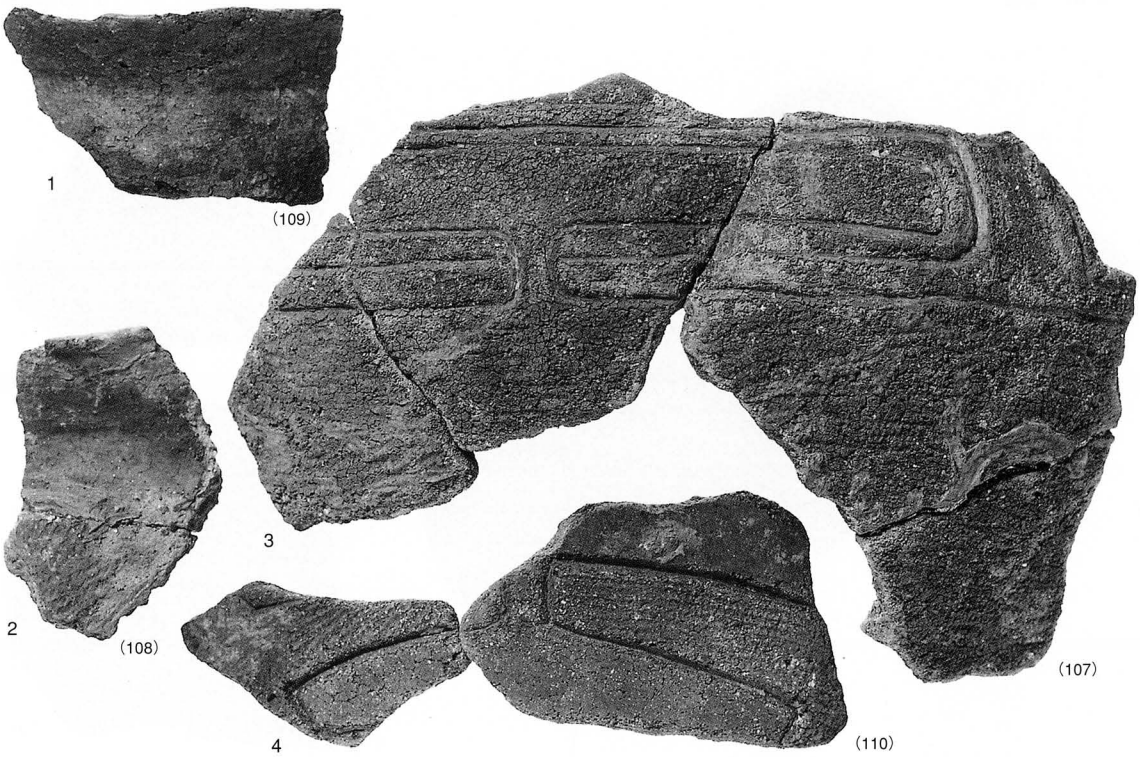


2　K区出土土器　　1～19 第7号溝跡

ＰＬ．12　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

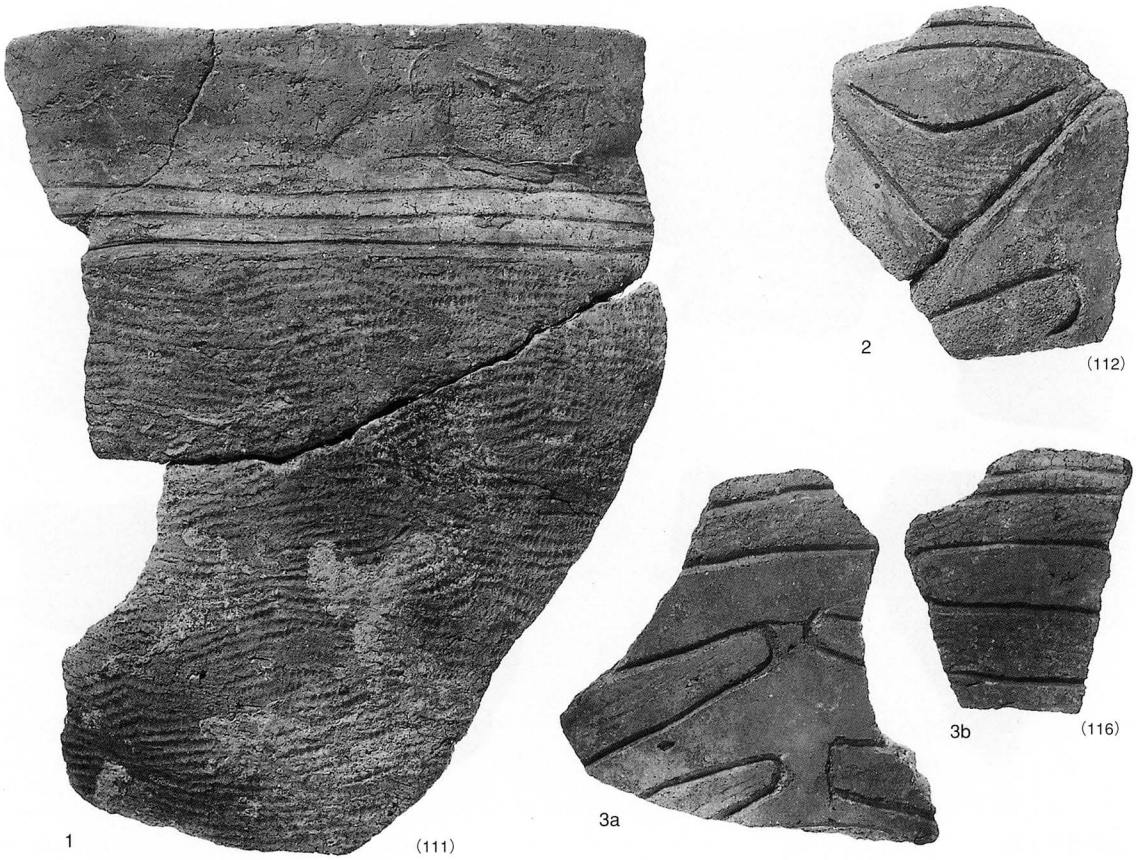


1　K区出土土器　　1～12 第7号溝跡

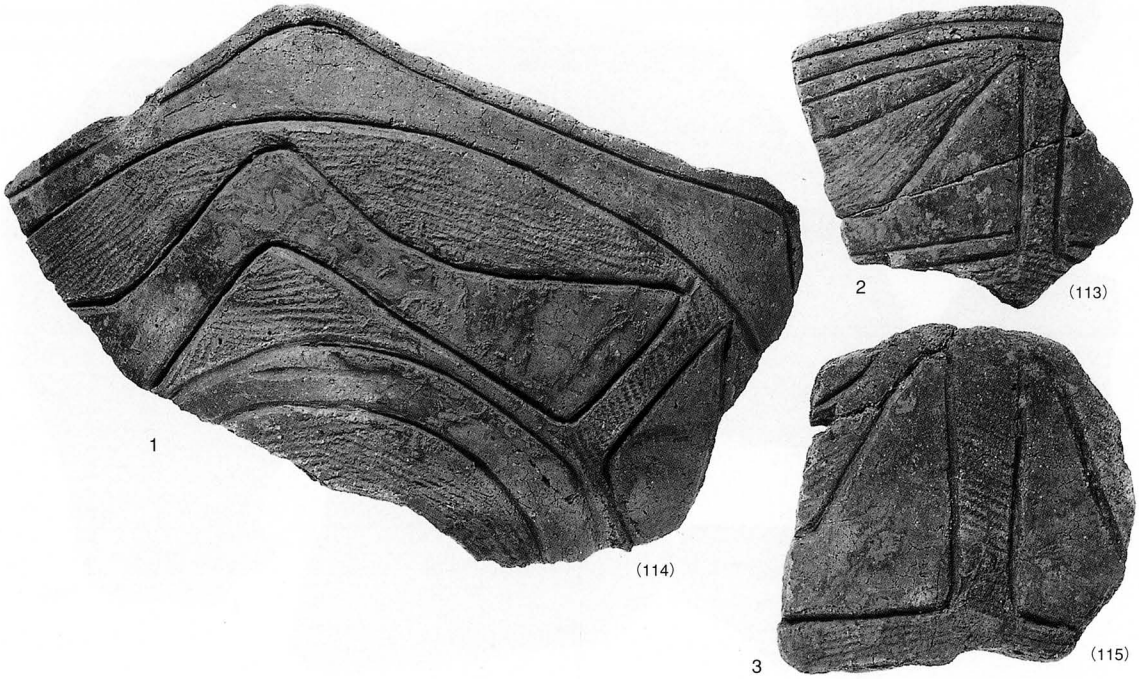


1　I区出土土器　　1～4 第7号溝跡

PL. 13　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

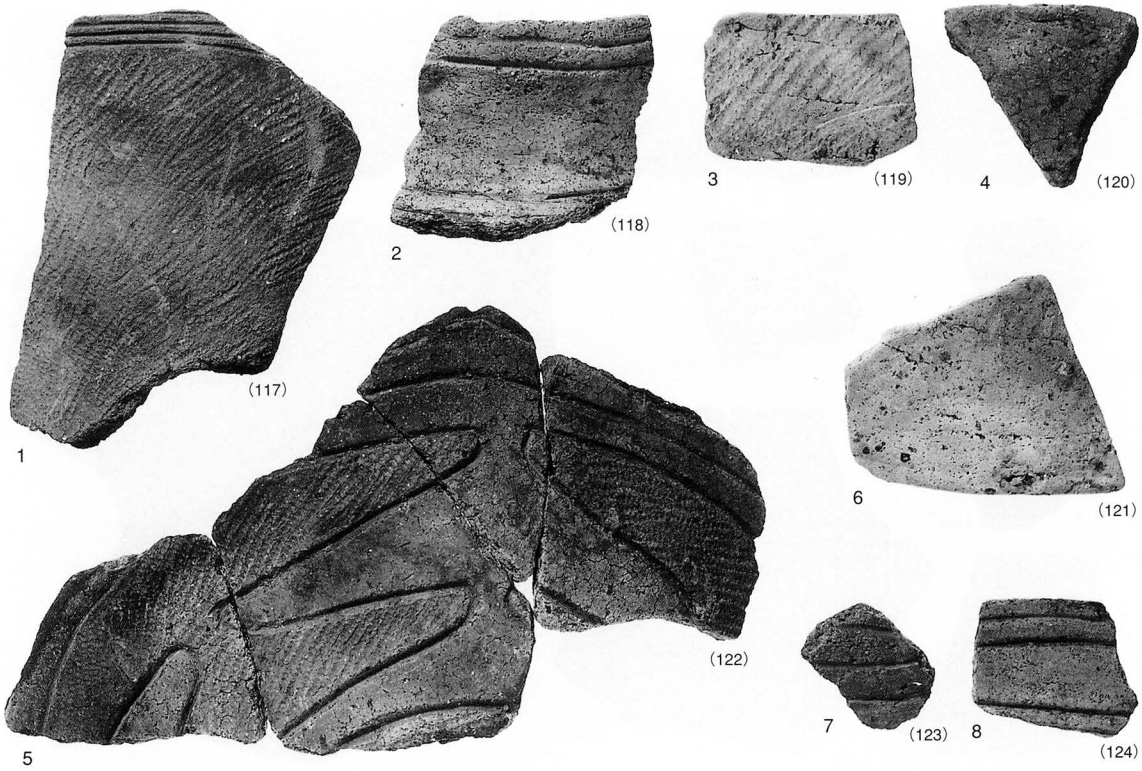


1　Ⅰ区出土土器　　1～3 第7号溝跡

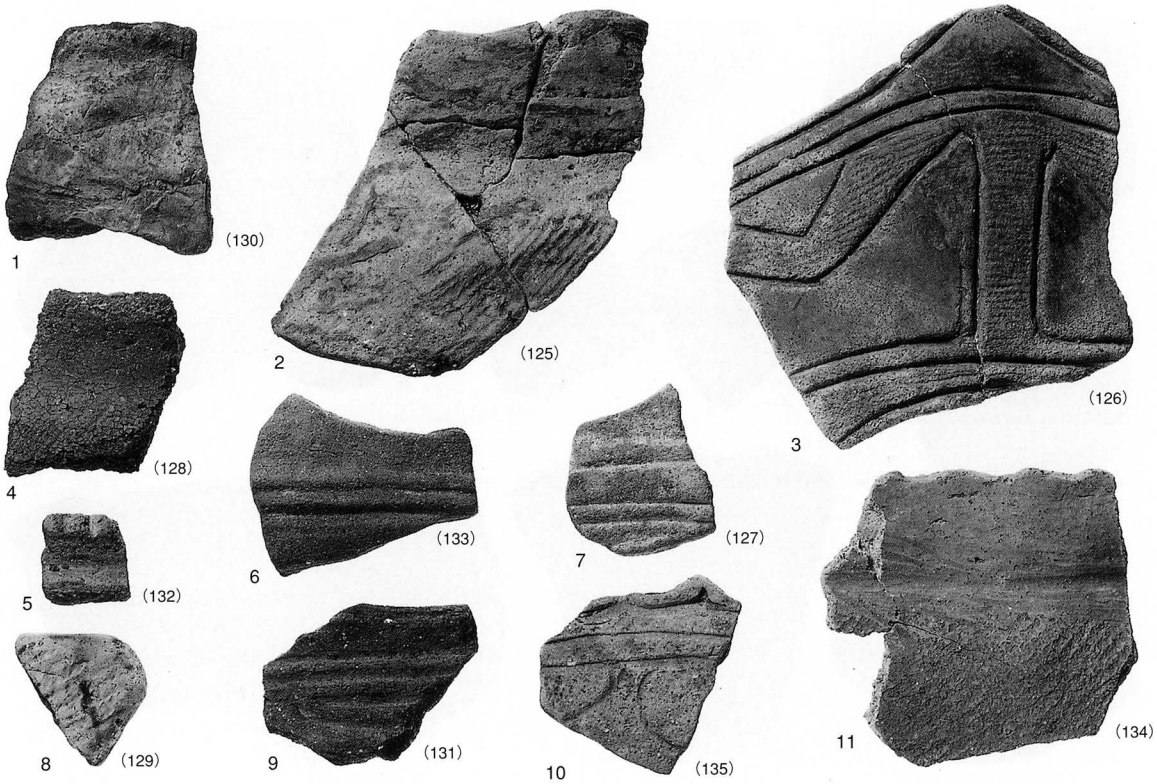


2　Ⅰ区出土土器　　1～3 第7号溝跡

PL. 14　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

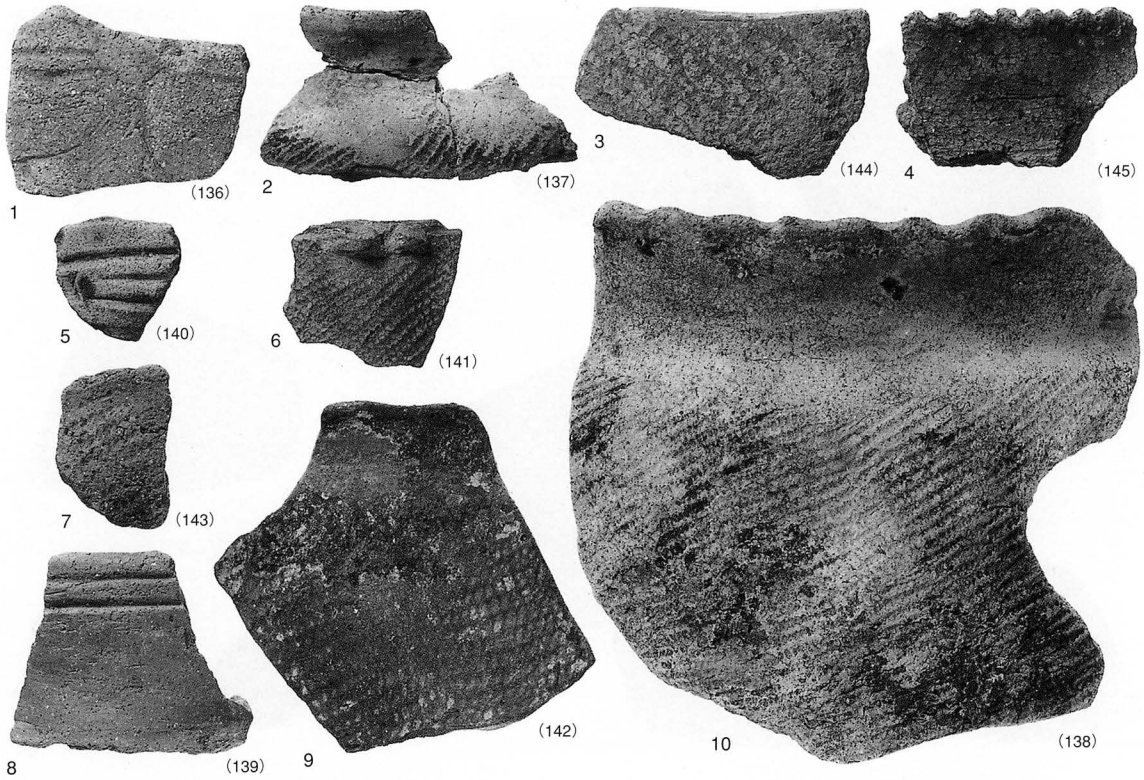


1　Ⅰ区出土土器　　1～8 第7号溝跡

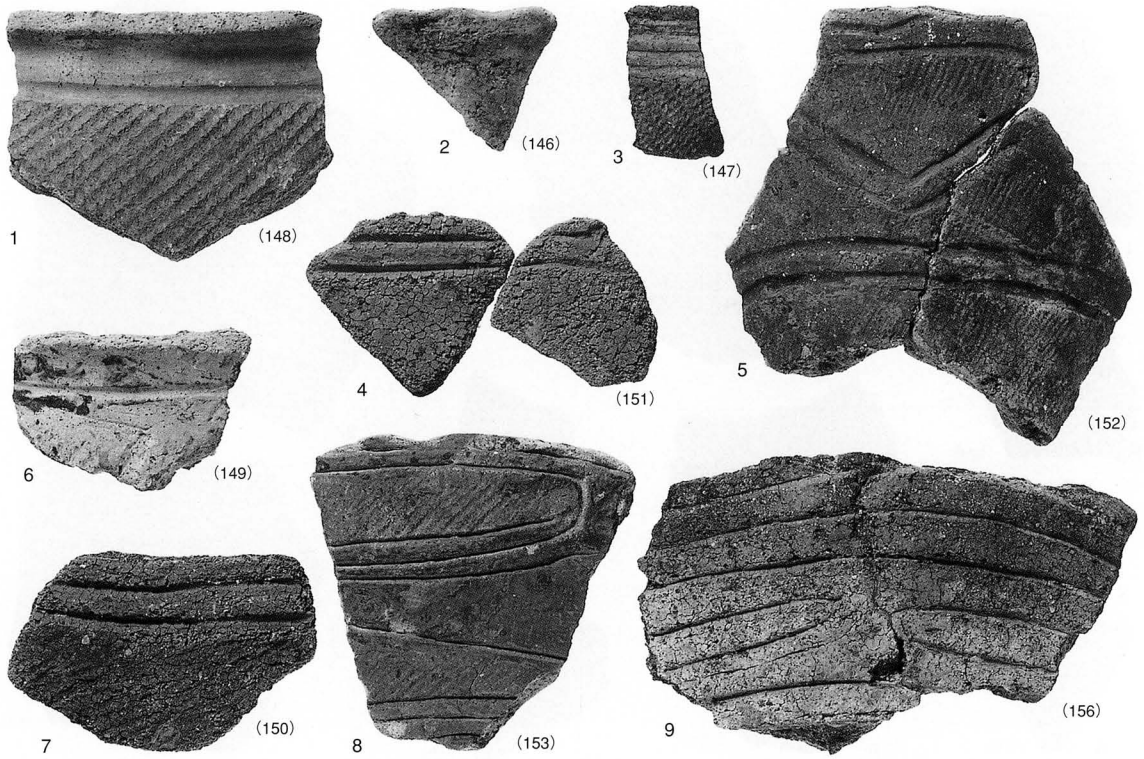


2　Ⅰ、E区出土土器　　1～4・7・8 第7号溝跡　6・11 ピット254
5・9 第2号配石遺構　10 ピット258

PL. 15　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

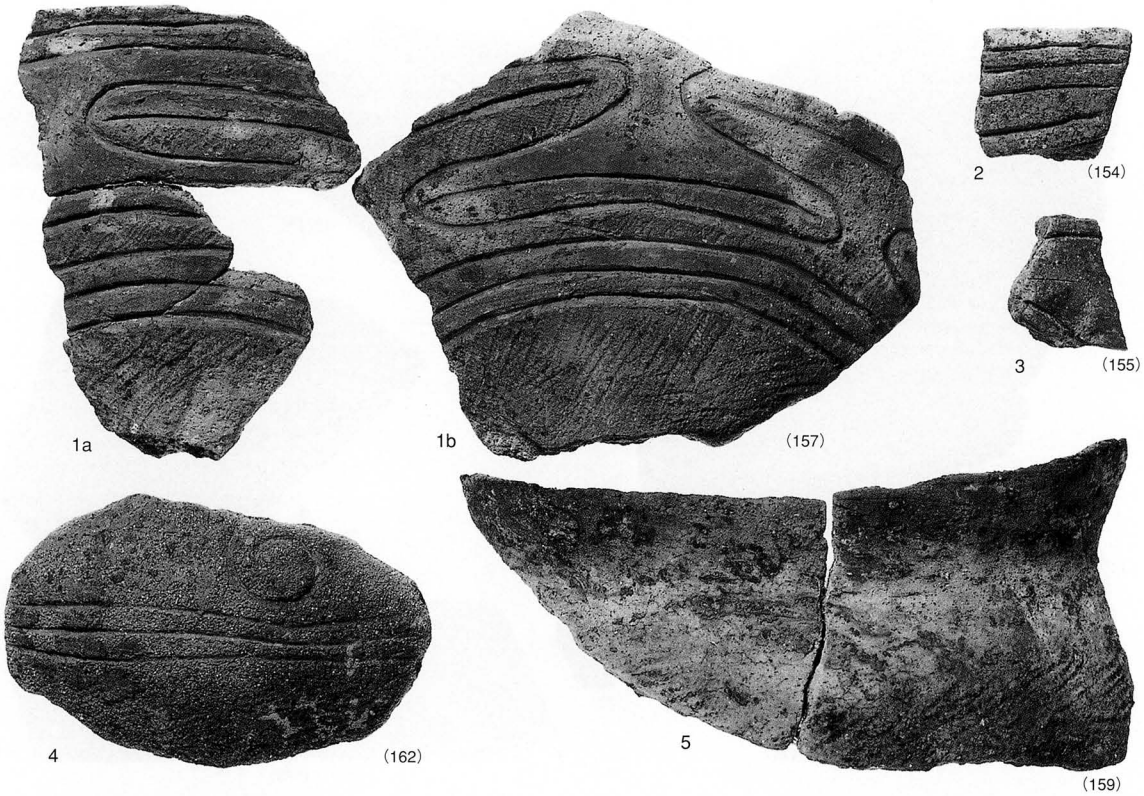


1　E、K区出土土器　　1 ピット292　2・3・5～10 ピット305　4 ピット306

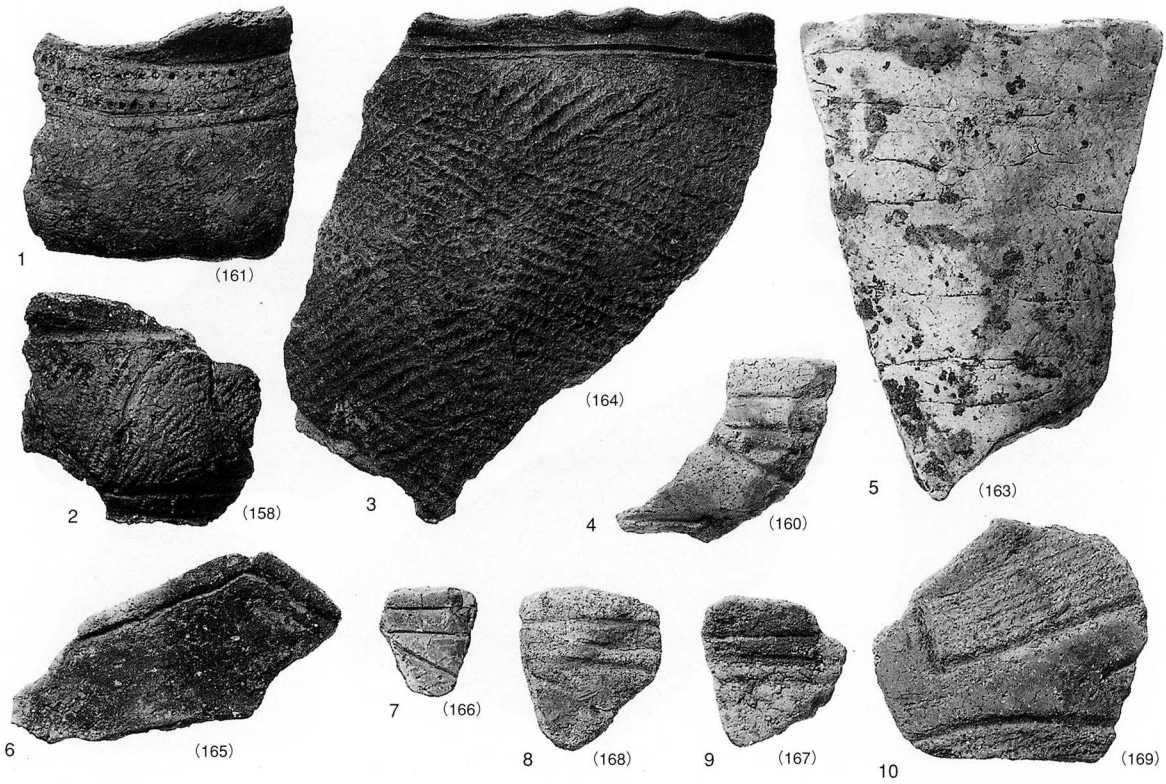


2　K、Ⅰ南区出土土器　　1～3 ピット306　4～9 Ⅰ南区包含層

ＰＬ．16　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

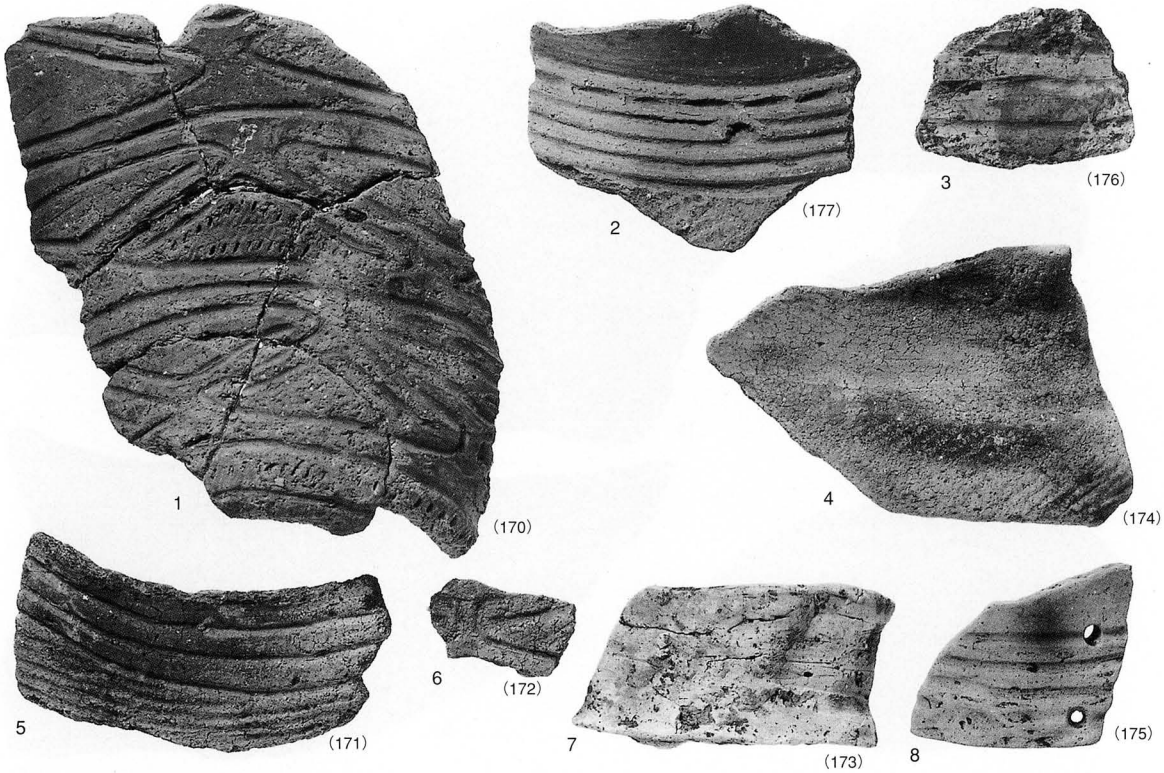


1　Ⅰ南区出土土器　　1～5　Ⅰ南区包含層

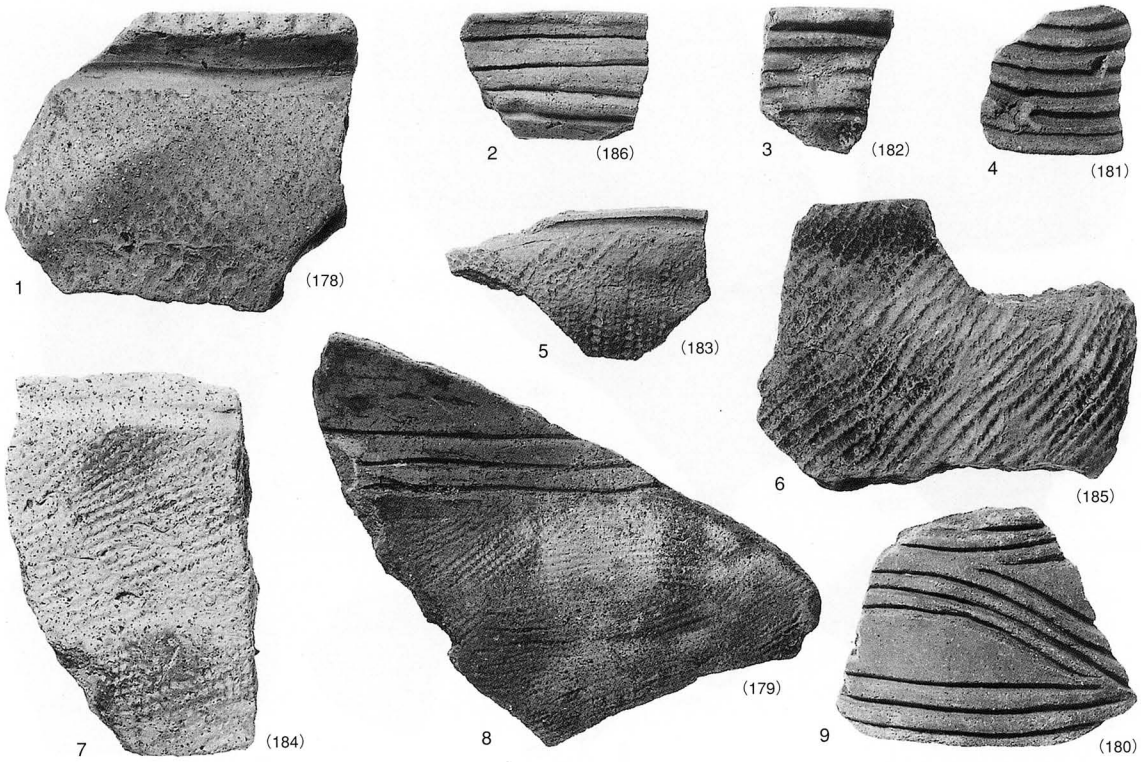


2　Ⅰ南区、Ⅰ区出土土器　　1～5　Ⅰ南区包含層　6～10　Ⅰ区包含層

PL．17　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

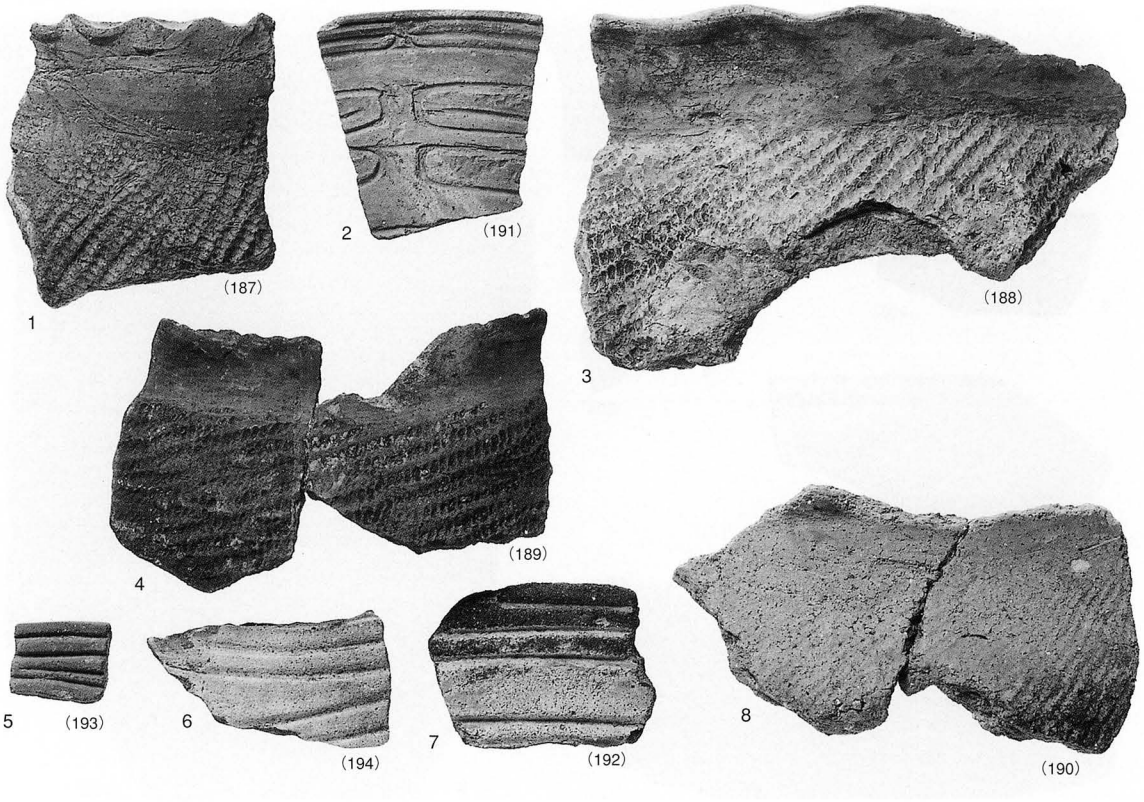


1　Ⅰ区出土土器　　1～8　Ⅰ区包含層

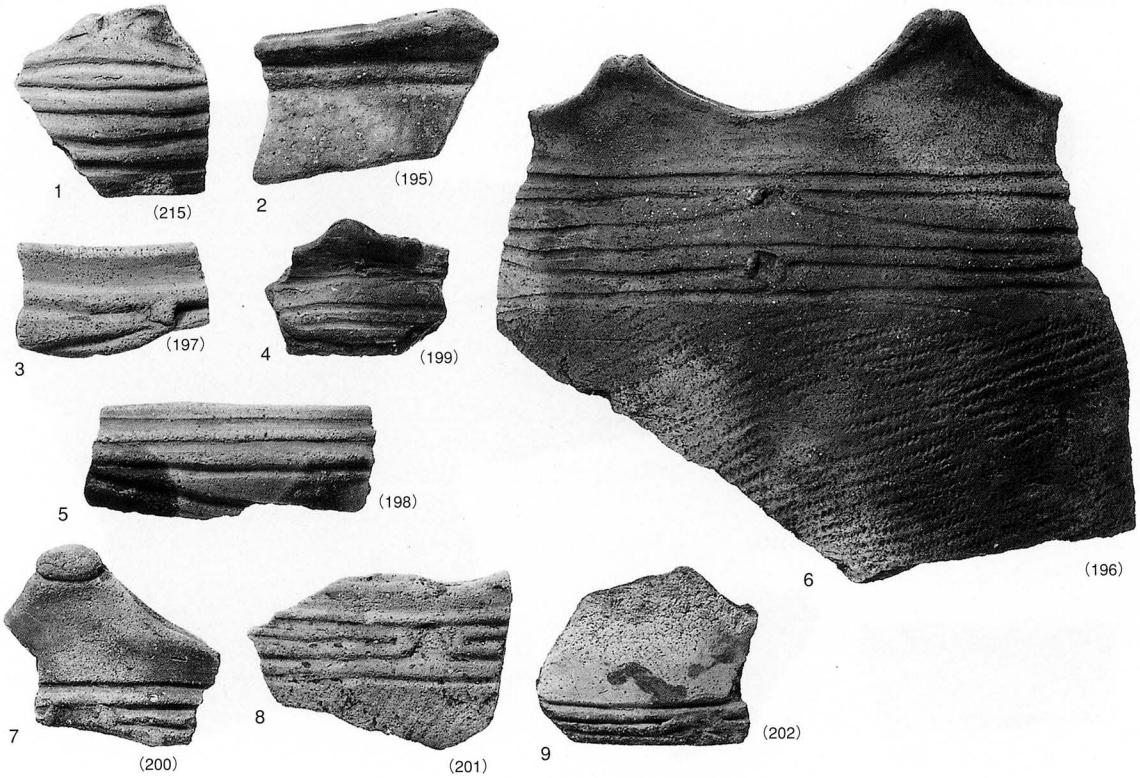


2　Ⅰ区出土土器　　1　Ⅰ区包含層　2　Ⅰ区試掘トレンチ603層
3～7・9　602層　8　601層

PL. 18　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

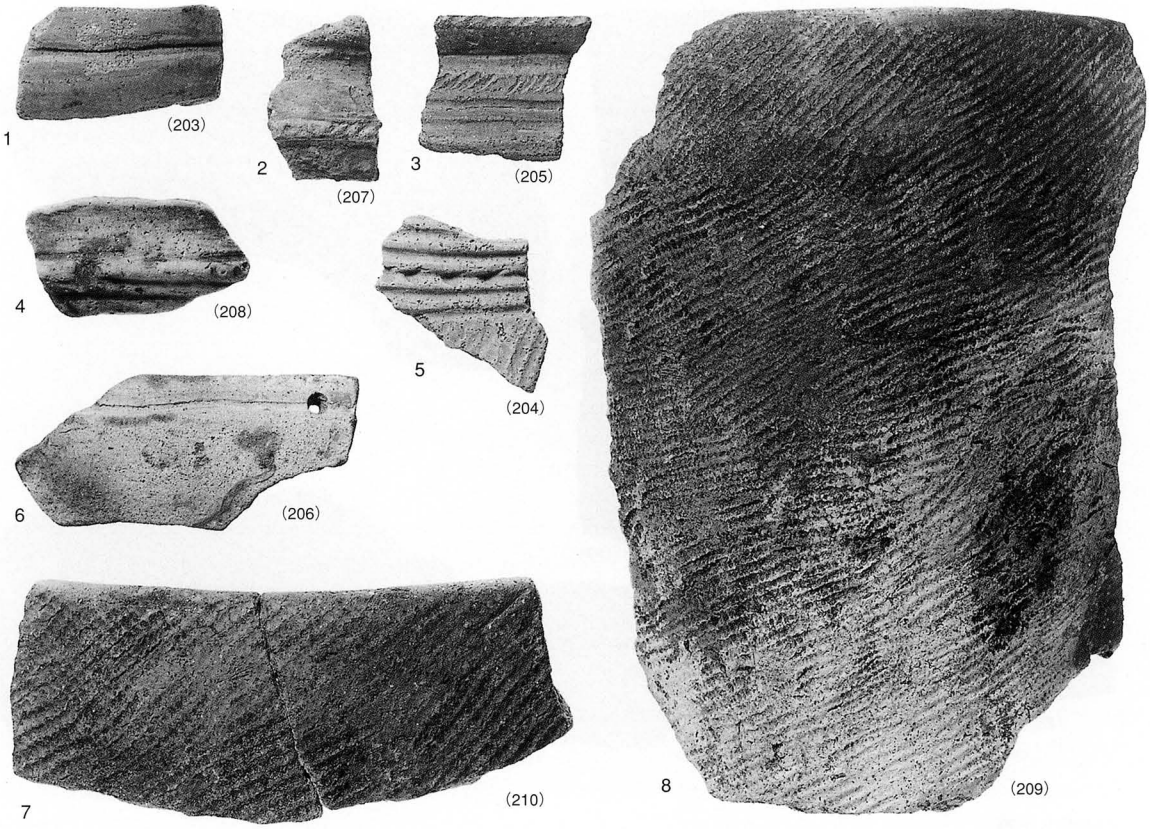


1　Ⅰ区出土土器　　1～8　603層

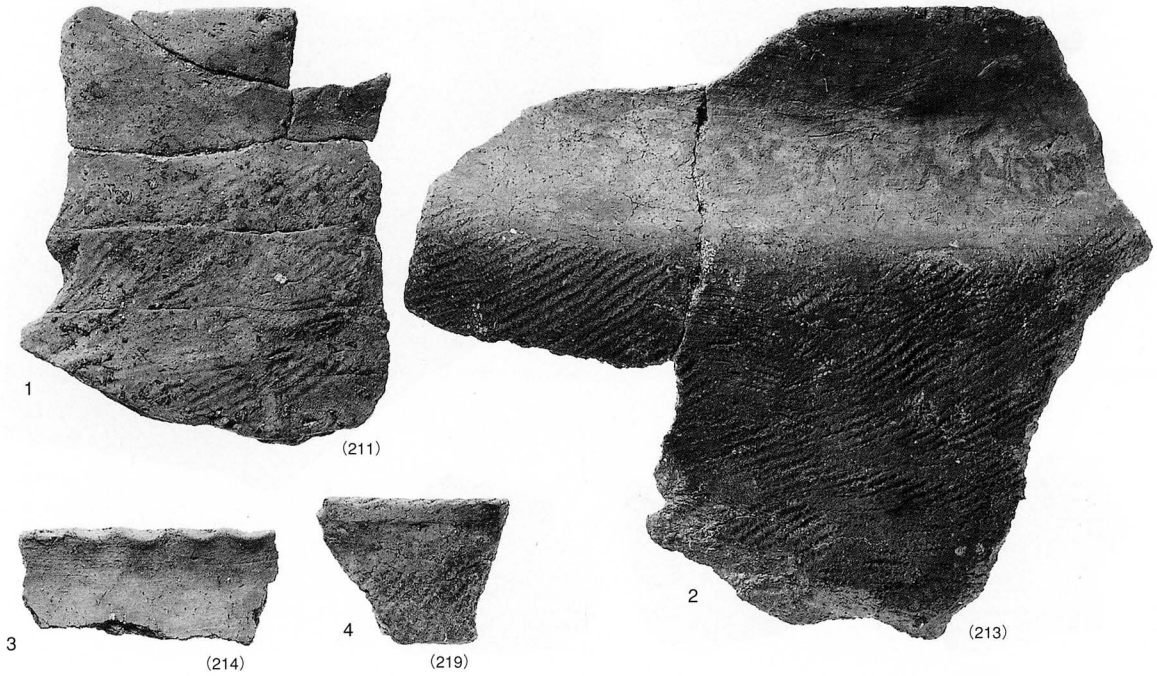


2　Ⅰ区出土土器　　1　604層　2～9　603層

ＰＬ．19　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

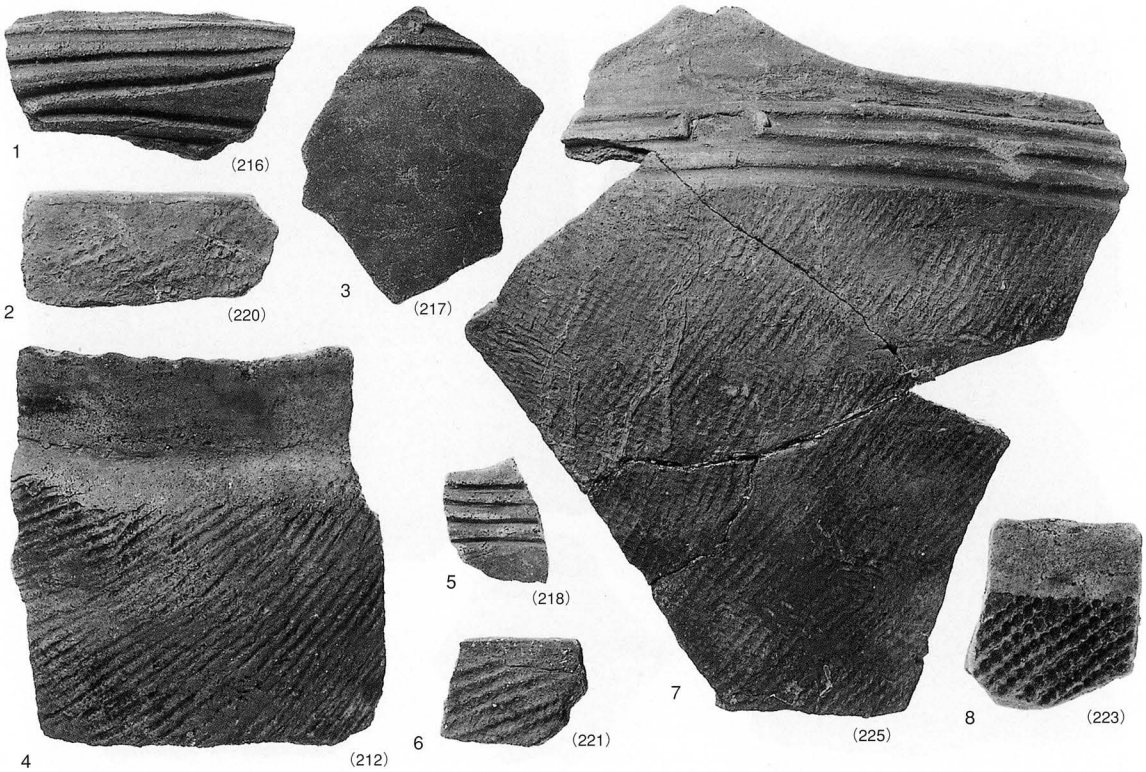


1　Ⅰ区出土土器　　1～8　603層

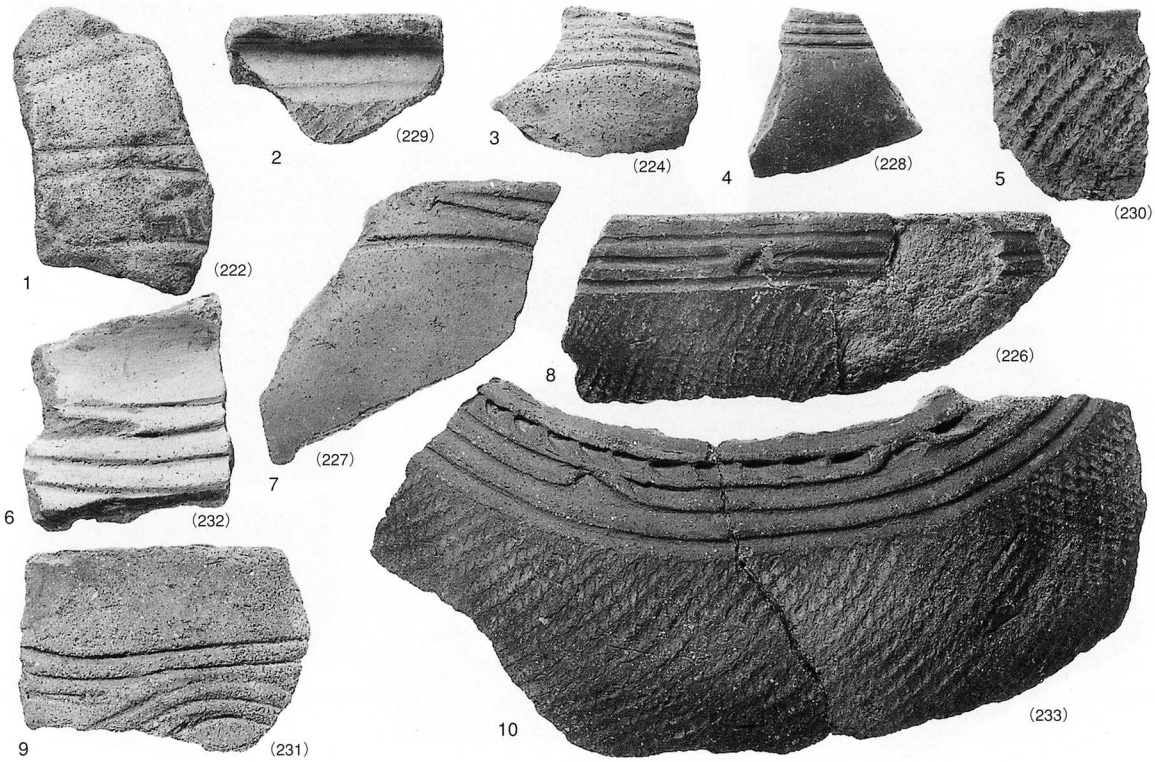


2　Ⅰ区出土土器　　1～4　604層

ＰＬ．20　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

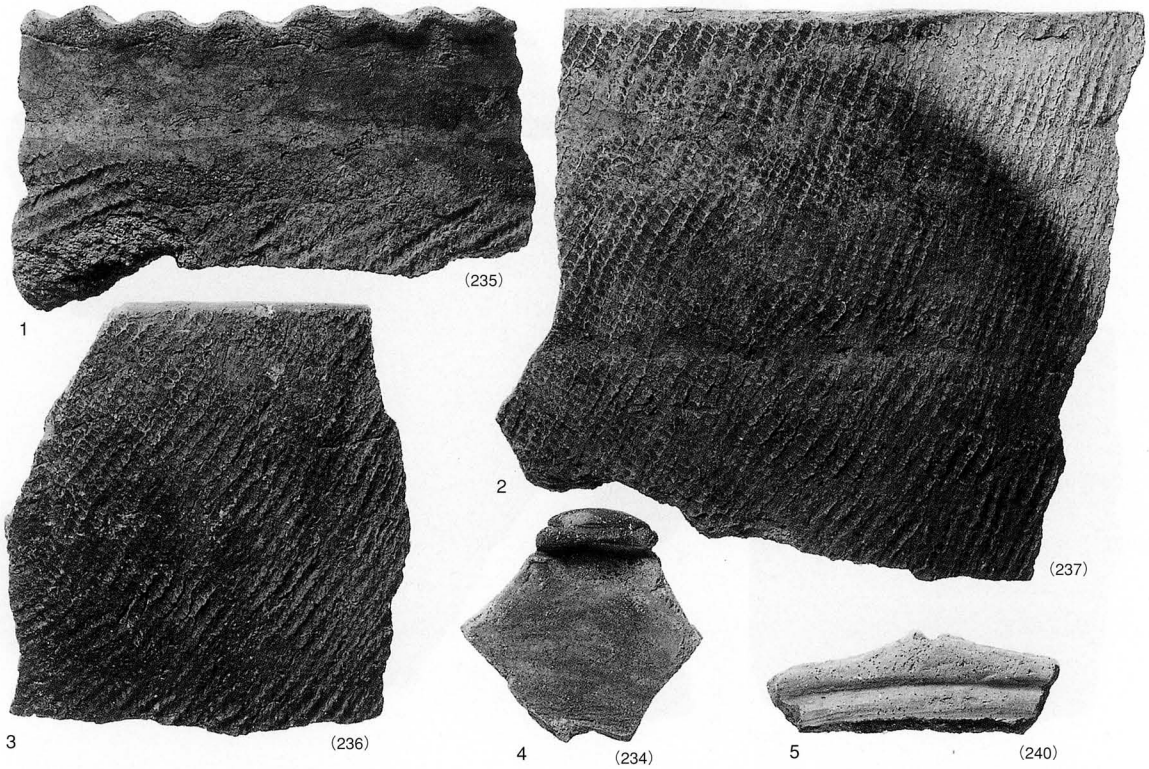


1　Ⅰ区出土土器　　1～6　604層　7・8　605a層

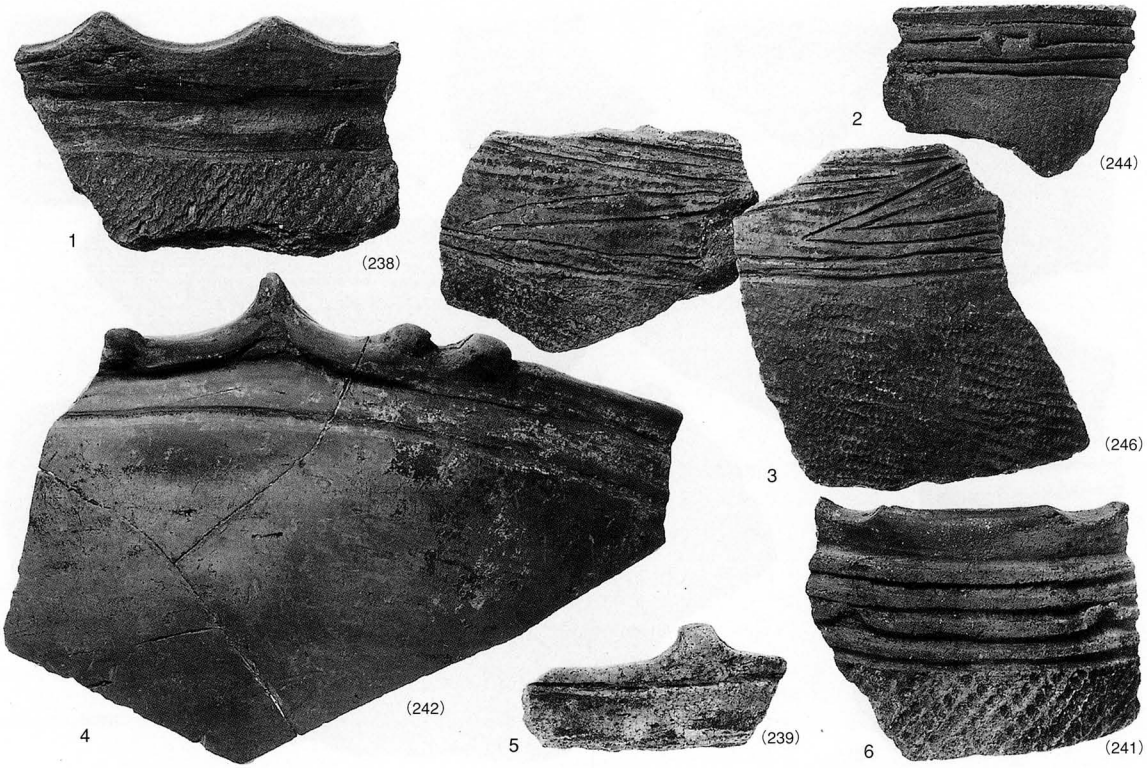


2　Ⅰ区出土土器　　1～5・7・8　605a層　6・9・10　605d層

PL. 21　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

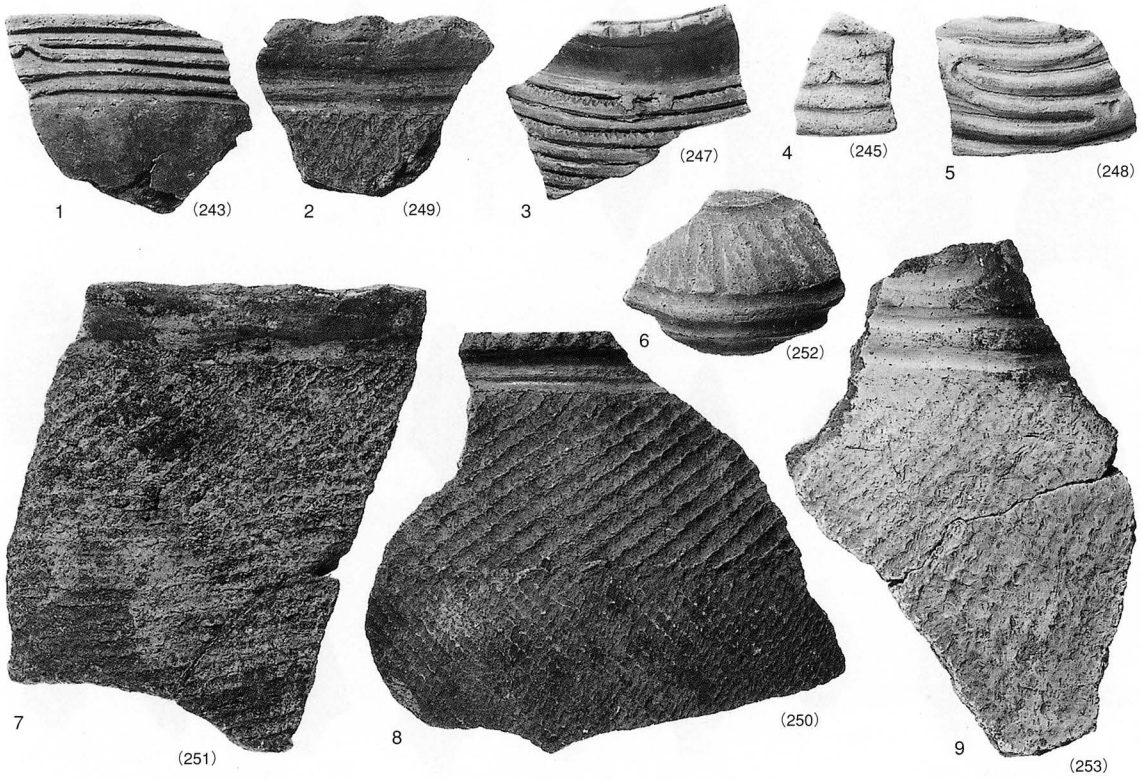


1　Ⅰ区出土土器　　1・3・4　606層　2　607層　4　606層　5　610層

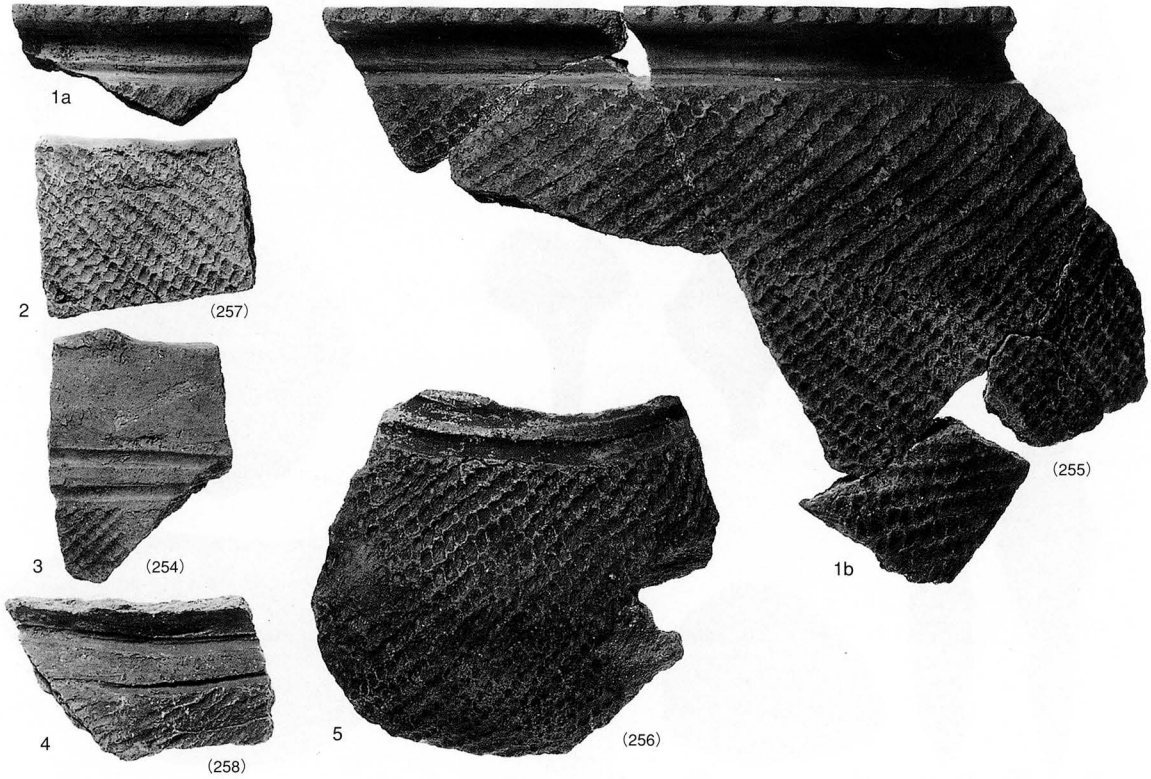


2　Ⅰ区出土土器　　1～6　610層

ＰＬ．22　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

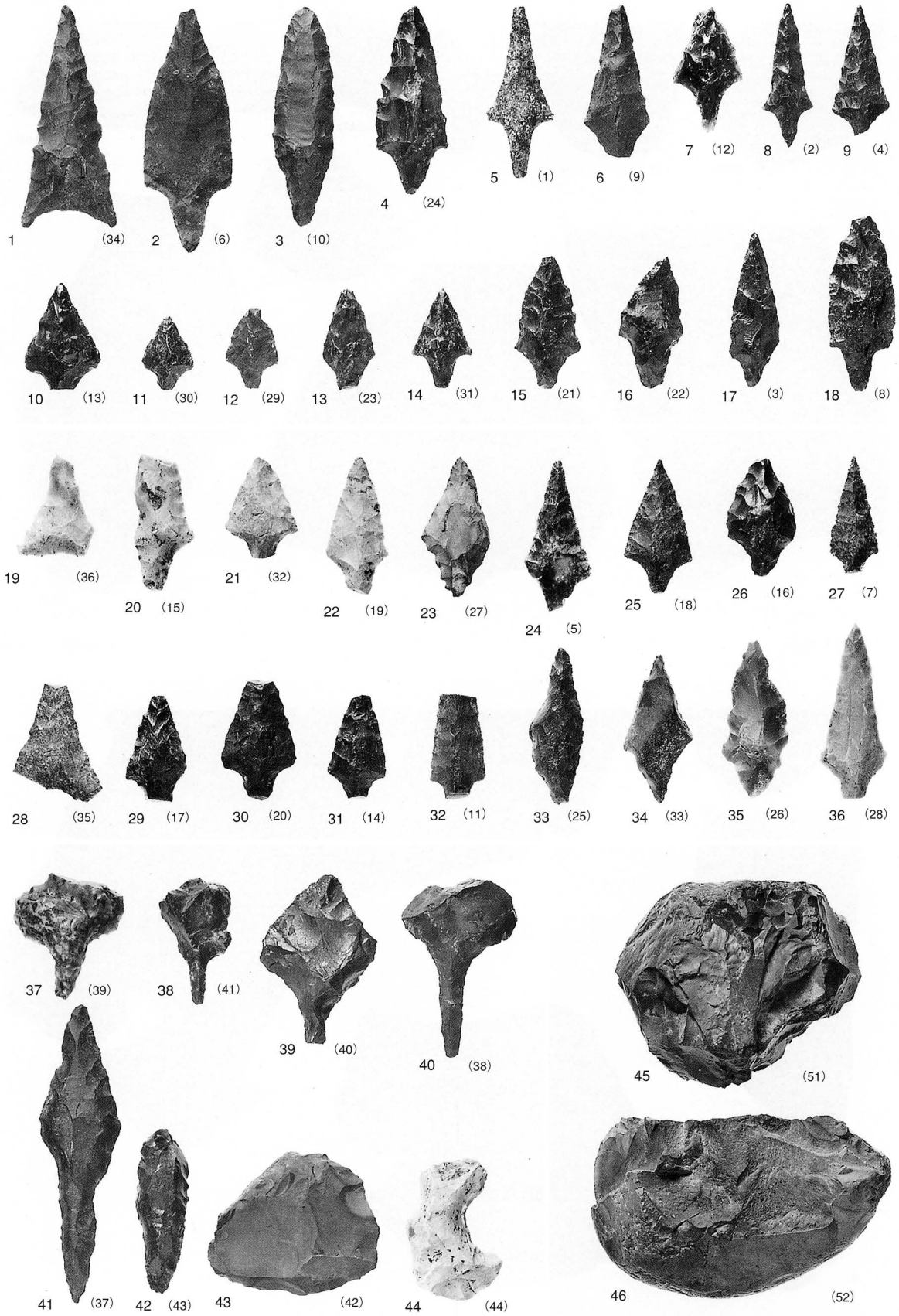


1　Ⅰ区出土土器　　1～8　610層　9　610a層



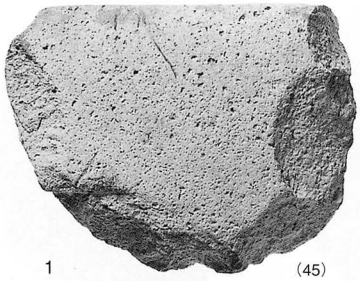
2　Ⅰ区出土土器　　1～3・5　610a層　4　611層

PL. 23　山王囲遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



PL. 24　山王囲遺跡出土石器
Stone implement from the Sanno-gakoi site

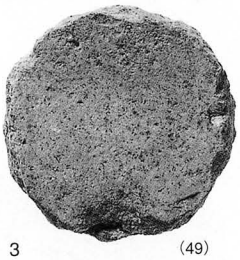
1～36 石鏃　37～41 石錐　42・43 不定形石器
44 異形石器　45・46 石核

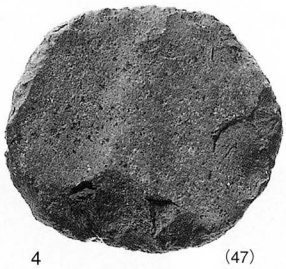

1 (45)

2 (46)

7 (57)

10 (56)


3 (49)


4 (47)

8 (54)

5 (50)

6 (48)

9 (55)

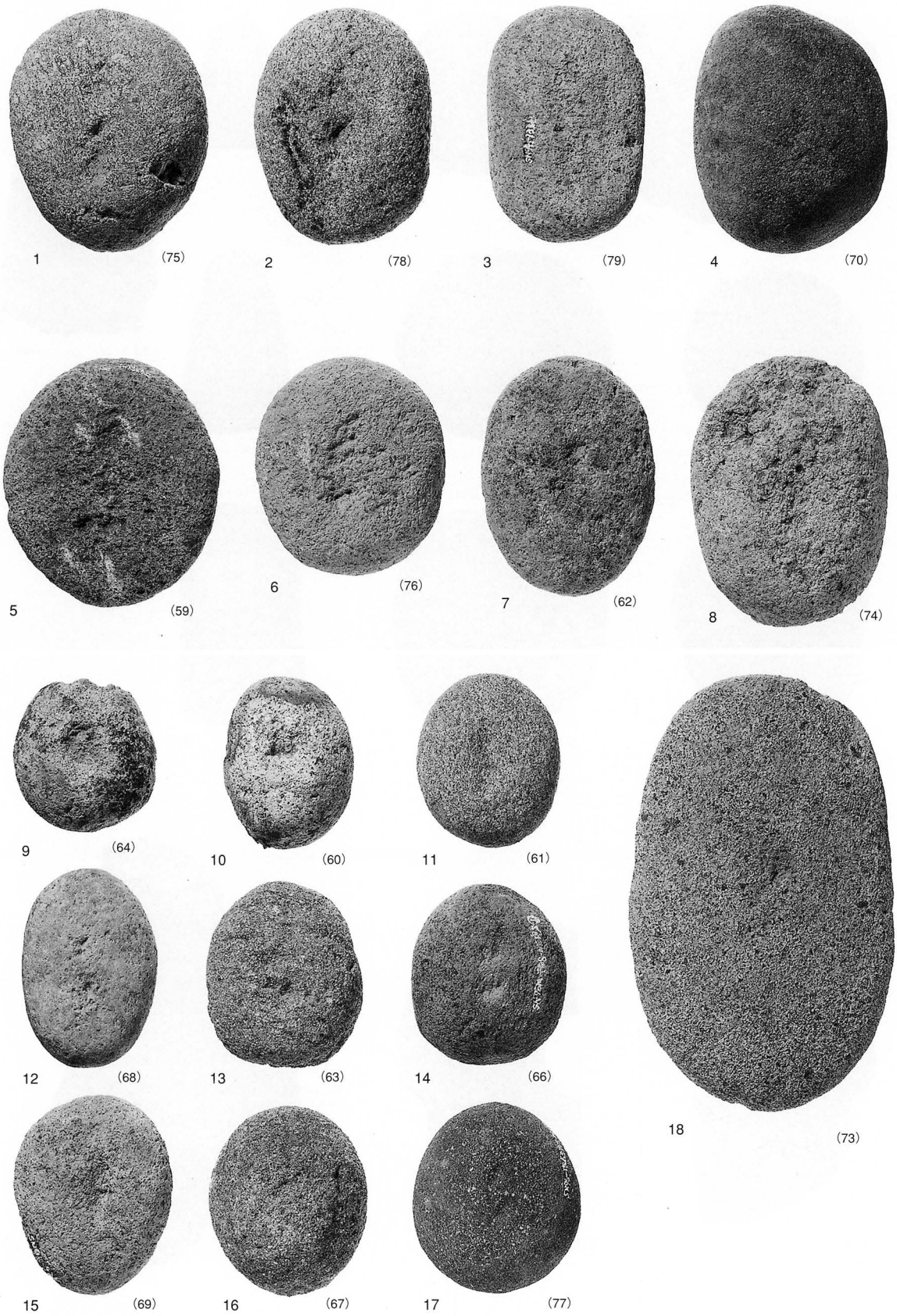
11a

11b (53)

12 (58)

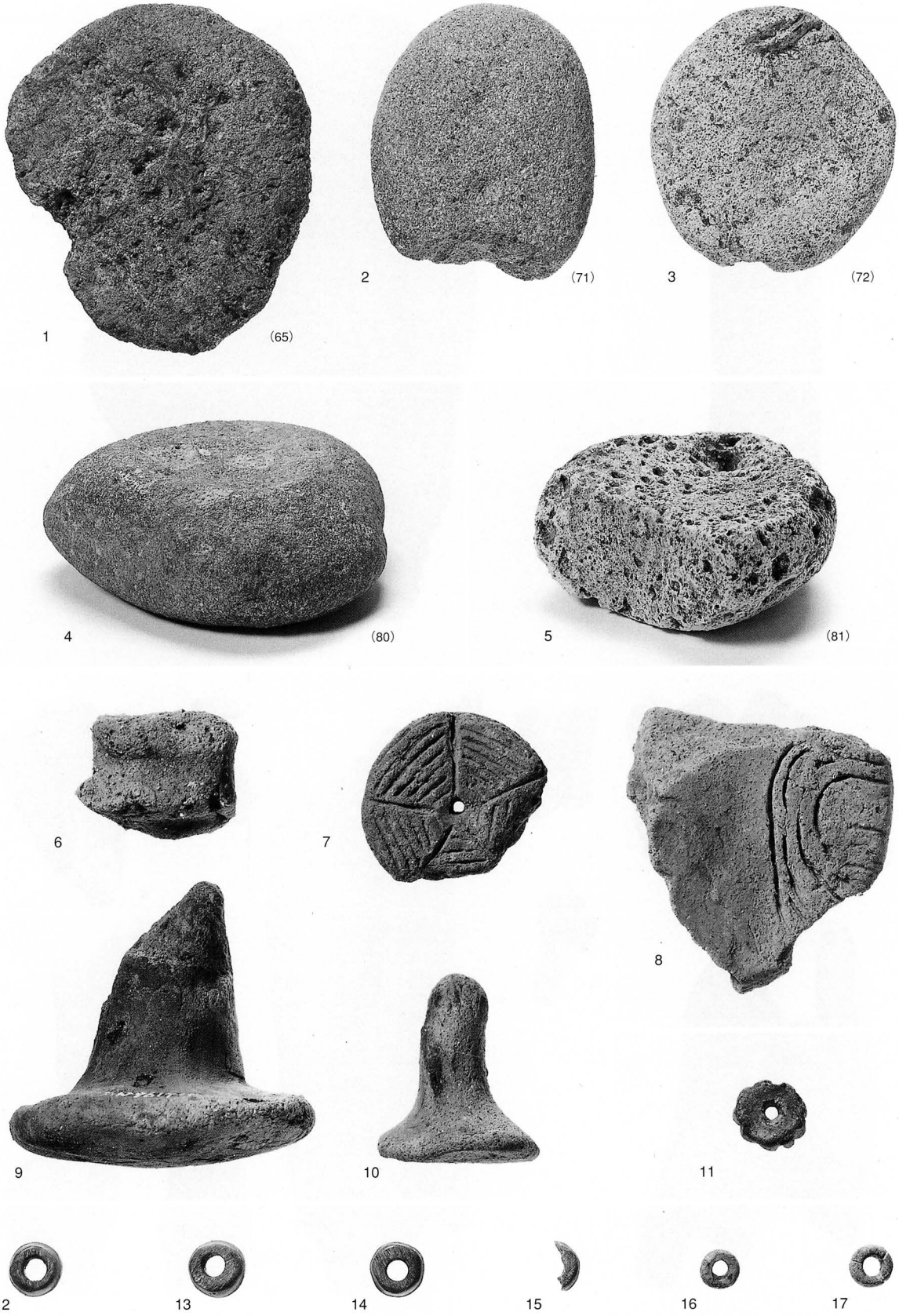
ＰＬ．25　山王囲遺跡出土石器
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1 チョピングトゥール　2～6 円盤形石器
7～10 磨製石斧　11 環状石斧　12 石鍬



ＰＬ．26　山王囲遺跡出土石器　　1～18 凹石

Stone implement from the Sanno-gakoi site



PL. 27　山王囲遺跡出土石器、土製品、石製品
Stone implement and Clay object from the Sanno-gakoi site

1～3 凹石　4・5 石皿　6 土偶　7 紡錘車
8 土版　9・10 スタンプ状土製品
11 土製小玉　12～17 石製小玉

PL. 28　山王囲遺跡出土木製品、動物遺存体
Wooden manufacture and Mammal remains
(Cervus nippon, Sus scrofa)

1 竪杵　2 加工材　3～7 ニホンジカ（3 下顎骨（L）　4・5 下顎骨第3大臼歯（L）　6 上腕骨（L）　7 脛骨（L））
8～12 ニホンジカあるいはイノシシ相当（8 大腿骨（LR不明）　9～12 四肢骨骨幹部破片）

国史跡 山王囲遺跡
発掘調査報告書Ⅱ

平成９年３月25日　印 刷
平成９年３月31日　発 行

発　行　宮城県一迫町教育委員会
栗原郡一迫町真坂字清水田河前５番地
ＴＥＬ　０２２８－５２－２１１１

印　刷　㈲　平　電　子　印　刷　所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13
ＴＥＬ　０２４６－２３－９０５１